

日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究

海外調査報告書

平成18年3月

独立行政法人

国立国語研究所

まえがき

国内外における日本語学習者の増加とともに、学習者の母語や学習目的、各国・地域における日本語教育の社会的位置付け、日本語教育機関の設備・環境、教師の日本語能力等は一層の広がりを見せている。一方、これまでは教室の中で紙と鉛筆による日本語学習や指導が日本語と接触する主たる環境であったが、交通手段や情報通信の急速な発展に伴い、日本人との直接の交流や、インターネットを活用した日本語によるメール交流、e-learningによる遠隔教育など、様々な環境が利用可能となっている。

このように、様々な情報流通のあり方が変化するのに伴い、日本語の学習や指導の環境や手段も多様化している。日本語教育現場が、この多様化に柔軟に対応していくためには、国内外ではどのような環境・手段で日本語学習者は学習し、指導者は教えているのかについて、広く情報を収集し、「多様化」を正確に把握する必要がある。

そこで、国立国語研究所では、国内外の地域(日本、タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシア)の学習者と教師を対象に、各地域の多くの協力者の御協力を得て、平成13年度より5年計画で「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施してきた。

本調査研究では、アンケートによる大規模調査と面接調査を行い、各調査地域の学習環境・手段の全体像の把握に努めてきた。その結果は、これまでに各調査地域のアンケート調査集計結果報告書として刊行し、平成17年のマレーシア調査結果報告書の刊行をもって終了する。調査時期が異なるため各調査結果の比較は困難であるが、ここに本調査研究全体を概観することが可能になった。

本報告書は、海外の学習者を対象とした調査結果について、全体をまとめたものである。本報告書は2部構成となっている。第1部は、1章で本調査研究の背景、2章で海外調査の全体的な概要、3章で各調査地域における学習環境の概要とアンケート調査結果、という構成である。第2部は、個別の視点から調査全体の視点へと配列した各論という構成である。本調査結果の詳細、様々な視点からの分析、教師を対象とした調査結果については、現在も分析を進めているところである。その分析結果については、今後適切な形で公表していきたい。

本報告書が、今後の日本語教育方策や日本語教育の内容・方法の検討に際しての一助となれば幸いである。

最後に、本調査研究に積極的に参加して下さった、各地域の日本語教育関係機関や団体、日本語教師、並びに日本語学習者の方々に深くお礼申し上げる。

平成18年3月

独立行政法人国立国語研究所
所長 杉戸 清樹

目次

第1部

1. 背景	1
2. 海外調査の概要	
2. 1. 目的	7
2. 2. 調査体制	7
2. 3. 調査方法	10
2. 3. 1. アンケート調査	10
2. 3. 2. インタビュー調査	13
2. 3. 3. 学習環境調査	15
3. 結果	
3. 1. 調査対象5地域における学習環境の概要	16
3. 1. 1. 5地域共通項目に関する統計データ	16
3. 1. 2. タイの学習環境の概要	20
3. 1. 3. 韓国の学習環境の概要	27
3. 1. 4. オーストラリアの学習環境の概要	35
3. 1. 5. 台湾の学習環境の概要	44
3. 1. 6. マレーシアの学習環境の概要	51
3. 2. アンケート調査結果に見る学習者の学習環境と学習手段	57

第2部

「台湾の日本語学習者の学習リソース利用—インタビュー調査から—」 工藤節子（東海大学，台湾）	83
「日本人との接触が日本語学習に及ぼす影響に関する一考察」 タナサーンセーニー美香（アサンブション大学，タイ）	108
「マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境」 阿久津智（拓殖大学）	128

「日本語教育におけるリソースと環境：

オーストラリアに関するデータの考察及び今後のリソース開発への示唆」

ロビン・スペンス-ブラウン（モナシュ大学，オーストラリア）・・・138

「台湾『日本語世代』の日本語環境と日本語意識」

藤井彰二（台湾大学，台湾）・・・146

「リスニングに関わるリソースの使用とリスニング能力との関係

ーバンコクの日本語主専攻の大学生の場合ー」

佐藤純（タイ商工会議所大学，タイ）・・・161

「日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー」

李徳奉（同徳女子大学，韓国）・・・171

「学習者の学び方から学ぶー台湾調査よりー」

金田智子（国立国語研究所）・・・179

「韓国調査にみるインタビュー調査方法の検討

ーインタビュー調査によって学習者から引き出されたもの」

小河原義朗・笠井淳子（国立国語研究所）・石井恵理子（東京女子大学）・・・192

参考文献

資料

日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 アンケート調査 学習者調査票

タイ（バンコック）調査 学習者調査票	1
韓国調査 学習者調査票	6
オーストラリア調査 学習者調査票	11
台湾調査 学習者調査票	16
マレーシア調査 学習者調査票	21

第1部

1. 背景

国内外における日本語学習者の増加は周知の事実であり、国内では13万人(文化庁, 2004)、海外では236万人(国際交流基金, 2005)を超えている。それと同時に、母語や学習目的、専門、年齢といった学習者の多様化だけでなく、各国・地域における日本語の社会的位置付け、日本語教育機関の設備・環境、教師の教育観や日本語能力等、日本語教育における多様化は更なる広がりを見せている。このような日本語教育の多様化についての認識は広く定着しつつあり、その多様性に対してそれぞれの教育現場においてそれぞれの対応がなされてきている。

一方、交通手段や情報通信技術の急速な発展に伴い、これまでのような教室の中での紙と鉛筆による日本語学習だけでなく、短期留学やホームステイなどで直接日本に來たり、インターネットを通じて海外で生の日本語に触れたり、e-learningによる遠隔学習を受けたりすることが可能になっている。このように地球規模での人の移動や交流が加速し、様々な情報流通の在り方が変化するのに伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化している。日本語教育の各機関や教育現場は、相互の連携体制を整えながら、学習支援の在り方に対して柔軟に対応していく必要がある。そのためには、まず国内外で日本語を学習している、あるいは教えている人々が、どのような環境・手段で日本語を学習している、あるいは教えているのかについて広く情報を収集し、「多様化」している現状を把握する基礎的な調査研究が必要である。

そこで国立国語研究所では、平成12年度の準備期間を経て、平成13年度より日本、及び海外の地域(タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシア)を対象に、各地域・機関と連携しながら5年計画の大規模調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施してきた。

本調査研究の特色は以下の3点である。

(1) 国内と海外の両方を視野においた調査研究である。

社会・経済状況や教育制度、学習環境等が異なる国内外の地域を比較することで、世界の日本語教育の状況全体を把握することが可能となる。国外では、学習者数や学習環境の面での多様性、現地調査協力体制等の観点から、タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシアの5地域において、調査を実施した。日本国内では、全国規模のアンケート調査、及びいくつかの地域(山梨県など)におけるインタビュー調査、参与観察等を実施した。

(2) 微視的・巨視的視野の両面からの研究である。

各国・地域の一般的な言語観、教育観、言語教育政策、日本との経済・文化等の交流関係等、それぞれの社会環境の中で日本語教育がどのような位置付けにあるのかという巨視的な視野と、学習者・教師の具体的な行動や意識、教材、教具、個々の日本語学習・教育の実態といった微視的な視野の両面から調査を実施した。

(3) 学習者と教師の両面からアプローチする研究である。

各国・地域の初・中・高等教育機関、民間日本語教育機関、ボランティア教室(国内)などに在籍する学習者だけでなく、教師も対象にして調査を実施した。

以下、本報告書では「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」の中でも、特

に「学習者」を対象とした「海外調査」について報告する。

海外調査では、調査全体、そして各調査地域についてこれまで以下のような成果を挙げた。

発行年・五十音順(2006/03/20 現在)

【海外調査全体】

- 小河原義朗(2003)「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」『国語研の窓』17号, p. 5, 国立国語研究所
- 小河原義朗(2004)「日本語学習者はどのようなリソースを用いているのか?」『平成 16 年度 国立国語研究所公開研究発表会予稿集』pp. 9-18, 国立国語研究所
- 国立国語研究所(2004)「これからの日本語学習支援を考える—学びを支えるモノ・ヒト・コト—」『平成 16 年度 国立国語研究所公開研究発表会予稿集』
- 小河原義朗(2005)「教室のウチとソトをつなぐメタ認知(自主シンポジウム A-3「日本語学習支援にメタ認知を活かす」)」『日本教育心理学会 第 47 回総会 発表論文集』pp. 22-23, 日本教育心理学会
- 小河原義朗・岡部真理子(2005)「地域における日本語学習リソースの活用について」『平成 17 年度文化庁日本語教育大会 日本語教育研究協議会』pp. 28-29, 文化庁
- 小河原義朗・金田智子・笠井淳子(2005)「海外における日本語学習者の学習環境と学習手段」『日本語科学』18, pp. 111-123, 国立国語研究所
- 金田智子(2005)「『ことばを学ぶ』方法について考える—こちら国語研究所—」『NHK アナウンサーのはなす, きく, よむ』pp. 168-175, 日本放送協会
- 小河原義朗(2006)「『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究』の概要と成果」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 3-6, 国立国語研究所
- 金田智子・小河原義朗・笠井淳子(2006 発表予定)「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究: 教師調査を中心に」『日本語教育国際研究大会』
- 国立国語研究所(2006)『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』

【タイ(バンコック)調査】(平成 13~17 年度実施)

- 国立国語研究所(2003a)『平成 13 年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書—』(日本語版)
- 国立国語研究所(2003b)『平成 13 年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書—』(タイ語版)
- タナサーンセーニー美香・佐藤純・小河原義朗・湯山佳代・千葉真人(2004)「『リソース』の観点から授業を考える—学習者は何を使って学習しているか—」『タイ国日本語教育研究会第 16 回年次セミナーシンポジウム』タイ国日本語教育研究会
- タナサーンセーニー美香・小河原義朗・佐藤純(2004)「教師は何を使って教えているか」『タ

- タイ国日本語教育研究会第16回年次セミナー分科会』タイ国日本語教育研究会
 小河原義朗・笠井淳子・金田智子・石井恵理子(2004)「日本語教育の学習環境と学習手段
 に関する調査研究—タイ調査報告—」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集(発
 表1)』pp. 131-136
- タナサーンセーニー美香(2006a)『『環境』を利用した教室作りのために』『国立国語研究所
 日本語教育シンポジウム(平成17年度第2回日本語教育短期研修) 日本語教育の
 学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 15-21, 国
 立国語研究所
- 佐藤純(2006)「リスニングに関わるリソースの使用とリスニング能力との関係—タイの大
 学生の場合—」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成17年度第2回日本
 語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調
 査の成果と展望—』pp. 36-37, 国立国語研究所
- 佐藤純・タナサーンセーニー美香(2006)『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成17
 年度第2回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査
 研究—海外調査の成果と展望—』国際交流基金バンコク日本文化センター報告会
- タナサーンセーニー美香(2006b 発表予定)「日本人との接触が日本語学習に及ぼす影響に関
 して」『タイ国日本語教育研究会第154回月例会口頭発表』国際交流基金バンコク
 日本文化センター

【韓国調査】(平成14~16年度実施)

- 国立国語研究所(2004a)『平成15年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
 —韓国アンケート調査集計結果報告書—』(日本語版)
- 国立国語研究所(2004b)『平成15年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
 —韓国アンケート調査集計結果報告書—』(韓国語版)
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005a)「学習者は何をどのように用いて学習している
 のか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学会第
 70回学術大会 Proceedings』pp. 486-492, 韓国日本学会
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005b)「学習者は何をどのように用いて学習している
 のか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『日本学報』65-1,
 pp. 145-156, 韓国日本学会
- 李徳奉(2006a)「日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー」『国立国語研究所日本
 語教育シンポジウム(平成17年度第2回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習
 環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 22-25, 国立国
 語研究所
- 李徳奉(2006b 刊行予定)「開かれた日本語教育のためのリソース・リテラシー」『同日語文
 研究』, 韓国同日語文学会
- 国実久美子・笠井淳子(2006)「学習者のリソース利用をどう共有するか?」『国立国語研究
 所日本語教育シンポジウム(平成17年度第2回日本語教育短期研修) 日本語教育
 の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 46-50,
 国立国語研究所

【オーストラリア調査】(平成 15~17 年度実施)

Robyn Spence-Brown 'Japanese in the Primary School' Paper delivered at the 14th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia, 3-6 July 2005, Adelaide, Australia

ロビン・スペンス・ブラウン, 萩野祥子(2006)「オーストラリアの年少者日本語教育—初等・中等教育機関における日本語教育の理念と実践—」『日本語教育』128号, pp. 46-58, 日本語教育学会

【台湾調査】(平成 15~17 年度実施)

国立国語研究所(2005a)『平成 16 年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—台湾アンケート調査集計結果報告書—』(日本語版)

国立国語研究所(2005b)『平成 16 年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—台湾アンケート調査集計結果報告書—』(中国語版)

金田智子(2005)「学習者の学び方から学ぶ—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究をもとに—」『台湾日本語文学会 2005 年度日本語文学術研討会予稿集』pp. 22-29, 台湾日本語文学会

藤井彰二(2005)「日本語世代は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『日語教育與日本文化研究』国際学会議論文集, p. 177-191, 台湾日語教育学会

上條純恵・李金娟(2006)「台湾の中等教育における日本語学習者の学習リソースに関する面接調査」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 31-33, 国立国語研究所

工藤節子(2006)「学習リソースとの接触は何をもたらすか—教育への示唆—」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 7-14, 国立国語研究所

服部美貴(2006a)「台湾在住の日台婚姻家庭における子どもの日本語習得」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 51-60, 国立国語研究所

服部美貴(2006b 刊行予定)「日台婚姻家庭における子どもの日本語習得に関する基礎的研究」『台湾日本語教育論集』9, 台湾日語教育学会

藤井彰二(2006)「台湾の『日本語世代』は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関するインタビュー調査—」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』pp. 29-30, 国立国語研究所

林明煌(2006)「台湾日本語学習者の学習リソースに関する面接調査—社会人を中心に—」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研

修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』 pp. 38-40, 国立国語研究所

【マレーシア調査】(平成 16~17 年度実施)

国立国語研究所(2005)『平成 17 年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—マレーシアアンケート調査集計結果報告書—』(日本語版)

国立国語研究所(2006)『平成 17 年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—マレーシアアンケート調査集計結果報告書—』(マレー語版)

国立国語研究所・国際交流基金クアラルンプール日本文化センター(2006)『2005 年度 マレーシア日本語教育セミナー: 学習者のまわりにある日本語, そして, 日本語学習を考える』

阿久津智(2005a)「[研究ノート] マレーシアにおける日本語学習者」『語学研究』108, pp. 157-173, 拓殖大学言語文化研究所

阿久津智(2005b)「日本語の可能性 海外の日本語教育の現場から」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』14, pp. 59-72, 拓殖大学人文科学研究所

アン・チュイ・キエン(2006a)「学習者による自習用自作語彙集の作成におけるリソース利用」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』 pp. 61-63, 国立国語研究所

アン・チュイ・キエン(2006b)「語彙の習得を目指した自習用教材の作成とリソース—学生のまわりに日本語環境がないと思って, あきらめていませんか—」『2005 年度マレーシア日本語教育セミナー』 pp. 16-18, 国立国語研究所・国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

小河原義朗(2006)「学習者は教室の外で何をしているのか?」『2005 年度マレーシア日本語教育セミナー』 p. 1, 国立国語研究所・国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

小林百恵・阿久津智(2006)「マレーシアの一般日本語教育機関における学習者の学習意識と学習環境—ペラ馬日友好協会を一例として—」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』 pp. 34-35, 国立国語研究所

フィトラ・廣瀬純子(2006)「勉強と知らずに楽しく学べる日本語のクラス!—教師はどのように手伝うことができるのか—」『2005 年度マレーシア日本語教育セミナー』 pp. 2-4, 国立国語研究所・国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

ヨーリースー(2006a)「学習者の学習環境と学習手段に関する調査と調査実施に伴う成果」『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成 17 年度第 2 回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』 pp. 41-45, 国立国語研究所

ヨーリースー(2006b)「学習者の学習環境と学習手段に関する調査と調査実施に伴う成果—USM の学生の場合—」『2005 年度マレーシア日本語教育セミナー』 pp. 5-8, 国立国語研究所・国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

このように、海外調査はタイ(バンコック)調査(平成 13～17 年度実施)、韓国調査(平成 14～17 年度実施)、オーストラリア(ビクトリア州)調査(平成 15～17 年度実施)、台湾調査(平成 15～17 年度実施)、マレーシア調査(平成 16～17 年度実施)の順で実施してきた。そして、国内での成果報告とともに、各調査地域において実施した大規模なアンケート調査の集計が終わり次第、その結果を報告書にまとめ、日本語版と現地語版で順次刊行し、アンケート以外の調査結果と併せて現地における結果報告という形で、主にその成果を還元してきた。調査全体としては、最終年度の 2005 年 12 月に最終調査地域のマレーシア調査のアンケート集計結果報告書の刊行をもってようやく各調査結果全体を見通すことが可能となった。そこで、最終年度を終えるにあたり、本報告書では、まず上記海外の各調査地域における学習環境調査の結果を示した上で、各アンケート調査で共通した項目について、その結果を並べて示し、日本語教育の学習環境と学習手段について概観する。同時に、本調査研究の立ち上げから計画、実施に至るまですべてに関わってきた関係者に、アンケート調査、インタビュー調査、学習環境調査の結果をもとにそれぞれの観点から自由に論じてもらう。そして、それらの各論を個別のテーマから本調査研究全体、さらには今後に向けた課題と展望という流れで配列して示すことにより、プロジェクト全体を通して包括的にまとめる海外調査報告書として刊行するものである。

本報告書は 2 部構成とする。まず第 1 部では、1 章で本調査研究の背景、2 章で海外調査の全体的な概要、3 章でその結果として、各調査地域における学習環境の概要、アンケート調査結果を並べて示す。そして、第 2 部として個別の視点から調査全体の視点へと配列した各論という構成になっている。

2. 海外調査の概要

2.1. 目的

本調査研究がスタートする2000年当時、本調査研究のテーマである学習環境や学習手段に関しては、「リソース」といった用語での議論や、社会文化能力、接触場面、状況的学習論などによる「学習」の捉え方の変化、第二言語習得に影響を及ぼす要因、さらには学習者の多様性に対する対応としても学習者の学習環境や学習手段を把握することの重要性が指摘されていた。しかし、個別の調査研究はなされているものの、学習者を取り巻く学習環境全体を実態として包括的に捉える調査研究はなされていないことから、国内外の学習者を対象として主に大規模な量的調査を実施し、まずは学習環境と学習手段に関する全体像を把握するための基礎研究を実施することにした。

以上のことから、海外調査では学習者を取り巻く環境を広く学習環境と捉え、大規模な量的調査を行うことで、海外における日本語教育の学習環境と学習手段に関する実態について、全体的な傾向を把握し、新たな観点から日本語教育の改善・支援・連携のための基礎資料を作成することを目的とする。あわせて、今後の学習環境と学習手段に関する調査研究における調査方法のあり方、アンケートやインタビュー調査の内容・技術に関する検討のための基礎資料とする。

2.2. 調査体制

所内では以下のメンバーが実務担当した。

【平成12年度】

石井恵理子、柳澤好昭、小河原義朗、鈴木理子

【平成13年度】

石井恵理子、金田智子、小河原義朗、鈴木理子

【平成14年度】

石井恵理子、金田智子、小河原義朗、鈴木理子、笠井淳子

【平成15年度】

石井恵理子、金田智子、小河原義朗、笠井淳子

【平成16年度】*：主担当

小河原義朗(*), 金田智子, 笠井淳子

【平成17年度】*：主担当

小河原義朗(*), 柳澤好昭, 金田智子, 笠井淳子

また、第1章で述べたような本調査研究プロジェクトの性質上、報告書の刊行、各調査地域における成果のフィードバック等、本調査研究の成果が広く国内外において十分に還元され、国立国語研究所を中心としたさらなる調査研究の継続、発展、ネットワークの拡大のためには、現地協力者・機関との連携が不可欠である。

そのため、まず次の項目について、各調査地域において中核的な役割を担う日本語教育関係者を海外調査委員として委嘱する「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」海外調査委員会を設置して実施した。

- ・現地における調査実施，そのための助言，情報提供
- ・現地における調査協力体制の構築，そのための助言，情報提供
- ・報告書の内容の検討と執筆
- ・調査研究結果の現地への還元，そのための助言，情報提供
- ・調査研究の現地における継続，そのための助言，情報提供

委員会の構成は以下のとおりである。なお，()内は所属を示すが，現在と調査当時の所属が異なる場合は，()内を「(現在の所属／調査当時の所属)」で示す(以下同様)。

【海外調査委員会】

平成 12 年度～

佐藤純(タイ商工会議所大学，タイ)

李徳奉(同徳女子大学校，韓国)

工藤節子(東海大学，台湾)

ロビン・スペンス-ブラウン(モナシュ大学，オーストラリア)

阿久津智(拓殖大学／元日本マレーシア高等教育大学連合，マレーシア)

平成 16 年度～

タナサーンセーニー美香(アサンプション大学，タイ)

藤井彰二(台湾大学／元財団法人交流協会台北事務所，台湾)

石井恵理子(東京女子大学／元国立国語研究所)

【海外調査委員会実施記録】

平成 13 年度	海外調査準備会議	平成 14 年 2 月 7 日
平成 14 年度	海外調査準備会議	平成 15 年 2 月 3 日
平成 15 年度	海外調査会議	平成 16 年 2 月 4 日
平成 16 年度	海外調査委員会	平成 16 年 10 月 31 日
平成 17 年度	第 1 回海外調査委員会	平成 17 年 10 月 24 日
	第 2 回海外調査委員会	平成 18 年 2 月 4 日

さらにこの委員会のもと，各調査地域において以下のような多くの調査協力機関・協力者の協力を得て実施した。なお，「国際交流基金バンコック日本語センター」は 2004 年に「国際交流基金バンコック日本文化センター」に改称となった。そのため，以下，調査当時(タイ調査は 2002 年実施)を示す場合は，「国際交流基金バンコック日本語センター」と旧称を用い，「バンコク」も「バンコック」と表記する。

【タイ(バンコック)調査】(平成 13～17 年度実施)

佐藤純(タイ商工会議所大学)

タナサーンセーニー美香(アサンプション大学)

大竹啓司(独立行政法人国際交流基金バンコック日本文化センター)

湯山佳代(立教大学大学院／元泰日経済技術振興協会)

独立行政法人国際交流基金バンコク日本文化センター

【韓国調査】(平成 14～17 年度実施)

李徳奉(同徳女子大学校)
姜錫祐(カトリック大学校)
金世恩(同徳女子大学校大学院博士課程)
国実久美子(仁済大学校)
韓国日本学会
韓国日本語文学会
大韓日語日文学会
同日語文学会
ソウル中等日本語教育研究会
京畿道中等日本語教育研究会
大邱中等日本語教育研究会
全南中等日本語教育研究会
湖南日本語教育研究会
独立行政法人国際交流基金ソウル日本文化センター
在釜山日本国総領事館日本語教育室
時事日本語社
日本語バンク

【オーストラリア(ビクトリア)調査】(平成 15～17 年度実施)

ロビン・スペンス-ブラウン(モナシュ大学)
アン・デクレツァー(メルボルン日本語教育センター)
マリー・ピット(ビクトリア州教育訓練省)
室屋春光(元ビクトリア州教育訓練省日本語アドバイザー<国際交流基金派遣>)
メルボルン日本語教育センター
独立行政法人国際交流基金シドニー日本文化センター
Catholic Education Office, Melbourne
Association of Independent Schools of Victoria
ビクトリア州日本語教師会

【台湾調査】(平成 15～17 年度実施)

工藤節子(東海大学)
藤井彰二(台湾大学/元財団法人交流協会台北事務所)
上條純恵(財団法人交流協会高雄事務所/元財団法人交流協会台北事務所)
顔幸月(世新大学)
服部美貴(台湾大学)
李金娟(東海大学)
李若筠(東海大学)

林美智(中山女子高校)
林明煌(嘉義大学)
王慧珍(中山医科大学)
財団法人交流協会台北事務所, 同高雄事務所

【マレーシア調査】(平成16~17年度実施)

阿久津智(拓殖大学/元日本マレーシア高等教育大学連合)
アン・チュイ・キエン(International Languages Teacher Training Institute)
伊藤俊也(拓殖大学/元日本マレーシア高等教育大学連合)
エドワード・リー(マレーシア日本語協会)
小林伊智郎(拓殖大学/元日本マレーシア高等教育大学連合)
小林百恵(ペラ馬日友好協会)
滝口博子(日本マレーシア高等教育大学連合)
フィトラ廣瀬純子(マラ・オイスカ日本語センター)
松本紫帆(立教大学/元日本マレーシア高等教育大学連合)
ヨーリースー(マレーシア科学大学)
吉田真宏(独立行政法人国際交流基金クアラルンプール日本文化センター
/元日本マレーシア高等教育大学連合)
マレーシア日本語協会
独立行政法人国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

2.3. 調査方法

本調査では、主に各調査地域での学習環境・学習手段を全体的に把握するための量的調査としてアンケート調査を実施した。同時に、アンケートでは捉えきれない学習者の個別的な側面を補完するためにインタビュー調査を実施した。さらに、各調査地域における日本語学習に影響を与えると考えられる現地社会的状況等を把握するための学習環境調査もあわせて実施した。以下、その詳細について述べる。

2.3.1. アンケート調査

学習者が日本語を学習する際には、何らかの物・人・場(機会)といった対象(以下、リソース)に接触すると考えられる。アンケートの内容は、学習者がどのようなリソースにどのような方法で接触しているのかについて質問する項目が中心になっている。また、接触の対象や方法等に影響すると考えられる、日本語学習歴、学習動機、訪日経験等についても質問項目に含めている。

アンケートでの主な調査項目は以下のとおりである。

【属性】

- ・ 性別, 居住地域, 年齢, 母語, 身分, 日本語学習の開始学年, 日本語学習の場所, 訪日経験, 日本語学習動機, 4技能別日本語力自己評価等

【質問項目】

- ・日本語の使用状況(相手, 頻度, 手段, 内容, 理由等)
- ・日本語との接触状況(物, 頻度, 内容, 理由等)
- ・日本語との接触状況(場, 機会)
- ・授業で使用する日本語教材の授業以外での使用状況
- ・日本語学習のためのリソース
- ・日本語学習のために充実を希望するもの

対象地域によって学習環境や教育制度自体が異なるため, アンケートでの調査項目や選択肢は一部異なる。アンケートは, 各国語版と日本語版のものを用意した。日本語版は巻末資料, 各国語版は参考文献に掲げた各国報告書を参照されたい。

アンケート調査の実施については以下のとおりである。

【タイ(バンコック)調査】(平成 13 年度実施)

本調査研究における国外第一調査地域として, 学習者数(54,884 人で海外第 7 位(国際交流基金 2005))・現地での調査協力体制等を勘案し, さらに, 学習環境は一国の中でも地域によってかなり多様であることから, タイ・バンコック市内(一部その近郊を含む)とした。そのため, 本調査はタイ国全体を把握するものではない。

タイ・バンコック市内で日本語教育を実施している機関における学習者を対象とし, 2001 年 12 月に実施した。アンケートはタイ語版と日本語版のものを用意した。国際交流基金バンコック日本語センター(当時)から得た日本語教育実施機関情報をもとに, アンケートを配布し, 回収するという方法で行った。調査票の配布および回収作業については現地協力者の協力を得て, 各機関との事前調整の後, 各機関に直接指定日時に配布・回収するメッセージング方式で行った。その結果, 77 機関の学習者 6,035 名から調査票を回収した。調査票の一部が欠落している等, 回答が明らかに不完全なものを除いた有効回答数は学習者 5,919 名である。

【韓国調査】(平成 14~15 年度実施)

タイ(バンコック)に続く国外第二調査地域として, 学習者数が 894,131 人と国外最大であり(国際交流基金, 2005), 日本語教育が非常に盛んである韓国, 特に学習環境が一国の中でも地域によってかなり多様であることから, 韓国全土を視野に入れ, ソウル, 釜山, 光州の 3 地域を核として, 2003 年 3~9 月に調査を行った。高等教育機関については日本語・日本語教育関連学会を通じて, 中等教育については各地域の日本語教育研究会を通じて, 調査協力校の選定, アンケートの配布及び回収を行った。学校教育以外の機関については調査協力機関を経て, 学習者にアンケートの配布, 及び回収を行った。その結果, 94 機関の学習者 7,331 名から調査票を回収した。調査票の一部が欠落している等, 回答が明らかに不完全なものを除いた有効回答数は学習者 6,739 名である。

【オーストラリア(ビクトリア州)調査】(平成 15~16 年度実施)

オーストラリアは学習者数 381,954 人という, 韓国と中国に次いで日本語教育が盛んな

国である(国際交流基金, 2005)。また, 初等・中等教育機関の学習者が全体の9割以上を占めているという特徴があり, 年少者から成人まで幅広い学習者に関する調査が可能であるという理由から, 調査地域の一つとした。州によって, 学校教育における日本語教育の扱いも異なるが, 日本語学習者が多く, 日本語教師会等の活動も盛んで, 協力が得やすい地域であるビクトリア州を調査地と定め, メルボルン日本語教育センターの協力を得て, 調査を実施した。

初等教育機関の学習者にアンケート調査を実施するのは困難であることから, グループインタビューを行った(383名)。また, 彼らがいかに日本語や日本に触れているかを知るべく, 保護者に対するアンケート調査(回収数 832)を実施した。しかしながら, 中等教育他の教育機関については, 調査研究を行う上での事務手続き上の困難や, アンケートの回収率の低さなどが原因で, 他調査地域との比較に足るだけのデータを得ることはできなかった。

学習者に対するアンケート調査は, 中等教育機関では回収数 309, 高等教育機関では回収数 43であった。

保護者及び中等教育機関の学習者に対するアンケート調査は2003年5~7月, 初等教育機関でのインタビューは2003年11月~2004年3月, 高等教育機関でのアンケート調査は2005年5~6月に実施した。

【台湾調査】(平成15年度実施)

台湾は学習者数が128,641人と, 海外において5番目に多く, 日本語教育が非常に盛んである(国際交流基金, 2005)。学習者層も年少者から年長者まで幅広い。現地協力者の協力の下, 中等教育機関, 高等教育機関, 学校教育以外の機関について, 全土から調査協力校を選定し, 調査を行った。2003年12月~2004年2月に, 財団法人交流協会台北事務所及び現地協力者の協力を得て, 調査票の配布・回収を行った。アンケートは中国語版と日本語版のものを用意した。その結果, 110機関, 3,447件の調査票を回収し, それを分析の対象とした。

【マレーシア調査】(平成16年度実施)

マレーシアは, 学習者数が海外で13番目に多く(17,406人(国際交流基金, 2005)), 現在も学習者が増えている。本調査では, マレーシア全土を対象に調査を行った。マレーシアで日本語教育を実施している機関における学習者を対象とし, 2004年6~7月に実施した。アンケートはマレー語版, 英語版, 日本語版のものを用意した。マレーシア日本語協会の全面的な協力を得て, 調査協力校の選定, 調査票の配布及び回収を行った。その結果, 91機関の学習者5,457名から調査票を回収した。調査票の一部が欠落している等, 回答が明らかに不完全なものを除いた有効回答数は学習者5,360名である。

本調査では, 調査を行った地域の現状把握だけでなく, 各調査地域間の比較検討も視野に入れている。各国の教育制度・学校体系は国によって異なるため, 以下の分析では, 国際交流基金日本語国際センター(2000)を参考にして, 調査対象機関を①~③の三つに分類し, 分析対象とした。

- ①「中等教育機関」：日本の中学校及び高等学校に当たる教育機関
 ②「高等教育機関」：日本の大学院・大学・短期大学・高等専門学校に当たる教育機関
 ③「学校教育以外の機関」：民間の日本語教育機関など、上記①②に含まれない機関

本調査の対象となった機関数と学習者数の内訳を表1に示す。アンケート調査の集計については(株)ストーム(代表：藤田茂)に委託して実施した。

表1 学習者アンケート回答数と実施機関数の内訳 単位：人

		中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
タイ	学習者数	2710 (45.8)	2559 (43.2)	650 (11.0)	5919 (100)
	機関数	41 (53.2)	33 (42.9)	3 (3.9)	77 (100)
韓国	学習者数	3177 (47.1)	2456 (36.4)	1106 (16.4)	6739 (100)
	機関数	45 (47.9)	38 (40.4)	11 (11.7)	94 (100)
オーストラリア	学習者数	309 (87.8)	43 (12.2)	0 (0.0)	352 (100)
	機関数	16 (94.1)	1 (5.9)	0 (0.0)	17 (100)
台湾	学習者数	926 (26.9)	2075 (60.2)	446 (12.9)	3447 (100)
	機関数	35 (31.8)	58 (52.7)	17 (15.5)	110 (100)
マレーシア	学習者数	2276 (42.5)	2245 (41.9)	839 (15.7)	5360 (100)
	機関数	40 (44.0)	23 (25.3)	28 (30.8)	91 (100)

(括弧内は%。以下同様)

2.3.2. インタビュー調査

アンケート調査では、各調査地域での日本語の学習環境と学習手段を全体的に把握するために、大規模な量的調査を行った。しかし、全体像は把握できても、各学習者が具体的にどのようなリソースにどのように接触しているのかについて知るには限界がある。そこで、アンケート調査を補完する質的調査として、より具体的、個別的な日本語との接触状況やそれに対する評価等について聞くインタビュー調査を実施した。

インタビューでの主な調査項目は以下のとおりである。この調査項目は、事前に各調査者に共通した項目として設定したものであるが、インタビューの展開によって内容は調査者の裁量に任された。

【インタビュー項目】

(0) 身分、訪日経験、日本語学習動機

(1) 現在、どこで日本語を学習しているか。勉強を始めて、何年くらいか。

・日本、日本人、日本語とのつながりはどうか(周囲の日本語環境：日本人をよく見るか等)

(2) 日本語の学習は楽しいか。その理由は何か(他の外国語学習との違い等)。

日本語のイメージはどうか。

・現在受講中の日本語の授業についてどう思うか(内容、方法、教科書、頻度、時間、人数等)。

- (3) 授業の予習、復習、テスト勉強等、自分自身でどのように勉強しているか。
- ・(勉強方法として挙がってこないものについて)それをしないのはなぜか。
 - ・授業で扱われること以外のことを勉強しているか。その方法は。
 - ・自分で勉強していて、何かわからないことがある時はどうしているか。
 - ・学習が大変な部分はどんなところか。
 - ・どんな助けがあれば、その学習が容易になると思うか。
- (4) 今後、日本語学習をどう予定、あるいは計画しているか。
- ・日本語学習に対するやる気のもととなっているものは何か。
- (5) その他

インタビューは、現地で協力が得られた学習者を対象に、上記項目をもとにした半構造化式のインタビューを行った。現地調査協力者を含む調査員がそれぞれ実施し、学習者と個別あるいはグループで行った。時間は一人約30～60分で日本語、あるいは現地語で行った。インタビューはMDに録音し、それを文字化した資料をもとに分析を行った。

インタビュー調査対象者の内訳を表2に示す。表中、「複数」とは複数の機関に所属していることを示す。また、オーストラリアの教師数のうち、初・中等教育で41人となっているのは、所属が初・中等教育の区別がつかない対象者がいるためである。本インタビュー調査は、表2にあるように地域による対象者数にばらつきがあり、学習者の所属機関も高等教育機関が中心で、十分なデータを確保できているとは言えない。しかし、このインタビューは量的に全体を把握しようとするアンケート調査を補完する質的調査として位置付けられる。さらに、インタビューを通じて、学習環境の把握を目的としたインタビューの方法論についてもあわせて検討する意味合いも含まれていた。そのため、インタビュー調査では上記質問項目をもとにしながらも、学習者の日本語能力等の背景に配慮しながら、なるべく各学習者から具体的にどのようなリソースにどのように接触しているのかについて引き出すことを主眼に行った。

表2 インタビュー調査対象学習者数と教師数の内訳 単位：人

		初等教育	中等教育	高等教育	学校教育以外	複数	合計
タイ	学習者数	0 (0.0)	0 (0.0)	74 (77.1)	22 (22.9)	0 (0.0)	96 (100)
	教師数	0 (0.0)	5 (16.7)	17 (56.7)	8 (26.7)	0 (0.0)	30 (100)
韓国	学習者数	0 (0.0)	0 (0.0)	86 (83.5)	17 (16.5)	0 (0.0)	103 (100)
	教師数	0 (0.0)	6 (10.7)	25 (44.6)	21 (37.5)	4 (7.1)	56 (100)
オーストラリア	学習者数	383 (98.5)	0 (0.0)	6 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	389 (100)
	教師数	41 (97.6)		1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	42 (100)
台湾	学習者数	0 (0.0)	25 (22.3)	38 (33.9)	49 (43.8)	0 (0.0)	112 (100)
	教師数	0 (0.0)	8 (23.5)	13 (38.2)	8 (23.5)	5 (14.7)	34 (100)
マレーシア	学習者数	0 (0.0)	0 (0.0)	60 (45.5)	72 (54.5)	0 (0.0)	132 (100)
	教師数	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100)

(括弧内は%。以下同様)

2.3.3. 学習環境調査

アンケート調査とインタビュー調査の他に、学習者の日本語学習に影響を与える要因に関する学習環境調査を実施した。具体的には、教育制度、言語事情、外国語教育、日本語教育の教育段階別状況、日本語に関する試験、日本語の教科書、インターネット普及率、テレビ放送や出版状況、日本との外交政策や人的・経済交流、日本人・日本語教師コミュニティ等、現地の日本語教育にかかわるマクロレベルの情報について、国内外における文献収集、インターネットを通じた情報収集、行政や出版等の関係者を対象とした現地聞き取り調査を通じて実施した。現地学習環境調査については(株)ストーム(代表：藤田茂)に一部委託して実施した。

3. 結果

3.1. 調査対象 5 地域における学習環境の概要

ここでは、各調査地域における学習環境調査の結果について、5 地域における学習環境の概要としてまとめる。まず、3.1.1 で日本語教育機関数、人的交流の状況等、5 地域に共通した項目に関する統計データについて比較して述べた後、3.1.2 から 5 地域に個別の学習環境についてまとめる。なお、各調査地域における学習環境は時々刻々と様々に変化する性質のものである。本調査は 5 年に渡って実施した調査であり、調査期間中にも当然変化している。そのため、本節における概要は本調査研究の最終年度である 2005 年度までに収集した情報についてまとめる。

3.1.1. 5 地域共通項目に関する統計データ

(1) 日本語教育機関数

2003 年時点での日本語教育機関数を表 1 に示す(交流協会(2004)、国際交流基金(2005))。表中、()内は日本語母語話者教師在勤機関数を示す。

表 1 日本語教育機関数(2003 年)

	タイ	韓国	オーストラリア		台湾	マレーシア
			全土	ビクトリア		
初・中等教育	165 (45)	2,527 (51)	2,081 (582)	434 (218)	175 (46)	37 (3)
	60.2%	75.8%	94.2%	95.0%	40.2%	28.5%
高等教育	82 (15)	269 (161)	61 (52)	11 (9)	145 (61)	22 (15)
	29.9%	8.1%	2.8%	2.4%	33.3%	16.9%
学校教育以外	27 (25)	537 (143)	67 (51)	12 (10)	115 (69)	71 (47)
	9.9%	16.1%	3.0%	2.6%	26.4%	54.6%
合計	274 (85)	3,333 (355)	2,209 (685)	457 (237)	435 (176)	130 (65)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%

(2) 日本語学習者数

2003 年時点での日本語学習者数を表 2 に示す(交流協会(2004)、国際交流基金(2005))。

表 2 学習者数(2003 年) 単位：人

	タイ	韓国	オーストラリア		台湾	マレーシア
			全土	ビクトリア		
初・中等教育	17,516	780,573	369,157	103,374	36,597	5,562
高等教育	22,273	83,514	8,269	1,823	75,242	6,472
学校教育以外	15,095	30,044	4,528	794	16,802	5,372
合計	54,884	894,131	381,954	105,991	128,641	17,406

(3) 日本語教師数

2003年時点での日本語教師数を表3に示す(交流協会(2004), 国際交流基金(2005))。表中, ()内は日本語母語話者教師数を示す。

表3 教師数(2003年) 単位:人

	タイ	韓国	オーストラリア		台湾	マレーシア
			全土	ビクトリア		
初・中等教育	236 (52)	3,727 (59)	3,044 (684)	754 (260)	522 (66)	66 (5)
高等教育	309 (163)	1,300 (334)	268 (185)	60 (43)	1,304 (221)	132 (69)
学校教育以外	319 (141)	1,204 (312)	313 (258)	70 (62)	670 (279)	214 (128)
合計	864	6,231	3,625	884	2,496	412
	(356)	(705)	(1127)	(365)	(566)	(202)

(4) 人的交流

(a) 日本⇒各国・地域

2003年時点での日本から5地域への訪問者数を表4, 永住者・長期滞在者数を表5に示す(総務省統計局, 2005)。なお, 表4の訪問者のデータは, タイ・韓国については「日本国籍を持つ者」, 台湾・オーストラリア・マレーシアについては「日本に通常(過去12か月のほとんど)居住する者」が調査対象となっている。

表4 訪問者(2003年) 単位:万人

	タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア
総数	104.2	180.2	62.8	65.7	21.4

表5 永住者・長期滞在者数(2003年) 単位:人

		タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア
永住者		595	55	20,655	668	810
長期滞在者	民間企業	13,609	2,156	3,166	合計 15,041	4,623
	留学生・研究者・教師	883	2,345	8,248		112
	政府関係機関	455	140	233		290
	報道・自由業・その他	2,103	8,632	7,439		277
	同居家族	11,131	6,357	5,387		4,657
総数		28,776	19,585	45,128	15,709	10,769

(b) 各国・地域⇒日本

2003年時点での5地域から日本への訪問者数を表6、永住者・長期滞在者数を表7に示す(総務省統計局, 2005)。なお, 表6・7の「韓国」とは「韓国・北朝鮮」を示す。

表6 訪問者(2003年)(「正規入国外国人数」)単位: 万人

	タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア
総数	9.5	163.1	17.5	81.7	6.7

表7 永住者・長期滞在者(2003年)(「在留資格別外国人登録者数」)単位: 人

	タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア	
永住者	5448	(省略)	683	(不明)	1,013	
非 永 住 者	日本人の 配偶者等	12,330	24,176		1,590	891
	定住者	2,283	8,941		110	131
	留学	1,921	16,951		369	2,054
	就学	474	6,560		212	78
	就労	1,355	13,607		6,211	817
	その他	11,014	31,993		2,407	4,024
	総数	29,377	102,228		10,899	7,995

(5) 留学生数

日本から5地域への留学生数(教育人的資源部国際教育振興院(2005), 交流協会(2004), 文部科学省(2004))を表8, 5地域から日本への留学生数(日本学生支援機構, 2004)を表9に示す。表中, 「内)短期留学生」は「総数における短期留学生の数」を示す。

表8 留学生数(日本⇒各国・地域)単位: 人

	タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア
総数	(不明)	1,519	2,200	1,324	(不明)
調査年	—	(不明)	2000年	2000年	—

表9 留学生数(各国・地域⇒日本)単位: 人

	タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア
総数	1,665	15,533	348	4,096	2,010
内)短期留学生	186	1,268	208	345	26

(6) 大学間交流協定締結の状況

2003年時点での大学間交流協定締結の状況(文部科学省, 2004)を表10に示す。表は日本側の機関の種類ごとに集計したものであり, 表中の「共同」は大学共同利用機関を示し, 「その他」には国立高等専門学校等が含まれる。

表10 大学間交流協定締結の状況(2003年)

	タイ	韓国	オーストラリア	台湾	マレーシア	参考: 全協定数
国立	230	522	160	51	26	4,788
公立	8	40	20	4	0	362
私立	119	528	283	206	27	5,604
共同	4	16	5	0	0	113
その他	10	43	20	5	2	425
合計	371	1,149	488	266	55	11,292

参考文献

教育人的資源部国際教育振興院(2005)「Statistics : Foreign Students By Nation」

(http://www.studyinkorea.go.kr/ENGLISH/G100/G100_Co.jsp)

交流協会(2004)「人員往来」

([www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/12/29413e3739e3600649256eaf00267814/\\$FILE/table10koryu.pdf](http://www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/12/29413e3739e3600649256eaf00267814/$FILE/table10koryu.pdf))

国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状』

総務省統計局(2005)『世界の統計 2005年版』総務省統計局

文部科学省(2004)『大学等間交流協定締結状況等調査』

(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)

3.1.2. タイの学習環境の概要

1. 教育制度・日本語教育の概要

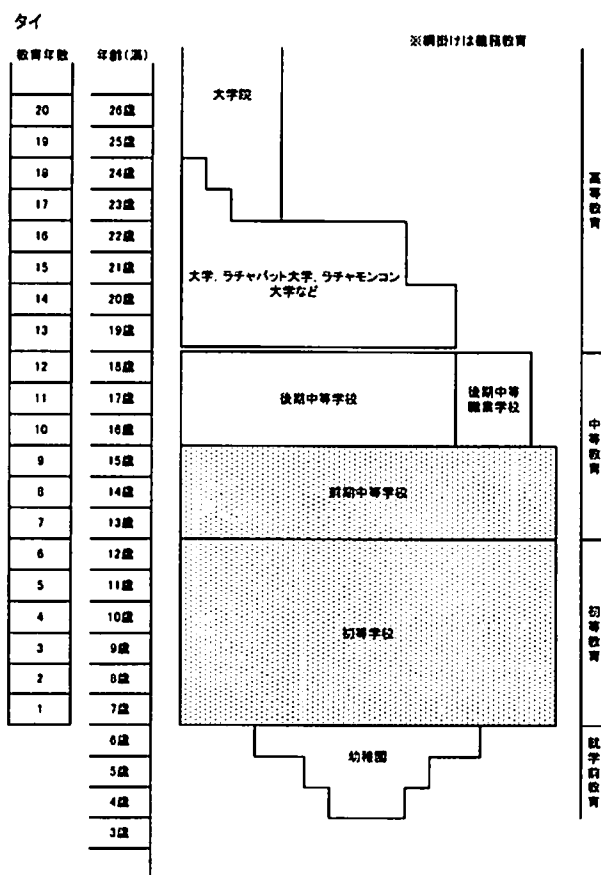
1.1. 教育制度全般

6-3-3 制で、初等学校が 6 年間、前期中等学校が 3 年間、後期中等学校が 3 年間である。前期普通中学校 3 年生終了後、職業専門学校(3 年間)に進学することも可能である。義務教育は、1999 年の国家教育法改正で 9 年間となり、義務教育に加え、高等学校にも無償教育制度が導入されている。

義務教育課程の就学率は高く、2003 年の統計で、初等教育はほぼ 100%、前期中等教育は 84.6%となっている。義務教育以降の進学率は低く、2003 年の統計で、後期中等教育は 58.5%(普通科 37.5%、職業科 21.0%)、大学進学率は 29.5%である(海外子女教育振興財団, 2005)。

高等教育は、総合大学、ラチャパット大学、ラチャモンコン大学、その他で行われている。タイの高等教育は準学士レベル及び学士レベルと、ポスト学士レベルに大きく分けられる。学士取得には準学士課程を終えてさらに 2 年、または中等教育を終えてさらに 4 年(分野によっては 5 年から 6 年)の教育が必要である。ポスト学士以上は、修士が学士の後少なくとも 1 年(通常は 2 年)、博士が修士課程にさらに 3 年程度の教育が必要である。

<教育系統図>



成人教育については、教育省の全体的な企画・立案、監督や資金援助のもとで、様々な省庁や民間団体が初等・中等教育未履修者の教育を行っている(国際交流基金, 2005)。

教育については、現在 1999 年に制定された国家教育法により、抜本的な教育改革が進められている。教育行政については、従来、初等・中等教育及び社会教育・文化は教育省、高等教育は大学庁、教育政策の取りまとめは首相府内の国家教育委員会が所管してきたが、2003 年にこれらが整理され、「教育省」及び「文化省」が設立された。

1.2. 外国語教育

(1) 言語事情

国民の 85%はタイ語を話す。文字は独自のタイ文字が使われる。タイ語は、共通語である中部方言と、北部方言、東北方言、及び南部方言の四つの方言地域に下位分類できる。また、華僑によって中国語(諸方言)が話され、その他、クメール語・モン語・カレン語・ミャオ語等がある(下宮(2000)等)。識字率は、2000 年時点で、95.5%である(海外職業訓練協会, 2005)。

(2) 第 1 外国語, 第 2 外国語

第 1 外国語は英語が必修で、初等学校は 1997 年より開始された。第 2 外国語は、基本的に後期中等教育(高校)より開始され、ドイツ語、フランス語、日本語、中国語、アラビア語、パーリー語、スペイン語、イタリア語の 8 科目から 1 科目選択する。日本語教育は 1947 年にボピットピムク学校(後期中等教育と高等教育前期を合わせた機関)から始まった(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

1.3. 日本語教育の教育段階別の状況

(1) 初等・中等教育

初等学校、前期中等学校では日本語教育を行っている機関はまだ少ない。1981 年に、日本語は後期中等学校(高校)の第 2 外国語(全部で 8 言語)の中の 1 科目に加えられた。その後、年々機関数、教員数、学習者数が増加し、現在初等・中等教育では 238 機関で教えられている(2006 年 2 月国際交流基金バンコク日本文化センター調べ)。2001 年 11 月に教育省から新指導要領が発表され、この中で日本語は、8 つの学習カテゴリー(タイ語、数学、外国語など)のうちの外国語科目の 1 つとして位置付けられた。

(2) 高等教育

現在、高等教育の 122 機関で日本語教育が行なわれている。そのうち主専攻課程を持つ大学は、国立大学が 12 校、ラチャパット大学が 12 校、私立大学が 3 校、その他の大学が 1 校で(2006 年 2 月国際交流基金バンコク日本文化センター調べ)、文学部や人文(社会)学部に設置されている。その他の多くは副専攻や選択科目である。近年は観光学科の日本語履修コースの増加が目立ち、実務的な日本語のニーズが高まっている。

(3) 学校教育以外

ビジネス関係者や学生が中心の語学学校の他に、大学の夜間講座でも日本語が教えられ

ており、日本語の人気は漸増している。大手の語学学校 2 校では施設拡張を実施し、増加する初級学習者に対応している(国際交流基金, 2005)。

2. 試験

2.1. 大学入試における「日本語」の位置づけ

日本語は、1998 年 10 月から試験科目に採用されているが、受験科目として認めるかどうかは各大学の判断に任されている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

表 1 タイの大学における日本語入試科目の受験者数

1998 年 10 月	1999 年 3 月	1999 年 10 月	2000 年 3 月	2000 年 10 月
424 人	409 人	791 人	656 人	1,452 人

(ウォラウィット・チラソンバット, 2001)

2.2. 日本留学試験

2005 年度日本留学試験(第 1 回)の受験者数は、日本国内 10686 人、海外 2584 人であった。そのうち、タイでの受験者は 33 人で、海外全 12 か国中、6 番目に多い(日本学生支援機構, 2005)。

2.3. 日本語能力試験

2004 年度のタイでの受験者数は以下のとおりである。国外の実施国・地域の中で第 4 位で、いわゆる非漢字圏の中では最大の受験者数となっている(<http://momo.jpf.go.jp/jlpt/j/result.html>)。

表 2 日本語能力試験受験者数(2004 年度)

	受験者数(人)
1 級	471
2 級	1,483
3 級	2,364
4 級	3,697
合計	8,018

2.4. BJT ビジネス日本語能力テスト(旧 JETRO Test)

BJT ビジネス日本語能力テストは、ビジネス場面での実際的な日本語の理解力やコミュニケーション能力を測定し、評価する目的で実施されている一般向けのテストである。テストは「JLRT(聴読解テスト)」と「JOCT(オーラルコミュニケーションテスト)」がある。

2005 年度第 12 回の「JLRT(聴読解テスト)」の結果は以下のとおりである。

表3 2005年度第12回(JLRT 聴読解テスト)

	受験者数
タイ	251人
海外計	1,817人
総計(12カ国で実施)	3,094人

(日本貿易振興機構, 2006)

3. 教科書

3.1. 初等・中等教育機関で使用される教科書

『日本語よろしく』(泰日経済技術振興協会編), 『にほんご・あいうえお』『みんなの日本語』(泰日経済技術振興協会編のタイ語版), 『日本語初歩』(国際交流基金編), 『あきこと友だち』(国際交流基金バンコク日本文化センター編)などが使用されている。この『あきこと友だち』は, 国際交流基金バンコク日本文化センターの日本語教育専門家と現地教員共同作成による, タイの後期中等学校(高校)用教科書で, 2004年5月の新学年から, 各学年2分冊の本冊, 教師用指導書, ワークブック, テープ教材が市販されている。これらは国際交流基金バンコク日本文化センターとタイ教育省共催の「中等学校日本語教師新規養成講座」の修了生の所属機関を中心に広く使用されている。

3.2. 高等教育機関で使用される教科書

初級は, 『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク, または泰日経済技術振興協会編のタイ語版), 『初級日本語』(東京外国語大学), 各大学の自主教材などが主に使用されている。中級は, 日本製の教材を中心に多様な教材が使用されている。

3.3. 学校教育以外の機関で使用される教科書

『日本語よろしく』(泰日経済技術振興協会編), 『基礎日本語』『日本語中級』『日本語上級』『みんなの日本語』(泰日経済技術振興協会編のタイ語版), 『にほんごかんたん』(研究社), 『楽しく聞こう』(文化外国語専門学校編), 『わくわく文法リスニング 99』(凡人社)等が使用されている(国際交流基金, 2005)。

4. インターネット普及率

インターネット利用者数は, 2002年の統計ではタイ全土で約353万6千人, 普及率は5.6%である。また, 都市部と地方の間の格差が大きく, バンコクでは普及率が16.0%であるのに対し, 地方部では2.8%と非常に低い(日本政策投資銀行シンガポール駐在員事務所, 2003)。

5. 日本文化の受け入れ

5.1. タイのマス・メディア事情

タイの言語別のテレビ・ラジオ・新聞雑誌の視聴者・購読者数は以下の表の通りである。日本語の場合は, 主にタイ在住の日本人により視聴・購読されている。

表4 テレビ・ラジオの視聴者数及び新聞雑誌読者数(1995年) 単位：人

言語	テレビ視聴者数	ラジオ視聴者数	新聞雑誌読者数
タイ語	403,000,000	40,200,000	20,643,000
中国語(普通話)	70,000	—	31,000
英語	700,000	291,016	670,000
マレー語	2,000	—	—
日本語	25,000	—	15,000
フランス語	3,000	—	4,000
ドイツ語	3,000	—	3,000
スペイン語	—	—	1,000

(ウォラウィット・チラソンパット, 2001)

5.2. テレビ放送

日本から海外への1年間の輸出(または提供)契約の成立したテレビ番組は、1,675番組(シリーズは全体で1番組としてカウント、以下同様)にのぼり、世界で放映される総時間数は、約42,600時間にのぼる。そのうち大半(時間数で46.1%)がアジア地域向けであるが、タイへの輸出は72番組、約1,400時間を占め、各国・地域の中で、番組数で8番目、時間数で3番目に多い(原, 2004)。

5.3. 音楽

日本のポップミュージックのCDも、大手の店であれば、一部のヒット作のみであるが、日本での発売とほぼ同時期に入手可能である。価格も、国内の音楽CDに比べて大きく異なるということはない(但し、国内音楽CDより海外音楽CDの方が若干高めである)。ポップミュージックのCDは、著作権法に違反した形のMP3で売られることが多く、300円程度となっている。

6. 両国間の交流等

6.1. 外交政策

日本とタイとは伝統的に友好関係を維持している。皇室・王室間の親密な関係を基礎に、政治・経済・文化等で緊密な関係を築いており、人的交流も活発である。

6.2. 経済交流

経済面において、日本からタイへの貿易額、投資額、援助額ともに1位である。80年代後半以降、日本企業は円高を背景に積極的にタイに進出した。現在、在バンコク日本人商工会議所加盟企業は1,200社にのぼる。今後、日タイ経済連携協定の締結により、両国の経済関係のさらに緊密になることも考えられる(外務省, 2005)。

6.3. タイでの日本関係のイベント・交流会

日本関係の主なイベントや交流会等は、以下のとおりである。

- ・日本語弁論大会(「日本ASEAN交流年2003」事業)(外務省主催)
- ・ブラパー大学ジャパン・ウィーク2003年(外務省主催)
- ・日本留学フェア(タイ国元日本留学生協会・JASSO共催)

- ・日本映画祭(「日本 ASEAN 交流年 2003」事業)(外務省主催)
- ・週1度の JF theater(日本文化センターにおいての映画会, 無料)(国際交流基金主催)
- ・ラジオ番組(日本語タイ語混合の音楽や日本の情報番組)
- ・タイ国元日本留学生協会主催, 泰日経済技術振興協会主催のイベント
- ・国際交流基金バンコク日本文化センターによるイベント(歌舞伎, 狂言, 歌手のコンサート等, 毎月開催されている。観覧料金はタイ人にとって手ごろな価格となっている)

そのほか, 日本語を主専攻にもつ大学のほとんど, 及び, 一部の高校が, 「ジャパニーズデー」「インターナショナルデー」等として日本関係のイベントを行っている。具体的な内容は, 日本関係の出し物(寸劇, 日本語のカラオケ, 盆踊り等)や, タイ在住の日本人による茶道・生け花等, 伝統文化のデモンストレーション, 日本食の屋台などである。また, 日本人会主催の盆踊り大会(2年に1回開催)も, 交流の場となっている。

7. 日本人・日本語教師コミュニティ

7.1. 日本人会

タイ国日本人会は1913年9月に設立された。2005年7月末現在の会員数は9,571名である(同会ホームページ <http://www.jat.or.th>)。

7.2. 日本語教師会

日本語教師会はタイ国内に「タイ国日本語教育研究会」「北部タイ日本語教師会」「南部タイ日本語教師会」「北部タイ中等教育日本語教師会」「タイ日本語教師会(JTAT)」「ラチャパットの日本語教育を考える会」「みんなの勉強会」などがある。

参考文献

- ウオラウィット・チラソンバット(2001)「タイの言語政策」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第6号, pp.105-114, 国際交流基金日本語国際センター
海外子女教育振興財団(2005)『諸外国の主要学校情報 タイ』 (http://www.joes.or.jp/world_school/world_school.cgi?cmd=dp&num=10600&Tfile=User)
海外職業訓練協会(2005)『各国の情報 タイ』
(<http://www.ovta.or.jp/info/asia/thailand/index.html>)
外務省(2005)『各国・地域情勢 タイ』
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand>)
教科書研究センター(2001)『東南アジア諸国の教科書事情および初等学校における外国語教育に関する調査研究報告書』
国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状』
国際交流基金日本語国際センター(2004)『日本語教育国別情報 タイ』
(<http://www.jpj.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/thailand.html>)
下宮忠雄(2000)『世界の言語と国のハンドブック』大学書林
総務省統計局(2005)『世界の統計 2005年版』総務省統計局
日本政策投資銀行シンガポール駐在員事務所(2003)『タイのIT化と人材育成』

- (<http://www.dbj.go.jp/singapore/english/PDF/S31j.pdf>)
- 日本貿易振興会 日本経済情報課(2005)『日本のアニメーション産業の動向』
(<http://www.jetro.go.jp/jpn/reports/05000977>)
- 日本貿易振興会経済情報部(2001)『タイ、フィリピンの映像コンテンツ調査』
- 日本貿易振興機構(2006)「第12回 JLRT(2005)結果の概要」
(http://www.jetro.go.jp/course/bjt/data/jlrt/pdf/res12report_je.pdf)
- 日本学生支援機構(2004)『留学生受入れの概況 平成16年版』
(www.jasso.go.jp/kikaku_chosa/ryugaku_chosa/16004.pdf)
- 日本学生支援機構(2005)『平成17年度日本留学試験(第1回)受験者数』
(http://www.jasso.go.jp/examination/efjuafis_examinees_0501.html)
- 日本国際教育支援協会(2005)『日本語能力試験結果の概要 2004』
(<http://momo.jpf.go.jp/jlpt/j/result.html>)
- 原由美子(2004)「日本のテレビ番組輸出入状況—2001-2年 ICFP 調査から—」『第13回 JAMCO ウェブサイト国際シンポジウム報告書』(財)放送番組国際交流センター
- ブッサパー・バンチョンマニー, 今枝亜紀, プラパー・セーントンスック(2005)「タイの中等教育用日本語教科書作成プロジェクト」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号, pp.147-157, 国際交流基金バンコク日本文化センター
- プラニー・チョンスツチャリットタム(2004)「タイ国後期中等教育のための日本語シラバス」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第7号, pp.71-82, 独立行政法人国際交流基金日本語国際センター
- 本名信行・岡本佐智子編(2000)『アジアにおける日本語教育』三修社
- 松井嘉和, 北村武士, ウォーラウト・チラソンバット(1999)『タイにおける日本語教育—その基盤と生成と発展—』錦正社
- 文部科学省 2004『大学等間交流協定締結状況』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)
- Office of the Education Council(2004)“*Education in Thailand 2004*”, Bangkok, Amarin, pp.20-31.

3.1.3. 韓国の学習環境の概要

1. 教育制度・日本語教育の概要

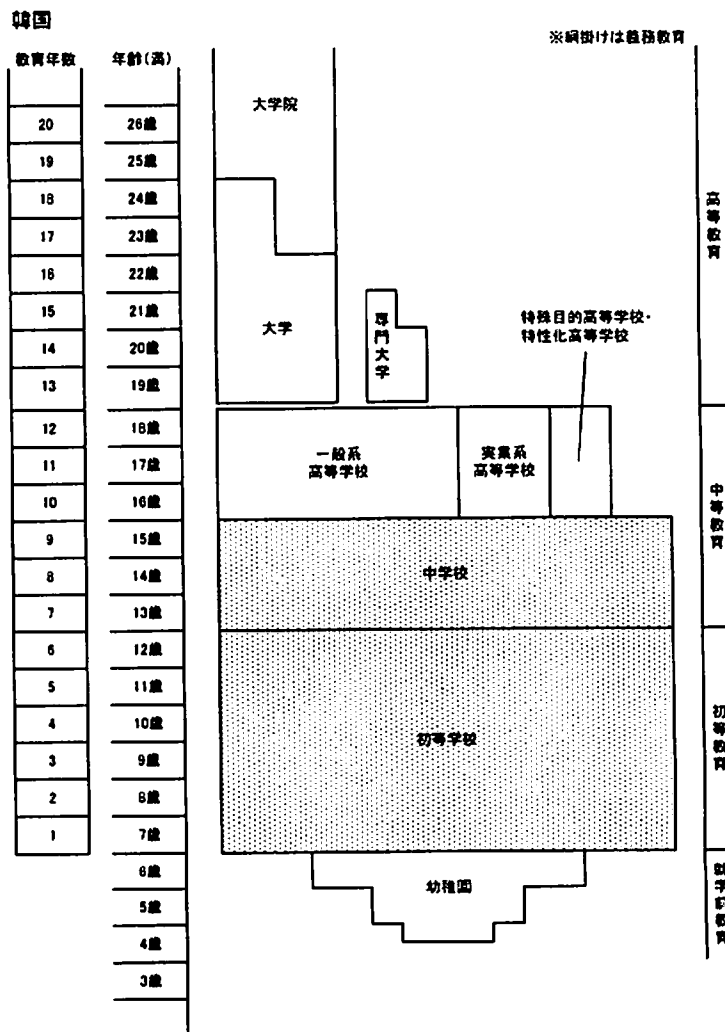
1.1. 教育制度全般

教育課程・年数は、日本と同じ6-3-3制である。一般に、学年は3月から始まり、2学期制(3~7月, 9~2月)となっている。義務教育は、小学校・中学校の9年間である。義務教育の就学率はほぼ100%に達している(海外子女教育振興財団, 2005)。

高等学校は、地域ごとに、「一般系」(進学準備のための普通高校)と「実業系」(就業準備のための職業高校)があり、その他の特殊学校として、「特殊目的高等学校」(芸術・体育・科学・外国語に重点をおいたエリート英才教育)・「特性化高等学校」(情報・デザイン等の専門分野の集中教育)がある(国立教育政策研究所国際研究・協力部, 2002)。

高等学校への進学率は99.7%(2003年)である(海外子女教育振興財団, 2005)。大学は、大きく分けて2~3年の専門大学と4年制大学があり、大学進学率は78.7%(2003年)となっている(海外子女教育振興財団, 2005)。

<教育系統図>



1.2. 外国語教育

(1) 言語事情

公用語は朝鮮語(韓国では「韓国語」と呼ぶ)である。文字は主にハングル文字を使用し、それに加え、漢字が使われることもある。1948年「ハングル専用に関する法律」が制定され、公文書でのハングル専用が実施された。その後約50年間ハングル専用化の流れが加速し、現在印刷物のほとんどはハングル専用になっている。1970年、漢字教育が一時廃止されたが、1972年に漢字教育が復活し、「教育用基礎漢字」1800字が制定された。現在学校教育では、1800字(の一部)が選択科目の「漢文」の授業で教えられているのみであるが、近年漢字を見直す動きも見られ、1999年の国務会議で公文書での漢字使用が認められた。

(2) 第1外国語, 第2外国語

第1外国語として、小学校での英語教育が1997年から実施されており、3,4年生は週1コマ、5,6年生は週2コマ必修となっている。また、中等教育において、中学校1,2年次は週3コマ、3年次は週4コマが必修、高校は8単位が必修となっている(国立教育政策研究所国際研究・協力部, 2002)。

第2外国語については、1973年「第2次教育課程」の第2次部分改定で、高校の第2外国語に日本語が(スペイン語とともに)追加され、独・仏・中・西・日の5つからの選択制となり、第2外国語が必修となった。1997年「第7次教育課程」(後述)が公布され、日本語を含む外国語教育が大きく変化し、現在は先の5言語に加え、露・アラビア語からの選択制となっている。

1.3. 日本語教育の教育段階別の状況

(1) 初等・中等教育

① 「第7次教育課程」

「教育課程」とは日本の学習指導要領に当たり、教育部(現・教育人的資源部)は1997年12月、新しく「第7次教育課程」を告示し、その後2000~2004年にかけて段階的に移行された。この「第7次」は、「21世紀世界化・情報化時代を主導する自立的で創意的な韓国人の育成」を基本方針としている。そして、小学校1年生から高等学校1年生までの10年間を「国民共通基本教育課程」と設定し、高等学校2・3年に「選択中心教育課程」を導入し、「選択教科」を「一般選択」と「深化選択」とに区分している。また、生徒の能力(個人差)にあった多様な教育、学校の裁量による選択幅の拡大といった方向が見られ、日本語を含めた外国語教育にも影響を及ぼしている(国立教育政策研究所国際研究・協力部, 2002)。日本語教育については、「聞く・話すに重点」「学習者中心」「機能中心シラバス」「文化理解重視」「インターネットによる情報収集能力養成」といった点が特徴として挙げられる(門脇, 2003等)。

② 小学校(「初等学校」)

基本的に日本語の授業はない。現在、ソウル市の1校(慶熙大学校付属小学校)のみで、学校の裁量活動として授業がある。クラブ活動として行っている学校はいくつかある(国際交流基金国際センター, 2004)。

③中学校

2001年度から、第2外国語(「生活外国語」)は、1週間の全34コマ中、4コマを占める「裁量活動」の枠内で開始された。「裁量活動」は、「漢文・コンピュータ・環境・生活外国語・その他」があり、そこから生徒が選択履修する。「生活外国語」には、日本語の他に、独・仏・西・中・露・アラビア語があり、履修学年、時間数は各学校によって異なる。2003年度の「生活外国語」の受講者は合計約20万人で、教員数は合計275名である(教育人的資源部『2003年度韓国教育統計年報』)。中学校国定教科書『生活日本語』の販売部数は2004年度で16万部であった(澤邊, 2005等)。

④高校

第2外国語は、旧制度では必修であったが、生徒の選択の幅を大きく広げた「第7次教育課程」では、2,3年次の「選択科目」の1つとして位置付けられている。中学校同様、日本語の他に、独・仏・西・中・露・アラビア語があり、それぞれ「〇〇語Ⅰ」(聞く・話すに重点)と「〇〇語Ⅱ」(「Ⅰ」の深化)がある。2年次のみか、2年～3年の2年間かは、各学校の裁量による。単位数は、3年間の総履修単位216中、「Ⅰ」「Ⅱ」とも6単位である。2003年に日本語を選択した高校生は約56万人で、全高校生の32%である(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。また、第2外国語を履修した学生全体に占める割合は、63%にのぼる。「一般系」の高校生に限った場合、日本語履修者は約37万人で、第2外国語履修者の62%を占める(澤邊, 2005)。

(2)高等教育

戦後、日本語教育は途絶えていたが、1960年代から韓国外国語大学(1961年)をはじめ、大学で日本語学科が設置され始めた。日本語を教えている高等教育機関は2003年時点で269校にのぼる(国際交流基金, 2005)。2000年時点では4年制大学の96大学、短期大学の37大学に日本語関連学科が設けられている(李, 2000)。

(3)学校教育以外

多くは「学院」である。日本の学習塾や専門学校に似た性格で、学生のみならず社会人も通学している。「学院」は、日本の専門学校のように専らそこに所属するのではなく、学校での勉強のうちの特定分野を補助的集中的に勉強したり、特定の能力を身につけるために副次的に通ったりする場所とされる(阿曾村, 2003)。他に、大学附属の語学研修施設(語学堂)、企業内研修、国際交流基金ソウル日本文化センターなどがある。

以上に加え、テレビやラジオ番組の日本語講座、インターネットによる日本語教育が行われている。

2. 試験

2.1. 大学入試における「日本語」の位置付け

「修学能力試験」(日本のセンター試験に相当。国立・私立を問わず課せられる)では、1994年以降日本語を含む第2外国語科目が除外されていたが、2001年度から再び第2外国語科目が加わった。独・仏・西・中・日・露語の6つから選択する。国際交流基金日本語国際センター(2004)によると、2003年度は、全国の大学で約30学科が日本語の試験を評価

に反映させる旨を、教育人的資源部に申請したという。

2.2. 日本留学試験

2005年度日本留学試験(第1回)の受験者数は、日本国内10,686人、海外2,584人であった。そのうち、韓国国内の受験者は683人で、海外の受験者数としては台湾について2番目に多い(日本学生支援機構, 2005)。

2.3. 日本語能力試験

日本国際教育支援協会(2004)によれば、韓国での「日本語能力試験」の受験者数(2004年)は、以下の表1のとおりである。

表1 日本語能力試験受験者数(2004年)

	受験者数
1級	17,559
2級	18,692
3級	17,670
4級	3,815
合計	57,736

2.4. 民間で行なわれる試験

民間の出版社・団体等の行っている日本語能力検定試験について、以下に実施概要をまとめる(国際交流基金日本語国際センター, 2004等)。

表2 民間の出版社・団体等が実施している日本語能力検定試験

試験名	技能	主催	頻度	会場
JPT (Japanese Proficiency Test)	聴解・読解	YBM SISA (出題: 駿台グループ)	年10回(ソウル) 年4回(東京)	
NIKKEN(日検)	聴解・読解	時事日本語社	年2回	ソウル, 釜山 ほか5都市
FLEX (Foreigner Language Examination)	聴解・読解・作文・口頭	韓国外国語大学・ 外国語研修評価院	年4回	ソウル, 釜山 ほか5都市
JAT(中・高校生対象) (Japanese Ability Test)	筆記・聴解	韓国日本語教育研究会・ 韓国日語教育学会	年1回	ソウル, 釜山 ほか5都市
JTRA (Japanese Test Research Adviser)	聴解・読解	国際外国語評価院	年2回	不定
JLT (practical Japanese Level Test)	聴解・読解	韓国外国語評価院	年3回	全国15会場

3. 教科書

3.1. 初等・中等教育機関で使用される教科書

中学校では『生活日本語 こんにちは』(国定教科書)、高等学校では『高等学校日本語』I, II(検定教科書)が使われる。中学校『生活日本語』は、1種のみで、教育部(現・教育

人的資源部)が作成している。その前書きには、目的として「単に言語表現の学習だけではなく、文化理解・言語表現の理解を共に達成すること」「多様な日本文化体験を通じ、日本文化の特徴を理解し、日常生活の基礎的日本語力を養成すること」とあり、「第7次教育課程」の方針に則ったものとなっている。高校用は、民間出版社から出版されている複数の検定教科書がある。内容は、いずれも絵(マンガ・イラスト)や写真が多く載せられ、日本文化紹介記事も多く見られる。

3.2. 高等教育・学校教育以外の機関で使用される教科書

初等・中等教育用以外の教科書、また、参考書・日本語能力試験対策本等は、韓国で作成されたもの、日本の教科書をライセンス契約により韓国で出版したものなど様々ある。高等教育・学校教育以外では、学校が独自に作成した教材を含め、様々な教材が使われる。

3.3. 教科書の制度・価格

初等・中等教育の教科書は、中学校までは無償である。市販の教科書・教材の価格は様々である。大手書籍小売店「教保文庫」のホームページ(www.kyobobook.co.kr アクセス:2005年8月)で、よく売れている日本語教材上位10種に限っても、定価で4,800~16,000ウォン、平均1万ウォン程度であり、一般書の価格と大差はない(1ウォン≒0.1円)。上位10種の内訳は、日本語能力試験対策が5、入門書が3、会話が2となっている。

4. インターネット普及率

韓国インターネット振興院(2005)によると、インターネット利用者数は3,257万人で、利用率は71.9%である。世代別では、以下の表3に示すように若い世代が圧倒的に多い。

表3 インターネット利用者世代別割合

10歳代以下 (6~19歳)	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
97.3%	97.2%	89.8%	67.2%	34.7%	11.0%

(韓国インターネット振興院, 2005)

5. 日本文化の受け入れ

5.1. テレビ放送

韓国は長年禁止してきた日本の大衆文化の輸入を段階的に開放し、第4次日本大衆文化開放(2004年)では、映画、レコード(CD、テープなど)及びゲームソフト販売が全面開放された。

テレビ放送に関しては、スポーツ、ドキュメンタリー、報道番組は全面開放、映画のテレビ放映は、韓国で公開されたもののみ開放されている。歌番組・ドラマも一部開放されている(ドラマは、地上波では共同制作のもののみ)。娯楽番組は未開放である(外務省, 2003)。原(2004)、原・川竹・杉山(2004)等によれば、1年間の輸出(または海外提供)契約の成立したテレビ番組は、1,675番組(シリーズは全体で1番組としてカウント、以下同様)にのぼり、世界で放映される総時間数は、約42,600時間にのぼる。大半(時間数で46.1%)がアジア地域向けであるが、韓国への輸出は169番組、約1,340時間を占め、各国・地域の中で、番組数で3番目、時間数で6番目に多い。内容は、アニメとドキュメンタリーが

多い。アニメは、暴力、裸のシーン、純日本的なものはカットされ、再編集される。ドキュメンタリーのほとんどは、NHK制作のものである。また、NHKや在京民放による日韓共同制作ドラマもいくつか放送され、反響を呼んだ。インターネットを通じての番組提供サービスも見られる。KBS(韓国放送公社)は、ホームページ(www.kbs.co.kr)を通じて、登録制(無料)の番組配信サービスを行っている。また、MBC(文化放送)とSBS(ソウル放送)は、有料の番組配信を行っている。

5.2. 書籍

日本の書籍(オリジナル)は、「教保文庫」のような大きな書店では様々な分野のものが多数扱われている。そういった書店のホームページを使えば、殆ど全てのものが入手可能である。価格は、日本での価格より1~2割程度高い。韓国語への翻訳について、(社)出版文化国際交流会の報告(落合, 2003 舘野, 2004)によれば、韓国での日本書の翻訳出版は、年間4,770点(2003年)に達する。分野は様々だが、マンガ(コミック)が多くを占める。

5.3. 音楽

日本のポップミュージックのCDも、大型の店であれば、その時に日本で流行しているものが入手可能である。輸入のみならず、ライセンス契約により韓国の会社が制作・販売している場合もある。価格も、国内の音楽CDに比べ、大きく異なるということはない。

6. 両国間の交流等

6.1. 外交政策

韓国と日本との外交面での交流は、1998年の金大中大統領訪日を契機に、飛躍的に進んだ。2002年には日韓共催でサッカー・ワールドカップが行われ、同年は「日韓国民交流年」とされ、両国間の交流が活性化した。また、2005年は「日韓友情年」であった。査証等について、1999年、韓国との間で「ワーキングホリデー」制度が開始された。また現在、日本政府は韓国人修学旅行生に対する査証免除を実施している(外務省, 2004等)。

6.2. 経済交流

韓国にとって日本は輸出先として第3位、輸入としては日本が第1位である。内容について、韓国から日本に一次産品を輸出して、日本から工業品を輸入する形から、工業品を相互に輸出入する形に次第に移行してきた。しかし、日韓の間の貿易は不均衡で、韓国の慢性的な対日貿易赤字が続いている(平凡社編集部, 2000等)。

6.3. 韓国での日本関係イベント・交流会

韓国で、日本紹介・日韓交流のイベントが数多く開催されている。主なものについては、在韓国日本大使館ホームページ(www.kr.emb-japan.go.jp)等で行事の内容・日程等を見ることができる。内容は、音楽・芸術・伝統文化・映画等が多い。

7. 日本人・日本語教師コミュニティ

7.1. 日本人会

韓国在留日本人のコミュニティとしては「ソウルジャパンプラブ」や「釜山日本人会」

がある。「ソウルジャパンクラブ」は日本紹介・日韓交流のイベントを韓国で行っている。

7.2. 日本語教師会

主に大学教員によって構成される日本関連の学会は、現在は19存在し、日本文学と日本語学の両方を主流とするものが大半である。歴史ある全国規模の学会としては、「韓国日本学会」(1973年設立、会員数1,950人)及び、「韓国日語日文学会」(同1979年、1,000人)が挙げられる。2002年12月には、「韓国日本学会」「韓国日本語文学会」「日本語文学会」「大韓日語日文学会」「韓国日本文化学会」の5学会が連合した「韓国日本学連合会」が発足した。その他、各地域での比較的小規模な学会による活動も行われている。

また、高校の教員によって構成される研究会は、現在16ある。その中でも「ソウル日本語教育研究会」は、日本語教師を対象とした研修の実施、教材開発、高校生の日本語能力判定試験開発など、活動内容を広げている。2003年2月には、全国16の研究会が連合した「韓国日本語教育研究会」が発足した(国際交流基金日本語国際センター、2004等)。

参考文献

- 阿曾村陽子(2003)「韓国における「学院」の考察—日本語教育を中心に—」『言語と交流』6号, pp. 106-114, 言語と交流研究会
- 李徳奉(2000)「韓国における日本語教育の現状と課題」『日本語学・日本語教育学研究国際シンポジウム報告書』pp. 131-137, 名古屋外国語大学
- 落合博康(2003)『「第9回ソウル国際ブックフェア」報告』(社)出版文化国際交流会
(<http://pace.or.jp/news/PDF/2003%20seoul%20ibf%20report.pdf>)
- 海外子女教育振興財団(2005)『諸外国の主要学校情報 大韓民国』(http://www.joes.or.jp/world_school/world_school.cgi?cmd=dp&num=10700&Tfile=User)
- 外務省(2003)『韓国政府による日本文化開放政策(概要)』
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/bunka/index.html>)
- 外務省(2004)『最近の日韓関係』(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/kankei.html>)
- 門脇薫(2003)「韓国の高校における日本語教育の現状と課題」『山口大学留学生センター紀要』1号, pp. 57-68, 山口大学留学生センター
- 韓国インターネット振興院(2005)『2005年上半期情報化実態調査』
(<http://www.nida.or.kr>)
- 教育人的資源部 国際教育振興院(韓国)ホームページ
(<http://www.studyinkorea.go.kr/jp/index.jsp>)
- 教育部(韓国)(2001)『生活日本語』中学校国定教科書
- 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状』
- 国際交流基金日本語国際センター(2004)『日本語教育国別情報 2004年度 韓国』
(<http://www.jpfi.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/korea.html>)
- 国立教育政策研究所国際研究・協力部(2002)『「知識基盤型社会」を目指す韓国の教育改革』
- 高民定・村岡英裕(2004)「学習の新しい芽生えの一つ—韓国のインターネット・サークルの場合—」『2004年日本語教育国際研究大会 予稿集本冊』pp. 21-27
- 澤邊裕子(2005)「韓国帰国報告会」発表レジュメ, 国際交流基金
- ストーム(株)(2005)『韓国における日本語教育』非公刊報告書(調査委託: 国立国語研究所)

- 宋永彬(2004)「第5章 韓国の漢字」前田富祺・野村雅昭 編『漢字の未来 朝倉漢字講座5』
pp. 129-160, 朝倉書店
- 総務省統計局 (2005)『世界の統計 2005年版』総務省統計局
- 舘野哲(2004)『「第10回ソウル国際ブックフェア」報告』(社)出版文化国際交流会
(<http://pace.or.jp/news/PDF/2004%20seoul%20tateno.pdf>)
- 坪山由美子(2004)「韓国帰国報告会」発表レジュメ, 国際交流基金
- 日本学生支援機構(2004)『留学生受入れの概況 平成16年版』
(www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/16004.pdf)
- 日本学生支援機構(2005)『平成17年度日本留学試験(第1回)受験者数』
(http://www.jasso.go.jp/examination/efjuafis_examinees_0501.html)
- 日本国際教育支援協会 (2004)『日本語能力試験 結果の概要 2004』
(http://www.jees.or.jp/jlpt/jlpt_result.html)
- 原由美子(2004)「日本のテレビ番組の輸出入状況—2001-2年 ICFP 調査から—」『第13回
JAMCO ウェブサイト国際シンポジウム報告書』pp. 69-75, (財)放送番組国際交流
センター
- 原由美子・川竹和夫・杉山明子(2004)「日本のテレビ番組の国際性—テレビ番組国際フロ
ー調査結果から—」『放送研究と調査』48号, pp. 213-250, NHK 放送文化研究所
- 平凡社編集部 編(2000)「大韓民国」『朝鮮を知る事典』新訂増補版, pp. 488-506, 平凡社
- 本田洋(2000)『海外・人づくりハンドブック9 韓国』(財)海外職業訓練協会
- 森山新(2001)「韓国の大学入試への日本語科目の導入とその影響」『言語文化と日本語教育』
22号, pp. 105-117, 日本言語文化学会
- 文部科学省 (2004)『大学等間交流協定締結状況等調査』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)

3.1.4. オーストラリアの学習環境の概要

1. 教育制度・日本語教育の概要

1.1. 教育制度全般

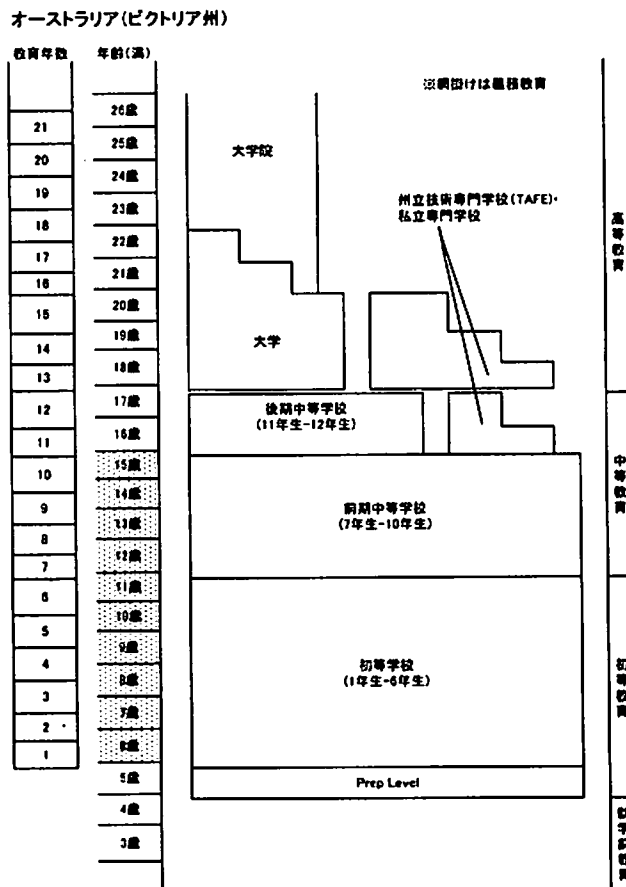
オーストラリアでは、教育に関する責任と権限は各州がもつため、教育制度は州により異なるが、義務教育は基本的に6歳から15歳まで(初等教育と中等教育の前期, 10年生まで)である。初等教育は6年生か7年生までで、それ以降が中等教育となる。義務教育終了後は、さらに中等教育の後期(11~12年生)を継続, 直接TAFE(後述)へ進学, あるいは就職といった道がある。学校教育機関には、州立と私立の区別があり、私立学校にはカトリック系と独立系の2種がある。

高等教育機関は、大学、大学院、TAFE、私立の専門学校等がある。TAFEとは、「Technical and Further Education」の略で、州立の技術専門学校・職業訓練校をさす。TAFEのコースは、ビジネスから農業・レジャーに至るまで多岐に渡る。

学年は1月下旬から2月下旬の間に始まり、12月中旬に終わる(大学は3月~10月)。

義務教育期間の就学率はほぼ100%で、中等教育後期への進学率は87.3%である(海外子女教育振興財団, 2005)。義務教育修了後(満15歳以降)の学校残留率は82.9%(2004年)、大学への進学率は40.8%(2003年)となっている(海外子女教育振興財団, 2005)。

<教育系統図>



本調査の調査地であるビクトリア州では、小学校準備教育(Prep)の1年間を含めて、初等教育7年間、中等教育6年間となっている。Prepの1年間は、小学校に直結している場合が多く、ほとんどの子どもがこの準備教育段階を経て、初等教育を開始するため、本稿で「初等教育」と記す場合、Prepも含まれている。また、ビクトリア州においては、6歳から満15歳までが義務教育年齢と規定されている。

1.2. 外国語教育

(1) 言語事情

英語(オーストラリア英語)が公用語であり、学校教育も英語で行われる。しかし、移民を受け入れる政策により、英語以外の言語を話す人々が数多く存在する。また、移民の母語は、「継承語」として政府の支援を受けている。

また、先住民族(アボリジニ)の流れをくむ者は23万人おり、アボリジニの固有言語の維持継承もオーストラリアにおける言語政策の基本方針の一つとなっている。(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

(2) 外国語教育

後述するように、オーストラリアでは国の政策として、初等・中等教育での外国語(LOTE, Languages Other Than English)教育が盛んに行なわれている。そのため、日本語については、初等・中等教育の学習者がオーストラリア全体の日本語学習者の約97%を占める(国際交流基金, 2005)。

1.3. 日本語教育の教育段階別の状況

(1) 初等・中等教育

初等・中等教育での外国語教育は、州教育省、学校、地域社会、保護者の方針によって決まるため、対象言語や学習期間は一律ではない。初等教育から中等教育への橋渡しの時期(5~9年生)は、多くの州でLOTEの授業が必修となっている。中等後期課程(11~12年生)では、外国語は選択科目となるため、日本語のみならず外国語の履修者は激減する(国際交流基金日本語センター, 2004)。

以下、調査を行ったビクトリア州について記す。

ビクトリア州ではLOTE教育が重視されており、全ての州立学校で、いずれかの段階において、外国語の学習を行うことが奨励されている。

LOTE教育の意義・位置付けについて、ビクトリア州教育委員会(2000)では、日本語を含めた外国語教育の理由を「グローバル化の高まりとオーストラリア国内の文化の多様化」とし、「英語以外の言語の使用能力と異文化間を移動する能力」が非常に重要である点を挙げている。さらにLOTE教育の目標として「コミュニケーション力の育成」、「社会文化の理解」、「言語の持つ役割に対する気づき」、「一般知識の獲得」の4つを挙げている。カリキュラムについて、Prepから学習を始めて10年生(または6年生)まで同じ言語を学習する生徒を対象としたコース(“pathway 1”)と、7年生から始める生徒を対象としたコース(“pathway 2”)の2つを設け、それぞれ学習レベルと学習基準を設定している。

尚、Prepから10年生までの教育について新たな基準(Victorian Essential Learning Standards)が設けられ、2006年から実施されている(スペンス-ブラウン・萩野, 2006)

Victorian Curriculum and Assessment Authority, 2005)。

室屋(2005)によると、州立学校に関する 2003 年度の調査で、LOTE の科目がある学校は、初等教育で全 1,272 校の約 90%にあたる 1,149 校、中等教育で全 310 校のうち約 94%にあたる 293 校であった。採択率の高い言語は以下のとおりである。

表 1 LOTE 科目別学校数・採択率

初等教育		中等教育	
言語名	学校数・採択率	言語名	学校数・採択率
インドネシア語	351 (30.5%)	インドネシア語	131 (44.7%)
イタリア語	299 (26.0%)	フランス語	109 (37.6%)
日本語	221 (19.2%)	日本語	99 (34.1%)
ドイツ語	101 (8.8%)	イタリア語	84 (29.0%)
フランス語	97 (8.4%)	ドイツ語	74 (25.3%)
中国語	44 (3.8%)	中国語	32 (11.0%)
その他の言語*	94	その他の言語*	54

*オーストラリア手話、ギリシャ語、スペイン語等

(Department of Education & Training, Victoria, 2003)

学習者数においても、初等教育ではイタリア語(78,166名)、インドネシア語(77,166名)、日本語(53,019名)、中等教育では、インドネシア語(25,450名)、フランス語(22,536名)、イタリア語(20,620名)、日本語(20,620名)の順に多い(Department of Education & Training, Victoria, 2003)。

また、同時期の調査によれば、州立学校の7年生は8,024名、8年生6,057名、9年生3,522名、10年生1,851名というように、高学年になるにつれて学習者は減り、先述したとおり、11年生(693名)、12年生(473名)からは激減する。しかし、私立学校では後期中等教育段階でも続けて学習する率が州立学校より高い。そのため、例えば2003年の州立と私立を合わせた12年生の日本語修了者(中等教育修了試験で第2言語として日本語を受験した者¹⁾)は1,121名であった。(Victorian Curriculum and Assessment Authority, 2004)

(2) 高等教育

大学においても、日本語は他の言語に比べて人気が高い。ほとんどの大学で日本語を履修・専攻することができる。大学で日本語を専攻する場合は、語学だけでなく社会・文化・経済なども学ぶことができる。また、日本語と法学や商学等の二重学位(Double Degree)とする場合もある。

(3) 学校教育以外

一般を対象とした日本語教育は、一部の語学学校、各地域のコミュニティーカレッジ、大学の公開講座等があるが、学校教育以外での日本語教育はあまり盛んではない。

2. 試験

2.1. 高校卒業試験・大学入試における「日本語」の位置付け

オーストラリアでは一般に、各州の中等教育修了試験と後期中等教育の成績によって、大学入学の可否が決定される。調査対象地域であるビクトリア州では、中等教育修了資格「VCE(Victorian Certificate of Education)」と呼ばれ、日本語もこの中等教育修了試験

の科目となっている。しかし、日本語を含めた外国語科目は受験者が比較的少ない(国際交流基金日本語国際センター, 2004 本柳, 2004)。

2.2. 日本語能力試験

日本語能力試験は、キャンベラ他6都市で実施され、2004年の受験者は848人であり、学習者数に比して少ない。これは、この試験に合格することが特別な資格としては認められないこと、オーストラリアの学習者の学習目的と合致しないことなどが理由として考えられる。

表2 日本語能力試験受験者数

	受験者数
1級	113人
2級	236人
3級	275人
4級	224人
合計	848人

(日本国際教育支援協会, 2004)

なお、日本留学試験はオーストラリアでは実施されていない。

2.3. BJT ビジネス日本語能力テスト(旧 JETRO Test)

年1回、シドニー・ブリスベン・メルボルンの3都市で実施され、2005年(第12回)のJLRT(聴読解テスト)では44人が受験した(日本貿易振興機構, 2006)。

2.4. 民間で行なわれる試験

「ACER (Australian Council for Educational Research)」という機関が実施する「ALC(Australian Language Certificate)」がある。これは中等教育等の生徒を対象とする検定試験で、日本語の試験もあり、資格のための試験というより動機付けのための試験という位置付けである。内容は読解タスクと聴解タスクからなり、レベルは以下の3つがある。

The First Certificate : 80~100時間の学習者 (※聴解タスクのみ)

Beginners' level : 100~200時間の学習者/2年目の学習者向け

Intermediate level : 200~300時間の学習者/3~4年目の学習者向け

3. 教科書

以下は主に国際交流基金日本語国際センター(2004)による。

3.1. 初等・中等教育機関で使用される教科書

オーストラリアで開発された市販教材が多数ある。『YOROSHIKU』、『KIMONO』、『OBENTO』、『MIRAI』、『IMA』などシリーズもの(総合教材)の人気の高い。

初等低学年では、『小学校の日本語』、『Yonde Kaite』、『Ohisama』などの教材が出版されている。また『Idea Book(1~5)』、『Japanese Enrichment Activities』、『Japanese Culture Resources & Activities』などの副教材や教室活動集がある。多くの教師は教科書を使わず、扱うトピックに応じて、副教材や教室活動集を適宜選んで使ったり、独自のリソースを使ったりすることが多い。

初等後期から中等前期課程で使用される教科書『Hai』が2002年に出版された。これには日本の最新の若者文化を紹介する写真が多く掲載されている。中等後期課程用の教材としては、『MIRAI 5-6』、『学校生活』、『高校生活』、『Wakatta』、『A First Course in Japanese』など、各州のシラバスに合った、試験対策的な教科書が出版されており、多くの教師は自分の州のシラバスに合った教科書を使用する。

また、『Sugoi』、『Language Market A&B』、『Michio teaches Japanese』などがCD-ROM教材あるいはウェブ教材として人気がある。

3.2. 高等教育・学校教育以外の機関で使用される教科書

オーストラリアで広く使われている大学向けの教科書は特にないが、初級段階はアメリカで出版された『Nakama』、『Yookoso!』や日本で出版された教科書が、上級段階では小説、新聞記事、ビデオ、インターネットのホームページなどの生教材が使われることが多い。

前述の通り、民間日本語学校での日本語教育は盛んでないため、省略する。

3.3. 教科書の制度・価格

義務教育における教科書が有償か無償かは、各学校によって異なる(文部科学省, 2005)。

また、学校で購入し、学習者に貸し出している場合もある。

4. インターネット

4.1. インターネット普及率

OECDが2003年に15歳児を対象として実施した調査によると、家庭でコンピュータを使うことができると答えたのは全体の94%であり、OECD諸国の平均79%と比べ、家庭でのコンピュータ普及率が高い。そして、インターネットを頻繁に使用していると答えたのはオーストラリアの生徒の場合、74%であり、これもOECD諸国の平均55%を大きく上回っている(OECD, 2005)。

4.2. インターネット使用の状況

オーストラリアでは、学校でマルチメディアを使用することが推奨されており、教室活動にパワーポイントやインターネットを使用する教師が増えてきている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

また、メーリングリストやインターネットのサイトを使って情報・意見交換を活発にしている教師も多い。ビクトリア州では、州政府の「LOTElinx」プロジェクトの一環として「Japaneselinx」というウェブサイト、ビクトリア州日本語教師会(JLTAV)のウェブサイトなどが、日本語教育に関する情報を提供している。また、JLTAVが運営するメーリングリスト「日本語ビクトリア」でも、教師同士の情報交換や意見交換が行われている。

5. 日本文化の受け入れ

5.1. テレビ放送

2001年ICFP調査報告(原, 2004 および 原・川竹・杉山, 2004)によると、2001年における日本製テレビ番組のオセアニア州への輸出量は、年間輸出時間量約42,600時間のうち、300時間にとどまり、全体の1%に満たない。

日本の番組を放送する局として、「Special Broadcasting Service(SBS)」という、多文化・多言語の公共放送がある。世界のさまざまな言語で放送を行っており、各言語でのニュースの他、映画・ドラマ・スポーツ等を放送している。日本の番組は、映画、アニメ、バラエティ番組(「料理の鉄人」等)が放送されている。

5.2. 書籍・音楽

日本の本は、紀伊国屋書店シドニー店といった都市部にある日本専門書店では入手可能である。漫画の人気は高く、店頭の数多く並ぶ。

ポップミュージック等の日本の大衆文化は、アジア地域に比べ受け入れられていないが、琴・尺八といった伝統的な日本音楽は、ラジオ「ABC Classics」等で放送されている。

6. 両国間の交流等

6.1. 外交政策

日本とオーストラリアは、相互補完的な経済関係を基盤として、良好な関係を維持している。

両国の現在の関係は、「日豪通商協定」(1957年調印)と「日豪友好協力基本条約(NARA条約)」(1976年調印)の2つに基づいており、この2つの条約が経済交流促進の枠組み確立に寄与した(マッカーシー, 2004)。

1974年に「文化協定」が署名され、日本側は国際交流基金を中心として、オーストラリア側は豪日交流基金(Australia-Japan Foundation)を中心として、研究者・教員、学生、芸術家、スポーツマン等の交流や、展示・公演事業が行われ、文化交流が進められている(外務省, 2004)。

1980年、オーストラリアとの間で「ワーキング・ホリデー制度」が開始した。「ワーキング・ホリデー制度」とは、2国間の取り決めによって、お互いに、相手国の若者に対し自国の文化理解の為の休暇滞在と、その資金を補う就労を認める制度である。また外務省は、オーストラリア人に対し、日本での短期滞在のビザを免除している。

6.2. 経済交流

第2次大戦前は、日本が羊毛を輸入し、代わりに繊維製品・陶器・雑貨等をオーストラリアに輸出していたが、戦後もこのパターンを踏襲する形で貿易が再開され、その後、日本経済の高度成長とともに資源・原材料を輸入し機械・石油化学製品・乗用車等を輸出する形に移行した(平凡社編集部, 2000)。現在の日本とオーストラリアとの間の貿易額・主要品目は、以下のとおりである。

表3 日豪間の貿易額・主要品目(2003年)

日本⇒オーストラリア	11,469億円	自動車 (49.8%) 映像機器 (4.5%) 自動車部品(4.1%)
オーストラリア⇒日本	17,445億円	石炭 (24.5%) 石油ガス類(14.6%) 鉄鉱石 (12.0%)

(外務省, 2004)

6.3. 教師派遣

日本からオーストラリアへの日本語教師派遣プログラムは数多くある。国際交流基金の日本語教育専門家の派遣の他に、以下のようなものがある（国際交流基金日本語国際センター，2004 他）。

- ・「REX プログラム」：文部科学省事業。日本全国の公立中学・高校の若手教員を、海外の日本語教育を行う中等学校に 2 年間派遣する。オーストラリアへの派遣は数人で、2003 年は、総数 39 人中 7 人がオーストラリアへ派遣されている。
- ・「Assistant to Teachers of Japanese Program」：ビクトリア州教育省と南山大学、同志社女子大学、姫路獨協大学の間の事業。20 人をビクトリア州の公立初等・中等学校へ派遣している。
- ・「Japanese Assistant Training Scheme (JATS)」：タスマニア大学アジア言語・研究学科が実施。数人をタスマニア州の初等・中等学校へ派遣している。

また、民間業者のプログラムによって、アシスタントが各州の初等・中等教育機関に派遣されているが、統計的なデータはない。

6.4. オーストラリアでの日本関係イベント・交流会

日本関連イベントは、日本文化の展示、伝統芸能紹介、映画上映等があり、在オーストラリア日本大使館のホームページ(www.japan.org.au)に内容・日程が掲載されている。

7. 日本人・日本語教師コミュニティ

7.1. 日本人会

オーストラリア在留日本人の相互交流のための団体は各地に存在し、「Japanese Society(日本人会)」あるいは「Japan Club(日本クラブ)」と称する。在オーストラリア日本大使館ホームページに、「日本関連機関」リストが掲載されている。

7.2. 日本語教師会

各州に「日本語教師会(JLTA)」, または日本語教師を含む外国語教師の組織「現代語教師会(MLTA)」が設置されており、ビクトリア州日本語教師会(JLTAV)は特に活動が盛んである。また、州レベルの教師会の全国組織として「全豪現代語教師会(AFMLTA)」がある。活動として、総会・研修会・機関紙発行等の他に、オンライン上でのネットワーク化を目指している。

高等教育の教師を中心とする「オーストラリア日本研究学会(JSAA)」は、日本語教育を含む、日本研究全般の学会で、学会誌『Japanese Studies』の発行、全国大会等を行う。(国際交流基金日本語国際センター, 2004)

8. 日本語教育を支援する組織

オーストラリアには、国際交流基金シドニー日本語センターがあり、日本語及び日本語教育に関する情報提供、各種イベントの開催等を行っている。また、ビクトリア州メルボルンにはメルボルン日本語教育センター(MCJLE)があり、ニュースレターの発行、ワークショップの開催(ビクトリア州・南オーストラリア州・タスマニア州の教師が対象)、教材の貸し出しなどを行って、日本語教師の支援をしている。

注

- ¹ 中等教育修了試験の「日本語」には、第2言語としての日本語に加え、第1言語としての日本語も科目として存在し、受験者も増えている。

参考文献

- 海外子女教育振興財団(2005)『諸外国の主要学校情報 オーストラリア』 (http://www.joes.or.jp/world_school/world_school.cgi?cmd=dp&num=20100&Tfile=User)
- 海外職業訓練協会(2002)『海外・人づくりハンドブック 13 オーストラリア』
- 外務省(2004)『各国・地域情勢 オーストラリア連邦』
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>)
- 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状』
- 国際交流基金日本語国際センター(2004)『日本語教育国別情報 2004年度 オーストラリア』
(<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/australia.html>)
- 在オーストラリア日本大使館(2005)『Japan- Related Organisations』
(<http://www.japan.org.au/Organisations.htm>)
- 在日オーストラリア大使館(2004)『統計で見るオーストラリア』
(<http://www.australia.or.jp/gaiyou/fastfacts.html>)
- スペンス・ブラウン, ロビン・萩野祥子(2006)「オーストラリアの年少者日本語教育—初等・中等教育機関における日本語教育の理念と実践—」『日本語教育』128号, pp. 46-58, 日本語教育学会
- 総務省統計局(2005)『世界の統計 2005年版』総務省統計局
- 日本学生支援機構(2004)『留学生受入れの概況 平成16年版』
(www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/16004.pdf)
- 日本国際教育支援協会(2004)『日本語能力試験 結果の概要 2004』
(http://www.jees.or.jp/jlpt/jlpt_result.html)
- 日本貿易振興機構(2006)『第12回 JLRT(2005)結果の概要』
(http://www.jetro.go.jp/course/bjt/data/jlrt/pdf/res12report_je.pdf)
- 原由美子(2004)「日本のテレビ番組の輸出入状況—2001-2年 ICFP 調査から—」『第13回 JAMCO ウェブサイト国際シンポジウム報告書』pp. 69-75, (財)放送番組国際交流センター
- 原由美子・川竹和夫・杉山明子(2004)日本のテレビ番組の国際性—テレビ番組国際フロー調査結果から—」『放送研究と調査』48号, 213-250, NHK 放送文化研究所
- 平凡社出版部(2000)『オセアニアを知る事典』新訂増補版, 平凡社
- マッカーシー, ジョン(2004)『同志社大学法学部 2004年度大使講座「今, 世界を語る」: 世界の中のオーストラリアとその対日関係』在日オーストラリア大使館(http://www.australia.or.jp/gaiyou/japanese_resources/pdf/lecture_doshisha.pdf)
- 室屋春光(2005)「国際交流基金派遣オーストラリア・ビクトリア州 日本語アドバイザー 帰国報告会」発表レジュメ 国際交流基金
- 本柳とみ子(2004)『ビクトリア州教育省日本語アドバイザー訪問報告』早稲田大学宮崎里司研究室 (<http://www.f.waseda.jp/miyazaki/dat/rep0403d.pdf>)
- 文部科学省(2004a)『大学等間交流協定締結状況等調査』

- (http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)
文部科学省(2004b)「1. 学校教育」『データからみる日本の教育 2004』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/toukei/04042301/002.pdf)
文部科学省(2005)『教科書制度の概要』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901.htm)
文部科学省ホームページ『REX 教員の海外派遣実績』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/rex/009.htm)
Batt, Deleece(2004)「オーストラリアにおける日本語教育—現在の取り組み—」
『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第7号, pp. 83-103, 国際交流基金日本語国際センター
Board of Studies, Victoria[ビクトリア州教育委員会] 2000, *Curriculum and Standards Framework II (CSF II) Language Other Than English Japanese Supplement*
(『カリキュラムと学習基準の枠組み II LOTE(英語以外の言語)日本語用別冊』
国際交流基金日本語国際センター発行 日本語版)
Department of Education & Training, Victoria 2003, *Languages other than English in Government Schools 2003*.
(<http://www.sofweb.vic.edu.au/lem/lotte/pdfs/LOTEreport2003.pdf>)
OECD 2005, *Are students ready for a technology-rich world?*
Victorian Curriculum and Assessment Authority 2004, *VCE Statistical Information 2003*
(<http://vcaa.vic.edu.au/vce/statistics/2003>)
Victorian Curriculum and Assessment Authority 2005, *Victorian Essential Learning Standards* (<http://vels.vcaa.vic.edu.au>)

3.1.5. 台湾の学習環境の概要

1. 教育制度・日本語教育の概要

1.1. 教育制度全般

6-3-3 制である。「国民小学」(小学校)6 年間と「国民中学」(中学校)3 年間で義務教育である。「国民小学」と「国民中学」は、そのほとんどが公立学校である。2 学期制で、年度は9 月から始まる。

就学率及び進学率は極めて高く、義務教育の就学率はほぼ 100%であり、2001 年度の「国民中学」卒業者の上級学校への進学率は 95.8%、「高級中学」(普通高校、以下「高中」)及び「高級職業学校」(職業高校、以下「高職」)卒業者の進学率は 77.1%となっている(交流協会、2002)。

1.2. 外国語教育

(1) 言語事情

中国語(北京語, Mandarin)が公用語で、学校教育では中国語が使われる。文字は漢字の繁体字を使用している。また、台湾人の多くは閩南(びんなん)語を母語として話し、また客家(はっか)語を話す人も多い。漢民族以外に、12 の少数民族(先住民族)が存在し、人口の 2%弱を占めているが、少数民族はそれぞれ民族固有の言語を持っている。

年配者の中には「閩南語と日本語はわかるが、北京語はわからない」という人も多い。

(2) 第 1 外国語, 第 2 外国語

「国民小学」3 年生から、英語が第 1 外国語として必修である。

「高中」で、第 2 外国語(日本語, ドイツ語, フランス語, スペイン語のいずれか)の教育が実施されており、各学校が内容を決定する選択科目の中に位置付けられている。具体的には、主に 1, 2 年生に対し、放課後や土曜日に週 2 時間程度の授業を行っている。(交流協会、2004a)。

1999 年に「推動高級中学第二外語教育五年計画」(高等学校における第 2 外国語推進 5 年計画)が開始された。これは、カリキュラムの一部に自由選択科目を設けて第 2 外国語の授業を行うことを勧めるもので、第 2 外国語を実施する「高中」に対し 5 年間の補助金が支給された(交流協会、2004a 谷口、1999)。2005 年には、新たに「推動高級中学第二外語教育第二期五年計画」が発表されている。

1.3. 日本語教育の教育段階別の状況

(1) 初等・中等教育

「国民小学」では日本語教育は実施されていない。「国民中学」の一部で、日本語教育が実施されている。

「高中」では、1996 年から第 2 外国語の教育が試験的に実施され始めた(国際交流基金日本語国際センター、2004)。前述のとおり、選択科目として第 2 外国語を行うかどうかは各学校が決定する。谷口(1999)、交流協会(2004a)等によると、第 2 外国語希望者の約 7 割が、日本語を希望しているという。

一方、「高職」での日本語教育は「高中」より早く、1986 年に始まった。「高職」では、

応用日語科，応用外語科日本語コース，また観光科等で日本語教育が行われている（交流協会，2004a）。

<教育系統図>

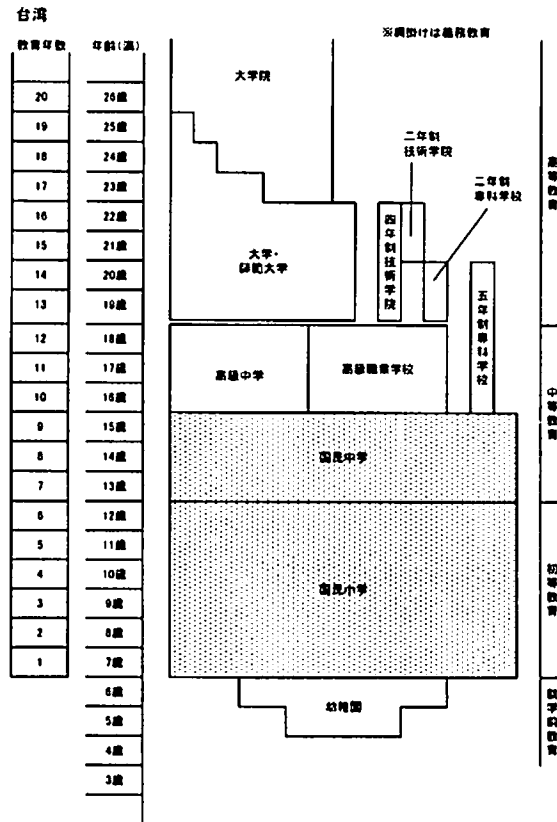


表1 日本語教育実施高校数

	高級中学	高級職業学校
1. 日本語教育実施校(2003年)*	122校	53校
2. 高校全体(2004年)**	312校	161校
日本語教育を実施する高校の割合	39%	33%

(*交流協会，2004a **台湾教育部，2004)

しかし，1999年時点での日本語教育の実施校は，「高中」145校，「高職」92校であるのに対し，2003年の調査では「高中」122校，「高職」53校となっており，日本語教育を行う高校の数は減少傾向にある（交流協会，2004a）。特に，「高職」での大幅な減少が目立つが，これは，大学進学者の増加による「高職」の定員割れにより，日本語科が廃止されたり，「高職」の「総合高校化」（大学進学準備のため，普通高校的性格を持たせる）が進み，受験に関係のない日本語科目が廃止されたりしたことが原因であると考えられる。

(2) 高等教育

日本語教育を行っている高等教育機関は145機関（2003年）である（交流協会，2004a）。そのうち，日本語関連学科を設置している大学は43校，大学院は，修士9校，博士1校となっている。日本語の学科には，大きく「日本語文学系」と「応用日本語系」がある。近年，後者の「応用日本語系」の新設が目立ち，日本語を技能として育成する実務志向が強

い。

また、「専科学校」(専門学校)の日本語科は、実践的な日本語教育を行っているところが多い。日本語科のある5年制専科学校(日本の高等専門学校に相当)は、2002年時点で11校である(李, 2002)。近年、高学歴化が進むなか、「専科学校」の多くが「技術学院」等に昇格している。

(3) 学校教育以外

学校教育以外の日本語教育機関として、「補習班」や「社区大学」、大学の「推广部」、放送講座等がある。

「補習班」は、都市部の駅前や繁華街に多く見られる民間語学学校である。幼児から熟年まで、幅広い世代の学習者が受講している。市、県、教育部が運営する「社区大学」(生涯教育を担うコミュニティセンター的な存在)にも日本語クラスがある。

大学の「推广部」とは、社会人を対象として各種の講座を開講するものであり、その中に日本語のコースもある。街中の交通の便がよい場所で行われる場合が多い。

2. 試験

2.1. 大学入試における「日本語」の位置付け

全国規模で行われる普通大学受験用学科能力試験における外国語科目は英語のみであり、日本語はない。しかし、多元入学制度に変わってからは推薦入学や各大学が独自に選抜試験を行う枠もあり、その場合、日本語を課している日本語学科がいくつかある。また、全国規模で行われる技術職業系大学受験用の学力試験には、日本語の試験がある。「技術学院」や「科技大学」の「応用日語科」に入学を希望する場合に、この試験を受けることが想定されているが、義務づけはされていない。ただし、どの「技術学院」・「科技大学」を希望するかによって、受験が必要となる場合がある。

2.2. 日本留学試験

2005年度日本留学試験(第1回)の受験者数は、日本国内10,686人、海外2,584人であった。そのうち、台湾での受験者は1,331人¹⁾で、海外の受験者の中では一番多く、全体の約52%を占める(日本学生支援機構, 2005)。

2.3. 日本語能力試験

台湾での「日本語能力試験」の受験者数(2004年)は、以下のとおりである。

表2 日本語能力試験受験者数(2004年)

	受験者数(人)
1級	7,873
2級	9,932
3級	11,480
4級	8,448
合計	37,733

(日本国際教育支援協会, 2004)

2.4. 民間で行われる試験

「財団法人言語訓練試験中心」という機関が、以下の2つの試験を実施している²。

(1) 「外語能力試験」

受験資格は満18歳以上で、「筆記試験」(「聴力」「用法—文法と文型」「語彙と読解」と「口頭試験」がある。筆記試験はマークシート、口頭試験は録音形式である。

実施言語は、日本語の他に、英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語がある。

(2) 「実用日本語能力試験」(初級)

日文系の学生の1, 2年生, および日本語の初級学習者を対象とする。レベルは「日本語能力試験」の3, 4級に相当する。「聴力試験」(聴解試験)と「総合試験」(筆記試験)がある。

3. 教科書

日本の教科書の主なものは台湾の出版社が著作権を獲得し、中国語訳を付けて販売されている。近年、台湾で開発された教科書も増加している。

3.1. 初等・中等教育機関で使用される教科書

高校レベルでは、『みんなの日本語(大家的日本語)』(大新書局), 『輕鬆学日本語』(允辰出版), 『日本語』(教育部 委託/金陵女子高級中学 作成), 『新新日本語』(大新書局), 『日本語大丈夫』(文京出版)等が使われている。

3.2. 高等教育機関で使用される教科書

高等教育機関の日本語学科では、『みんなの日本語』, 『進学のための日本語』, 『新日本語の基礎』(以上, 大新書局)等が多く使われる。専攻学生以外の選択授業では, 各校オリジナルのものや, 『みんなの日本語』等が使われる。また, 会話の授業では, 『文化初級日本語』, 『商用日本語』(ともに大新書局)等が使われる。

3.3. 学校教育以外の機関で使用される教科書

学校教育以外の機関では『みんなの日本語』, 『新日本語の基礎』(ともに大新書局)が使われている。

4. インターネット普及率

インターネットも大幅に普及しつつある。2001年時点で加入者数は623万人, 利用者数は782万人に達し, 普及率は約35%である(交流協会, 2002)。さらに, 「(財)資訊工業策進会」がホームページに掲載している統計調査によると, 2005年3月現在のインターネット人口は925万人で, 普及率は約41%であるという。

5. 日本文化の受け入れ

5.1. テレビ放送

1993年, 政府は日本のテレビ番組の放送を解禁した。翌94年, 「おしん」が中国電視によって放映され大ヒットし, これを契機に他の放送局も日本の番組を放送するようになった。

た(交流協会, 2002)。

台湾は、日本からのテレビ番組輸出量が世界第1位となっており、台湾内の全54局の内、日本番組専門チャンネルが4局、日本製の番組を放送しているのは26局にのぼる。内容は、アニメが圧倒的に多いが、最近バラエティ番組が増加し、また、ドラマも日本専門チャンネルを中心に多く放送されている。また、テレビCMでは、日本の商品のCMが25%ぐらいを占めており、その中で日本そのものを象徴する映像が使われている例が多い。台湾製の番組でも、日本の自然や社会、文化を紹介する番組が多く放送されている(原・川竹・杉山, 2004)。

5.2. 書籍

マンガの他、ファッション、ヘアカタログ、手芸や料理等の趣味の雑誌が輸入され、よく売れている。書店で、日本の雑誌の台湾版と並べて置いてある場合もある。

マンガやベストセラー小説等は、多く翻訳が出ている。

5.3. 音楽

大手の小売店であれば、CD等は多くのものが入手可能である。ライセンス契約に基づき台湾の会社が製造・販売する音楽CDは、台湾国内音楽と価格があまり変わらない。

5.4. その他の製品

日本の電化製品・自動車等は世界的に有名だが、それ以外にも、台湾では日本ブランドの食品は高級品とされ、りんご等の生鮮食品、菓子・飲料等の加工品等が多く見られる(交流協会, 2002)。また、多くの化粧品会社も台湾へ進出しており、日本製の化粧品は人気ブランドとなっている。日本製品に対するそういったイメージのためか、台湾で消費される台湾製品のパッケージにも日本語の商品名等が書かれていることが多い。

6. 両国間の交流等

6.1. 外交政策

日本と台湾の間に国交はなく、実務レベルでは民間機関によって関係が維持されている。日本側機関は「財団法人交流協会」、台湾側機関は「亜東関係協会」である。

国交はないものの、現在の陳水扁政権下で日本との関係を重視した政策がなされている(交流協会, 2002)。また、外務省は、2005年9月26日から、短期滞在が目的の台湾人訪日者に対する査証免除を実施している。

6.2. 経済交流

日本と台湾は、1972年の日本と中華人民共和国との国交正常化に伴って外交関係が断絶した。それ以来、民間主体の貿易・経済交流が行われており、日台経済は非常に緊密な関係にある。台湾は日本の主要な貿易相手国であり、日本の輸出先としては第4番目にランクされている。さらに、台湾との輸出・輸入ともに機械類が金額ベースで6割以上を占め、日本の機械工業関連分野にとっても重要な貿易相手である(交流協会東京本部 ホームページ)。

6.3. 台湾での日本関係イベント・交流会

学習者向けの日本語スピーチコンテスト、ディベート大会等が催され、各地域の代表がその日本語力を競い合っている。

6.4. 対日感情

侵略の過去があるため、世代および個人によって日本への感情は様々だが、他の東アジア諸国に比べ、台湾は親日的な人が多いようである。国立国語研究所(2002)のアンケート調査³では、日本が「好き」な人が、「非常に」と「やや」の合計で50%近くに達し、韓国の約10%、中国の約25%に比べ、大幅に高い。特に10年ほど前から、日本好きの若い世代が増え、彼らに対する「哈日族(日本大好き族)」という呼び名も広く知られるようになった。

7. 日本人・日本語教師コミュニティ

7.1. 日本人会等

台湾在住日本人のコミュニティとしては、「台湾日本人会」(台北市、高雄市)や「日僑協会」(台北、台中、高雄)があり、台湾日本人会は会報「さんご」を会員用に配布している。また、国際結婚をしている日本人女性のネットワークには「なでしこ会」(台北)、「桜会」(台中)、「南風」(台南)、「ひまわり」(高雄)がある。

また、日本人学校は台北・台中・高雄にある。

7.2. 日本語教師会

高等教育機関の教師を中心メンバーとする学会は、「台湾日本語文学会」「台湾日語教育学会」「台湾日本語言文芸研究学会」「台湾応用日語学会」の4つである。他に台湾南部の教師会「南部教師会」や高校の日本語教師による研究会等もある(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

注

¹ 日本留学試験は、年に2回実施されるが、台湾の場合、第1回の日本留学試験の結果が交流協会の日本留学奨学金の一次試験として扱われるため、受験者が多い。

² 詳細は実施機関のホームページ www.lttc.ntu.edu.tw を参照のこと。

³ 「好き-嫌い」で、「非常に+/やや+/どちらとも/やや-/非常に-」の5つの選択肢から回答。アンケート調査は1997年から1998年に、15歳から69歳の男女約1000人を対象(ただし、中国と日本は3000人弱)に行われた。

参考文献

- 海外子女教育振興財団(2005)『諸外国の主要学校情報 台湾』 (http://www.joes.or.jp/world_school/world_school.cgi?cmd=dp&num=18100&Tfile=User)
- 外務省(2005)『最近の台湾情勢』 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/kankei.html>).
- 教育部(台湾)(2004)『九十三年度各級学校概況表』 (http://www.edu.tw/EDU_WEB/EDU_MGT/STATISTICS/EDU7220001/data/serial/f.htm?open)

- 交流協会(2001)『台湾における日本語教育事情調査報告書 平成11年度(改訂版)』
- 交流協会(2002)『台湾の経済事情 2002』
- 交流協会(2004a)『台湾における日本語教育事情調査報告書 平成15年度』
- 交流協会(2004b)『人員往来』([http://www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/12/29413e3739e3600649256eaf00267814/\\$FILE/table10koryu.pdf](http://www.koryu.or.jp/ez3_contents.nsf/12/29413e3739e3600649256eaf00267814/$FILE/table10koryu.pdf))
- 交流協会東京本部 ホームページ(<http://www.koryu.or.jp>)
- 国際交流基金日本語国際センター(2004)『日本語教育国別情報 2004年度 台湾』(<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/taiwan.html>)
- 国立国語研究所(2002)『東アジアにおける日本語国際センサス(国際シンポジウム第6~8回専門部会報告)』
- 近藤功(2000)「台湾からの留学生受入に関するこれからの方向」『文学部紀要』14-2, pp. 95-110, 文教大学文学部
- 資訊工業策進会(台湾)「Focus on Internet's News & Data」(<http://www.find.org.tw>)
- 総務省統計局(2005)『世界の統計 2005年版』総務省統計局
- 谷口龍子(1999)「台湾における日本語教育の現状と問題」『東京外国語大学独立百周年記念公開講座「二十一世紀の世界における日本語教育」予稿集』pp. 70-81, 東京外国語大学
- 日本学生支援機構(2004)『留学生受入れの概況 平成16年版』(www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/16004.pdf)
- 日本学生支援機構(2005)『平成17年度日本留学試験(第1回)受験者数』(http://www.jasso.go.jp/examination/efjuafis_examinees_0501.html)
- 日本国際教育支援協会(2004)『日本語能力試験 結果の概要 2004』(http://www.jees.or.jp/jlpt/jlpt_result.html)
- 原由美子(2004)「日本のテレビ番組の輸出入状況—2001-2年 ICFP 調査から—」『第13回 JAMCO ウェブサイト国際シンポジウム報告書』pp. 69-75, (財)放送番組国際交流センター
- 原由美子・川竹和夫・杉山明子(2004)「日本のテレビ番組の国際性—テレビ番組国際フロー調査結果から—」『放送研究と調査』48号, pp. 213-250, NHK 放送文化研究所
- 平凡社出版部(2000)『オセアニアを知る事典』新訂増補版, 平凡社
- 文部科学省(2004)『大学等間交流協定締結状況等調査』(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)
- 李美麗(2002)「五年制専科学校における日本語教育の現状と問題点」『銘傳日本語教育』第5期, pp. 117-133, 銘傳応用日語教育学会

3.1.6. マレーシアの学習環境の概要

1. 教育制度・日本語教育の概要

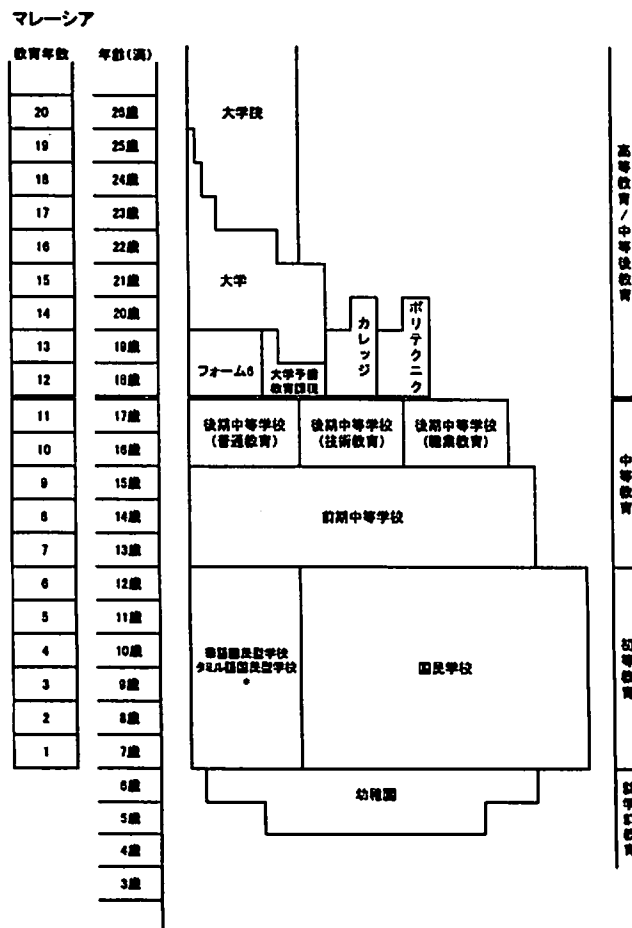
1.1. 教育制度全般

6-3-2 制である。初等教育(小学校)は6年間、中等教育は前期中等教育(中学に相当)3年間、後期中等教育(高校に相当)2年間の計5年間である。後期中等教育の上に1~2年の大学入学準備教育課程がある。2003年から初等教育で義務教育制が導入された。中等教育機関には、主に優秀なマレー系マレーシア人を集めた全寮制のエリート中等学校(以下、レジデンシャルスクール)が全国に50校以上ある(マレーシア教育省、2006)。

高等教育機関としては、大学(3~6年間)、カレッジ(2~3年間)、専修学校・短期大学に相当)、ポリテクニク(2~3年間、総合技術専門学校)がある。このうち、大学に進学するには、大学入学準備教育課程を修了する必要がある。

各段階における就学率及び進学率は、初等教育で93%、中等教育で70%、高等教育で29%となっている(2002年度、ユネスコ統計局、2006)。各教育段階修了時(初等教育6年次、中等教育3年次、中等教育5年次、大学入学準備教育課程修了時)に全国統一試験が行われる(マレーシア教育省、2006)。

<教育系統図>



• 国民学校から中等学校に進学する際、1年間の「移行クラス」(マレー語補習クラス)を経る者もいる。

1.2. 外国語教育

(1) 言語事情

マレー語が国語である。その他、中国系住民の間では主に中国語、インド系住民の間では主にタミル語が使用されている。また、英語も広く使われている。識字率は、10～64歳で93.5%である(2000年国勢調査, マレーシア統計局, 2006)。

マレー語が標準教育言語であるが、初等教育では、中国語やタミル語も認められている。中等教育以降はマレー語が教育言語となるが、私立学校では、他の言語も使用されている。なお、2003年より算数(数学)と理科の教育言語は、順次英語に切り替えられることになった(マレーシア教育ガイド, 2006)。

(2) 英語, 外国語

初等教育から、英語が必修となっている。中等教育では、フランス語、ドイツ語、日本語、中国語、タミル語、アラビア語などから外国語科目を1つ選択する(マレーシア教育省, 2006)。

1.3. 日本語教育の背景

マレーシアの日本語教育は、1981年に第4代首相に就任したマハティール氏が提唱した東方政策の影響を強く受けている。この政策は、日本と韓国に研修生や留学生を派遣し、両国の技術や勤労精神を学ぶことにより、マレーシアの経済発展を図ろうというものである。この政策により、日本の大学および高等専門学校への留学、産業技術研修のための渡日前日本語教育が始まるとともに、中等教育段階での日本語教育も始められた。この東方政策に日本が応えたことがマレーシアの日本語教育に多大な影響を与えている。

1.4. 日本語教育の教育段階別の状況

(1) 初・中等教育

レジデンシャルスクールにおいて、1984年に日本語教育が導入された。2005年現在、40校のレジデンシャルスクールで、外国語科目の1つとしてマレーシア人日本語教師によって日本語が教えられている。学習時間は4年間で240時間である。それ以外の中等学校でも日本語教育が行われ始めている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

(2) 高等教育

2003年時点で11の大学で日本語教育が行われている(2003年時点における大学の総数は30, マレーシア教育ガイド, 2006)。その多くは、選択外国語として週に3～5時間学ぶコースであり、初級レベルにとどまる(国際交流基金, 2005)。

国立大学には日本語コースを持つところが多いが、日本語主専攻はマラヤ大学言語学部のみである。日本語副専攻があるのはマレーシア科学大学、マレーシア国民大学、サバ大学の3校で、他の大学では選択科目である。私立大学や単科大学でも日本語教育を始める学校が増えてきている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

(3) 学校教育以外

民間の日本語学校、非営利団体の日本語クラス、公的機関が運営する教育機関、日系企業(社員教育)などで日本語が教えられている。

2. 試験

2.1. 進級・進学試験における「日本語」の位置付け

各教育段階修了後に実施される全国統一試験の科目に日本語は含まれていない(マレーシア教育省, 2006)。

2.2. 日本留学試験

2005年度日本留学試験(第1回)のマレーシア人受験者数は、日本国内で24人(国内受験者の0.2%)、マレーシアで33人(海外で受験者の1.3%)であった(日本学生支援機構, 2005)。

2.3. 日本語能力試験

2004年度日本語能力試験のマレーシアにおける受験者数は2,798人であった(日本国際教育支援協会, 2004)。

表1 日本語能力試験受験者数(2004年度)

	受験者数(人)
1級	131
2級	548
3級	766
4級	1,353
合計	2,798

2.4. レジデンシャルスクールでの試験

レジデンシャルスクールでは、2002年度から4年終了時に「日本語統一試験」を行っている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

3. 教科書

3.1. 教科書制度

初等教育の全教科と中等教育の一部の教科の教科書は国が作成・発行しているが、それ以外は民間の出版社が作成したものを国が検定している(教科書研究センター, 2001)。

2006年現在、教科書は初等・中等教育の学生の80~90%に無償貸与されているが、政府は2008年までに100%貸与の実現を目指している(マレーシア教育省, 2006)。

3.2. 中等教育機関で使用される日本語教科書

レジデンシャルスクールでは、『レジデンシャルスクール日本語シラバス』に基づく教科書『にほんごこんにちは』が使用されている。付属の『れんしゅうノート』(全4冊)とテープ、『アクティビティ集』(全4冊)も使用されている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

3.3. 高等教育機関・学校教育以外の機関で使用される日本語教科書

『みんなの日本語』が最も多く使われている(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

4. インターネット

4.1. インターネット普及率

インターネット普及率は、2005年現在、ダイヤルアップ式で13.9%(加入者数3,672,000人)となっている(マレーシア通信マルチメディア委員会, 2006)。

4.2. 学校教育におけるインターネットの使用状況

初・中等教育では、すべての学校をインターネット(ブロードバンド)で結ぶ「スクールネット計画」や、IT教育設備を持つ学校を整備する「スマートスクール計画」が現在推進されている。2005年末時点では、全国の9割の学校にスクールネット設備が設置されている(マレーシア教育省, 2006)。

日本語の授業におけるコンピュータやインターネットの使用は、ほとんど行われていない(国際交流基金日本語国際センター, 2004)。

5. 日本文化の受け入れ

5.1. テレビ放送

2001年時点で、日本からマレーシアに輸出されているテレビ番組数は、64番組、899時間であった(原, 2004)。

6. 両国間の交流等

6.1. 外交政策

日本とマレーシアとの両国間の関係は全般に良好に推移してきた。1981年、マハティール氏が首相に就任し、工業化・近代化推進の手段として「東方政策」を提唱したことで、日本に対する関心が高まった。

6.2. 経済交流

日本はマレーシアにとって最大の貿易相手国である。対日輸出は増加しているものの、全輸出に占める対日輸出の割合は低下傾向にある。輸入の相手国としては日本が依然1位である(海外職業訓練協会, 2000)。

表2 マレーシア主要貿易相手国(2004年)

輸出	輸入
1位 米国 (18.8%)	1位 日本 (15.9%)
2位 シンガポール (15.0%)	2位 米国 (14.5%)
3位 日本 (10.1%)	3位 シンガポール (11.1%)

(マレーシア国際貿易産業省, 2006)

6.3. マレーシアでの日本関係のイベント・交流会

日本関係のイベントとしては、毎年「ジャパン・フェスティバル(映画鑑賞会、絵画展、弁論大会、コンサート等)」などの日本紹介事業が実施される。また、現地日本人会等が中心となって開催する盆踊り大会には、毎年、マレーシア人・日本人合わせて3万人以上が参加するという(在マレーシア日本大使館、2006)。

7. 日本人コミュニティ等

7.1. 日本人会

マレーシアにある主な日本人会は以下のとおりである(在マレーシア日本大使館、2006)。

- ・「クアラルンプール日本人会」

1963年設立。会員数(2005年)1,995人、家族を含めると4,884人。

- ・「ジョホール日本人会」

1991年設立。会員数(2004年)832人。

- ・「ペナン日本人会」

1977年設立。会員数(2005年)874人。

7.2. 日本語教師会

マレーシア人教師を中心とした「マレーシア日本語教師会」(2000年設立)がある。ただし、政府の認可は得たものの、実質的な活動は開始されていない(国際交流基金日本語国際センター、2004)。

参考文献

海外職業訓練協会(1993)『マレーシアの人々』

海外職業訓練協会(2000)『海外人づくりハンドブック7 マレーシア』

海外職業訓練協会(2005)『各国の情報 マレーシア』

(<http://www.ovta.or.jp/info/asia/malaysia/index.html>)

外務省(2005)『各国・地域情勢 マレーシア』

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia>)

教科書研究センター(2001)『東南アジア諸国の教科書事情および初等学校における外国語教育に関する調査研究報告書』

国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状』

国際交流基金クアラルンプール日本文化センター(来嶋洋美)(2000a)『学部留学予備教育修了者のその後—マラヤ大学予備教育課程(AAJ: AMBANG ASUHAN JEPUN)の概要—』

(http://www.jpfc.go.jp/j/urawa/world/chek/wld_03_05_03.html)

国際交流基金クアラルンプール日本文化センター(坪山由美子)(2000b)『レジデンシャル・スクールにおける日本語教育』

(http://www.jpfc.go.jp/j/urawa/world/chek/wld_03_05_02.html)

国際交流基金クアラルンプール日本文化センター(根津誠)(2005)『中等教育から見たマレーシアでの日本語教育支援』(http://www.jpfc.go.jp/j/learn_j/voice_j/tounan_asia/malaysia/2005/report01.html)

- 国際交流基金日本語国際センター(2004)『日本語教育国別情報 2004年度 マレーシア』
(<http://www.jpfi.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/malaysia.html>)
- 在マレーシア日本大使館(2005)『マレーシアの東方政策—ルックイーストポリシー—』
(<http://www.my.emb-japan.go.jp/JP/nitima/toho.htm>)
- 在マレーシア日本大使館(2006)ホームページ (<http://www.my.emb-japan.go.jp>)
- 総務省統計局(2005)『世界の統計 2005年版』総務省統計局
- 日本学生支援機構(2004)『留学生受入れの概況 平成16年度版』
(www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/16004.pdf)
- 日本学生支援機構(2005)『平成17年度日本留学試験(第1回)受験者数』
(http://www.jasso.go.jp/examination/efjuafis_examinees_0501.html)
- 日本国際教育支援協会(2004)『日本語能力試験結果の概要 2004』
(http://www.jees.or.jp/jlpt/jlpt_result.html)
- 日本貿易振興会 日本経済情報課(2005)『日本のアニメーション産業の動向』
(<http://www.jetro.go.jp/jpn/reports/05000977>)
- 原由美子(2004)「日本のテレビ番組輸出入状況—2001-2年 ICFP 調査から—」『第13回 JAMCO
ウェブサイト国際シンポジウム報告書』pp. 69-75, (財)放送番組国際交流センター
- 本名信行・岡本佐智子編(2000)『アジアにおける日本語教育』三修社
- マレーシア教育ガイド(2006) (<http://www.studymalaysia.com>)
- マレーシア教育省(2006) (<http://www.moe.gov.my>)
- マレーシア高等教育省(2006) (<http://www.mohe.gov.my>)
- マレーシア国際貿易産業省(2006) (<http://www.miti.gov.my>)
- マレーシア通信マルチメディア委員会(2006) (<http://www.mcmc.gov.my>)
- マレーシア統計局(2006) (<http://www.statistics.gov.my>)
- 文部科学省(2004)『大学等間交流協定締結状況等調査』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)
- ユネスコ統計局(2006) (<http://www.uis.unesco.org>)

3.2. アンケート調査結果に見る学習者の学習環境と学習手段

2.3.1で述べたアンケート調査の中で、大規模なアンケート調査を実施したタイ(バンコック)調査、韓国調査、台湾調査、マレーシア調査で共通して聞いた調査項目のうち、主な29項目について並べて示す。オーストラリア(ビクトリア州)調査では、他調査地域との比較に足るだけのデータを得ることができなかつたため、ここでは取り上げない。なお、タイ(バンコック)調査は平成13年度(2001年12月)、韓国調査は平成14～15年度(2003年3月～9月)、台湾調査は平成15年度(2003年12月～2004年2月)、マレーシア調査は平成16年度(2004年6月～7月)に実施した結果である。さらに、アンケートは各調査で現地学習者に合わせた言語に翻訳して実施していることから、バックトランスレーションを行ったとはいえ、質問項目の内容を各調査で完全に一致させることは不可能である。また、各調査地域の学習環境に合わせて、質問項目数、選択肢数にも多少の増減がある。各アンケート調査の日本語版は巻末資料に示す。各言語によるアンケートと調査結果については、各アンケート調査結果報告書を参照されたい。

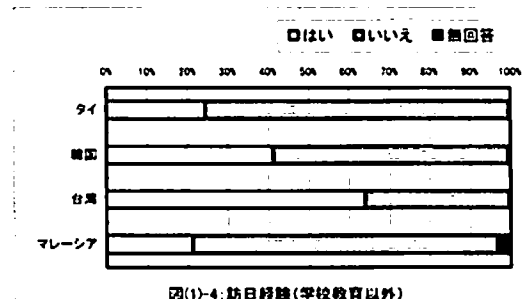
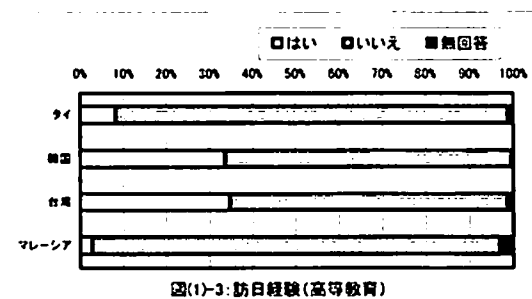
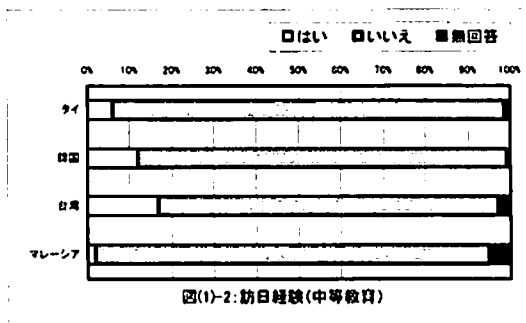
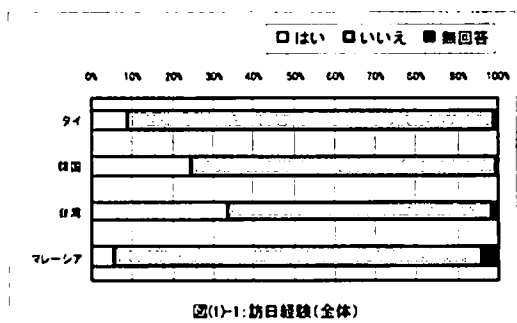
以下、29項目について、アンケートでの実際の質問項目(日本語版)、各調査の学習者全体、各調査の学習者の所属機関別(中等教育・高等教育・学校教育以外)の結果を示す。なお、< >内は巻末資料で示した各アンケート項目での項目番号を示し、「タ」はタイ、「韓」は韓国、「台」は台湾、「マ」はマレーシアをそれぞれ指す。例えば、<タF8、韓・台・マF8-2>は「タイ調査の項目番号F8、韓国・台湾・マレーシア調査のF8-2」を示す。

(1) 訪日経験

質問項目：「日本に行った経験がありますか。」<F8>

全体(図(1)-1)：「はい」がマレーシア(5.2%)<タイ(9.0%)<韓国(24.6%)<台湾(33.6%)

所属別(図(1)-2～4)：共通して中等教育<高等教育<学校教育以外の順で訪日経験が多い。



(2) 訪日目的(訪日経験があると回答した学習者対象)

質問項目：「日本に行った目的は何ですか。」(複数回答可) <タ F8, 韓・台・マ F8-2>

全体・所属別(表(2)-1~4)：地域・所属に共通して「観光」が第1位。

<表(2)-1：全体> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	観光 (63.4)	観光 (64.3)	観光 (87.2)	観光 (39.5)
2位	交流 (25.2)	短期留学(1) (10.2)	親族訪問 (10.6)	国際交流 (19.2)
3位	留学 (18.4)	家族滞在 (9.9)	短期留学(1) (9.4)	企業研修 (12.1)

<表(2)-2：中等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	観光 (70.7)	観光 (73.3)	観光 (91.6)	観光 (52.4)
2位	交流 (30.6)	家族滞在 (13.4)	親族訪問 (13.5)	家族滞在 (19.0)
3位	留学 (17.2)	その他 (9.5)	国際交流 (9.0)	親族訪問 (16.7)

<表(2)-3：高等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	観光 (63.1)	観光 (62.0)	観光 (86.1)	観光 (39.3)
2位	交流/留学 (26.6)	短期留学(2) (16.6)	短期留学(1) (12.7)	国際交流 (31.1)
3位		短期留学(1) (10.7)	親族訪問 (9.9)	家族滞在 (16.4)

<表(2)-4：学校教育以外> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	観光 (56.4)	観光 (65.6)	観光 (87.7)	観光 (36.5)
2位	企業研修 (19.2)	仕事 (12.8)	親族訪問 (10.9)	企業研修 (18.5)
3位	交流/その他 (17.9)	家族滞在 (10.4)	企業研修 (6.3)	国際交流 (18.0)

※短期留学(1)：6ヶ月未満，短期留学(2)：6ヶ月以上1年未満

(3) 日本語学習動機

質問項目：「日本語の学習を始めた理由や動機は何ですか。」(強い順に3つ選択) <F9>

全体(表(3)-1)：タイ・台湾・マレーシアは「日本語に興味がある」，韓国は「学校の授業にある」が1位。

所属別(表(3)-2~4)：韓国では中等教育で「学校の授業にある」，高等教育・学校教育以外で「日本語に興味がある」が1位。タイでは「就職に有利」が所属に共通して2位。

<表(3)-1：全体>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語に興味がある	学校の授業にある	日本語に興味がある	日本語に興味がある
2位	就職に有利	日本語に興味がある	日本のものが好きだ	日本に行きたい
3位	日本に行きたい	日本に興味がある	日本に行きたい	日本のものが好きだ

<表(3)-2：中等教育>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語に興味がある	学校の授業にある	日本語に興味がある	日本語に興味がある
2位	就職に有利	日本語に興味がある	日本のものが好きだ	日本に行きたい
3位	日本に行きたい	日本のものが好きだ	日本に行きたい	学校の授業にある

<表(3)-3：高等教育>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語に興味がある	日本語に興味がある	日本語に興味がある	日本語に興味がある
2位	就職に有利	日本に興味がある	日本のものが好きだ	日本に行きたい
3位	学校の授業にある	学校の授業にある	学校の授業にある	日本科学技術に興味がある

<表(3)-4：学校教育以外>

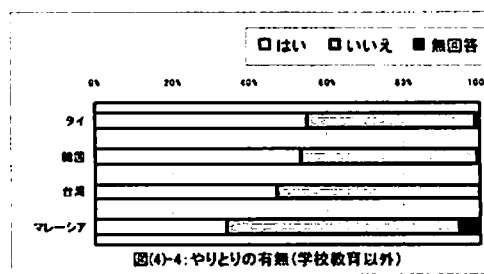
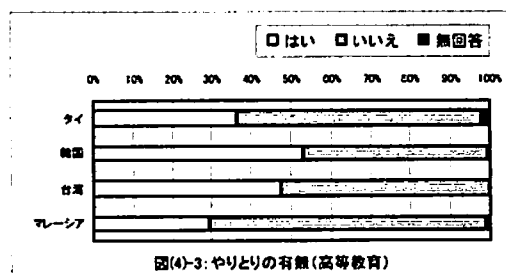
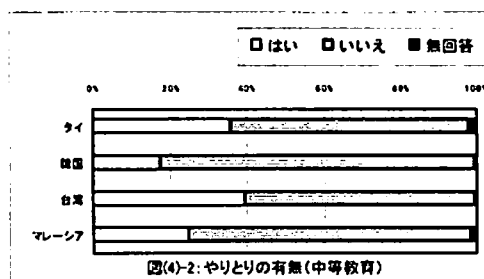
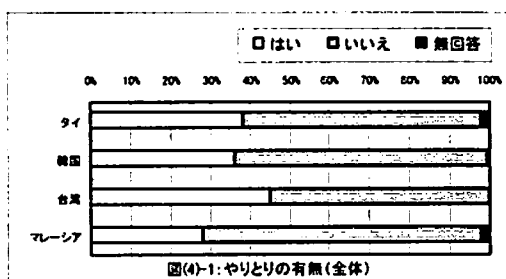
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語に興味がある	日本語に興味がある	日本語に興味がある	日本語に興味がある
2位	就職に有利	日本に興味がある	日本のものが好きだ	現在の仕事に必要なだ
3位	現在の仕事に必要なだ	日本に行きたい	日本に行きたい	日本に行きたい

(4) やりとりの有無

質問項目：「日本語の授業以外で日本語を使ってやりとり(会話、電話、手紙、電子メールなど)をすることはありますか。」 <Q1>

全体(図(4)-1)：「はい」がマレーシア(28.1%)<韓国(36.4%)<タイ(38.0%)<台湾(45.3%)

所属別(図(4)-2~4)：タイでは、中等・高等教育で35.4%・36.5%であるが、学校教育以外では55.1%となっている。韓国では、中等教育で17.4%であるが、高等教育・学校教育以外では53.3%となっている。



(5) やりとりの相手((4)で「はい」と回答した学習者対象)

質問項目：「日本語の授業以外でどんな人と日本語でやりとりしますか。」(複数回答可)

<Q1-1>

全体(表(5)-1)：「日本語の教師」「学校の友人」「知り合い」が多い。

<表(5)-1：全体>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師	知り合い	学校の友人	日本語の教師
2位	学校の友人	日本語の教師	日本語の教師	学校の友人
3位	知り合い	学校の友人	知り合い	知り合い

<表(5)-2：中等教育>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師	学校の友人	学校の友人	学校の友人
2位	学校の友人	日本語の教師	日本語の教師	日本語の教師
3位	知り合い	知り合い	知り合い	知り合い

<表(5)-3：高等教育>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師	知り合い	学校の友人	日本語の教師
2位	学校の友人	日本語の教師	日本語の教師	学校の友人
3位	知り合い	学校の友人	知り合い	塾や語学学校等のクラスメート

<表(5)-4：学校教育以外>

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師	知り合い	日本語の教師	日本語の教師
2位	知り合い	日本語の教師	塾や語学学校等のクラスメート	塾や語学学校等のクラスメート
3位	会社の上司	学院・語学塾等のクラスメート	知り合い	知り合い

(6)最もよくやりとりする相手(4)で「はい」と回答した学習者対象)

質問項目：「最もよくやりとりする人、あるいは人たちはだれですか。」

<タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2①>

所属別(表(6)-2~4)：各地域について所属別の1位を以下に示す。

タイ：中等・高等教育では「日本語の教師」、学校教育以外では「会社の上司」

韓国：中等教育では「学校の友人」、高等教育では「知り合い」、学校教育以外では「日本語の教師」

台湾：共通して「日本語の教師」

マレーシア：中等教育では「学校の友人」、高等教育・学校教育以外では「日本語の教師」

<表(6)-1：全体>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師 (30.9)	知り合い (25.2)	日本語の教師 (33.3)	日本語の教師 (38.2)
2位	学校の友人 (12.9)	日本語の教師 (24.6)	学校の友人 (25.2)	学校の友人 (27.9)
3位	知り合い (10.9)	学校の友人 (20.4)	知り合い (13.5)	知り合い (7.3)

<表(6)-2：中等教育>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師 (36.1)	学校の友人 (26.2)	日本語の教師 (35.1)	学校の友人 (40.4)
2位	学校の友人 (17.0)	日本語の教師 (23.0)	学校の友人 (28.5)	日本語の教師 (37.9)
3位	知り合い (7.2)	知り合い (20.2)	知り合い (13.2)	知り合い (5.9)

<表(6)-3：高等教育>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語の教師 (33.8)	知り合い (24.8)	日本語の教師 (33.6)	日本語の教師 (42.7)
2位	知り合い (13.4)	日本語の教師 (22.7)	学校の友人 (27.9)	学校の友人 (27.0)
3位	学校の友人 (12.1)	学校の友人 (19.2)	知り合い (14.5)	塾や語学学校等のクラスメート (10.1)

<表(6)-4：学校教育以外>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	会社の上司 (24.2)	日本語の教師 (23.6)	日本語の教師 (29.0)	日本語の教師 (28.3)
2位	知り合い (19.6)	知り合い (23.4)	塾や語学学校のクラ (9.5)	知り合い (11.5)
3位	日本語の教師 (13.5)	学校の友人 (10.3)	スメント/知り合い	職場の同僚 (11.2)

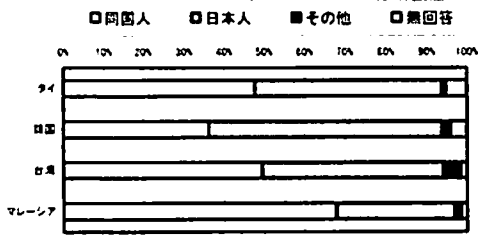
(7)やりとりの相手の国籍(6)で回答した最もよくやりとりする相手について)

質問項目：「どこの国の人ですか。」<タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2②>

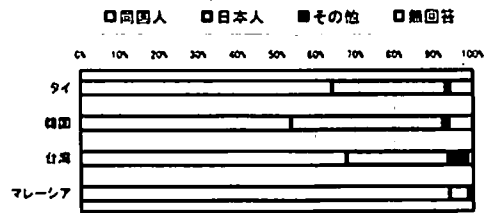
全体(図(7)-1)：同国人の割合

韓国(36.1%)<タイ(47.8%)<台湾(49.5%)<マレーシア(67.7%)

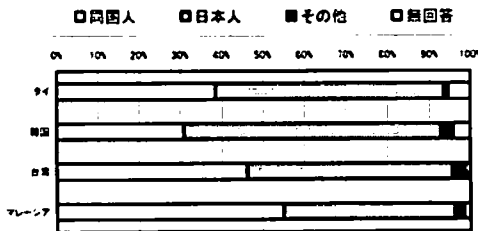
所属別(図(7)-2~4)：地域に共通して中等教育<学校教育以外<高等教育の順で同国人の割合が減り、日本人が多くなる。



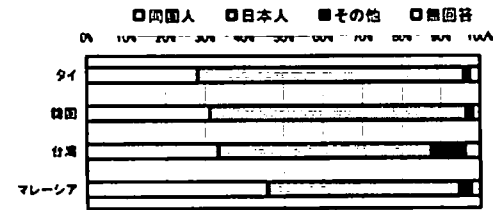
図(7)-1 やりとりをする相手の国籍(全体)



図(7)-2 やりとりをする相手の国籍(中等教育)



図(7)-3 やりとりをする相手の国籍(高等教育)



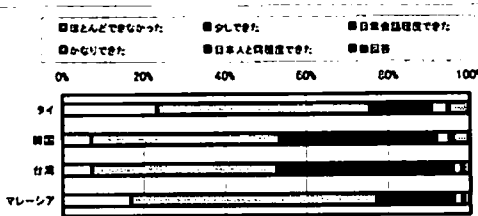
図(7)-4 やりとりをする相手の国籍(学校教育以外)

(8) やりとりを始めた頃の日本語力((6)で回答した最もよくやりとりする相手について)
 質問項目: 「やりとりをするようになった頃, あなたの日本語はどうでしたか。」

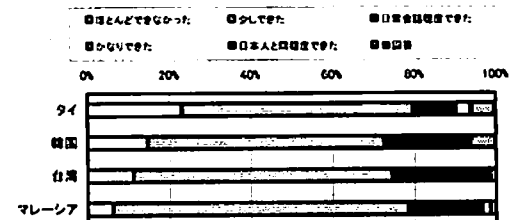
<タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2④>

全体(図(8)-1): 韓国・台湾では「少しできた」(46.7%・45.8%)「日常会話程度できた」(38.0%・42.7%)が多い。タイ・マレーシアでは「少しできた」(52.4%・60.5%)が最も多く、「ほとんどできなかつた」も23.4%・16.7%いる。

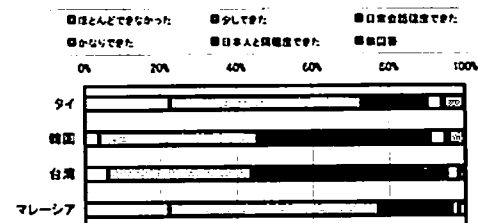
所属別(図(8)-2~4): 地域に共通して「少しできた」が中等教育で最も多い。



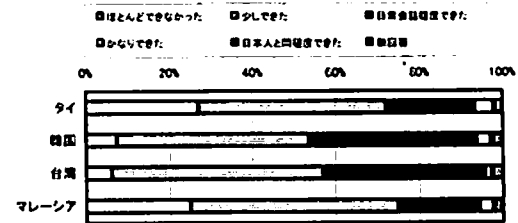
図(8)-1: やりとりを始めた頃の日本語力(全体)



図(8)-2: やりとりを始めた頃の日本語力(中等教育)



図(8)-3: やりとりを始めた頃の日本語力(高等教育)



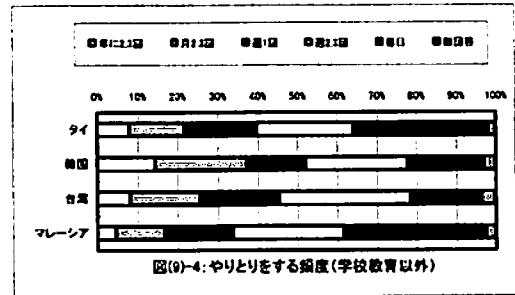
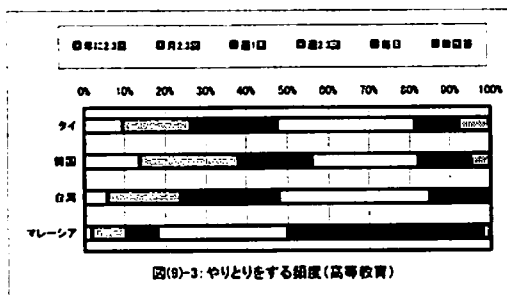
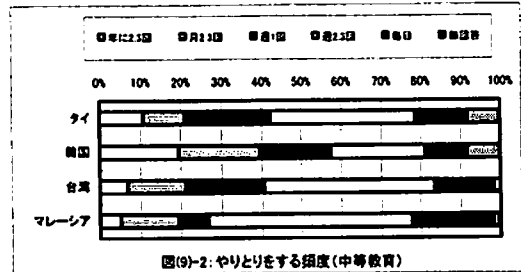
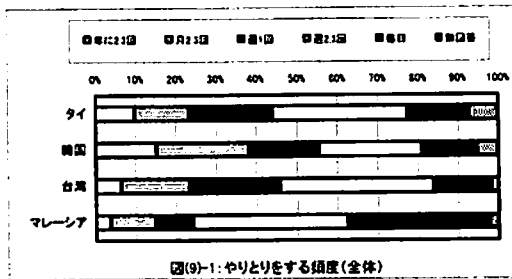
図(8)-4: やりとりを始めた頃の日本語力(学校教育以外)

(9) やりとりの頻度 ((6) で回答した最もよくやりとりする相手について)

質問項目：「やりとりをする頻度はどのぐらいですか。」 <タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2⑤>

全体(図(9)-1)：「週 2, 3 回」が共通して最も多い。

所属別(図(9)-2~4)：マレーシアの高等教育・学校教育以外(48.0%・35.7%)、タイの学校教育以外(33.8%)では「毎日」が最も多い。



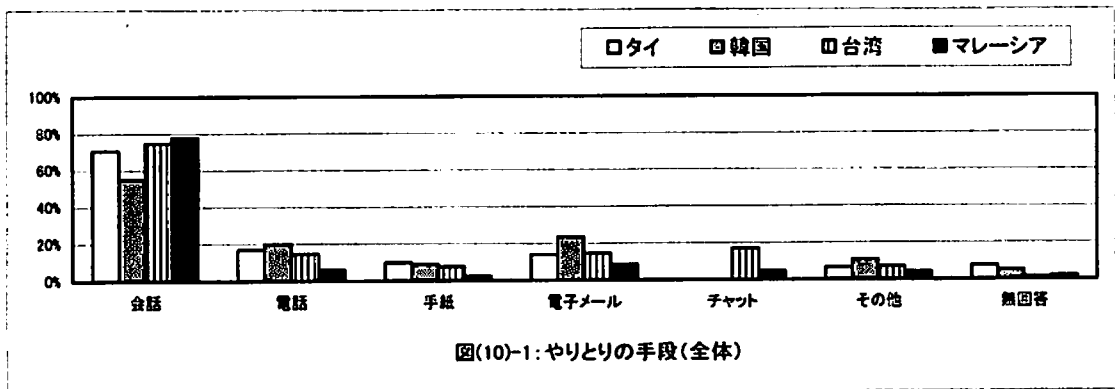
(10) やりとりの手段 ((6) で回答した最もよくやりとりする相手について)

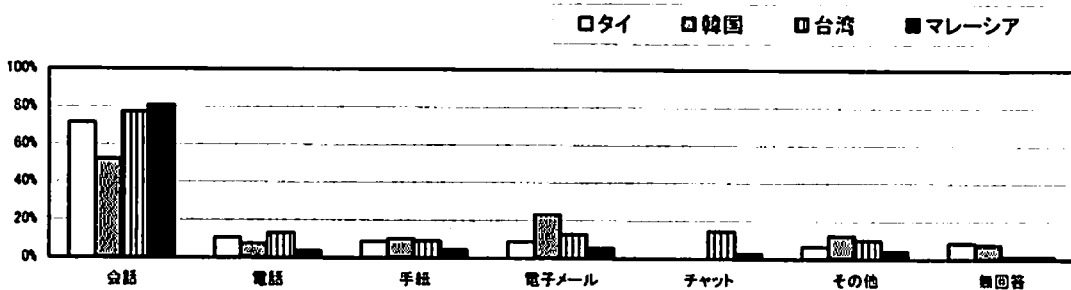
質問項目：「やりとりの主な手段は何ですか。」(複数回答可)なお、タイ調査・韓国調査時

点では「チャット」は項目に含まれていない。 <タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2⑥>

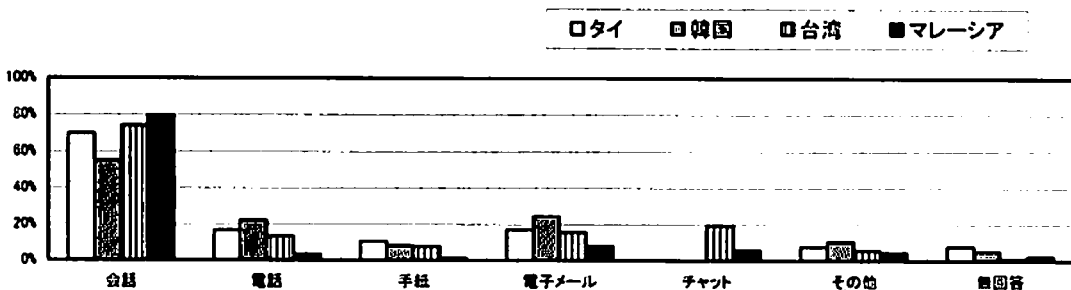
全体(図(10)-1)：共通して直接会っての「会話」が最も多い。

所属別(図(10)-2~4)：地域に共通して学校教育以外では「電話」の割合が増える。

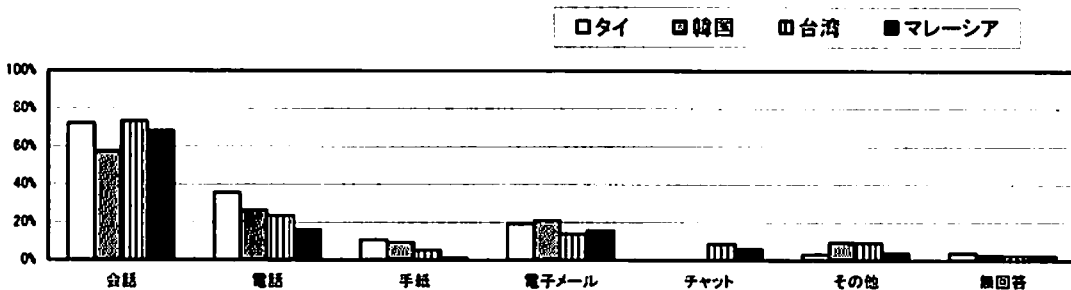




図(10)-2: やりとりの手段(中等教育)



図(10)-3: やりとりの手段(高等教育)



図(10)-4: やりとりの手段(学校教育以外)

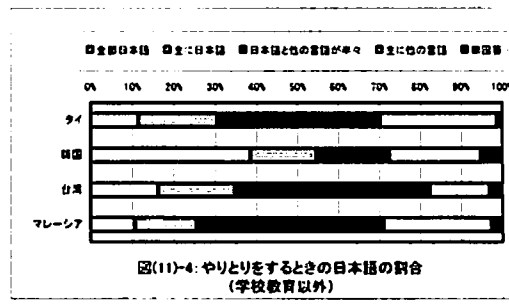
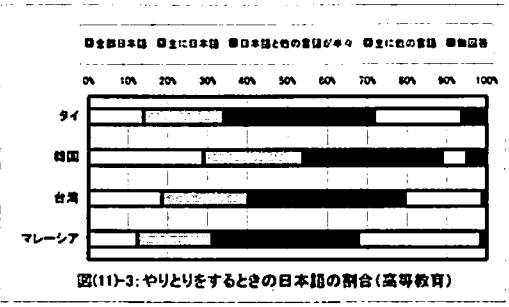
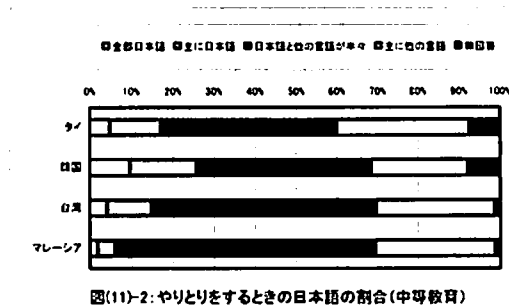
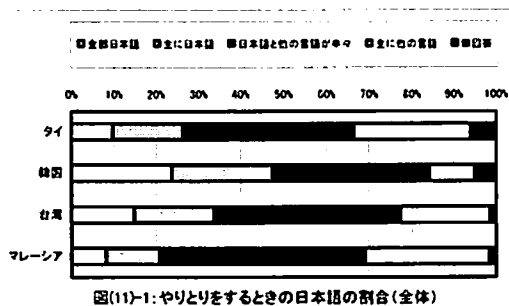
(11) やりとりの際の日本語の割合 ((6) で回答した最もよくやりとりする相手について)

質問項目: 「やりとりをする時、日本語をどのくらい使いますか。」

<タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2⑦>

全体(図(11)-1): 共通して「日本語と他の言語が半々」が最も多い。

所属別(図(11)-2~4): 地域に共通して中等教育では「日本語と他の言語が半々」と「主に他の言語」の割合が高い。韓国では「全部日本語」の割合が最も高く、学校教育以外では62.4%となっている。



(12) やりとりの内容(6)で回答した最もよくやりとりする相手について)

質問項目:「主にどんなことについて話しますか。」(複数回答可)

<タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2⑧>

全体・所属別(表(12)-1~4): 地域・所属に共通して「生活」が多い。

学校教育以外では3位以内に「仕事」が入っている。

<表(12)-1: 全体> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	生活 (52.8)	生活 (44.4)	生活 (64.0)	生活 (38.1)
2位	勉強 (44.2)	勉強 (14.8)	日本語 (38.7)	勉強 (36.9)
3位	日本語 (25.0)	日本語 (11.1)	趣味 (38.4)	日本語 (25.7)

<表(12)-2: 中等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	生活 (48.9)	生活 (41.3)	生活 (59.5)	勉強 (37.0)
2位	勉強 (43.3)	勉強 (15.6)	日本語 (41.4)	日本語 (34.3)
3位	日本語 (25.3)	日本語 (12.3)	趣味 (41.1)	生活 (30.9)

<表(12)-3: 高等教育> (%)

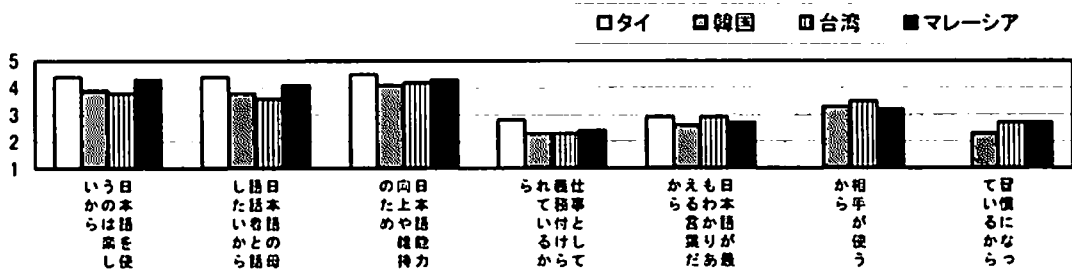
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	生活 (54.1)	生活 (46.5)	生活 (66.1)	生活 (43.5)
2位	勉強 (52.1)	勉強 (14.9)	趣味 (39.9)	勉強 (43.2)
3位	日本語 (26.4)	日本語 (10.5)	日本語 (38.9)	日本語 (18.3)

<表(12)-4: 学校教育以外> (%)

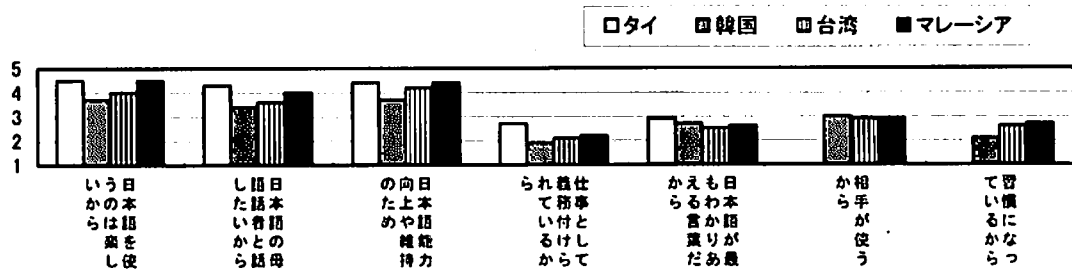
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	生活 (60.1)	生活 (41.9)	生活 (62.4)	生活 (39.9)
2位	仕事 (46.9)	勉強 (14.1)	日本語 (33.3)	日本語 (25.9)
3位	勉強 (26.0)	仕事 (12.9)	仕事 (31.9)	仕事 (23.1)

(13) やりとりする理由(6)で回答した最もよくやりとりする相手について

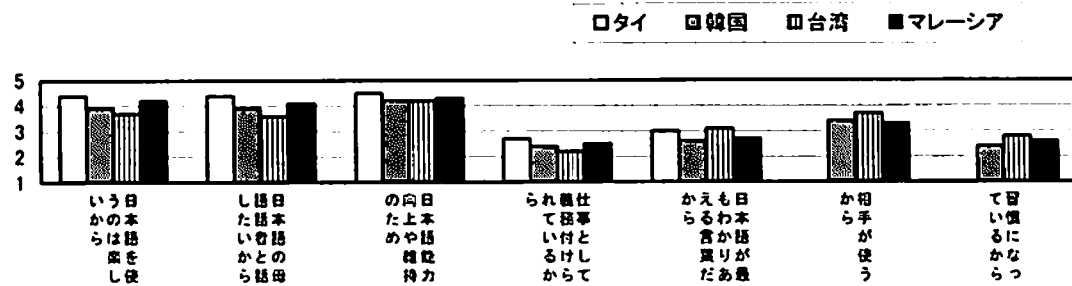
質問項目：「やりとりをするとき、なぜ日本語を使うのですか。(5段階評価)」なお、タイ調査では「相手が使うから」「習慣になっているから」は調査項目に含まれていない。図中の数値は5段階評価平均値を示す。〈タ Q1-2, 韓・台・マ Q1-2⑨〉
 全体・所属別(図(13)-1~4)：地域・所属に共通して「日本語を使うのは楽しいから」「日本語の母語話者と話したいから」「日本語能力向上や維持のため」が高い。また、同じ3項目について、タイ・マレーシアに比べて韓国・台湾のポイントが低い。



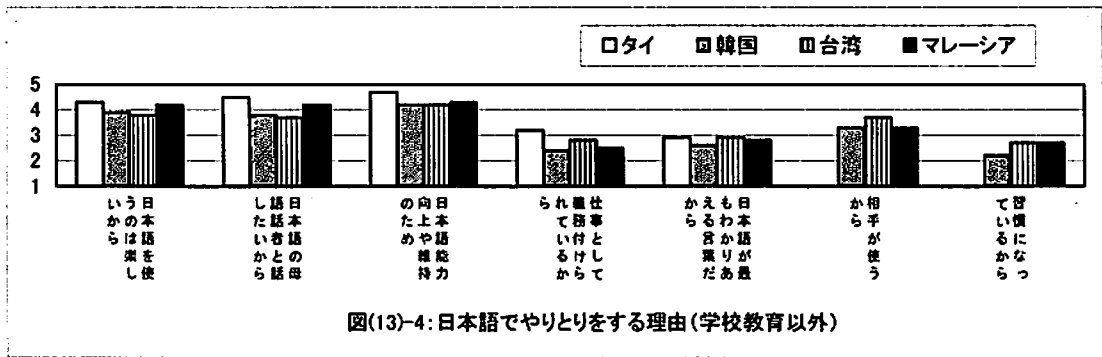
図(13)-1: 日本語でやりとりをする理由(全体)



図(13)-2: 日本語でやりとりをする理由(中等教育)



図(13)-3: 日本語でやりとりをする理由(高等教育)

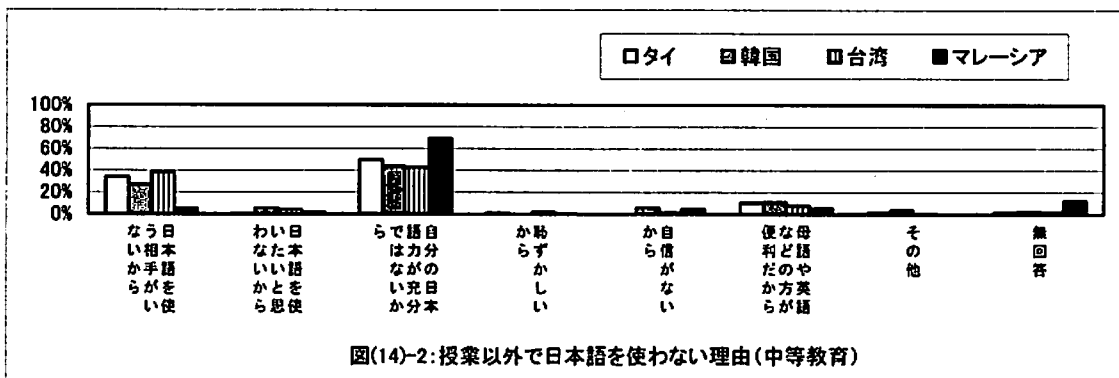
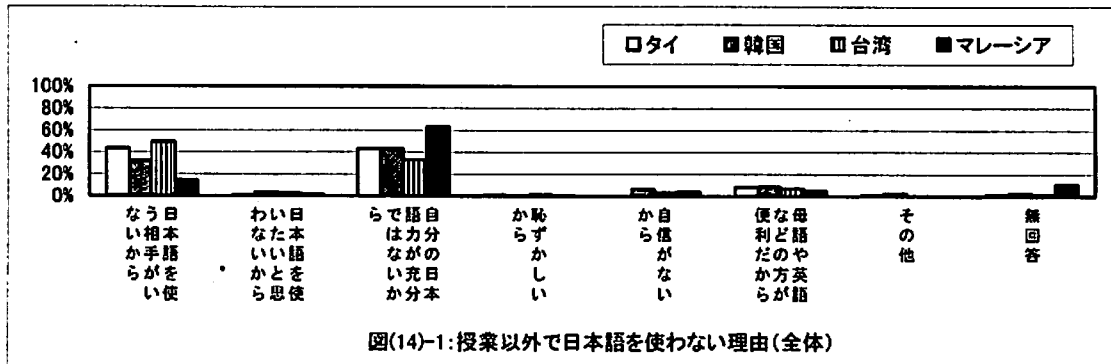


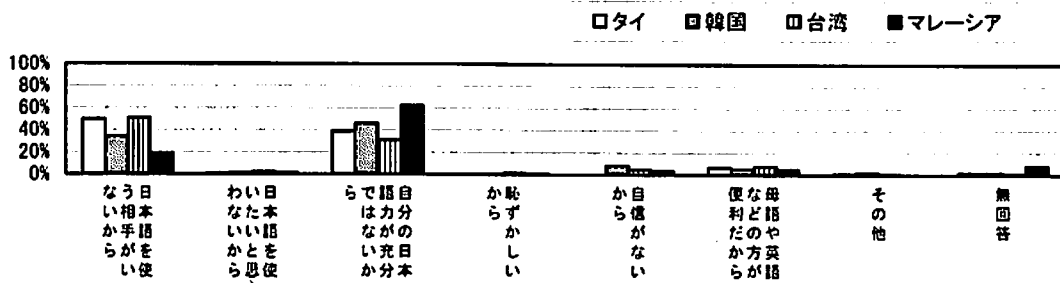
(14) 授業以外で日本語を使わない理由((4)で「いいえ」と回答した学習者対象)

質問項目: 「授業以外で日本語を使わない理由は何ですか。」 <Q1-3>

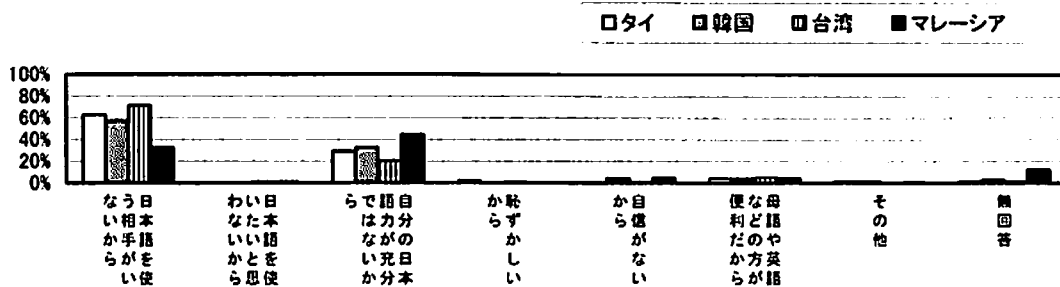
全体(図(14)-1): 共通して「自分の日本語力が十分ではないから」「日本語を使う相手がいないから」が多い。

所属別(図(14)-2~4): 共通して中等教育では「自分の日本語力が十分ではないから」が多く、学校教育以外では「日本語を使う相手がいないから」の割合が増える。





図(14)-3:授業以外で日本語を使わない理由(高等教育)

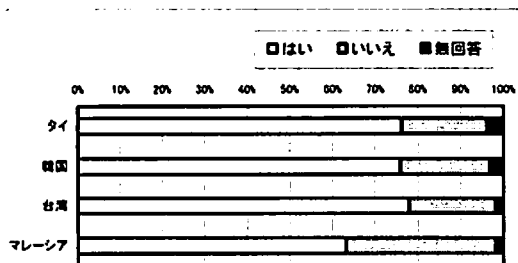


図(14)-4:授業以外で日本語を使わない理由(学校教育以外)

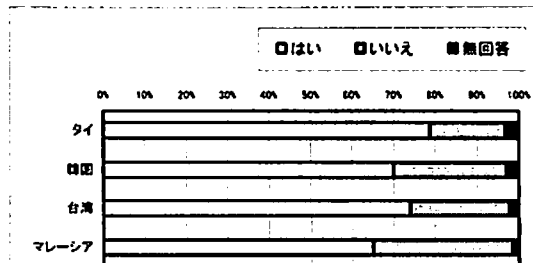
(15) 日本語の見聞きの有無

質問項目:「日本語の授業以外の時間に、日本語が使われているのを見たり聞いたりすることはありますか。」<Q2-1>(質問項目:「身の回りに日本語が使われているのはありますか(日本語学習教材は除く)。」<Q2>で「はい」と回答した学習者対象。図の数値は全学習者中、<Q2-1>で「はい」と回答した学習者の割合を示す。)

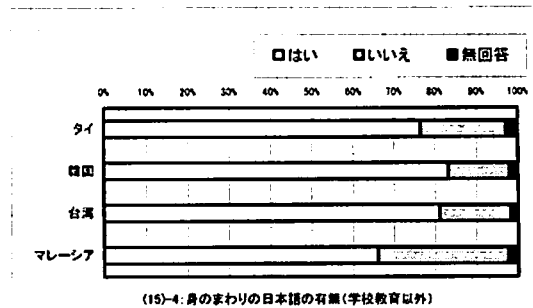
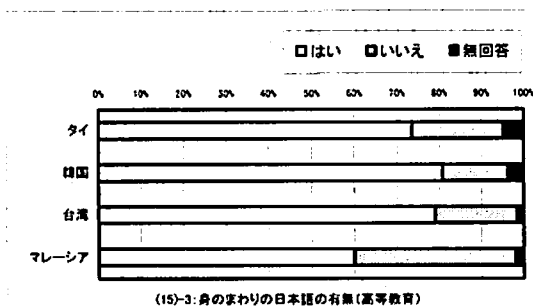
全体((15)-1):「はい」がマレーシア(63.1%)<韓国(76.0%)<タイ(76.2%)<台湾(77.8%)
 所属別((15)-2~4):マレーシアのみ所属に共通して60%台。韓国の高等教育(80.7%)・学校教育以外(83.2%),台湾の学校教育以外(81.2%)では80%を超えている。



(15)-1:身のまわりの日本語の有無(全体)



(15)-2:身のまわりの日本語の有無(中等教育)



(16) 見聞きするもの((15)で「はい」と回答した学習者対象)

質問項目:「授業以外でどんなもの(日本語が使われているもの)を見たり聞いたりしますか。」(複数回答可)<Q2-2>

全体(表(16)-1):共通して「テレビ」の割合が高い。

所属別(表(16)-2~4):タイ・台湾では所属に共通して「テレビ」が1位。韓国は中等教育が「マンガ」、高等教育が「ビデオ・DVD」、学校教育以外が「テレビ」、マレーシアは中等教育が「テレビ」、高等教育・学校教育以外が「ビデオ・VCD・DVD」が1位。

<表(16)-1:全体>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	テレビ放送 (56.2)	マンガ (52.8)	テレビ番組 (86.3)	ビデオ・VCD・DVD (63.8)
2位	マンガ (53.8)	テレビ番組 (48.0)	CD (61.6)	テレビ (57.2)
3位	雑誌 (48.1)	ビデオ・DVD (47.8)	マンガ・アニメ (59.4)	マンガ・アニメ (39.0)

<表(16)-2:中等教育>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	テレビ放送 (60.4)	マンガ (59.1)	テレビ番組 (82.3)	テレビ (62.7)
2位	マンガ (60.1)	コンピュータ (46.4)	CD (67.7)	ビデオ・VCD・DVD (53.5)
3位	雑誌 (48.2)	ビデオ・DVD (40.5)	マンガ・アニメ (66.7)	ゲームソフト (50.0)

<表(16)-3:高等教育>(%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	テレビ放送 (54.4)	ビデオ・DVD (54.9)	テレビ番組 (88.0)	ビデオ・VCD・DVD (74.2)
2位	マンガ (51.8)	テレビ番組 (54.0)	CD (62.7)	テレビ (52.5)
3位	雑誌 (49.8)	マンガ (51.2)	マンガ・アニメ (61.8)	CD (39.9)

<表(16)-4:学校教育以外>(%)

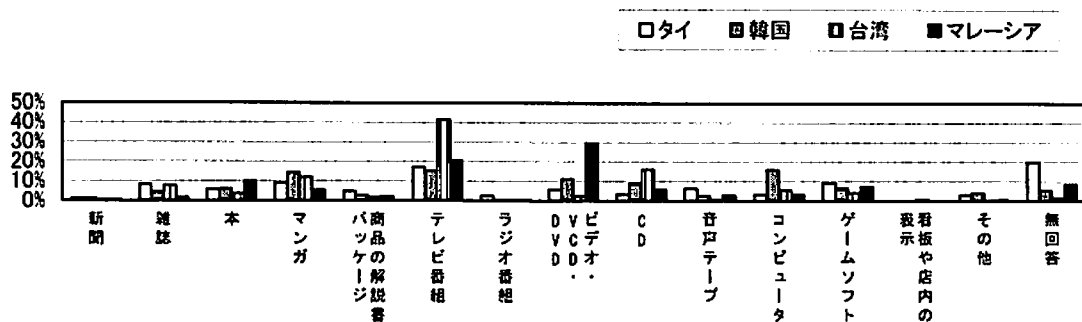
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	テレビ放送 (49.9)	テレビ番組 (54.1)	テレビ番組 (86.5)	ビデオ・VCD・DVD (65.9)
2位	雑誌 (41.2)	ビデオ・DVD (50.0)	雑誌 (55.8)	テレビ (53.6)
3位	マンガ (34.2)	コンピュータ (43.5)	CD (44.8)	CD (39.0)

(17)最もよく見聞きするもの((15)で「はい」と回答した学習者対象)

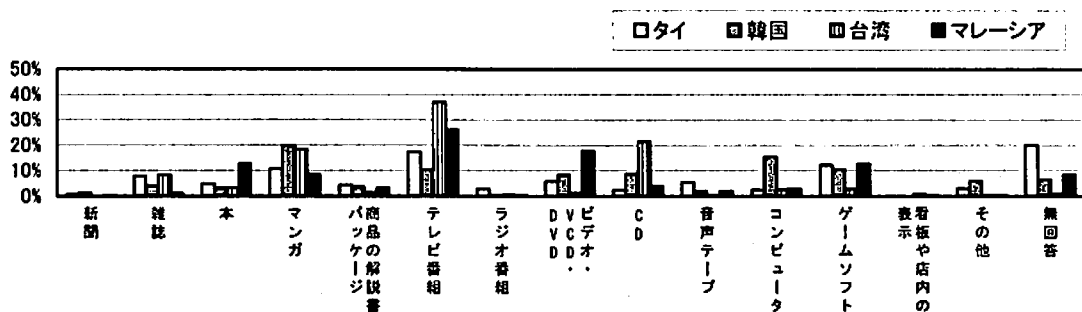
質問項目:「最もよく見聞きするものはどれですか。」<タ Q2-3, 韓・台・マ Q2-3①>

全体(図(17)-1):タイ・台湾は「テレビ」,韓国は「コンピュータ」,マレーシアは「ビデオ・VCD・DVD」が1位。

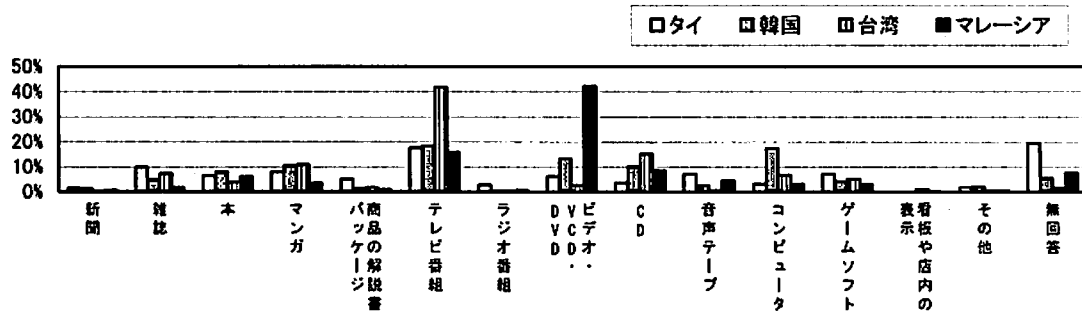
所属別(図(17)-2~4):中等教育ではタイ・台湾・マレーシアで「テレビ」,韓国で「マンガ」,高等教育・学校教育以外ではタイ・韓国・台湾で「テレビ」,マレーシアで「ビデオ・VCD・DVD」が1位。



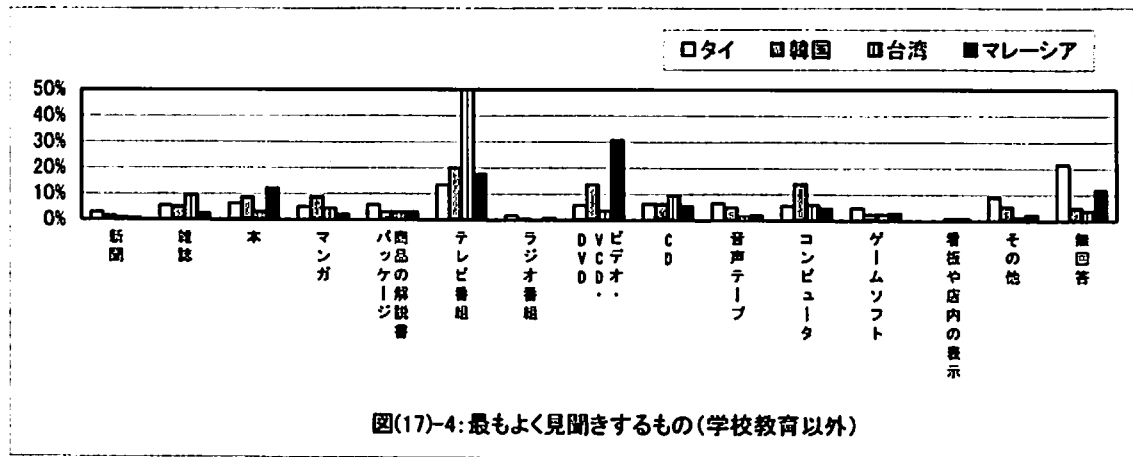
図(17)-1:最もよく見聞きするもの(全体)



図(17)-2:最もよく見聞きするもの(中等教育)



図(17)-3:最もよく見聞きするもの(高等教育)

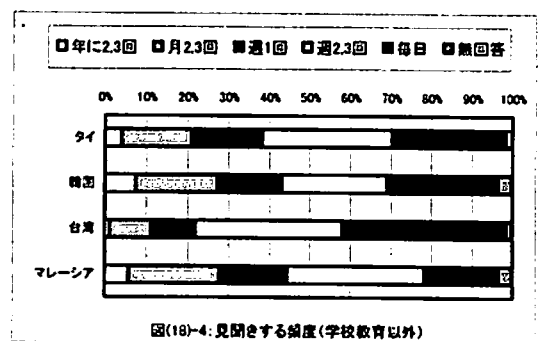
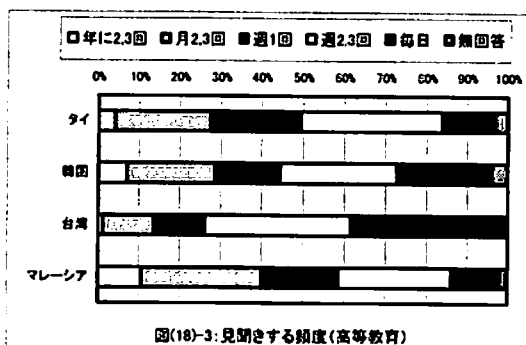
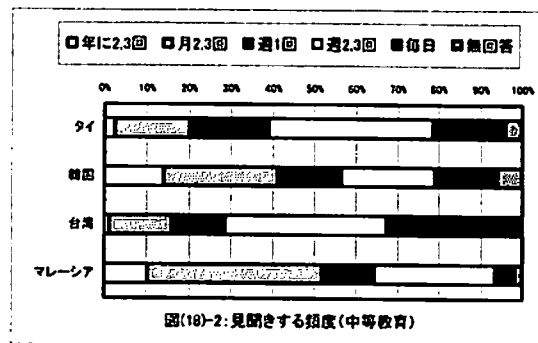
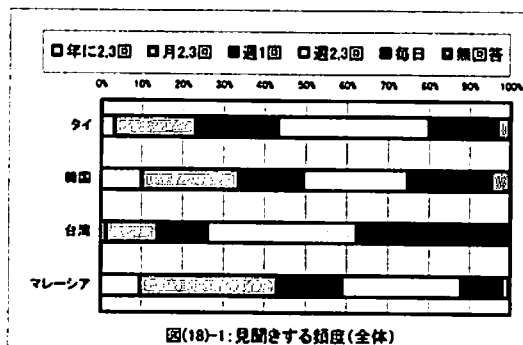


(18) 見聞きする頻度((17)で回答した最もよく見聞きするものについて)

質問項目:「頻度はどのぐらいですか。」<タ Q2-3, 韓・台・マ Q2-3②>

全体(図(18)-1): マレーシアは「月2, 3回」、タイ・韓国は「週2, 3回」、台湾は「毎日」が最も多い。

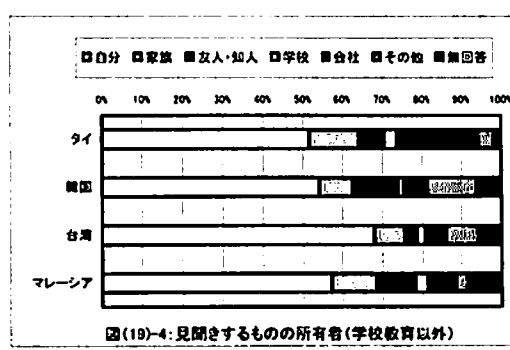
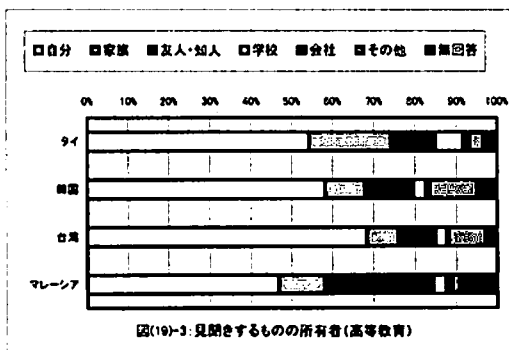
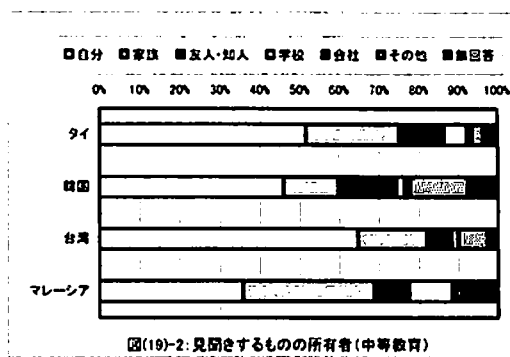
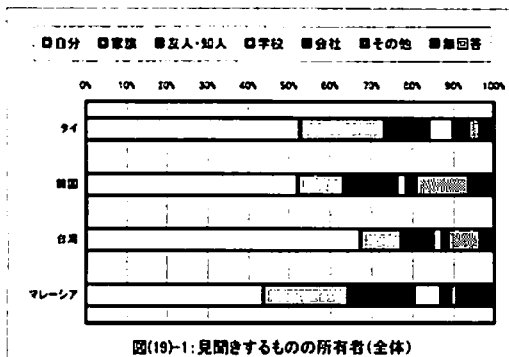
所属別(図(18)-2~4): 韓国では中等教育で「週2, 3回」よりも「月2, 3回」の方が割合が高い。マレーシアでは学校教育以外で「月2, 3回」よりも「週2, 3回」の方が割合が高い。



(19) 見聞きするものの所有者((17)で回答した最もよく見聞きするものについて)

質問項目:「誰のものですか。」<タ Q2-3, 韓・台・マ Q2-3③>

全体・所属別(図(19)-1~4): 地域・所属に共通して「自分」が最も多い。



(20) 見聞きする内容(17)で回答した最もよく見聞きするものについて

質問項目：「主にどんな内容ですか。」(複数回答可) <タ Q2-3, 韓・台・マ Q2-3④>

全体(表(20)-1)：タイは「その他」(中等教育は「ゲーム」「歌」「マンガ」「ドラマ」「テレビ番組」など、高等教育では「テレビ番組」「歌」「ドラマ」「芸能」「料理」「ゲーム」など、学校教育以外では「歌」「ニュース」「テレビ番組」「会社の仕事」など)、韓国は「文化・芸術」、台湾・マレーシアは「社会・生活」が最も多い。タイ・マレーシアでは「日本語・日本語学習」が3位以内に入っている。韓国の中等教育の「その他」は「ゲーム」「歌」「マンガ」など、学校教育以外は「ドラマ」「歌」などを示す。マレーシアの学校教育以外の「その他」は、「マンガ」「アニメ」「歌」「ドラマ」などを示す。

<表(20)-1：全体> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	その他 (29.6)	文化・芸術 (28.8)	社会・生活 (44.1)	社会・生活 (37.9)
2位	日本語 (28.5)	スポーツ・趣味 (16.6)	スポーツ・趣味 (32.1)	日本語・日本語学習 (19.5)
3位	社会・生活 (25.0)	その他 (15.6)	文化・芸術 (29.3)	文化・芸術 (14.1)

<表(20)-2：中等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	その他 (29.4)	文化・芸術 (28.3)	スポーツ・趣味 (33.3)	社会・生活 (37.3)
2位	日本語 (29.1)	スポーツ・趣味 (20.0)	文化・芸術 (32.6)	日本語・日本語学習 (22.0)
3位	日本人 (24.8)	その他 (19.8)	社会・生活 (32.5)	文化・芸術 (13.0)

<表(20)-3：高等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	日本語 (28.9)	文化・芸術 (30.3)	社会・生活 (47.9)	社会・生活 (40.7)
2位	その他 (28.5)	スポーツ・趣味 (15.1)	スポーツ・趣味 (33.7)	文化・芸術 (15.6)
3位	社会・生活 (27.0)	社会・生活 (13.0)	文化・芸術 (29.1)	日本語・日本語学習 (14.8)

<表(20)-4：学校教育以外> (%)

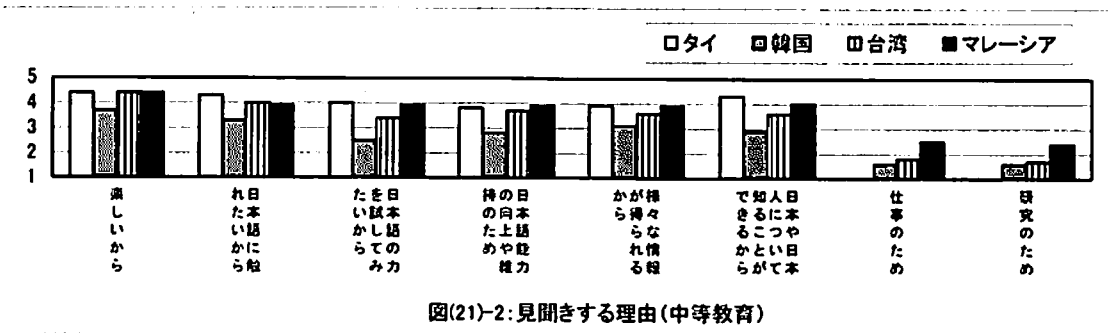
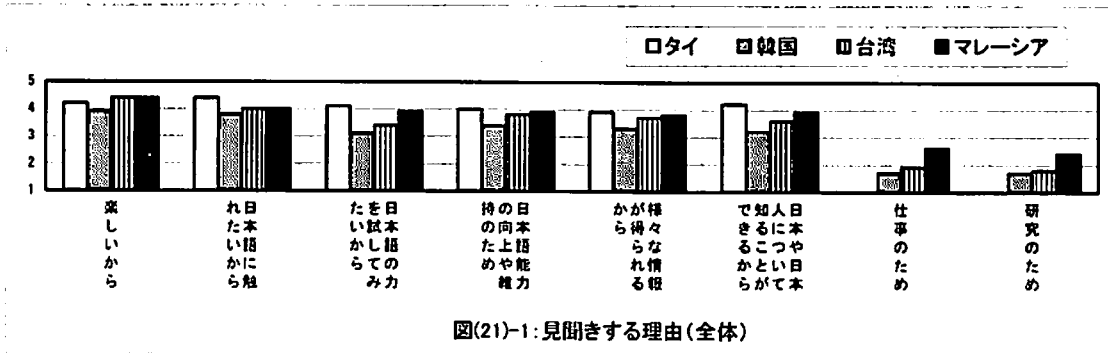
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	その他 (34.2)	文化・芸術 (26.8)	社会・生活 (48.9)	社会・生活 (32.9)
2位	社会・生活 (30.2)	社会・生活 (14.3)	文化・芸術 (23.8)	日本語・日本語学習 (24.0)
3位	日本語 (24.9)	その他 (13.2)	スポーツ・趣味 (22.4)	その他 (15.3)

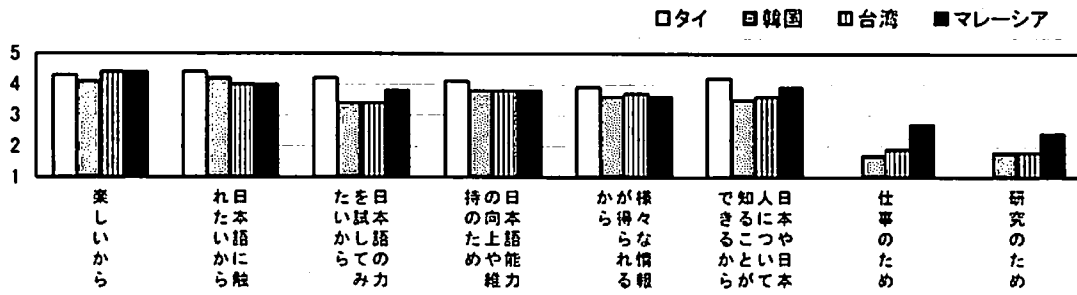
(21) 見聞きする理由 ((17) で回答した最もよく見聞きするものについて)

質問項目：「見たり聞いたりする理由は何ですか。(5段階評価)」図の数値は5段階評価平均値を示す。<タ Q2-3, 韓・台・マ Q2-3⑤>

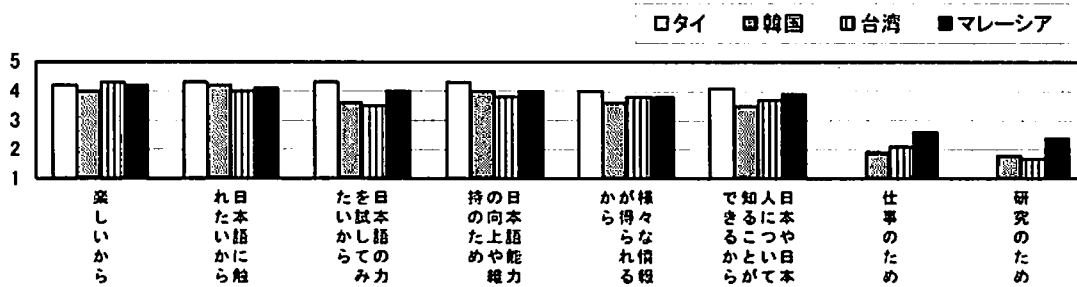
全体(図(21)-1)：共通して「楽しいから」「日本語に触れたいから」が高い。

所属別(図(21)-2~4)：韓国では特に中等教育で他国に比べて全ての項目でポイントが低い。





図(21)-3: 見聞きする理由(高等教育)

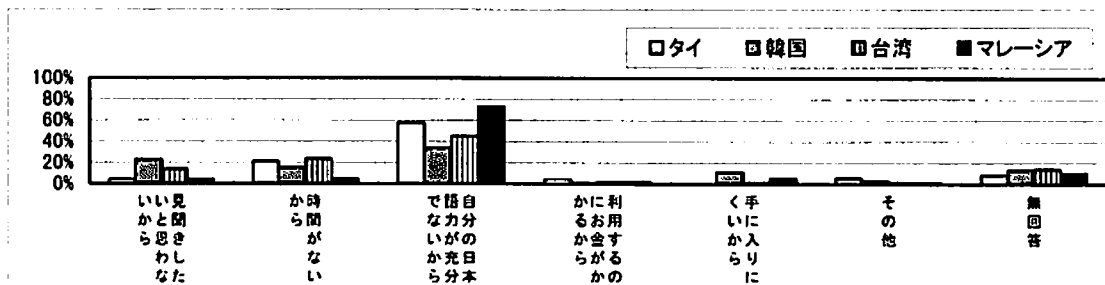


図(21)-4: 見聞きする理由(学校教育以外)

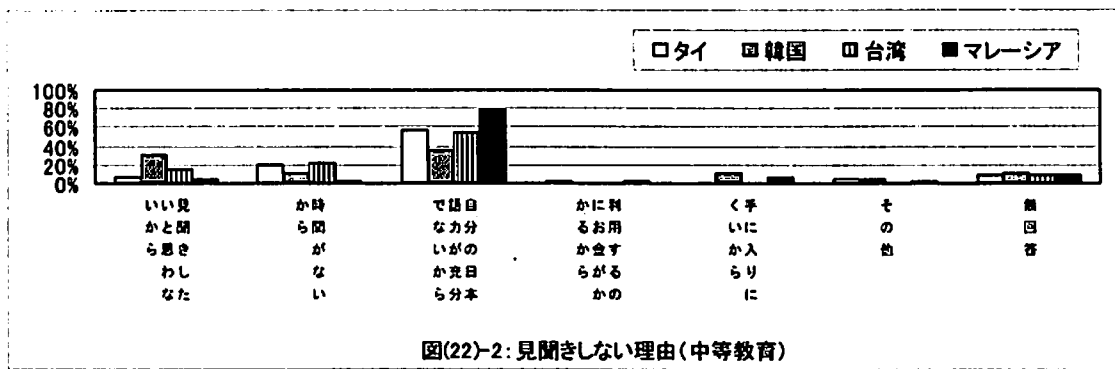
(22) 見聞きしない理由((15)で「いいえ」と回答した学習者対象) <02-4>

質問項目: 「授業以外の時間に、日本語が使われているのを見たり聞いたりしない理由は何ですか。」

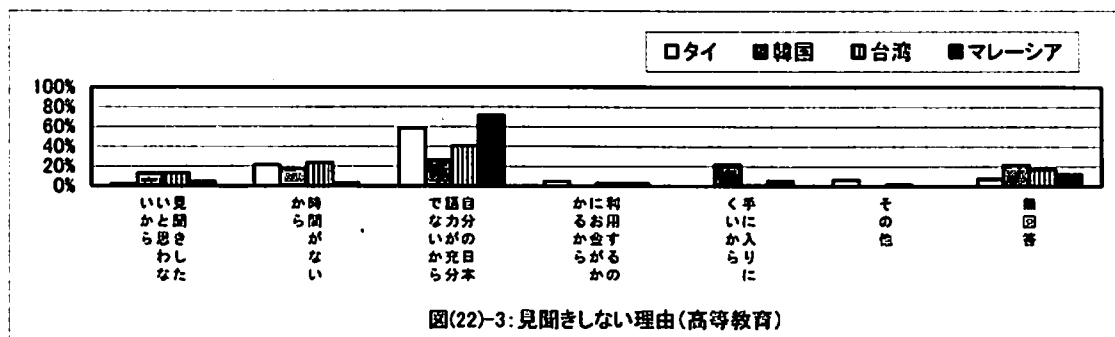
全体・所属別(図(22)-1~4): 地域・所属に共通して「自分の日本語力が十分でないから」が最も多い。



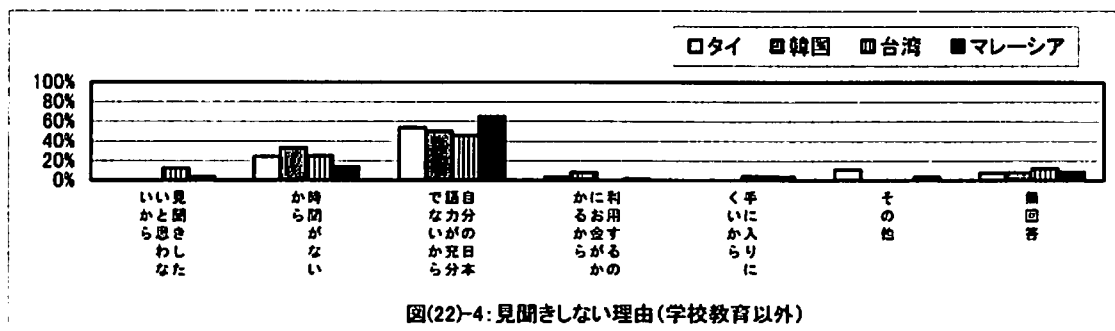
図(22)-1: 見聞きしない理由(全体)



図(22)-2: 見聞きしない理由(中等教育)



図(22)-3: 見聞きしない理由(高等教育)



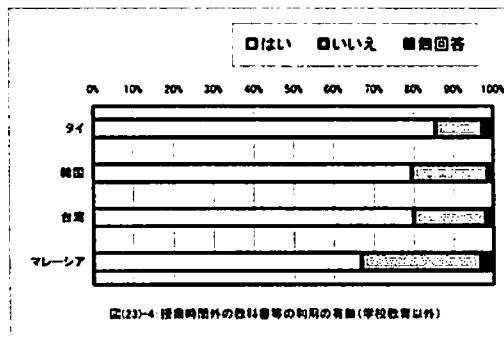
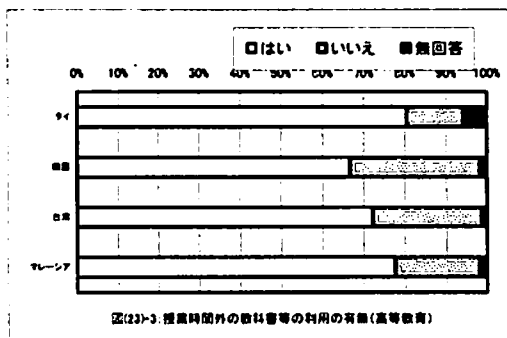
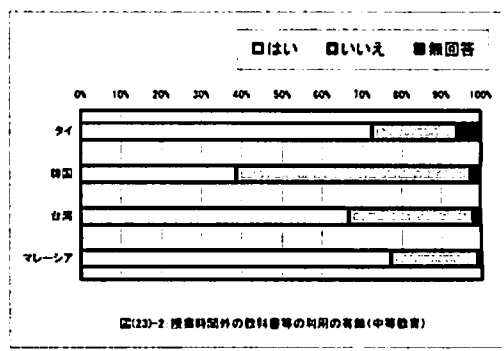
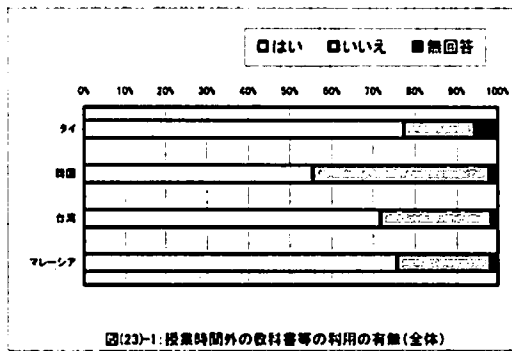
図(22)-4: 見聞きしない理由(学校教育以外)

(23) 授業時間外の教科書等の利用の有無

質問項目:「授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間にも使いますか。」<タ Q4, 韓・台・マ Q3>

全体(図(23)-1):「はい」の割合がタイ(77.4%), 韓国(55.5%), 台湾(71.7%), マレーシア(75.7%)

所属別(図(23)-2~4): 韓国では特に中等教育で「はい」が38.6%と低い。



(24) 授業時間外の教科書等の利用方法(23)で「はい」と回答した学習者対象)

質問項目:「授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡される学習資料を使って勉強する時にどのように使いますか。」(複数回答可) <タ Q4-1, 韓・台・マ Q3-1>

全体(表(24)-1): 共通して「暗記・暗唱する」「語句の意味を調べる」が多い。

所属別(表(24)-2~4): タイでは所属に共通して「練習問題を解く」が2位, 韓国では中等教育で「母語に訳す」が2位, 高等教育で「漢字にふりがなをふる」が1位, 台湾では所属に共通して「語句の意味を調べる」が高い割合で1位, マレーシアでは所属に共通して「語句の意味を調べる」「暗記・暗唱する」「練習問題を解く」の順となっている。

<表(24)-1: 全体> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	暗記・暗唱する (67.6)	暗記・暗唱する (53.8)	語句の意味を調べる (79.0)	語句の意味を調べる (77.4)
2位	語句の意味を調べる (67.3)	語句の意味を調べる (48.5)	暗記・暗唱する (57.4)	暗記・暗唱する (69.2)
3位	練習問題を解く (66.9)	漢字にふりがなをふる (45.2)	漢字にふりがなをふる (51.1)	練習問題を解く (50.3)

<表(24)-2: 中等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	暗記・暗唱する (67.9)	暗記・暗唱する (52.8)	語句の意味を調べる (75.8)	語句の意味を調べる (83.2)
2位	練習問題を解く (64.3)	韓国語に訳す (39.3)	母語に訳す (57.8)	暗記・暗唱する (76.3)
3位	語句の意味を調べる (61.1)	語句の意味を調べる (39.2)	漢字にふりがなをふる (54.7)	練習問題を解く (51.2)

<表(24)-3: 高等教育> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	語句の意味を調べる (72.3)	漢字にふりがなをふる (55.3)	語句の意味を調べる (82.0)	語句の意味を調べる (73.9)
2位	練習問題を解く (69.4)	語句の意味を調べる (53.3)	暗記・暗唱する (59.3)	暗記・暗唱する (67.3)
3位	暗記・暗唱する (69.3)	暗記・暗唱する (51.5)	漢字にふりがなをふる (54.8)	練習問題を解く (50.7)

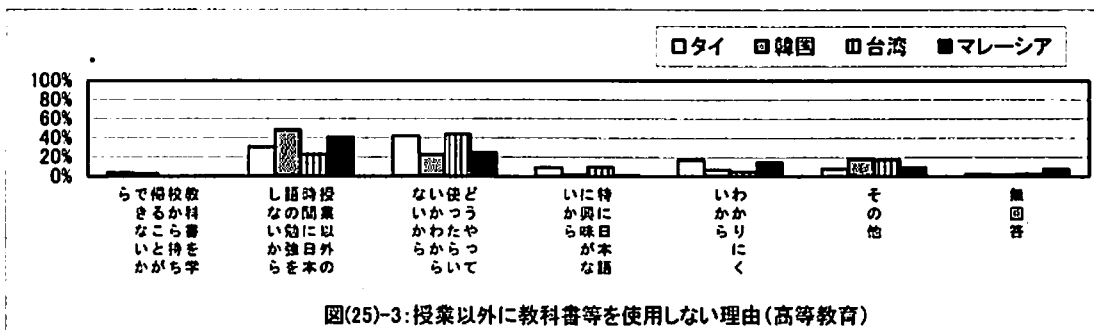
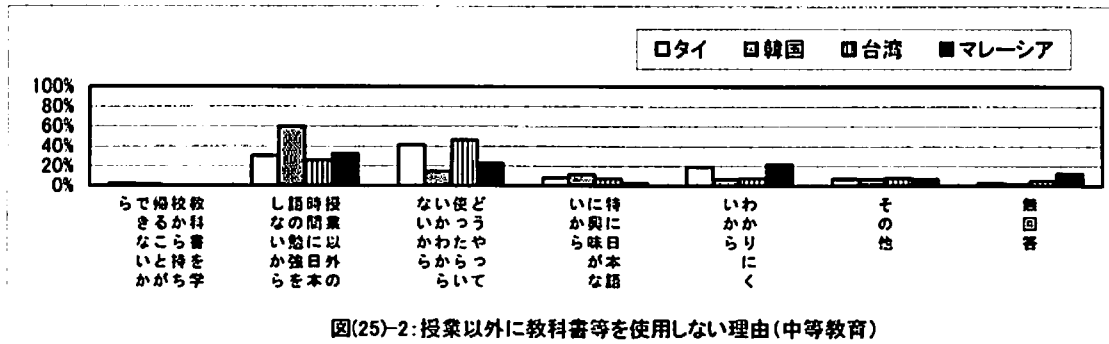
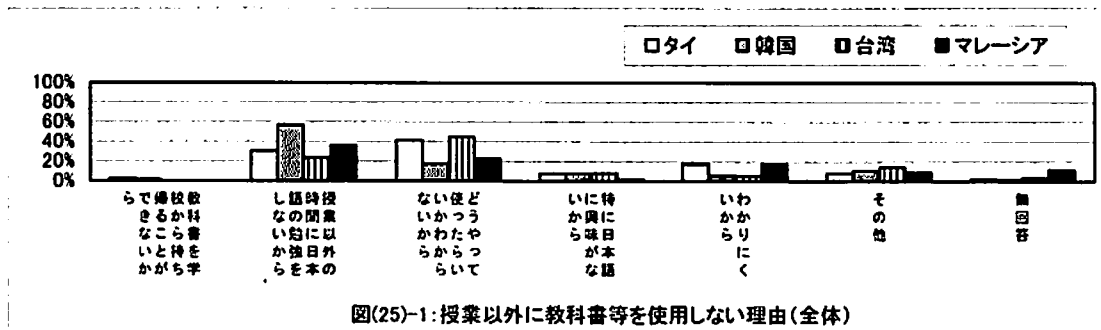
<表(24)-4：学校教育以外> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	語句の意味を調べる (70.3)	暗記・暗唱する (59.5)	語句の意味を調べる (71.9)	語句の意味を調べる (69.9)
2位	練習問題を解く (66.9)	語句の意味を調べる (52.7)	暗記・暗唱する (59.8)	暗記・暗唱する (52.8)
3位	暗記・暗唱する (59.9)	漢字にふりがなをふる (46.8)	練習問題を解く (53.9)	練習問題を解く (46.5)

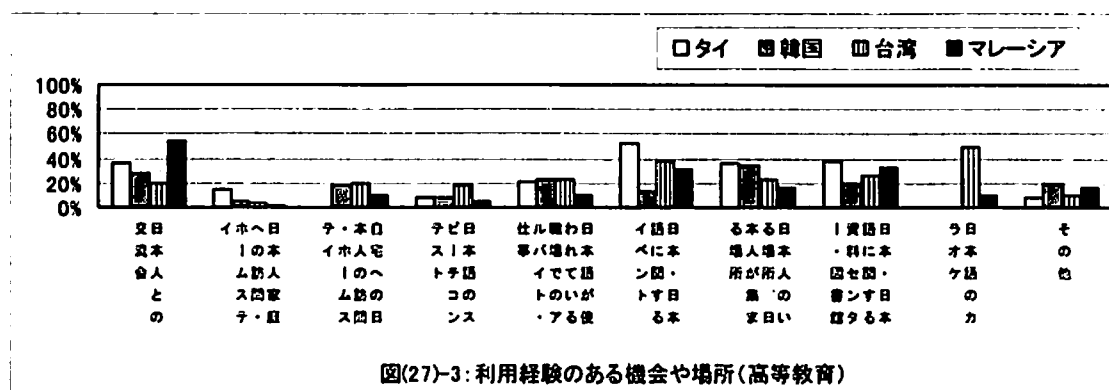
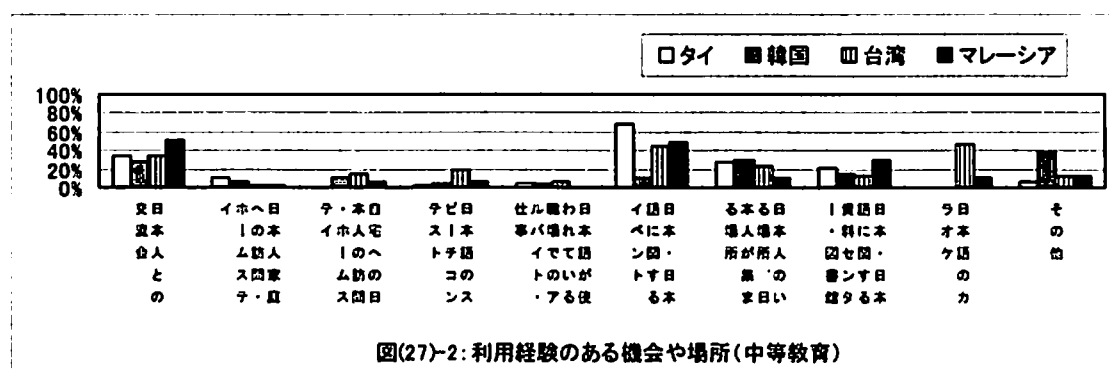
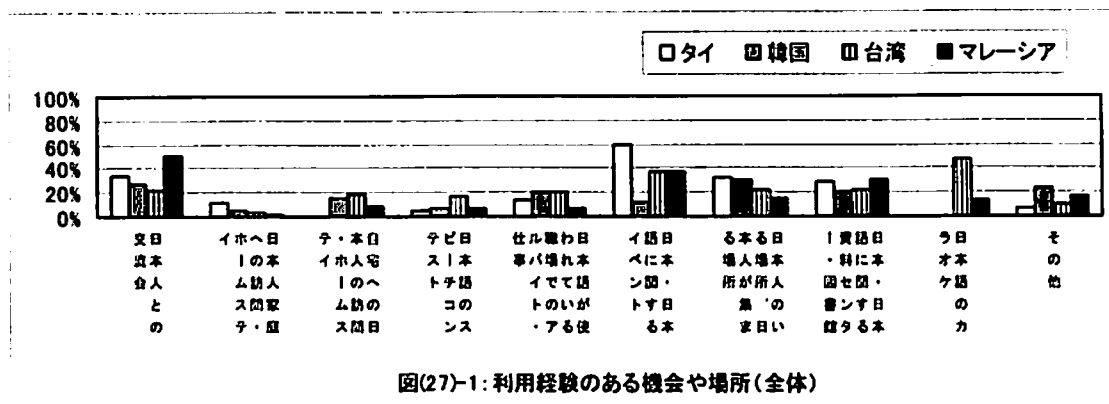
(25) 授業時間外に教科書等を利用しない理由((23)で「いいえ」と回答した学習者対象)

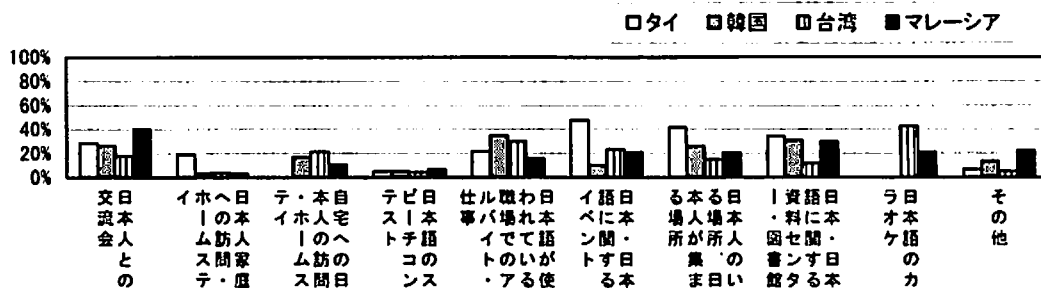
質問項目:「日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間に使わない理由は何ですか。」<タ Q4-2, 韓・台・マ Q3-2>

全体・所属別(図(25)-1~4): 地域・所属に共通して「授業以外の時間に日本語の勉強をしないから」「どうやって使ったらいいかわからないから」が多い。



所属別(図(27)-2~4) : 韓国では中等教育で「その他(「学校」「観光地」「修学旅行」「通りすがり」など)」(38.2%), 学校教育以外では「日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事」(35.1%)が最も多い。





図(27)-4: 利用経験のある機会や場所(学校教育以外)

(28) 日本語学習のために現在使っているもの

質問項目:「日本語学習のために現在使っているものはどれですか。」(複数回答可) < 表 Q6, 韓・台・マ Q5 >

全体(図(28)-1): 共通して「文法解説書・学習参考書」が最も多く、「日本語の歌」が続いている。台湾では「テレビ番組」(69.7%)が多い。

所属別(図(28)-2~4): 韓国・台湾では高等教育・学校教育以外で「辞書」を多く使っている。

<表(28)-1: 全体> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (66.9)	学習参考書 (69.6)	学習参考書 (77.5)	学習参考書 (83.9)
2位	日本語の歌 (28.8)	日本語の歌 (48.0)	テレビ番組 (69.7)	映画 (45.2)
3位	テレビ番組・映画 (28.7)	マンガ・アニメ (35.2)	日本語の歌 (67.9)	日本語の歌 (42.7)
4位	漢字辞典 (23.4)	辞書 (34.6)	マンガ・アニメ (51.2)	マンガ・アニメ (27.1)
5位	辞書 (22.6)	映画 (26.4)	辞書 (49.4)	ビデオ教材 (24.9)

<表(28)-2: 中等教育> (%)

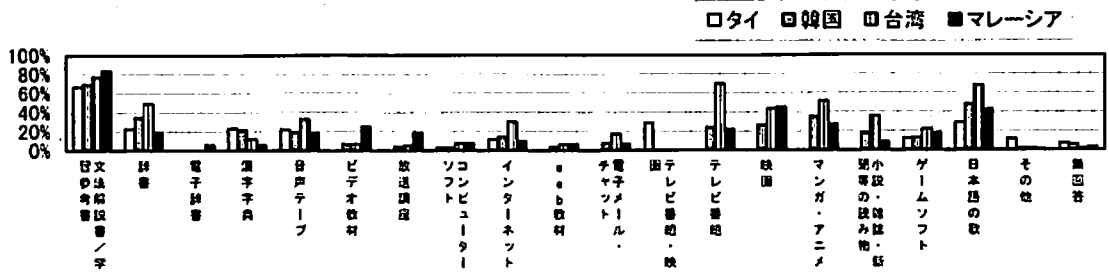
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (62.4)	学習参考書 (60.8)	日本語の歌 (75.7)	学習参考書 (69.8)
2位	テレビ番組・映画 (31.3)	日本語の歌 (44.9)	学習参考書 (74.4)	映画 (46.3)
3位	日本語の歌 (30.7)	マンガ・アニメ (33.2)	テレビ番組 (68.8)	日本語の歌 (42.9)
4位	音声テープ (22.5)	映画 (20.1)	マンガ・アニメ (61.3)	マンガ・アニメ (35.2)
5位	ゲームソフト (15.2)	ゲームソフト (17.6)	映画 (50.2)	ゲームソフト (28.1)

<表(28)-3: 高等教育> (%)

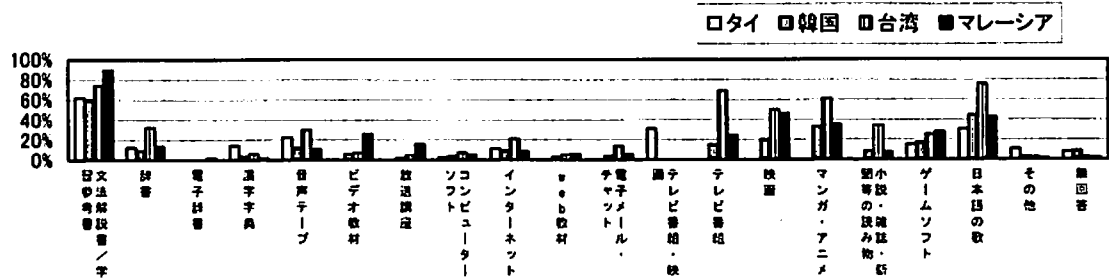
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (69.6)	学習参考書 (79.1)	学習参考書 (78.9)	学習参考書 (80.9)
2位	漢字辞典 (31.3)	辞書 (59.0)	テレビ番組 (71.2)	映画 (45.1)
3位	辞書 (30.9)	日本語の歌 (53.4)	日本語の歌 (68.3)	日本語の歌 (43.6)
4位	テレビ番組・映画 (26.4)	漢字辞典 (39.7)	辞書 (56.7)	ビデオ教材 (24.2)
5位	日本語の歌 (26.2)	マンガ・アニメ (39.2)	マンガ・アニメ (51.6)	音声テープ (23.3)

<表(28)-4: 学校教育以外> (%)

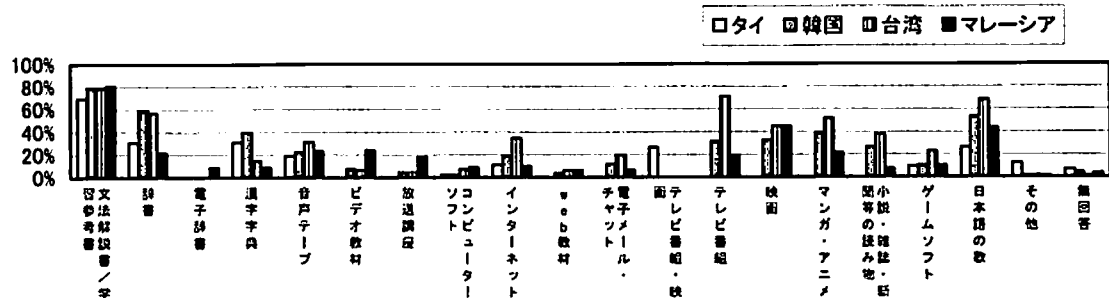
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (75.1)	学習参考書 (73.5)	学習参考書 (77.6)	学習参考書 (76.2)
2位	辞書 (32.6)	辞書 (52.4)	テレビ番組 (65.0)	映画 (42.7)
3位	日本語の歌 (30.6)	日本語の歌 (45.3)	辞書 (50.0)	日本語の歌 (39.7)
4位	漢字辞典 (29.8)	テレビ番組 (33.5)	日本語の歌 (49.3)	辞書 (29.6)
5位	音声テープ (29.7)	マンガ・アニメ (32.2)	音声テープ (45.1)	音声テープ (28.1)



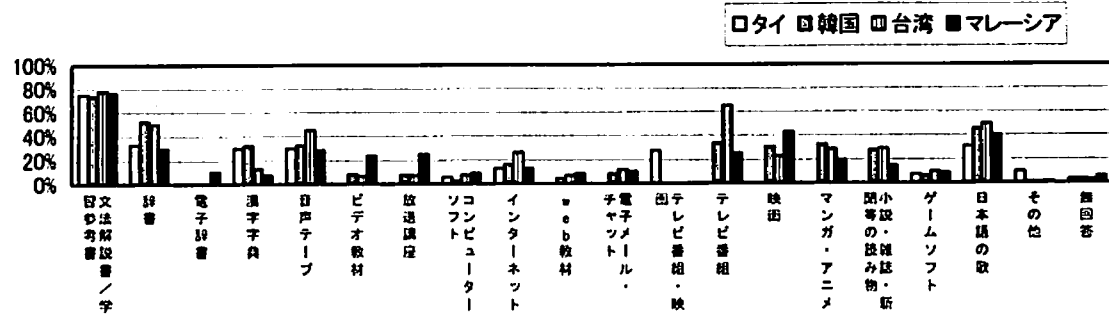
図(28)-1: 日本語学習のために現在使っているもの(全体)



図(28)-2: 日本語学習のために現在使っているもの(中等教育)



図(28)-3: 日本語学習のために現在使っているもの(高等教育)



図(28)-4: 日本語学習のために現在使っているもの(学校教育以外)

(29) 今後充実を希望するもの

質問項目：「日本語学習や日本理解のために、今後、もっと充実したらいいと思うものはどれですか。」(複数回答可) <タ Q7, 韓・台・マ Q6>

タイ ①「文法解説書」 ②「テレビ番組・映画」

韓国 ①「留学の機会」 ②「日本語の映画」

台湾 ①「日本語のテレビ番組」 ②「日本人との交流」

マレーシア ①「辞書」 ②「学習参考書・問題集」

<表(29)-1：全体> (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (63.0)	留学の機会 (36.7)	日本語のテレビ番組 (62.6)	辞書 (78.0)
2位	テレビ番組・映画 (57.1)	日本語の映画 (35.5)	日本人との交流 (57.2)	学習参考書・問題集 (61.6)
3位	辞書 (55.9)	学習参考書・問題集 (35.2)	留学の機会 (53.7)	日本語の映画 (52.3)
4位	日本人との交流 (53.0)	日本人との交流 (32.1)	学習参考書・問題集 (52.4)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (48.2)
5位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (52.4)	日本語のテレビ番組／日本人家庭への訪問・ホームステイ (30.6)	日本語の映画 (48.2)	留学の機会 (44.5)

<表(29)-2：中等教育> (%)

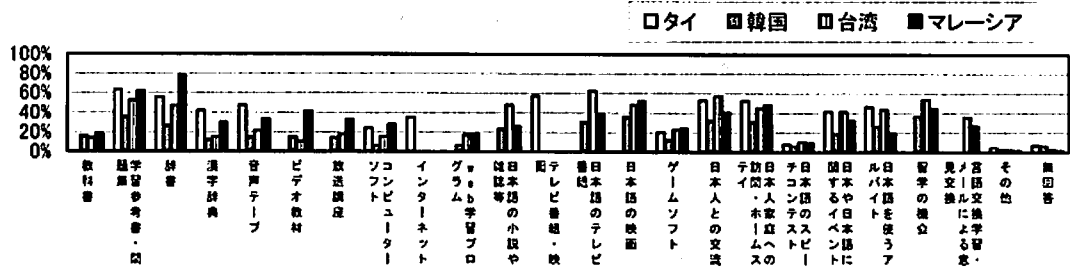
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (60.8)	日本語の映画 (34.9)	日本語のテレビ番組 (65.7)	辞書 (82.9)
2位	テレビ番組・映画 (55.5)	留学の機会 (31.9)	留学の機会 (56.8)	学習参考書・問題集 (68.4)
3位	日本人との交流 (51.8)	学習参考書・問題集 (28.3)	日本人との交流 (56.6)	日本語の映画 (53.3)
4位	辞書 (51.7)	日本語のテレビ番組 (25.9)	日本語の映画 (54.3)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (51.1)
5位	日本や日本語に関するイベント (46.9)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (25.3)	学習参考書・問題集 (52.5)	留学の機会 (48.8)

<表(29)-3：高等教育> (%)

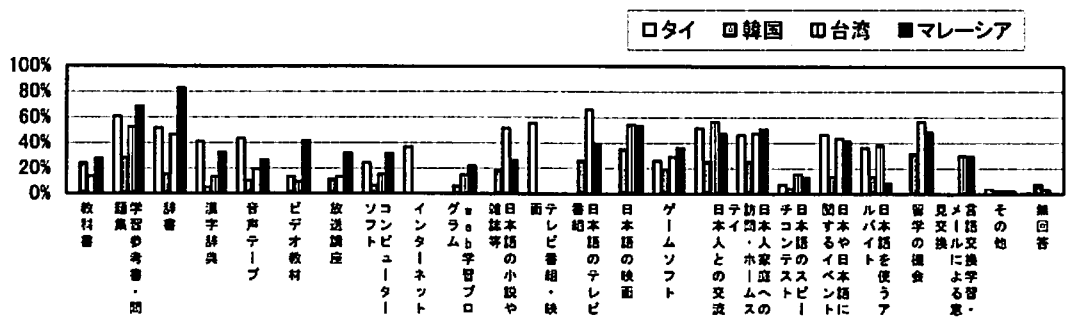
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (65.5)	留学の機会 (44.5)	日本語のテレビ番組 (62.2)	辞書 (74.9)
2位	辞書 (59.4)	学習参考書・問題集 (42.1)	日本人との交流 (59.4)	学習参考書・問題集 (56.0)
3位	テレビ番組・映画 (58.1)	日本語を使うアルバイト (39.9)	留学の機会 (56.0)	日本語の映画 (54.0)
4位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (57.2)	日本人との交流 (39.1)	学習参考書・問題集 (52.5)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (45.8)
5位	日本語を使うアルバイト (54.1)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (37.5)	日本語の映画 (49.0)	留学の機会 (44.0)

<表(29)-4：学校教育以外> (%)

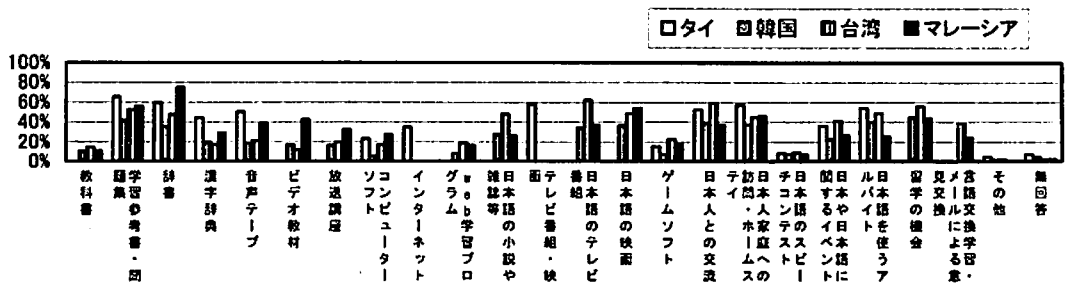
順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	文法解説書 (62.2)	学習参考書・問題集 (39.8)	日本語の小説や雑誌等／日本語のテレビ番組 (57.8)	辞書 (73.1)
2位	日本人との交流 (60.6)	辞書 (37.4)	日本人との交流 (48.4)	学習参考書・問題集 (58.4)
3位	辞書 (59.8)	日本人との交流 (36.8)	学習参考書・問題集 (51.6)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (46.7)
4位	テレビ番組・映画 (59.7)	日本語のテレビ番組 (36.2)	日本人との交流 (48.4)	日本語の映画 (44.9)
5位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (58.6)	日本語の映画 (35.2)	辞書 (44.6)	日本語のテレビ番組 (41.8)



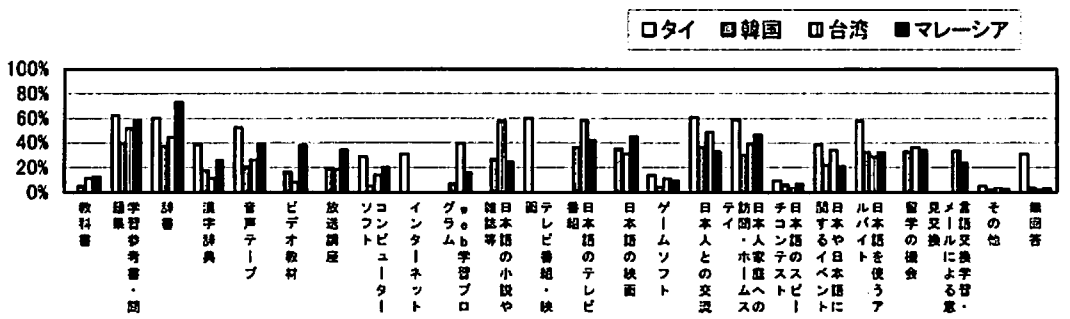
図(29)-1: 充実を希望するもの(全体)



図(29)-2: 充実を希望するもの(中等教育)



図(29)-3: 充実を希望するもの(高等教育)



図(29)-4: 充実を希望するもの(学校教育以外)

第2部

台湾の日本語学習者の学習リソース利用 —インタビュー調査から—

工藤 節子(東海大学)

1. はじめに

学習者をとりまく環境は時代とともに変化してきている。教室の中だけではなく、教室の外にどのような学習環境があり、学習者はこれをどのように利用しているのだろうか。そこで台湾の日本語学習者の用いる学習リソースについてインタビュー調査を行った。学習リソースの調査は、学習のプロセスを明らかにすることにつながり、今後の教育、学習支援を考えていく上で意義がある。本稿における日本語学習者とは、教室、教室外を問わず、なんらかの形で日本語を学んでいる高校生、大学生、社会人を指すが、この他に今回同時にインタビューを行った植民地統治時代に日本語教育を受けた人々(今回の調査では年長者と呼ぶ)¹、日本人との国際結婚の家庭の子供たち(年少者と呼ぶ。今回の調査では保護者にインタビュー)²の調査結果も合わせて分析する。これら二つのグループ³を加えた五つのグループの学習者が、それぞれどのような学習リソースを、どのように利用しているのかを分析し、今後の教育、学習支援で何が求められるかを探る。

2. 本稿における学習リソースの定義

田中・斉藤(1993)によれば、学習とは環境との相互作用で、相手に働きかけ、そのことによって相手も自分も変わっていくことであり、学習リソースとは、学習に関する相互作用の対象となるものである。例えば、田中・斉藤が例に挙げているのは、以下のような例である。「ある学習者が教師に質問をして適切に答えたとしたら、そこに学習は成立しているのであり、その教師は学習リソースと言える。また、ある学習者が本に書いてあることに疑問を抱き、著者に質問の手紙を書いたとして、それを日本語で書いたとしたら日本語の学習となる」わけで、その本も著者も学習リソースとなる⁴。田中・斉藤はこのように学習リソースを定義し、人、モノ、社会的リソースの三つに分けている。このうち、社会的リソースというのは、物的、人的リソースが組み込まれたコミュニティ、ネットワークを指す。トムソン木下(1997)は、これら三つの分類以外に、日本関係の情報を得る情報サービスリソースを挙げているが、本稿では、情報が何を介してアクセスされるかによって、それぞれ人、モノ、場のリソース⁵にふり分けることにする。

ただし、本稿ではリソースを日本人や日本語で書かれたものに限定しない。トムソン木下(前掲)は、人的リソースを日本人と限定する立場をとっておらず、オーストラリアに移住している年配の韓国系、台湾系の日本語話者をはじめ、流暢な日本語を話す外国人話者、同級生⁶も人的リソースに入れているが、本稿でも人的リソースを日本人ネイティブスピーカーに限定しない。また物的リソースに関して、田中・斉藤、トムソン木下には、日本語で書かれていないもの、例えば翻訳された日本の小説や漫画を物的リソースとみなす記述が見られないが、本稿ではこれらも物的リソースとみなす。翻訳されたものは日本語のインプットにはならないが、日本の社会文化を理解する重要なリソースと位置づけることがで

きるからである。ネウストプニー(1995)は、日本語教育の目標を、日本と外国との理解、相実行動⁷としており、言語能力だけではなく社会文化能力⁸も必要だと述べている。とりわけ海外において日常的に日本語を使用する機会は限られ、かわりに翻訳された作品やメディアを介した情報に接する機会が多い。こうした環境では日本語が理解できなくても一学習者の視点から日本の社会文化を理解することが可能である。むしろ、社会文化理解の程度は人によって異なり、これらの理解もその後の学習を経てさらなる変化を遂げる可能性はあるものの、それぞれがある段階における個々の学習の諸相を表していることに変わりはない。本稿では、さまざまな学習者がその人らしい自己実現をするのに必要とされる日本語習得、日本の社会文化理解のために相互作用をする対象としての環境を学習リソースととらえることにする。

3. 学習リソースと社会文化的背景

学習リソースは社会文化的背景を持っている。林(1998)は第二言語学習にかかわる要因として社会文化的要因、学習者要因、学習環境要因を挙げ、社会文化的要因が、学習者要因、学習環境要因に影響を与えていることを述べている。本稿で論じる学習リソースは、授業、授業外に関わらず日本語学習に影響を与える人やモノ、場であり、林(前掲)では学習環境要因に相当するが、こうした学習環境要因は、学習者を取りまく社会の言語政策、多言語、多文化との接触・態度・期待といった社会文化的要因の影響を強く受けている。例えば、外国語学習が奨励されているかどうか、日本語がその社会においてどのような位置づけをもっているか、日本とどのような政治経済的な関係をもっているかによって学習リソースのあり方は大きく変わってくる。劉・王(2002)によれば、台湾では50年の植民地統治により日本語習得率が非常に高く、こうした親や親戚の影響で日本語を学習するケースも非常に多いと言う。また日本への訪問経験やビジネスの影響など、日本との人的交流、ケーブルテレビの普及により日本関連情報の量は中国と比べるとはるかに多く、日本語の有用性に対する評価も高いと言われている。台湾は1895年から1945年まで日本の植民地支配を受け、日本語の強制に対して大きな衝突や反抗⁹があったものの、1944年には71パーセントの台湾人が日本語を理解するようになったと言われている¹⁰。戦後蒋介石による国民党政府が入ってきてからは日本語が禁止され、新しい国語としての北京語の教育が始まるが、「2.28事件」¹¹に対する反動、国民党政府に対する不満もあり、生活の場では日本語を使用する人々が多かったと言う。こうした背景から、この世代の人々の中には、今でも日本に親しみを持って流暢な日本語を話す人たちがいる¹²。

一方、日台の活発な経済交流が日本人やモノとの接触機会を生み出しているという状況もある。台湾の2001年上半期の貿易額で、日本は輸入額の1位、輸出額で3位を占めており¹³、また統計の国籍別統計によれば¹⁴、観光やその他の滞在で台湾を訪れる日本人の数は最も多い。2003年はSARSの影響で落ち込んだものの、2004年には885,168人、2005年11月の時点で既に100万人を超えるなど¹⁵台湾を訪れる日本人の数は年々増えている。こうした社会文化的背景から、日本語学習に影響を与える人、モノ、場のリソースに接する機会は台湾において非常に多いことが予想される。

4. 学習リソースとの接触がもたらすもの

では、このような学習リソースとの接触はどのような相互作用を生み出しているのだろうか。トムソン木下(前掲)は、学習リソースとの接触が目標言語話者との社交機会を与え、言語習得に必要な、文脈ある理解可能なインプット、アウトプットを与えるだけでなく、文化理解、多様な日本語との接触、言語使用を通しての自己評価の機会、さらには相互交流のネットワーク作りにも貢献していると述べている。また、浜田(2004)は、「日本語学習者と環境との相互作用に関する研究」の中で、学習者の学習環境¹⁶との相互作用の結果、学習につながるさまざまな学習行動やアイデンティティの再構築、日本語学習の目的をはじめ、相互作用の評価、計画など学習認知の機会が生まれていると述べている。一方、佐伯(1995a)は、学習をアイデンティティの変化を経た文化的実践ととらえているが、こうした見方に従えば、日本に関係する事や日本語を使って何らかの活動を行う文化的実践に好奇心や興味を示す、或いは参加を希望して何らかの働きかけを行うのは、一人の人間におけるアイデンティティ変化の表れであり¹⁷、学習行動の始まりと見ることができる。台湾の場合、娯楽として字幕付きの日本のドラマや翻訳された漫画を読む人は多いが、そこから日本の社会文化に興味をもつようになり、日本語学習に発展するという例も少なくない。このような場合、リソースとの接触は好奇心、関心、動機を生み出していると言える。この他、ドラマやニュースを通して日本事情としての文化¹⁸を理解することも可能であり、メールは日本語使用を可能にする¹⁹。言語使用の機会が広がれば、人間関係が生まれ、自身の言語能力について自己評価をする機会も生まれるはずである。

以上をまとめると、学習リソースとの接触は、言語インプット、アウトプットの機会を産出するだけでなく、社会文化理解、自己評価、学習評価、好奇心、学習動機を生み出す機会、さらには相互交流のネットワークを形成する可能性をもっている。本稿では、学習者の事例から学習リソースとの接触について述べるが、リソースとの相互作用を以下の項目から分析する。

- a. 好奇心、興味、関心、学習動機の産出
- b. 日本のモノ、人、コトについての情報、社会文化理解
- c. 文字、単語、文法理解、日本語全般の学習²⁰
- d. 聴解、読解など受容技能の練習になる行為²¹
- e. 言語使用、通訳、日本語を手段として使う行動
- f. 能力、理解についての評価、自己評価、学習方法への気づき・評価
- g. 好き、楽しいから行う行為、趣味、娯楽²²
- h. 人との出会い、交流、ネットワークの構築

5. 学習リソースとの接触

次に学習者グループ別に学習者の事例をとりあげ、リソースとの接触について述べる²³。インタビューでは、日本語学習の目的と開始時期、日本語や日本に関連する情報、日本人との接触状況など学習環境全般、またその評価を聞いた。その中で、何が学習に貢献しているか具体的に述べている学習者もいれば、そうではない学習者もいたが、以下の記述は

そうした言明も含め、インタビューの内容を極力変えないように筆者が再構成したものである²⁴。尚、()内の記述は、リソースとの相互作用を4のa~hの項目に従って分類したものである。

5.1. 高校生

5.1.1. Aさん(女)(普通高校²⁵2年生 インタビュー(中国語) 2004年7月)

人	物	場
兄, 教師	ゲーム, 攻略本(翻訳), 漫画, インターネット(サイト) テレビ(アニメ), 羊羹	第二外国語の授業

ゲームや漫画を翻訳に頼らず直接日本語で理解できるようになりたくて(a. 学習動機), 第二外国語の日本語の授業を履修した。小学校の頃, 兄がゲームをやるのを見ていっしょにやるようになった。ゲームは全て日本語だったが, その中の漢字を見て類推し攻略本(翻訳)と対照させながら(d. 読解)ゲームをした(g. 趣味・娯楽)。ゲームの主題歌やゲームの中で展開される音楽も好きだ(a. 興味)。どうしてもほしい歌は少し高くつくが, 漫画の店で日本から数回とりよせたこともある。ゲームをやりながら音楽を聞いていると臨場感がある(g. 趣味・娯楽)。ゲームの中で使われる名前はカタカタが多いため, カタカナにはなじみがあり, 高校に入ってから第二外国語の授業でカタカナを覚えるのはひらがなより簡単だった(c. 文字学習)。漫画も好きで読む。一番早く読んだのは「ドラえもん」で, これも最初は兄が読んでいたものだ。漫画は翻訳されていたが, 擬声語の部分は日本語のままになっていて, これが日本語の文字だと気づいた(a. 好奇心)。その後インターネットで新しい漫画を探すようになった。日本語の新しい漫画がそのまま読めるところもあるが(d. 読解), 漫画の翻訳は中国のサイトに多いのでよく中国のサイトへいく。彼らは自分で翻訳してホームページにのせて皆で読みあう同好会のようなものやっていて, 漫画の評価もこうしたところで読むことがある(b. 社会文化理解)。最近日本語を勉強して日本語が入力できるようになったので, 時々日本のサイトにもいく。日本のサイトは, 日本語が全て読めなくても写真やその他の情報を見て内容を類推することができる(d. 読解)。漫画やアニメから日本の文化を理解することができる。例えば, 「ちびまるこ」のアニメを見てみると, 食卓にたくさんの皿が並んでいて台湾と違うので, 授業の時先生に聞いたら(a. 好奇心), 日本では本当にそうするのだと聞き, 食事文化の違いを感じた(b. 社会文化理解)。また同じく「ちびまるこ」で羊羹が高級品だと言っているのを聞いた(b. 社会文化理解)。羊羹がどんなものかわからなかったが, この前スーパーでたまたま羊羹を売っていたので食べてみた。15元(日本円約50円に相当)だから, 日本のものかどうかかわからないが, 包装紙には日本語が書いてあった(c. 文字認識)。

5.1.2. Bさん(女) (普通高校2年生 インタビュー(中国語) 2004年7月)

人	物	場
母, 祖父, 姉, クラスメート	教科書, テープ, 漫画, 小説(翻訳) インターネット(サイト, 歌) 辞書, CD(ドラマ), テレビ(ニュース), 新聞, 和服	ラジオの日本語講座

祖父が日本語を話すのを聞きながら、自分でも少し勉強するようになった。しかし本格的に勉強したのは中学になって漫画の好きな姉と漫画(翻訳)を読むようになってからだ。漫画が好きな姉につきあって昔母が使った教科書とテープで50音や簡単な短い文を26課まで勉強した(a. 学習動機)。わからないところは姉に聞いたり辞書を引いたりする(c. 単語学習)。姉は大学生で日本語が必修なので今日本語を勉強している。たまに姉と二人で両親に秘密の話をする時に日本語で話すことがある(e. 日本語使用)。時々姉が買った小説(川端康成など)の翻訳を読むが、おもしろい(a. 興味)。ラジオで英語の勉強をしていた時に少し早めにラジオのスイッチを入れたら、偶然日本語の講座をやっているのを知ったので、それから時々聞くようになった(c. 日本語学習)。コンピューターはよく利用する。今は好きな夏川りみのサイトへいく。歌を聴いたり歌詞の翻訳を読んだりする(g. 趣味・娯楽)。夏川りみの歌は方言があるので、翻訳をみないとわからない(b. 社会文化理解)。一度学校のクラブ活動で宗教関係のことを調べることになってインターネットを探している時に、日本留学経験者が作成した京都を紹介するホームページを発見した。鳥居のマークがあったので宗教関係のサイトかと思ったが、京都に関係するサイトだった(b. 社会文化理解)。ここには日本のいろいろなサイトへのリンクもあるのでその後もよく利用する。翻訳サイトも時々利用するが質はよくない。日本語が少しできるので、時々クラスメートが漫画を持ってきて意味を教えてくださいと頼まれることがある。解説する(c. 日本語解説)際、わからない言葉があると辞書をひく(c. 単語学習)。漫画をドラマ化したCDを聞くこともある。CDは漫画の専門店においてある。文字がないから一生懸命聞き(d. 聴解)、声優の真似を試みたりもする(c. 会話練習)。日本の小説や文化に興味があるので、日本語をもっと勉強したい。今は第二外国語でフランス語を勉強しているが、将来大学に入ったら日本語を勉強したい。日本の文化に興味をもつようになったのは、小さい頃、祖父の影響で母が着ていた和服とか、インターネットでよくいく日本関係のサイトに興味をもったからだ。日本の精緻な文化、礼儀正しさが好きだ。華道も勉強したい(a. 興味)。もちろん、日本についてマイナス情報がないわけではない。例えば、新聞やニュースで、日本の生活が緊張している、部屋が小さい、援助交際といったマイナスの情報が入ってくることもあるが(b. 社会文化理解)、やっぱり一度は行ってみたい。

5.2. 大学生

5.2.1. Cさん(男)(生命科学専攻4年生 インタビュー(中国語) 2004年7月)

人	物	場
(祖父母), 両親, 父の仕事のパートナーである日本人, 観光ガイドをやっている友人, 教師	漫画(翻訳), 漫画(翻訳なし) テレビ(字幕つき), 日本の製品, NHK 天気予報(字幕なし), 日本語の歌	日本への旅行, カラオケ, 第二外国語の授業

日本語の勉強を始めたのは大学1年生の時、第二外国語として2単位、3年生の時も2単位履修した。子供の頃から日本の漫画(翻訳)が好きだったこと、父が日本人との共同出資でビジネスをしている関係で、その日本人と会う機会があり、日本語に興味をもつようになったこと(a. 興味)、父が日本語が流暢であったこと、外国語を勉強することは世界が広がることだという母親の外国語学習の勧めもあって、日本語を学ぶことにした(a. 学習動機)。漫画が好きで、かわぐちかいじが書いたものや『沈黙の艦隊』など、ビジネス、スポーツ、政治、医学界をテーマにした日本の漫画(翻訳)をたくさん読んだ(g. 趣味・娯楽)。漫画が好きになったのは、その中に日本の社会問題、文化が描かれているからだ(a. 興味)。例えば、『島耕作』を読むと本当に会社の成長を見ているようでリアリティがあるし日本のサラリーマンがもつプレッシャーを理解できる(b. 社会文化理解)。留学経験のある、現在観光ガイドの仕事をやっている知り合いの話によれば、日本人は自分でお金を払ってでもやるべき仕事を成し遂げる責任感をもっているという(b. 社会文化理解)。台湾にはこうした観念がないと感じている。日本の製品(例: MD プレーヤー, 象印の魔法瓶)は品質がよく安いしデザインもよく、日本の完璧さを求める精神には感心することが多い(b. 社会文化理解)。日本へは5, 6回旅行をしたことがある。これまで東京が多かったが、今度は伝統文化に触れられる京都に行ってみたい(b. 社会文化理解)。日本へ行った時に本屋へ行って翻訳されていない本物の漫画を読んでみたが、辞書がないと歯がたたないし、実際の会話も難しいと感じた(f. 自己評価)。テレビではよく字幕のある日本の番組を見るが(g. 趣味・娯楽)、授業でNHKの天気予報を聞いた時、字幕がなくスピードも速いのできつかった(f. 自己評価)。歌手ではMr. Childrenが好きで、時々CDを聴く。森山直太郎の歌は歌詞がわりと簡単だと思う(c. 日本語理解)が、だいたいメロディを聴くことが多い(g. 娯楽・趣味)。カラオケでは聞くことが多いが、単語を覚えることもできるので時々歌う(c. 単語学習)。台湾は日本語学習の環境が豊富なほうだが、まだまだ完璧な環境とは言えない。日本語の授業はあるが、いざ知り合いの日本人と話す時は、勇気がなくて話せない(f. 自己評価)。

5.2.2. Dさん(男)(日本語学科3年生 インタビュー(日本語) 2005年9月)

人	物	場
友達(日本からの帰国子女), 大学のクラスメート, 姉妹校の日本人大学生, TA	テレビ(アニメ, ドラマ), 辞書, 教科書, インターネット(情報検索, 新聞, ニュース, 掲示板, チャット)図書館の本, 紀伊国屋で買った本	塾, 第二外国語の授業, 日本語学科の授業, 日本への旅行, 姉妹校との交流, イベントの劇, 図書館, 日系デパート,

初めて日本語に接したのは小学校の時だ。小学校で日本から帰ってきた帰国子女の友人が話す日本語を聞いて意味はわからないが、好奇心をもった(a. 好奇心)。テレビでは、中国語の吹きかえの日本のアニメを見ていたが、テーマ曲が日本語で歌われていて、これが日本語なのだと知った。家族で一週間北海道と東京を旅行したことがあるが、日本はきれいなところだと思った(b. 社会文化理解)。高校の時、第二外国語の授業をとったが50音しか勉強しなかったため(c. 文字学習)物足りず、夏休みに塾に行った(c. 日本語学習)。その後帰国子女の友達から日本のことを聞いていて(b. 社会文化理解)、日本語に興味を持ち日本語学科に入った。先生が厳しく自分の発音を録音して提出する課題があったので、CDを使って何回もアクセントの練習をした(c. 発音練習)。また会話の授業では教科書の会話の文型を使って会話を練習したり劇のシナリオを書いて発表して文型と単語が自然に身についた(c. 日本語学習)。学科の先生たちと話す時は、基本的に日本語で話す(e. 日本語使用)。クラスメートとも簡単な単語を使って日本語を話すことがある(e. 日本語使用)。時々日本語について聞かれることがあり、わからない時もあり辞書を引いて教えることもある(c. 単語学習)。読解の授業で自分の読んだ文章を紹介する必要があるが、1回目は好きな料理関係の本を図書館で探し(d. 読解)、2回目は紀伊國屋書店で「外国人がよくするQ&A」を買って(d. 読解)発表した。発表の準備でわからないところはTA²⁶に教えてもらった(c. 日本語理解)。家の近くに高島屋デパートがあり、本屋に時々足を運んで日本語の本を見たり(d. 読解)日本料理を食べたりする。日本の食べ物は台湾の食べ物に比べると味がデリケートだと思う(b. 社会文化理解)。2年生の終わりに学科のイベントで吉本喜劇の脚本をもとに劇をやって(e. 日本語使用)喝采を受け、うれしかった(f. 自己評価)。インターネットは、授業の宿題の新聞記事や資料を探したり(d. 読解)音声付のニュースを聞いたりする(d. 聴解)。交流プログラムで姉妹校の学生たちが大学にきて、いっしょに実習をやった(e. 日本語使用)。実習に来る前に掲示板を通じて連絡し合い、帰国後は個人的にチャットを通じて交流を続けている(e. 日本語使用), (h. 交流)。日本の大学生たちと日本語で話していると、授業で習った日本語と大きな違いがあると実感した(c. 言語変種²⁷理解)。クラスメートや学科の先生との会話は、あまり問題がないが、日本の大学生たちと話していると半分ぐらいしかわからないことがあり、不安になることもあった(f. 自己評価)。この活動は、一週間の実習を通じた共同生活でいっしょに授業を考えるため、日本語を教える勉強になるし会話力も向上するので(f. 学習方法評価)、昨年に引き続き参加した。

5.3. 社会人

5.3.1. Eさん(男)(公務員 インタビュー(中国語) 2005年9月)

人	物	場
塾・大学院の教師, 家庭教師, 日本人教師, 日本人の知り合い, 同僚, 先輩, 日本人観光客	教科書, テープ, 日中辞典, 日本語能力試験, 問題集, テレビ(ドラマ), インターネット(NHK ニュース, 辞書)国語辞典, CD, VCD	大学院の授業, 塾, 日本での研修, 政府の留学試験

本格的に日本語学習を始めたのは1992年である。在職のまま大学院に学ぶ機会があり、修士論文を書く時外国語の文献を読めるようにと勉強を始めた(a. 学習動機)。日本語は大学の第二外国語の授業で勉強したことがあるが、特別な動機もなく授業で教える内容も少なかったため既習はゼロに等しかった(f. 自己評価)。大学院では授業以外に、自分で文法の本を買い塾にも行くようになった。そこは法律関係の文章を読むための文型を教える塾だった(c. 読解技能の学習)。2年生になると日本語のニュースの授業があった。その授業にはテープとテキストがあり、1回で5課ぐらい進むので家で20回も聞いて発音に慣れるようにした(c. 聴解技能のための学習)。法学日本語という読解の授業もあった(c. 読解技能のための学習)が、これも1年生の基礎文法から比べるととても難しかった(f. 自己評価)。授業についていくためには自分で勉強するしかない(f. 学習方法評価)。大学院を卒業する年に日本語能力試験2級を受けたが4点差で合格できなかった(f. 日本語能力評価)。卒業後は1級、2級の試験問題集や文法の本を買って自分で勉強し(c. 日本語学習)、2年目に2級、3年目に1級に合格した。その後日本語力を維持するために毎年日本語能力試験を受け続け(f. 学習方法への気づき)、今合格証書を5枚も持っている。その他に日本人教師が教える会話中心の塾へ通い(e. 日本語使用)、インターネットでNHKのニュースを聞き(d. 聴解)、日本のドラマを見たり文法や語彙の本を読んだりした(c. 日本語学習)。漢字があるので、読みはかなり早く、基礎も既にあるので単語を増やすのも楽だった(f. 学習方法評価)。その後公費で3ヶ月日本へ研修に行く機会があった。これには試験があり²⁸、聞く、話すのが苦手だったので2回も失敗したが、日本人の家庭教師について勉強した(e. 日本語使用)後、3回目でやっと合格した。日本語をこれほど勉強したのは、公務員は公費で留学するチャンスがある上に、日本語力を身につけるのは自分への投資になると思ったからだ。日本での研修は、犯罪現場に立会い資料収集について学び(e. 日本語使用)、日本人の友だちも何人かでき、休日いっしょに遊んだりした(h. 交流)。親しいつきあいはないが、1999年の台湾地震の時日本から「大丈夫か?」と電話をもらい、ありがたいと思った。日本から帰ってから、日本語を忘れたくない、もっと聞き取りと会話の力を強化したいという気持ちが強くなった(f. 学習方法への気づき)。今は時々同僚に日本語のことを聞かれたり、日本語のわからない先輩が日本語の文献を読む時に手伝いをするところがある(c. 日本語解説)。ドラマは忙しいので今は見ないがVCDは時々見る。わからないところがあれば何回も

聞くことができる(d. 聴解)。インターネットは、辞書機能以外に専門分野の資料収集(d. 読解)、他には特定のニュースについて日本がどんな見方をしているか、などを知るためのツールとして利用している(b. 社会文化理解)。辞書は日本語で説明をしているもののほうが日本語の表現が学べると思うので、日本語能力試験 1 級に合格した時から日中辞典は使わず日本の国語辞典を使っている(c. 単語学習)、(f. 学習方法への気づき)。掲示板はあまり使わない。前に日本の警視庁にメールで質問をし、返事をもらったことがある(e. 日本語使用)。台湾には観光客が多いため、夜市で日本人観光客が地図を見ているのを見て、道を教えたことがある(e. 日本語使用)。将来また日本へ留学に行きたいので、レベルを維持するためにインターネットで NHK ニュースを聞き、CD に焼き付けて車を運転する時、聞くようにしている(d. 聴解)。日本の最近の情報もわかるし新しい単語も覚えられる(b. 社会文化理解)(c. 単語学習)。

5.3.2. Fさん(女)(日系企業勤務 インタビュー(日本語) 2005年10月)

人	物	場
日本留学をした友人, 日本人の上司, 同僚, 友達, 顧客	インターネット, 辞書, ドラマ, 推理小説	日本に留学(日本語学校, 専門学校), 日系企業, カラオケ, 上司との食事

専科学校を卒業後、日本留学の経験のある知り合いに勧められ日本に留学した。一年日本語学校での日本語学習を経て、ビジネスの専門学校で 2 年間勉強して帰国したが、三年日本にいても日本語はあまり話せなかった(f. 自己評価)。授業は一方向的だったし、日本にいても日本人の友だちはあまりいなかった。自分でも日本語が話すのがこわくて、日本人とのコミュニケーションを避けていたようなところがあった。帰国後、家具を作り輸出する日系資本の会社に就職した。日本人の上司が二人、同僚四人が台湾人で、全部日本語が自分より上手な人たちだった。会社に入って、会議や通訳など朝から夜まで、毎日日本語を使う環境だった(e. 日本語使用)。わからない言葉があれば同僚に聞いてコミュニケーションの仕方を覚えていった(c. 日本語学習)。日本に留学していたときにまわりに男性の友人が多かったせいか「すげえ」「メシ」「カネ」といった言葉をたびたび使っていて、上司に注意され、今では適切な言葉遣いもわかるようになった(c. 言語変種理解)。上司の日本人は、年配の人で単身赴任だったため、生活面でもいろいろ面倒を見てあげた。例えば、皆でいっしょに料理をつくって食事をすることもあり、野菜の名前を教えてもらった(c. 単語学習)。また、カラオケへ行っては、日本語の歌をいっしょに歌って歌も覚えた(c. 日本語学習)。この時期に日本語の力が一番伸びたと思う(f. 自己評価)。その後、いくつかの会社を経て現在の人材派遣の日系企業に入った。上司が日本人で、台湾人の同僚が 7 人いる。日系企業の人材の需要を聞き、台湾の人に紹介する。毎日日系企業の顧客を相手にコミュニケーションをするので(e. 日本語使用)、わからない言葉もあるが、最近では直接相

手に聞く(c. 日本語学習)。辞書はいつも携帯している(c. 日本語学習)。インターネットでは専門用語を調べたり(c. 日本語学習)、日本の企業の内容を調べることもある(b. 情報理解)。ドラマも好きで見ている(d. 聴解), (g. 趣味・娯楽)。今、難しいのは、法律的な知識を知った上で交渉をしたり, どうやって人をほめたり, 人材を人に勧めていくかといった日本語だ。同僚の日本人に聞いているが(c. 日本語学習), まだうまくいかない(f. 自己評価)。日本語力を維持しさらに表現力をつけるために, 好きな推理小説をよく読んでいる(d. 読解), (g. 趣味・娯楽)。日本に留学時代に知り合った台湾人の友だちと時々電話で話す時は日本語になる(e. 日本語使用)。お互いに日本語力をチェックしあう意味もある(f. 自己評価)が, まわりの人に聞かれたくない話をする時に便利なことも理由の一つだ。

5.4. 年長者

5.4.1. Gさん(女)(主婦 インタビュー(日本語) 2004年8月)

人	物	場
同じ学校の先輩・後輩, 日本人のクラスメート, 銀行の窓口に来た日本人, 同僚, 戦後日本から引き上げてきた夫,	童謡, テレビ(NHK, 相撲), 雑誌(『オール読み物』, 『婦人クラブ』), 外来語辞典, 小説, レシピ, 手紙	幼稚園, 公学校, 高校の同窓会, 日本語の書店(邱永漢, 紀伊国屋), 日本への旅行, OB会の食事会

日本統治時代に生まれた(1928年)が, 家では台湾語²⁹を話していたので, 初めて日本語に接したのは幼稚園の時だった。日本の童謡(もしもし亀よ, 鳥の子, かめめの水兵さん)を覚えた。今聞いたら懐かしい。公学校³⁰に入り, その後高校に入った。高校はほとんどが日本人で, 台湾人は1クラスに4,5人しかいなかった。その時の高校の80周年記念の校友会が今年日本であり, 先輩たちと招かれて行った(e. 日本語使用)。地元に住む卒業生からなる高校のOB会は, 今でも月に1回食事会を開いて日本語でおしゃべりをしている(e. 日本語使用)。高校を卒業した年に, 戦争が終わり銀行に就職をした。その後中国から役人がきて中国語で仕事をするようになったので, 北京からきた先生に一年間中国語を教わり徐々に中国語を話すようになったが, 前からいる同僚や友達同士は日本語を使っていた。日本語のほうがすぐ通じるし仲間意識があった(e. 日本語使用)。時折, 日本人のお客さんが窓口に来た時も日本語ができる自分が対応した(e. 日本語使用)。その後, 高校時代のクラスメートをはじめ, 日本人の友達がよく台湾に遊びにきてはいつしよに遊び, こちらも日本へ行くなど, 交流関係は今でもずっと続いている(h. 交流)。会った時に撮った写真を送ったり, 暑中見舞いを送るなど手紙の交換もしている(h. 交流)。家庭内の日本語使用率も高い。戦後日本から引き上げてきた夫との会話は日本語であり(e. 日本語使用), その影響で娘も日本語を片言は知っていたが, その後の学習を経て今では日本語が話せ, 孫にも日本語を教えている。娘に日本語学習を勧めたのは, 私の日本の友達が子供を連れてきた時に, 子供どうし日本語でおしゃべりできないとつまらないと思ったし, 娘が国際貿易学科で勉

強していたので、日本語学習は就職に役立つと思ったからだ。自分は日本語も台湾語も中国語もぜんぶ中途半端で、流暢に話せないが(f. 自己評価)、言語は役にたつものなので習ってほしいと思った。テレビはNHKのニュースを毎朝見る(b. 社会文化理解)。相撲の好きな夫につきあって家中で相撲を見る(g. 趣味・娯楽)。雑誌は、『オール読み物』と『婦人クラブ』を前にとっていた(g. 趣味・娯楽)。時折、日本語の本が置いてある邱永漢書店や紀伊國屋に行って、おもしろそうな本があれば買う。小説もよく読む(g. 趣味・娯楽)。最近は外来語がたくさんあってわからないので(f. 自己評価)外来語辞典を買って調べている(c. 単語学習)。『婦人クラブ』にレシピが付録としてついていて、たまにそれを見て料理を作る(g. 趣味・娯楽)が、時々知らない野菜の名前が出てきて(f. 自己評価)、旅行で日本へ行った時スーパーで確認したり友達に聞いたりする(c. 単語学習)。旅行が夫婦共通の趣味で、日本へは数回旅行をしている(g. 趣味・娯楽)。

5.4.2. Hさん(男)(無職 インタビュー(日本語) 2004年8月)

人	物	場
中学の時のクラスメート、妻、日本語教育を受けた世代の人たち、英語の先生、娘	テレビ(のど自慢、NHK ニュース、相撲)、雑誌(『文芸春秋』、『諸君』)、本、年賀状、手紙、	日本への旅行、日本語の書店、老人大学

1924年生まれなので、公学校6年、高等科2年、高校5年と合計13年日本語で教育を受け(c. 日本語学習)、大学に入るまでの2年間、公学校の教師も勤めた。ちょうど大学に入った年に終戦となり、その後は中国語をゼロから学びながら学業を続けた。戦後、日本語は政府によって全面的に禁止されるが、友人と話す時は日本語だった(e. 日本語使用)。仕事で日本語を使う機会は全くなかったため、日本語を使うのはもっぱら日本語教育を受けた世代の人々と話す時で、昭和2年生まれ(の妻とも台湾語と日本語をおりまぜて話す(e. 日本語使用)。高校時代のクラスメートは大部分が日本人で、台湾人は1割程度しかいなかった。終戦後日本へ引き上げた日本人のクラスメートとは今でも年賀状、手紙のやりとりをしていて(e. 日本語使用)、そのうち頻繁に連絡をとりあっている友人が4人いる(h. 交流)。本が好きなので、台湾で買えない本を買って送ってもらい、わからない外来語を手紙で聞くこともある(c. 単語学習)。テレビを見ていると、最近わからない外来語がたくさん使われていて困る(f. 自己評価)。今老人大学³¹で英語を習っているが、英語を教える先生も同じ世代の人なので、日本語を織り交ぜて説明をしてくれ、外来語も時々解説してくれる(c. 単語学習)。70歳で引退してからこれまで11年間は、興味のある日本語の本を読んで(b. 社会文化理解)、(g. 趣味・娯楽)、中国語で本を書いている(g. 趣味・娯楽)。日本語で読むのは問題ないが書くことはできない³²(f. 自己評価)。これらの本は日本の軍人、政治家、宗教家などの人物伝が中心で、執筆した本は全部で18冊になった。1冊を執筆するのに日本語の参考図書を8~10冊読み、完成させるまで8ヶ月程度費やすが、製本は毎回

10冊ほどである。自分が読書し思索をした結果を生きた証として残すために書いているだけなので、家族や本が好きな人に配る。『文芸春秋』は毎月購読している(g. 趣味・娯楽)。時折、友人が日本の新聞の切抜きを送ってくれるので日本の事情もよく知っている(b. 社会文化理解)。娘が日本語学科に入ったが、学生時代はわからないことがあれば教えた(c. 日本語解説)。昨年の5月、娘が日本へ出張した際にいっしょに日本へ行き、奈良に住む高校時代のクラスメートとの再会をはたした(h. 交流)。

5.5. 年少者

5.5.1. 1ちゃん(女)(小学校3年生 母親にインタビュー(日本語) 2004年)

人	物	場
母, 日本の祖母, 父方の祖父母, 親戚, 国際結婚の家庭の子供, 書道の先生, 日本の友達, 補習校の友達	本(読み聞かせ), 本, テレビ(アニメ, 「お母さんといっしょ」), メール, 手紙, ビデオ, 補習校の宿題	通信教育『チャレンジ』, 日本へ帰省, 日本の小学校の体験入学, 補習校, なでしこ会 ³³ , 書道教室

Iは日本で生まれ2歳まで日本にいた。その後台湾に戻り幼稚園に入り現在小学校3年生である。Iの父親の4人の兄弟のうち3人が日本に留学し、そのうち一人が同じように日本人女性と結婚しているため、いとこたちが集まると日本語を使うことが多い(e. 日本語使用)。Iは台湾にもどって幼稚園に入ってから中国語も話せるようになり、父親とは中国語、日本語教育を受けた祖父母とは日本語で話す(e. 日本語使用)。親が国際結婚の中国語ができない子供のために、時々通訳をすることもある(e. 通訳)。小学校にあがる前は、「なでしこ会」の交流があって、お母さんと子供たちがいっしょに日本語で話をする機会があった(e. 日本語使用)が、小学校に入ってからはその機会がない。そのかわりに補習校³⁴ができ、日本語を話す場になっている。補習校では授業が終わると中国語になるが、授業中は日本語で話し(e. 日本語使用)、読み書きを強化するための書く宿題がある(c. 日本語学習)。他に習字と硬筆を習っているが、先生は台湾に長く住んでいる日本人の先生で、言葉や礼儀に厳しいので(e. 日本語使用)、嫉にもいいと思っけて行かせている(b. 社会文化理解)。夏休みになると日本の実家に帰り、3週間ほど日本の小学校に入れる(e. 日本語使用)、(c. 日本語学習)。田舎の学校で1クラスしかないせいか好意的に迎えてくれる。そこで友達もできて、手紙やメールの交換をし(e. 日本語使用)、次の年に行くともた歓迎してくれて、もう4年ごしの交流が続いている(h. 交流)。日本の祖母とは日本語で話す(e. 日本語使用)。2歳ぐらいの時から『チャレンジ』という添削通信教育を始めた(e. 日本語使用)、(c. 日本語学習)。テレビでは、小さい時「お母さんといっしょ」「日本語で遊ぼう」などを見ていた(d. 聴解)。アニメは中国語の吹き替えになっているが、それが日本のものであることは知っており、主題歌は日本語で歌える(g. 趣味, 娯楽)。ビデオを借りて見るときは日本語を選択して見せるようにしている(d. 聴解)。日記は少し書いていたが(e. 日本語使用)、長くは続かなかった。小さい頃は寝る前に読みきかせをしていたが(d. 聴解)、これは語彙

が増えると思う(c. 単語学習)。最近は自分で本を読むようになった(d. 読解)が、図書館が充実していないのが困る。私はIと日本語でしか話さないのが(e. 日本語使用)、例えば「幼稚園で何食べてきたの?」と聞いて、語彙が足りず日本語で説明できない場合「うちで食べたことがないもの」と答えたりする。

5.5.2. J君(男)(中学3年生 母親にインタビュー(日本語) 2004年)

人	物	場
母, 母親の実家の家族, 補習校に通う子供たち	テレビ(「お母さんといっしょ」, ドラマ), アニメ(「ドラえもん」, 宮崎駿), ゲーム(解説書), ミニ四駆(説明書), 本(読み聞かせ, ハリーポッター), 日本の学校の教科書	通信教育『チャレンジ』, 日本へ帰省, 日本の学校の体験入学, 補習校, 日本語能力試験, 日台青少年スカラシップ(交流プログラム)

Jの家庭内言語は多様である。小学校5年生の弟と中国語で話し、父親とは台湾語、母親とは日本語で話す(e. 日本語使用)。父と母は、留学先で知り合ったこともあって今でも英語で話す。祖母は植民地時代小学校の2年生まで、祖父は4年生まで日本語教育を受け、日常的な語彙はたまに日本語を使うこともあるが、Jとは台湾語で話す。同じ補習校に通う母親の友達の子供とは、母親が側にいると日本語で話すが(e. 日本語使用)、子供同士になると中国語になる。昨年日本語能力試験の2級を受けて合格した。昨年日台青少年スカラシップという交流プログラムあり、両言語ができるJが通訳を手伝ったが(e. 通訳)、そういう仕事ができたとすることで、自分が認めてもらえたと感じ(f. 自己評価)、その後も勉強を熱心にするようになった(a. 学習動機)。その交流プログラムの際、日本に住む台湾籍の子供がアイデンティティに悩んでいるのを聞いて、Jにこのことを聞くと「自分は日本と台湾、アイデンティティが二つあるから悩むことはない」と答えた。日本の学校への体験入学は夏休みを利用して3回行ったが(e. 日本語使用)、(c. 日本語学習)、昨年はSARSで行けず、今年は受験を控えているため日本に一週間しか帰れなかった。私の実家の家族とは日本語で話す(e. 日本語使用)。通信教育『チャレンジ』が日本語の発達に貢献している(c. 日本語学習)。小さい時はゲームの解説書を熱心に読んでゲームをしたり、ミニ四駆の説明書を見ながら車を組み立てて遊んでいた(d. 読解)、(g. 趣味・娯楽)。日本語がわからない友達が解説書を読めず電話をかけてくると、教えてあげていた(c. 日本語解説)。テレビでは、「ドラえもん」を吹き替えで中国語のまま見ていたが、宮崎駿のアニメは日本語を聞ける(d. 聴解)ので、日本語学習に役立った(c. 日本語学習)。ドラマ「ビーチボーイズ」は私もいっしょに見た(d. 聴解)。小さい頃よく読みきかせをしていたせい(d. 聴解)本はよく読む。ハリーポッターなど冒険小説が好きだ(d. 読解)、(g. 趣味・娯楽)。子供の言語発達には、母親の言葉が重要なので、単語をたくさん使い修飾語もたくさん使った文で言うのがいいようだ。しかし、会話はふだん話しているからあまり問題ないが、日本語

の裏に潜む文化的なものとか、内容のあるものを理解させるのは難しい。補習校では教科書を中心に国語や道徳の教科書を読んでいるが(b. 社会文化理解)(c. 日本語学習)、日本の歴史とか今の日本社会について、海外で文化的背景を理解するのは難しい(f. 文化理解評価)。例えば、テレビで時代劇を見ていても、なぜちよんまげをしているのか、刀をどうやってさすのかなど説明はできても、説明しただけではわからないところも多い。環境問題とか、障害者の話など、短くても心に訴え、内容のある読み物に日本語でふれさせるようにしたいが、そういった副読本がないので困っている。

6. 分析

6.1. グループ別分析

5つのグループの学習者が使用する学習リソースを比べると、年齢や関心、学習目的の違いによって異なる傾向が見られる。

まず、高校生グループ、大学生グループとも、アニメ、漫画、ドラマ、ゲーム、インターネットなどのリソースを利用したサイト情報との接触が圧倒的に多い。大学生になると、これに加えて、メールやチャット、掲示板、旅行や大学の交流プログラムといった場のリソースを介した言語使用の機会がある。非専攻の学生のリソースに比べると、日本語学科の学生は授業をはじめ、人、モノ、場の各種リソースが飛躍的に増える。調査ではこの他に大学の中国語センターで中国語を学んでいる日本人留学生との接触、日本人観光客の多いホテルでのアルバイト、スピーチコンテストへの参加など場のリソース利用の例があった。

一方、社会人にとって日本語は、趣味で学習するという人を除けば本稿で述べた事例のように、仕事のチャンス、公費による研修、昇進に結びつくため学習動機が高い。また、仕事で日本語を使う場合は、実際の仕事、同僚や仕事上の顧客とのつきあいなど場のリソースとの接触が増える。仕事上リソースとの接触がない場合は、塾や日本語能力試験、プロフィシエンシー試験といったリソース、それに関連した人的リソース(塾の教師)や物的リソース(参考書、問題集)の利用が増える。一定のレベルに達した日本語維持のためのリソースとして、趣味や情報収集を兼ねた読書やニュース、新聞の利用があるが、Eさんのように日本語能力試験を受け続けるという例もある。

年長者においては、特に本稿で紹介した二人は高校まで日本語による教育を受けており、日本語による会話に不自由がないため、新たに日本語を学習するためのリソース利用はない。しかし日常生活に欠かせないテレビや本、趣味の雑誌から今でも旺盛に社会文化理解を進めており、その中で出会う新しい外来語や見慣れない単語に関しては、外来語辞典で調べたり、日本人の友人に聞いたり旅行で日本へ行った時に実物を確かめたりしている。また、同窓会や旅行、手紙といったリソースを通して日本の旧友との息の長い交流が続いている。通信手段として手紙や年賀状の利用はあるが、インターネットの利用はほとんど

みられない。同世代の台湾人同士で日本語使用をする場面も少なくない。

年少者グループは、インタビュー対象者が母親であること、アイデンティティとの関わりを持ち、二言語併用能力としての日本語能力が期待されている点で、他の4つのグループと学習目的が異なる。しかし、日本語学習においてゲームやアニメ、漫画、日本語能力試験をリソースとして使っている点では、高校生や大学生のリソース利用と共通する部分があった。リソース利用で異なるのは、母親の親族や補習校を含めた日本人コミュニティという場のリソースで日本語使用機会をもっていることが挙げられる。また、発達段階を考慮に入れた日本語学習、読み書きの能力獲得、そのための知識、社会文化理解のために日本の教科書や通信教育の教材など物的リソースの利用、礼儀や躰を教えるために書道教室といった物的リソースの利用がある。さらに二言語併用話者であることで、小さい頃から他の人のために通訳をする機会があること、寝る前に母親による物語の読み聞かせがある。

6.2. 相互作用分析

次に学習リソースとの相互作用を項目ごとにまとめる。

a. 好奇心、興味、関心、学習動機の産出

Aさん、Bさん、Cさん、Gさんの娘さんの事例は、台湾の若者のまわりに学習動機に影響を与える人的リソースが多いことを教えてくれる。例えば、わからないことがあれば気軽に教えてもらえる日本語世代の祖父母をはじめ、既に日本語学習を始めている兄弟や両親、またいっしょにゲームや漫画を楽しむ兄弟姉妹がおり、こうした人的リソースの存在や、人的リソースが有する物的リソースが、若者の日本語学習の動機に少なからぬ影響を与えている。

また、小さい頃から日本の漫画、ドラマ、ゲーム、アニメに接する環境の中で育ち、その内容に興味をもったり翻訳できない擬態語の文字を漫画で見たり、意味がわからなくても日本語を身近で聞いた経験から、日本語に好奇心や興味をもつようになるというケースが多い。こうした学習者は筆者の周りにも数多く存在し、時折彼らの経験を聞くことができるが、それによれば、最初の興味はアニメやドラマがきっかけだが、その後さまざまなリソースを介して興味、関心が生まれるようになるという。例えば、アニメをきっかけに日本語によるCDのドラマを聞くようになった例では、アニメの多重放送で日本語を聞いて中国語と違った抑揚をもつ日本語に興味をもつようになる→そのうち特定の声優の声や話し方が好きになる→アニメ番組の後ろに出てくる声優の名前を覚えインターネットで検索する→web上で漫画をドラマ化したものを聞き、発売されるCDの宣伝を見てCDを買うようになる→画像がないため、一生懸命会話やナレーションを聞くようになる、と言う。また、ドラマから日本語学習につながる例では、ドラマがおもしろいと思う→テーマソングと歌手が好きになる→この歌手の歌う歌をもっと聴きたいからCDを買う→歌を歌いたいからCDについている歌詞を読めるようになりたいと思う→歌の意味を知りたいから教科書のロー

マ字を頼りに、CD を聞きながらひらがなを覚えるようになる→コンサートに行く→もっとこの歌手のことを知りたいからホームページを見る→それで本格的に日本語の学習をするようになった、というケースもある。さまざまな学習リソースとの接触は、このように日本語への興味、学習動機を生み出している。

b. 日本のモノ、人、コトについて情報、社会文化理解

日本語がわからないレベルでは、翻訳、字幕、吹き替えに頼りながらも、アニメや漫画、小説といった物的リソースに触れることが、日本の社会文化事情を理解する機会となっている。A さんの事例では、「ちびまるこ」のアニメを見て食卓に皿が並ぶ様子が台湾と違うと気づき、B さんはインターネットを介して日本の伝統文化についての理解を深めている。また、C さんは漫画『島耕作』を読んで日本のサラリーマン社会について理解を深め、友人の話や日本の製品からも、日本のモノ作り文化について自分なりの理解を形成している。インタビューでは、これ以外にも若者を中心に、映像の魅力を持つドラマやアニメが日本の生活文化理解に役立っている例に多く出会った。しかし、文化と呼ばれる概念は、こうした生活文化から日本人の精神性、作品に表象される世界まで幅広く、その解釈も多面的である。J 君の母親が日本の教科書にある日本の文化、歴史の知識を教えることは難しいと述べているように、日本の社会事情や歴史の知識を知った上で理解する文化は、テレビやインターネットによる表層的な情報からは理解されにくい。しかも、メディアや特定のインターネットサイトを介して得られた情報には偏りが多い。筆者が授業で大学生たちに「私が日本について知っていること」と題したテーマで話をさせた時に、話題性のある事件から発展した一面的な情報、ステレオタイプ化した見方が目立ち、驚いたことがある。情報源を聞くと、ほとんどがインターネット、テレビ、新聞であった。巨大な資本が投じられて流される情報や商品化された漫画やドラマとの接触は、一面的、表層的な社会文化理解にとどまる恐れがあり、注意を要する。一方、年長者や一定の日本語レベルに達した学習者は、日本語を介した情報理解が可能であり、個人の趣味や関心から読む本や新聞、ニュース、また知り合いの日本人とのつきあいの中から、社会文化理解につながる情報を得ている。

c. 文字、単語、文法理解、日本語全般の学習

B さんの事例は、授業を受けていなくても興味があれば、市販の教科書や身の回りにいる人的リソースを頼りに、文字の学習を行うことができることを教えてくれる。また CD、ゲーム、ドラマ、漫画などを介して、文字だけではなく、単語、文法も学習できることがわかった。特に単語は、わからなければ人に聞けるし、辞書を見れば答えがみつかるので、比較的容易に自己学習が進められる。さらに若者に人気のあるドラマにおいては、映像のある素材で日本語の単語や言い回しを理解することができるし、字幕がついていれば、中国語と対照しながら単語や文法を学習できる。また、B さん、D さん、E さんのように、友

達にわからないところを聞かれて教えるケースもあるが、教えるという行為は日本語の構造を再認識し復習する機会になることから、日本語学習の機会になっていると言える。さらに、実際の言語使用場面やテレビ、インターネットで触れる日本語は、教科書とは違う文体や話し方、方言など言語の多様性に気づく貴重なリソースとなっている。年少者調査の他の例では、母親が小学生の息子に男言葉を身につけさせるために、日本人男性がコーチをつとめるサッカーチームに入れているという例があった。多様なリソースは、多様な言語使用の実態を理解し学習するのに役立つ。

このように教室以外でも文字や文法、言語の多様性などさまざまな日本語学習が可能であることがわかったが、このことは言語の学習に教師が全く不要であることを意味するわけではない。言語構造の学習や技能を身につけるために必要な文型や単語の学習においては、ドラマやアニメ、漫画といった物的リソースによる学習例が少なく、これらの学習はむしろ、Dさん、Eさんの例にあるように、授業において教師によって導入され、その学習を補助する形で物的、人的リソースが使われていた。Iちゃん、J君の補習校における読み書きの学習も同様である。またAさんはゲームでカタカナを見ていても、教室でひらがな、カタカナを覚えることを強制されなければ、日本語の文字を知り、インターネットでキーワードを日本語で入力することはできなかつただろうし、課題やクイズがあるから家で一生懸命練習をした、という学習者の声もよく聞く。言語や言語知識を理解し体系的に学ぶこと、学習の強化という機能において、明示的な知識を与え学習の方向性を示すことのできる教師という人的リソースの役割は大きい。

d. 聴解、読解など受容技能の練習になる行為

さまざまな物的リソースの利用は、学習者が聴解、読解など受容技能を伸ばす手段となっている。例えば、読解ではインターネットを使った新聞やサイト情報、ゲームの攻略本、解説書、小説があるが、台湾の学習者の場合、漢字の意味がわかるので、日本語の既習度が低い学習者でも、ある程度の読解が可能である。例えばAさんは、まだ日本語を学習していない段階で、漢字とゲームの知識を頼りに、攻略本を類推しながら読んでいたし、インターネット情報も、写真やその他の情報を頼りに類推しながら読んでいるが、これに似たケースにはインタビューで数多くであった。インターネットのサイト情報は絵や写真情報が多いため、日本語力が低くても利用されやすいようだ。これらの物的リソースを効果的に生かせば、読解の技能の訓練が容易になることが予想される。一方、聴解は文字情報に頼ることができない分、読解に比べると困難なところがあるが、Bさん、Dさん、Eさん、Fさんは、ドラマやアニメ、CDドラマ、ニュース、インターネットの音声付ニュースを利用していた。インタビューでは他に、字幕を隠してドラマを視聴する、朝起きたら歯を磨きながらNHKやケーブルのチャンネルで10分でも日本語を聞くようにしている、などの例があった。これらは、興味や日本語のレベルの違いに応じて、学習者が自由に利用できるため、個のレベルの豊富な情報資源、社会文化理解に役立つインプットになっていると同

時に、日本語の言語処理を通じて行う読解、聴解技能を伸ばす有用な学習手段となっている。

e. 言語使用、通訳、日本語を手段として使う行動

チャット、掲示板、メールなどネットを介した日本語使用、現実のコミュニケーション、通訳における日本語使用は、いずれも人間関係やコミュニケーションの目的をもつ社会的状況を持ち、言語使用をすることで何かが達成されるため達成感も大きい。Dさんは、日本の大学生との共同実習という場のリソースに参加することにより、掲示板やチャットを介したコミュニケーションを体験し、日本の大学生が台湾に来てからは、共同実習を通して実際のコミュニケーションを体験している。Fさんは、日本に滞在した3年より、台湾で仕事をするほうが日本語を使用する機会が多かったと述べている。このように、コミュニケーションの目的を持つ場のリソースを利用すれば、海外においても言語使用の機会は少なくないと言える。Iちゃん、G君の通訳の機会もそうだが、Eさんの例にあったように、台湾に来る日本人観光客と話をする機会もある。また、Bさん、Dさん、Fさん、Gさん、Hさんの事例に、友人や姉妹など日本語を知っている人間の間で日本語を使用する話があったが、台湾人同士による日本語使用は、人に知られたいくない情報を語る便利さを有し、連帯感を生み出す機会にもなっているようだ。一方、Cさん、Dさん、Eさん、Gさんの事例にあったように、研修であれ、旅行であれ、日本へ行くという場のリソースは貴重な言語使用、自己評価、社会文化理解の機会になっている。ちなみに今回のインタビュー調査に先立ち行われたアンケート調査³⁵によれば、訪日経験のある人は高校生 16.7%、大学生は 34.7%、学校教育以外で 63.9%と、日本を訪れる人は年齢があがるにつれて多くなるが、金田(2005)³⁶によれば、この数値は他の調査国に比べても非常に高く、日台の盛んな往来を裏付ける結果となっている。インタビューの他の事例に、家族で日本に行った時に日本語ができる自分が通訳をつとめる、インターネットでホテルの予約を行う、といった日本語使用の例があった。

f. 能力、理解についての評価、自己評価、学習方法への気づき・評価

一般に能力の評価は、試験によってなされることが多い。例えば、Eさんは大学院を卒業する年に日本語能力試験2級を受けたが、合格できなかったことで、日本語能力の評価を知らされた。その後は、日本語能力試験や資格試験などのリソースが、学習目標の目安となると同時に、自己評価の機会になっている。しかし自己評価は試験以外の場でも起こり得る。例えば、Cさんのように現状の言語レベル以上の言語接触を経験して挫折感を感じる場合、Dさんのように日本人大学生との会話で自身の日本語能力に不安を感じるような場合がある。その一方で、Dさんのように劇の発表で喝采を受ける例や、J君のように通訳をしたり、まわりの人に質問をされた時に、解説したり教えてあげることで人に感謝され、自己の有能性を感じられるような例もある。挫折感にしても達成感にしても、これら自己評

価は、いずれも後に続く学習に影響を与えるという意味で重要である。また、日本へ短期研修にいった E さんが、帰国後聞き取りと会話を強化したいと思うようになった例や、日本語能力試験 1 級に合格してから国語辞典を使うようになった例は、自己評価が学習方法の変化に結びついたケースである。

一方、年長者グループの自己評価は複雑である。H さんは精力的に日本の人物伝や『文芸春秋』を読みこなすが日本語で書くことができないと述べ、G さんも日本語を流暢に話し、日本の友人たちとの交流も続いているにも関わらず、台湾語、北京語、日本語いずれも完璧ではないと自己評価をしている。日本統治時代は母語である台湾語使用が家庭内に限られ、戦後は日本語が禁止され北京語の使用を余儀なくされるなど、一貫した言語学習を続けることができなかったことが、こうした年長者の自己評価に影響を与えていると考えられる。こうした年長者の自己評価は外来語の学習を除けば、自身の新たな日本語学習につながることは少ないが、自分の知っている日本語を教えたり、日本語学習を肯定視する態度が、次世代の日本語学習に影響を与えていると思われる。

g. 好き、楽しいから行う行為、趣味、娯楽

ゲームやカラオケ、歌、読書などは、外国語であっても自分にとって興味があるものであれば十分楽しめ、しかもそれが意図しない学習効果に結びつく場合が多い。A さんはゲームが好きになり、漢字を頼りに攻略本を読みながらゲームを進めていくうちにカタカナの理解を容易にした。C さんは、好きな漫画を読むことが日本の社会文化理解に役立っており、歌を歌うことも単語学習に役立っている。F さんは同僚とカラオケに行ったり、いっしょにご飯を食べることで、野菜の単語を覚えたりその後の日本語学習に影響を与えたと思われる人間関係を築いていった。また G さんは料理雑誌を見ながら料理を作ることで、見慣れない単語に出会っている。今回の調査では他に、好きな関西出身のアイドルのサイトをいつも見ている関西弁が理解できるようになったとか、好きな歌手の CD をたくさん聞き、歌の意味を理解しながら文字や文法を覚えた、などの事例があった。いずれにしても好きで行う行為は、言葉の学習を容易にするだけでなく、自身の世界を広げるのに役立っていると言える。

h. 人との出会い、交流、ネットワークの構築

言語教育の目標が、ネウストプニー(1995)の述べる、異なる文化背景の人々との相互行動だとすれば、特に人的リソース、場のリソースは多くの人との出会いを可能にする有効なリソースだと言える。調査の他の例でも、わからないところを教えてくれる学習の協力者や言語交換の相手と知り合えた、といった事例があったが、こうした人々との出会いは、さまざまな交流や相互行動に発展する可能性を秘めているという点で、かけがえのない人間関係を築いていると言える。E さんに地震の時に安否を気遣ってくれる日本の友人がいたというのは、どれほど外国人に対する心の距離を縮めてくれたことだろう。とかく相手が

外国語話者ということだけで、人は容易に心の壁を作りやすく、メディアによる一方的な情報でも相手に対する固定観念を生みやすい。そうなれば相互行動もできにくい。年長者Gさん、Hさんと昔のクラスメートとの交流は、植民地で差別的な教育がなされたとは言え、同じ空間、時間をともに学んだ仲間の絆は深く、友人が単に学習を手助けする人的リソースにとどまらない貴重な財産となっていることを教えてくれる。同様の事例は、年少者グループIちゃんの日本の小学校への体験留学で生まれた子供たち同士の交流、Dさんの日本の大学生との共同実習後の交流にも見られる。

7. 教育への示唆

以上述べたように、学習者は人、モノ、場の学習リソースとの接触を通してさまざまな相互作用を果たし、個々の学びを形成していることがわかった。教師はこれらの知見をどのように教育に生かすことができるだろうか。

学習者の学習目的や学習機関の違いにより教育内容は異なるが、教師はまず、学習リソースとの接触が豊かな学習の機会になっている現実を理解する必要がある。教師は教材を熟知し専門的に学習のデザインをしているように見えるが、それらが学習者の学習に役立っているとは限らない。学習者は何も知らない存在で、教師が授業で知識や技能を教えることで学習が成立するのだと考える学習観から我々は解放されなければならない。学習者は自らの興味と関心から、生活の中にある環境と能動的に相互交渉を進めているのだ。

しかし、学習リソースによる学習がどれほど豊かなものであっても、授業の位置づけが否定されるものではない。逆に授業と教師に求められる役割はますます明確になったとも言える。インタビューの中では、Dさん、Eさんが高校、大学の第二外国語の授業で、学習したものが少ないと述べているが、一方で同じDさん、Eさんの事例に、教師が課題を出したり、一定のレベルを提示し、学習者にそのレベルに合うように自己学習を求める他の授業の例も紹介されている。教師が何をどう指示するかによって、学習者の学習が深められ、広がりをもつものになり得るかが決まる。教師は授業において、学習者が何をどこまですべきか、学習の道筋を明確に示さなければならない。その上で、学習リソースを有効に活用するように学習者に教えることである。例えば、インターネットで資料を探させたり、CDを自宅学習にして簡単なクイズをするというやり方は、これまでもやられているが、今後も積極的に取り入れるべきである。また、既に述べたように、台湾の学習者の場合、日本語の既習度が高くなくても、漢字や写真を手がかりに文章を類推しながら読んでいる状況があることから、例えば、初級のクラスで文字や簡単な文法を教え、辞書の引き方を教えたら、早い段階でインターネットのサイトで何かを読み取ってくるような宿題を課すことは可能である。こうした課題は、自律学習に向けた姿勢を養うだけでなく、教師が授業を効率的に進める上でも役にたつ。さらに、リソースが複合的に関係する構造をもつ場のリソースを授業に組み込むことは、学習の機会をさらに広げることにつながる。

会議や交流の場における通訳や情報提供も、学習者にとって社会的に自己の有能性を感じられる場のリソース利用であり、奨励していきたい。

最後に、個々の学習リソースへのアクセス、相互作用によって得られたものをより複合的、精緻なものにするために、共同学習としての授業の必要性を挙げたい。既に述べたように、メディアに支配された情報は一面的な見方を生じやすく、自分の関心だけでこれを理解していると独りよがりの解釈に陥りやすい。複数の人間がさまざまな資料をもちより、討論を通じて複眼的な視点を形成していくこと、内容を掘り下げていくことは、授業のような場でこそ可能であろう。

8. 課題

台湾の日本語学習者のまわりにどのような学習リソースがあり、どのような相互作用が生まれているのかを見てきた。学習リソースは、歴史的、社会的、文化的な背景をもつが、これらの多様な学習リソースとの接触は、実に多様な学習機会を生み出していることがわかった。言葉の学習に限らず、学習者たちのまわりには仕事や勉強、人や娯楽を通して日本語を使う世界が存在しており、その世界との相互作用が個々の学びを助け、人を豊かにしている。この豊かな学びを形成しうるリソースを教育に生かさなない手はない。今後は、これらのリソース利用をどのように教育、学習支援に位置づけていくべきか、具体的な方法を探り、検証していかなければならない。その場合、教師がどのような役割を果たしていくべきかを、合わせて見ていく必要がある。

尚、本調査では学習者の具体的な学習リソース利用の一端を見ることができたが、何をどのように利用して学習をしているのか、そこに教師がどのように関わっているのか、に関して、さらに継続調査をしていく必要があると感じている。その際、調査分析の方法論については再考を要する。まず、学習とは何かを再定義し、学習行動の細分化をする必要がある。その上で特定の学習行動について詳しく調査分析をしていかなければならない。また、学習行動を触発する学習リソースと個々の学習者要因の関係も、詳しく調査分析していく必要がある。

注

¹ 1895年～1945年の日本の植民地統治時代に初中等教育、高等教育を受け、一部の人は現在でも日本語を流暢に話す。

² 父親が台湾籍、母親が日本籍をもつ家庭の、小学校から中学校までの生徒。生徒たちは、台湾の小中学校に通っており、家庭内では基本的に日本語と中国語の二言語を併用している。

³ 本調査でとりあげる年少者グループは母親が日本人である点、年長者グループは植民地時代に学校教育を受けたという点で、他の調査グループと異なる。

⁴ 田中・斉藤(1993)p. 45

⁵ 本稿では、人とモノの存在するコミュニケーション空間、システムという意味で「社会

- 的リソース」より「場のリソース」の名称が適当だと考え、この名称を採用する。
- ⁶ 木下は「教室コミュニティという考え方からすれば、先生からだけでなく、同級生からも学べる。自分より劣るように見える同級生からも学ぶものがあるという態度の育成も重要である。」(p. 21)と述べている。
 - ⁷ ビジネスや学術交流など実質行動を指す。
 - ⁸ ネウストプニーは、相互行動に必要な社会及び文化についての知識として、日常生活、家庭、交友、教育、職業、公的生活、サービス領域を挙げている。(p. 109)
 - ⁹ 反日蜂起した台湾人によって日本人教師が殺された芝山巖事件(1896)や、日本統治に抵抗した原住民高砂族が蜂起して戦った霧社事件(1930)など。
 - ¹⁰ 黄(1995)p. 96
 - ¹¹ 1947年台北市で闇タバコを販売していた老婆の射殺をきっかけに起こった国民党政府や軍に対する民衆の抗議行動。
 - ¹² 酒井(2001)は、こうした人々を「日本語人」と呼んでいるが(p. 211)、親日と言われるのは、戦後の支配者である国民党政府に対する屈折した思いで日本を懐かしむのであって、植民地統治を肯定するものではないとも述べている。(p. 203)
 - ¹³ 財団法人交流協会(2001)
 - ¹⁴ 中華民国交通部観光局統計資料 <http://202.39.225.136/indexc.asp>
 - ¹⁵ 台湾で発行されている「聯合報」(2005年11月22日)
 - ¹⁶ 浜田らは学習リソースという言葉を使っていないが、浜田らがとりあげた学習環境は本稿の学習リソースの定義と重なるところが大きい。
 - ¹⁷ 佐伯は、「学習者個人が頭の中に特定のまとまりをもった知識や技能を獲得すること」という従来の学習観に対して、学習とは、知識も感情もある「わたし」が変わり、具体的な学習への取り組みが変わることであり、自分探し、アイデンティティの形成である、とする新しい学習観を提唱している。(pp. 8-9)
 - ¹⁸ 佐々木(2002)は、日本事情としての「文化」として日常生活、一般教養、専門知識、大衆文化を含めた所産、知識としての文化及び伝統文化、精神文化を挙げている。
 - ¹⁹ 映画、コンピューターを利用した社会文化理解、日本語交流については、吉村・宮副(2005)、宮副・吉村(2005)に詳しい。
 - ²⁰ まわりの人に対して母語による日本語の文法や単語の解説を行うことも自身の学習の確認、復習となるという意味でcに分類する。
 - ²¹ 結果的に社会文化理解を伴うことが多いが、外国語としての日本語の情報処理を伴いつつ技能の習得を目指すような行為の場合、この分類に入れ、母語、日本語に関わらず純粹に情報理解を目的としている行為はbに分類する。但し、bとdを厳密に区別することは難しい。
 - ²² 学習としての位置づけではないが、結果的に意図しない学習行動につながることが多い。
 - ²³ 調査では筆者を含めた10名の調査者が、2004年7月から2005年12月にかけて、年少者(保護者)15名、高校生25名、大学生38名(うち日本語専攻22名、非専攻(日本語以外の専攻)16名)、社会人24名、年長者25名、合計127名にインタビューを実施した。インタビューの時間は30分から1時間。本稿では、このうち比較的リソースとの接触が多い学習者を中心に取り上げた。
 - ²⁴ 最初のインタビューの後、詳細を聞く必要がある場合は追加インタビューを行った。
 - ²⁵ この学校では選択制の第二外国語として週に2時間、日本語の授業がある。普通高校は受験への影響を考慮して第二外国語の授業は通常2時間が多いが、職業高校で日本語を専門とする学校では週に20時間あるところもある。
 - ²⁶ ティーチング・アシスタント。この学校では日本籍の留学生、台湾籍の上級生がアルバイトでTAとして後輩の質問を受けつけている。
 - ²⁷ 本稿では、地域方言、社会方言、レジスター、文体の違いなど一定の特徴をもつ言語ス

タイトルを言語変種という名称で用いる。

- ²⁸ 財団法人言語訓練測驗中心 (<http://www.lttc.ntu.edu.tw/>) で行う外語能力試験 (Foreign Language Proficiency Test)
- ²⁹ 閩南語
- ³⁰ 日本人は小学校, 台湾人は一部の人を除いて公学校, 原住民は蕃童教育所と, 分けられていた。
- ³¹ 高雄市が運営する施設で, 年長者が無料で健康相談を受けたり, 語学や絵画などを習うことができる。
- ³² 筆者がインタビューで何回かお会いしていた際, 丁重な手紙を1,2度いただいたことがあるが, 日本語による手紙は, 教育を受けた日本人となんらかわるところがなかった。ここでは日本語で本を執筆するのは難しいという意味だと思われる。
- ³³ 台北を中心とした, 台湾人男性と結婚した日本人女性の会で, 現在150名以上の会員がいる。
- ³⁴ 文科省から派遣のある正式な補習校と違い, 「なでしこ会」のメンバーがボランティアで週末に授業を運営している。
- ³⁵ 国立国語研究所(2005)
- ³⁶ 金田(2005), p. 24

参考文献

- 稲垣佳世子・波多野誼余夫(1989)『人はいかに学ぶか』中公新書
- 石黒広昭(2004)「学習活動の理解と変革にむけて—学習概念の社会文化的拡張—」『社会文化的アプローチの実際』北大路書房, pp. 2-32
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学界第70回国際学術大会 Proceedings』, pp. 486-492
- 小河原義朗・金田智子・笠井淳子(2005)「海外における日本語学習者の学習環境と学習手段」『日本語科学』18, pp. 111-123, 国立国語研究所
- 金田智子(2005)「学習者の学び方から学ぶ—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究もとに」『台湾日本語文学会 2005 年度日本語文学術研討会会議手冊』, pp. 22-29
- 国際交流基金日本語国際センター(2003)
(http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/index.html)
- 国立国語研究所(2003)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究—タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2004)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究—韓国アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2005)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究—台湾アンケート調査集計結果報告書』

- 小西正恵(1998)「3. 動機・態度」『第二言語としての日本語学習及び英語学習の個別性要因に関する基礎研究』平成8年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
- 佐伯胖(1995a)「文化的実践への参加としての学習」『学びへの誘い』, pp. 1-48, 東京大学出版会
- (1995b)『学びの構造』東洋館出版社
- (1995c)『「学ぶ」ということの意味』岩波書店
- 酒井亨(2001)『台湾入門』日中出版
- 佐々木倫子(2002)「日本語教育と「文化」概念」『21世紀の「日本事情」』第2号, pp. 146-155, ころしお出版
- 財団法人交流協会(2001)『台湾の経済事情』
- 田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店
- 寺村由佳・佐久間治夫(1995)「事例研究：人的リソースの利用状況—中国帰国生徒の場合—」『中国帰国者定着促進センター紀要』, pp. 128-141
- トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第7号, pp. 17-29, 国際交流基金日本語国際センター
- 西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実際」『日本語教育』100号, pp. 7-18
- (2001)「状況的学習論の視点」『日本語教育学を学ぶ人のために』pp. 105-119, 世界思想社
- J. V. ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 林さと子(1998)「第二言語としての日本語学習及び英語学習の個別性要因に関する基礎研究」平成8年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
- 林正寛(1997)「多言語社会としての台湾」『多言語主義とは何か』pp. 34-47, 藤原書店
- 浜田麻里(2004)「研究の理論的枠組み」『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, pp. 3-10
- 文野峯子(2004)「日本語学習者と環境との相互作用に関する研究」平成13年度～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 黄宜範(1995)『語言, 社会與族群意識』文鶴出版有限公司
- 宮副ウォン裕子・吉村弓子(2005)「ヴァーチャル教室の「日本の社会・文化」にかかわる意見の調整—日港大学間の電子メール交換活動の実践から—」『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』2, pp. 281-292, 香港日本語教育研究会
- 吉村弓子・宮副ウォン裕子(2005)「ヴァーチャル教室における日本語交流—電子メール交換授業の進め」『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』2, pp. 172-181, 香港日本語教育研究会

羅曉勤(2005)「学習者のモチベーションを研究する」西口光一編著『文化と歴史の中の学習と学習者』pp. 189-211, 凡人社

劉志明・王甫(2002)「中国, 台湾における日本語観, 日本観の比較」『東アジアにおける日本語観国際センサス』pp. 89-112, 国立国語研究所

日本人との接触が日本語学習に及ぼす影響に関する一考察

タナサーンセーニー 美香(アサンブション大学)

1. はじめに

2001年に実施された「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究：タイ(バンコック)アンケート調査」(以下、「バンコックアンケート調査」)は主にバンコック在住の日本語学習者が接触する物、人、機会、そして場所といった学習環境に関して学習者の接触状況が幅広くまとめている。対象学習者の層も中等教育、高等教育、学校教育以外と多様である。学習環境に着目し、日常の教授活動に役立てたいと願う教師にとって、巨視的な調査結果は全体を把握するのに参考になるものである。しかし、教師が教育現場で学習環境を考慮し学習活動をデザインしようとしたときに、「バンコックアンケート調査」から得られる情報だけでは学習者一人一人の日本語学習に環境がどのように関わっているかを捉えるのに限界を感じる。実際の学習者は人、物、機会といった異なるリソースを併用したり、一つのリソースから他のリソースへと結びつけたりしながら活用していると思われるが、量的調査ではリソース相互の関連や広がりまで浮き彫りにするのは難しいからである。また、現場によって関心の対象となる対象者やリソースも異なってくる。

「バンコックアンケート調査」を現場に活かすためには、調査対象を現場教師が日頃接する学習者に絞り、また学習者に最も関連が深く重要だと思われる学習環境に焦点を当てた質的調査を補足するのが望ましいのではないだろうか。授業や試験など日常業務に忙殺されがちな教師が実施可能な調査の範囲は限られるが、それでも、現場との関連性が深ければ学習環境に関する新しい何かが得られるかもしれない。そのような観点から筆者は、タイの私立大学で日本語を学ぶ筆者自身の学生を対象として、学生が教室の外で接触する日本人を人的リソースと捉え、接触の現状とその接触が学習に及ぼす影響に関する調査を試みた。本稿はその調査の中間報告である。調査は継続中ではあるが、現時点まで調査から得られたことを元に、学習環境に関する筆者の見解を述べてみたい。

2. 背景

調査の焦点を教室学習外での日本人との接触に当てたその第1の理由は、母語話者との接触は外国語習得において重要な役割を果たすにもかかわらず、海外ではその機会が限られており、そのことが日本と海外での学習効果に決定的な差をもたらしているのではないかと考えたからである。第2の理由としては、「バンコックアンケート調査」において「日本語学習のために現在使っているもの」としてはあげられていなかったにもかかわらず、「今後充実を希望するもの」として日本人との接触を求めていたことがあげられる¹⁾。日頃使っている物のより一層の充実を求めるのは自然だが、日頃触れることのない、しかも、解説書や辞書などの勉強道具ではないリソースの充実をあえて求めているという点に、タイの学習者も日本人との接触を学習リソースの一つとして重要視しているのではないかと興味を抱いた。そして、日本

人と接触を持つことが、学習にどのように関わっているのかという点において学生の現状を調べてみたいと考えた。

日本人との接触を教室活動やカリキュラムに取り込もうという試みはいくつもなされている。最近では、2005年度日本語教育学会秋季大会で公開された「テレビ会議で行う異文化ディスカッションの方法」WEB用試作版教材(太田・三浦, 2005)、学習者の主体的自律的な学習を支援するためのビジターセッション、ランゲージパートナー、ティーチングアシスタントを効果的に授業に取り込む取り組み(森, 2005)、ホームステイや現地在住の日本人コミュニティを活用した試み(鈴木, 2004 井村, 2000 深澤, 2005)、日本の提携校の学生とのEメールによる交流を取り入れた授業(鳥居, 2004)、そしてインターネットフォーラムやビデオカンファレンスを使った授業(加納, 2004)などが報告されている。

鈴木(2004)、井村(2004)、鳥居(2004)、加納(2004)、深澤(2005)の報告に共通して見られるのは日本人と接触したことが学習者の自信に繋がったということである。また、楽しさ、日本語力の上達、異文化理解の促進などに影響がみられたという報告も多い。森(2005)は教室の外での日本人との接点は、存在はしても教室の中に結びついていない現状を指摘し、それらの接点を教育の中に取り込むためのネットワークの構築、学習環境のデザインを提言している。このような報告から、海外の学習者にも訪問、面会、インターネットやビデオなど、日本人との接触手段が多様であること、また学習者に大きな影響を及ぼすことがうかがえる。

こういった活動報告は、創造性豊かで学習者にとっても教師にとっても魅力的な学習活動をいかに企画し実施するかというヒントを得るのに大変有益である。また、その活動に参加した学習者の反応には今まで見落としていたことに気付かされることが多い。例えば、鳥居(2004)が行ったアメリカ人学生と日本人学生の電子メールの交換による学習プログラムでは、アメリカ人学生は日本語で、日本人学生は英語でメールを交換することで、お互いが相手の書いた文書の間違いを自主的に訂正しだした例が紹介されている。これは学習言語の母語話者と接したことで、相手を人的学習リソースとして役立て始めた例だと思われる、興味深い。

しかし、ある環境でうまくいった活動が必ずしも別の環境でも同じ効果があるとは限らない。このような取り組みが自分の現場に効果的かどうかを考える際、教師は教室外での日本人との接触そのものが、自分の関わる学習者にどのような意義があるのかを考える必要がある。ところが、この点に関して活動報告はあまり参考にならないことが多い。というのは、活動報告の多くは、活動そのものに焦点が当てられ、ある環境下の学習者にその活動がどう効果的であったかという議論はあっても、学習者が活動を通して体験した母語話者との接触が学習にどのような影響を与えたかという議論をされることがあまりないからである。また、限定された学習活動の中で学習者の行動や反応を追っていくため、学習者が学習に自信を持ったり、楽しさを感じたり、意欲を高めたことは報告されても、どのような経緯を辿ってそうなったのか、またそのことが活動後の学習にどのように影響を及ぼしたかという点で論じられることも少ない。一つの学習活動に留まらない、もう少し広い範囲で日本人との接触と学習活動を捉えた研究があればと思う。

このような背景から、本調査は学習者が日本人と接する機会とその影響について、大学で行われた日本人との交流活動に参加した学習者を対象を絞り、しかし接触範囲をその交

流活動に限定せずに、彼らが持っている教室学習外での日本人との接触の機会と接触が日本語学習に及ぼした影響を調べることを目的とした。質的調査だけではなく量的調査も加えたのは「バンコックアンケート調査」によってバンコックの大学生の概観が把握できるとはいえ、調査が行われた2002年と2005年現在の状況は変わっていると思われたからである。教育機関特有の環境の影響も考えられるため、比較の意味でも改めてデータを取り直した。

3. 調査の経緯

筆者自身は現在タイの私立大学で日本語教育に携わっているが、母語話者との接点の無さが海外の学習者の大きなハンディであるという認識を持ってきた。そのため、教室に日本人を招いたり、日本人に関連が深い企業に見学に出せたりといった活動は積極的に取り入れるようにしてきた。2004年からはタイの夏休みに当たる3月から5月を利用し、学生を日本へ連れて行き、そこで本来ならタイで行うはずのサマーコースを日本の大学で開講できる機会に恵まれた。カリキュラム(シラバス、単位、時間数、試験)は全てタイの大学に準じている。学生にとっては教室の中は教師もクラスメートもタイにいるときと同じだが、教室を一步出れば、日本人学生に囲まれ、日本人学生と共に寮で共同生活をしているという点でタイとは大きく環境が異なるわけである。協力してくれた大学は龍谷大学で、教室を使わせてもらったキャンパスは滋賀県大津市にある。このサマーコースは2004年、2005年と2年間行ってきた。日本での滞在はいずれの年も、寮に1ヶ月、寮生活を終えてホームステイが5日程度である。参加した学生数は合計で39名になるが、現在は23名が卒業し、在学中の学生は16名である。

日本滞在中には日本人学生がチューター²として寮に住み込み、学生生活を支援してくれた。学習活動でも週1回の割合で行われた発表会や合同授業などで双方の学生が交流を持った。これがきっかけで2005年の8月に龍谷大学から日本人学生が海外友好セミナーでタイを訪れることになり、9日間のセミナー日程のうち1日を使ってキャンパス内で交流会を持った。日本からの参加者は学生が66名、随員4名、タイ側は日本でのサマーコースに参加した16名をはじめ、3、4年生を中心に70名程度である。当日は午前10時から歓迎式、小グループでのキャンパスツアー、昼食、全体でゲーム、写真撮影、午後4時に見送りというプログラムであった。

交流会の1ヶ月前には、筆者が担当するBusiness Communication in Japanese I(3年)の63名の学生が文通を希望して66名の日本人参加者に自己紹介プロフィールを送っている。交流会の時点ですでに数名の学生が日本人学生との文通を始めていた。彼らにとっては、交流会は文通相手と初めて会う機会でもある。また、日本人学生の中には先の日本でのサマーコースで親しくなっていたチューター達も含まれている。交流会に参加したタイの学生のうち、サマーコースの参加者にとっては日本で親しくなった学生との再会の機会でもあった。交流会への参加は学科全体に呼びかけ、希望者は誰でも参加できるようにした。文通交流を行ったBusiness Communication in Japanese Iの学生と、ちょうど交流会の日に授業に当たっていた同じく筆者が担当しているJapanese IV(3年)の学生には授業の一環として交流会参加を義務付けた。ただし、交流会は平日に1日かけて行われたため、

学生の時間割の都合によって、空いている時間帯だけの参加を許可した。希望して参加した学生も時間の許す範囲での参加であった。

本調査はこの1日交流会に参加した学生を対象としている。しかし調査の目的はこの交流会そのものが学生にどのような影響を及ぼしたかを調べることではない。参加した学生にとって交流会は日本人との接触の機会の一つに過ぎず、その機会の意味は学生によって異なり、参加に至った背景も一律ではない。この交流会で生まれて初めて教師以外の日本人と接したという学生もいれば、数多く日本人の知り合いがいるが、この交流会でまた一人増えたという学生もいる。また、日本から帰ってきて久しぶりに日本人に会ったという学生もいる。自分から進んで参加を希望した学生もいれば、クラス活動として参加を義務付けられて来た者もいる。しかし参加者全員が少なくとも1度は教師以外の日本人と教室学習以外で接触した機会を持ち合わせたわけである。この交流会は、教室内環境は似ているが教室外では様々な日本人接触環境を持つタイ人学習者が、たまたま一つの接触の機会を共有したという意味で、日本人との接触環境とその接触が現場の学習者に及ぼした影響を調べる調査の対象者を抽出するには格好の場であると思われた。参加したタイ人学生には①教室外で教師以外の日本人との機会がどのくらいあるのか、②どのようなやりとりをしているのか、③そのやりとりの経験が学習にどのような影響を及ぼしているのかの3点に関して、質問票と聞き取りで調査を行った。また、学習者自身に影響を内省してもらうためには接触からある程度の時間が必要と考え、調査は交流会から3ヶ月経過した2005年12月に行った。質問票では47名、聞き取りでは21名の回答が得られた。

4. 質問票による調査集計結果と分析

4.1. やりとりの機会

結果を集計分析するにあたり、学生を日本人との接触経験別に6つのグループに分けた。まず、訪日経験の有無で大きく二つに分け、訪日経験があるグループを訪日の形態別に「サマーコース(夏)」、「滞在³(滞)」、「旅行(旅)」の3つに、訪日経験のないグループは教師以外の日本人との接触経験に関して「多い(多)」、「少ない(少)」、「無い(無)」の3つのどれに当てはまるか自己申告してもらった。各グループの人数は次のとおりである。

表1 接触経験別回答者内訳

	夏	滞	旅	多	少	無	計
質問票	14名	4名	5名	5名	11名	8名	47名
聞き取り	9名	2名	2名	3名	1名	4名	21名

訪日経験がある学生は「夏」、「滞」、「旅」の23名(聞き取りでは13名)、訪日経験の無い学生は「多」、「少」、「無」の24名(聞き取りでは8名)である。「バンコックアンケート調査」に比べて訪日経験者が多い⁴のは日本でのサマーコース開講など、教育機関の環境によるものと思われる。

交流会の場で学生達はどの程度日本人学生とやりとりができたのだろうか。交流会でどのくらい話す機会があったかという質問に「たくさん話す機会があった」と答えた学生は

訪日有 23 名のうち 12 名(夏: 9 名, 滞: 1 名, 旅: 2 名)で, 訪日無 24 名のうち 9 名(多: 5 名, 少: 3 名, 無: 1 名)であった。接触体験が無いにも関わらず、「たくさん話す機会があった」と答えた 1 名(ネーン⁶)は聞き取りで文通相手を得ていたことが分った。彼女は文通相手と対面したことで話す機会が多く持てたと思われるが, 日頃接触体験の少ない他の学習者は, 初対面の日本人とすぐにたくさんのやりとりは交わせなかったと感じたようだ。訪日経験がなくても日頃から多くの接触体験を持っている 5 名が全員, 交流会でやりとりの機会を多く持てたと考えていることから, 接触体験の頻度が初対面の人と話せるかどうかに関わりがあるとも考えられる。

しかし, 初対面の人と多く話せるかどうかと, 関係を維持したり発展させたりできるかは別である。物怖じせず, 社交的な性格の学習者なら初めての人にも声をかけやすいが, 必ずしもやりとりを継続できるとは限らない。その場限りで終わっている可能性もある。そこで, 現時点で教師以外にやりとりができる日本人がいるか調べてみた。相手がいると答えた学生は全体の 74%にあたる 35 名で, 訪日有 20 名(87%), 訪日無 15 名(63%)であった。内訳は表 2 のとおりである。訪日経験がある学生達は, ない学生に比べて接触を維持しやすい環境にあるようだ。しかし, 訪日経験がない学生にも 6 割以上に教室以外に接触できる日本人がいたことは筆者にとって驚きであった。

表 2 教師以外に現在やりとりができる日本人の有無 (質問票回答者 47 名)

	夏	滞	旅	多	少	無	計
いる	12 名	3 名	5 名	4 名	8 名	3 名	35 名
いない	2 名	1 名	0 名	1 名	3 名	5 名	12 名

現在やりとりをする相手と出会ったきっかけを調べてみると, 交流会で出会った相手と現在もやりとりがあると答えた学生は 16 名で全体の 34%であった。内訳を表 3 に示した。参考のため, 交流会でたくさん話す機会があったと答えた学生数を下段に示す⁶。

表 3 現在やりとりをしている相手に出会ったきっかけ (質問票回答者 47 名)

	夏	滞	旅	多	少	無	計
交流会	8 名	0 名	1 名	3 名	2 名	2 名	16 名
	(9 名)	(1 名)	(2 名)	(5 名)	(3 名)	(1 名)	(17 名)

これを見ると, やはり 1 度会ってたくさん会話を交してもその交流が 3 ヶ月以上続くと限らないようだ。おおむねどのグループも交流会で「日本人学生とたくさん話せた」と答えた人数に比べ, 「現在も交流会で会った学生とのやりとりが続いている」と答えた人数が減少している。やりとりが続いている学生は必ずしも交流会のときにたくさん話せたわけではないので, たくさん話す機会があったことと関係が継続していることとは相関が薄いと思われる。交流会以前に接触体験がない「無」のグループで, 前述の文通相手と出会い交流会で話す機会を多く持ったネーンは, 現在やりとりがあると答えた 2 名の中には入っていない。話す機会が少なかった学生でも関係を続けるのに成功した学生もいたわけである。その差はどこにあったのだろうか。一度の出会いが継続した関係に繋がるか否かにどのような要因が関わるかに関しては聞き取り調査の分析で詳しく触れる。

4.2. やりとりの形態

学生達は教室外でのやりとりをどのように進めているのだろうか。まず、現在やりとりの相手がいると答えた 35 名について、やりとりをどのくらい日本語で行っているか調べてみたところ、やりとりの半分以上を日本語で行っている学生が 26 名 (74.3%) であった。

次に、やりとりの手段と話題である。現在やりとりの相手がいる 35 名を対象に最もよく使う手段をあげてもらったところ、1 位は「チャット」で 17 名 (48.6%)、2 位は「会って話す」で 6 名 (17.1%)、3 位は「電話」と「電子メール」が共に 3 名 (17.1%) であった。また、よく使う手段を三つあげてもらった中で最も頻度が高かったのは「チャット」30 名 (85.7%)、2 位は「電話」と「電子メール」が共に 21 名 (60%)、3 位が「会って話す」13 名 (37.1%) であった。2002 年に行われた「バンコックアンケート調査」ではチャットについての調査項目がなかった⁷が、2005 年の現在、筆者の学生達には「チャット」は最もよく利用され、85%の学生にとって馴染みのあるやりとりの手段であることが分かる。

話題に関しては訪日経験の有無で多少変わることが予想されたので、最も多く話している話題を 3 つ選択 (選択肢にないものは自由記述) してもらった。その結果、訪日有の 19 名と訪日無の 15 名、合計 34 名から有効な回答が得られた。

表 4 やりとりの話題 (現在やりとり相手がいる 35 名中有効回答 34 名)

	1 位	2 位	3 位
訪日有 (19 名)	日常のこと (19 名)	勉強以外の日本語や文化のこと (13 名)	日本語の勉強のこと (11 名)
訪日無 (15 名)	日常のこと (15 名)	日本語の勉強のこと (11 名)	趣味のこと (8 名)
全体 (34 名)	日常のこと (34 名)	日本語の勉強のこと (22 名)	勉強以外の日本語や文化のこと (20 名)

全体の順位は「バンコックアンケート調査」と一致する⁸。「日常のこと」をあげた学生は訪日有・訪日無ともに 100%であった。続いて訪日有は「勉強以外の日本語や文化のこと」を 68.4%の学生が、「日本語の勉強のこと」を 57.9%の学生があげた。それに比べて訪日無の学生が 2 番目に多くあげたのは「日本語の勉強のこと」で 73.3%、次いで「趣味のこと」53.3%で、訪日組が 2 位にあげた「勉強以外の日本語や文化のこと」は 46.7%で 4 位であった。

やりとりの頻度に関しては訪日経験の有無による差はあまり見られない。おおむね週 1 回から月 1 回だが、毎日やりとりする学生もいれば半年に 1 回という学生もいて、個人差が見られる。

表 5 やりとりの頻度 (質問票回答者 47 名)

	毎日	少なくとも週 1 回	少なくとも月 1 回	少なくとも半年に 1 回	やり取りする相手はいない
訪日有 (23 名)	3 名	9 名	5 名	3 名	3 名
訪日無 (24 名)	2 名	6 名	5 名	2 名	9 名
全体 (47 名)	5 名	15 名	10 名	5 名	12 名

「毎日」と答えた学生は全体の10.6%、「少なくとも週1回」が31.9%、「少なくとも月1回」が21.3%、「少なくとも半年に1回」が10.6%、「相手がいない」と答えた学生は25.5%である。

4.3. やりとりが及ぼす影響

影響に関しては、現在のやりとりの相手の有無に関わらず、過去の体験も含めて47名全員に答えてもらった。どのような影響があったかは聞き取り調査の分析結果と合わせて述べることにする。調査票では先行研究で影響が見られたとの報告が多かった①日本語そのものへの影響、②学習行動や意欲への影響、③文化や価値観に対する理解への影響の三つに分けて、学習者に変った点があったかどうかを問う形式にした。本調査では変った点を自覚すれば影響があったとみなし、自覚がなければ影響がなかったとみなす主観による自己申告の形を取った。表6は接触による何らかの変化を自覚したかどうかの結果である。割合で示されている数字は訪日有、訪日無、全体、それぞれの段の人数を全体とした比率である。

表6 日本人との接触から受けた影響の有無 (質問票回答者47名)

	影響があった	影響はなかった
訪日有(23名)	21名 91.3%	2名 8.7%
訪日無(24名)	22名 91.7%	2名 8.3%
全体(47名)	43名 91.5%	4名 8.5%

訪日経験の有無に関わらず、9割の学生が変化を自覚しているが、どのような点で変化を自覚したのだろうか。影響があったと思われる43名を対象に集計をまとめたのが表7である。

表7 影響が及んだこと (質問票回答者47名)

	日本語	学習行動, 意欲	文化や価値観に対する理解
訪日有(21名)	19名 90.5%	15名 71.4%	11名 52.4%
訪日無(22名)	15名 68.2%	11名 50.0%	15名 68.2%
全体	34名 79.1%	26名 60.5%	26名 60.5%

学習者自身が日本人と接触することで一番変わったと感じるのは、日本語力に関するようだ。ただし、影響の強さは訪日経験の有無で異なった結果が見られ、訪日経験のある学生が強く影響を感じている。日本へ行った経験がある学生のほとんどが1ヶ月あまりの短期プログラムであったが、その程度の滞在でも日本語に影響を与えるようだ。訪日経験のないグループは日本語への影響を自覚している学生の割合が若干減っているが、それでも7割近くの学生が、日本語が変わったと感じている。訪日経験のある学生は学習行動や意欲の変化の自覚が高く、文化理解については低い。逆に訪日経験のない学生は文化理解に関して7割近くが変化を自覚しているのに対し、学習行動や意欲は半数に留まっている。

5. 聞き取りによる調査結果分析

5.1. 聞き取り調査の概要

聞き取り調査は主に、調査票から得られた個々の学生の接触環境に関するデータを元に①初めて日本人と接触を持ったときの感想、②やりとり場面の様子、③日本人との接触を通して感じた変化などについて話を聞いた。協力してくれたのは調査票を配った学生のうち、面接の都合がついた学習者31名であったが、現在、文字化などの処理ができたものは21名分だけである。意図的に抽出したわけではなく、学生の都合の良い時間に面接の約束を入れ、早く面接を行った学生から順番に処理を行った。本稿の分析はこの21名を対象とする。聞き取りは学生の都合に合わせて個人から3人のグループ面談という形で行い、会話を録音した。使用言語は、学生の要求に応じて日本語か英語⁹を用いた。

質問票の分析では学生を訪日の有無や形態、接触の体験の程度によって6つのグループに分けたが、聞き取り調査では現在やりとりができる日本人の相手の有無によって質問内容が変わるため、それぞれのグループを表す漢字の後ろに有・無をつけてやり取り相手の有無を表すことにする。例えば「夏有」ならサマーコースで訪日し、現在やりとりができる日本人の相手がいる学生で、「多無」なら訪日経験はなく、タイで日本人との接触の経験が多いが、現在はやりとりができる日本人の相手がない学生という意味である。21名のグループ分けは表8のとおりである。

表8 聞き取り調査対象者グループ分け（聞き取り調査回答者21名）

訪日有 12名		訪日無 9名	
夏有 8名	ソム, ジューン, アーゲー, メイ, ボー, ナウ, ボーイ, ダーク	多有 2名	ノグ, アン
夏無 1名	リン	多無 1名	ショー
滞有 2名	キウイ, バード	少有 2名	モモ, ミング
滞無 0名		少無 0名	
旅有 1名	ノート	無有 2名	ベル, プン
旅無 0名		無無 2名	ラルフ, ネーン

5.2. 接触経験

学生に初めて日本人と日本語でやりとりをした経験について語ってもらうと、ほとんどの学生がそのときの恐さや恥ずかしさ、緊張感などの心理的な負担に触れる。しかしそれも始めのうちだけで、やがて緊張感や不安は消えていくようだ。サマーコースで日本へ行ったことがある学生は早くも3日、多くが1週間、遅くても3週間目には恐さはなくなったと話している。そして帰国して1年4ヶ月、または4ヶ月の時間を経て今度はタイで日本人学生に会ったとき、もう始めから恐さはなかったと話している。

全然恐くなかった。同じ年だし、同じ学生だったから¹⁰(ボー・夏有)

訪日経験のない学習者には、交流会で日本人学生に会ったときどう感じたかを聞いてみた。答えはそれ以前の日本人との接触経験によって違いが見られる。アン(多有)、ショー(多無)は恐くなかったと言うが、ミング(少有)、ネーン(無無)は次のように話した。

初めて龍谷の学生と会ったときは少し緊張した。でもそれは最初だけ。私は知っている人(日本人学生)が誰もいなかったし、どうやって話し始めたらいいか分からなかった。でも、寮を案内するぐらいからよくなった。緊張していたのは最初の30分ぐらいだけ。一度リラックスすると会話を続けるのが難しいとは思わなくなった。

(ミング・少有)

手紙で知り合っていたけれど、初めて会ったときは緊張した。何を話したらいいかもどう話したらいいかも分からなかった。簡単な文さえも出てこなかった。

(ネーン・無無)

ストレスの原因は恥ずかしさ(リン・夏無),自分の日本語に対する不安(ジューン・夏有),相手の話す日本語の速さ(アージー・夏有)などがあげられたが、学生達はそれを比較的短時間で克服している。心理的負担を軽くする要因は何であったのだろうか。

タイ人の友達が周りにいたので日本で話したとき恐くなかった。分からないとき助け合う。(ボーイ・夏有)

サマーコースで日本に行ったことがある友達が龍谷の学生を知っていた。その友達と一緒にいたからあまり恐くなかった。みんなフレンドリー。(ノッグ・多有)

ボーイやノッグが言うようにそばにタイ人の友人がいるということは大きな支えになるようだ。しかし逆にそれが原因で話せなかったという学生もいた。

タイでは友達に頼ってしまう。(リン・夏無)

タイでは、もっと日本語が上手な友達がいると自分は聞き役に回ってしまう。(ジューン・夏有)

また、タイと日本との環境の違いで話しやすさや話す意欲に差が出るという指摘もあった。

タイだったら、別にタイ語を使っても構わない。日本だったら周りがみんな日本人だから日本語を話したいと思うのもっと頑張りたいと思う。

(アージー・夏有, ボー・夏有)

日本だと、私が日本語がよく分からないことをみんな知っていて分かりやすく話してくれる。私の日本語力をよく理解してくれる相手となら安心して話せる。だから交流会では日本で友達だった人とは話せたけれど、新しい友達とはあまり話せなかった。日本語が上手じゃないのが恥ずかしいし、間違うのも心配だった。日本では英語を話す友達と困るからどうしても日本語で説明しないといけないけれど、タイでは日本語を話す必要はない。英語のほうが上手に話せるから。(リン・夏無)

このようにタイでは日本語を話す必然性が日本より低いため、日本語で会話を続けようという意欲が湧かないようだ。

リンはサマーコースで日本人学生と親しくなったにもかかわらず、現在やりとりの相手がない学生である。彼女のように機会に恵まれたのにそれを活かすことができなかった学生と、交流会で出会って現在も関係を維持している学生の違いは何であろうか。リンの話

からは、恥ずかしさや間違ふことへの恐れといった彼女の性格的要素が原因であることも考えられるが、他の要因はないのだろうか。

ダークはリンと同じ2004年にサマーコースに参加して、1年4ヶ月後に龍谷大学の学生に再会している。彼のとった行動を例に考察を進めていく。

(交流会では)新しい学生とたくさん知り合えたが、今でも連絡があるのはそのうちの二人だけ。交流会のときは10時に会って、1時か2時ぐらいでもう何でも話せるようになっていた。でも、友達になったというわけではない。ただ知り合っただけ。交流会が終わった後、ノックや他の友達と一緒に龍谷の学生が泊まっているホテルまで会いに行った。次の日は一緒に遊びに行って、その次の日は空港まで見送りに行った。一緒にいた時間は1日3、4時間ぐらい。空港で別れたときもまだ知り合い程度だったと思う。友達になったのは二人が日本に帰ってから。チャットとEメールでやりとりをした。ただEメールを送って、もらって、それを読んで、返事する。何回もすると慣れてきた。(ダーク・夏有)

ダークは交流会の時間内では、知り合うことはできても友達と呼べるほど親しくなることはできなかったと述べている。その場で知り合えても、そこからもう少し親密にならなければ関係を続けるのは難しいということであろう。交流会ではたくさん話す機会があったのに、その後関係が続かなかったケースが質問票の結果集計からうかがえたが、理由はこの点にあるらしい。同じようなことをコメントした学生は他にもいる。

交流会で会っても時間が短いので自分のことはなかなか話せない。(ナウ・夏有)
交流会は楽しいから友達になれる。でもその後連絡が必要。(メイ・夏有)

ダークの話やメイの指摘から考えると、知り合いから友人に関係を発展させる鍵となるのは、知り合った後連絡が取れる環境にあるかどうかであるようだ。しかし、日本に帰国してしまった相手と再会の機会を得るのはタイの学生達にとって容易なことではない。そこで、ダークはチャットや電子メールといったパソコン通信による手段を活用した。学生達がやりとりによく使う手段として「チャット」が1位、「電子メール」が2位にあげられていたが、これらの手段があればタイと日本の物理的な距離は克服できる。前述のリンはパソコン通信に関して次のように話している。

Eメールとかチャットはしない。コンピューターをあまり使わないから。コンピューターは勉強とかレポートを書くときしか使わない。(リン・夏無)

せっかくの訪日の機会を活かせず、帰国後日本人との接触環境を失ってしまったリンの背景には、恥ずかしがり屋で間違いを嫌う几帳面な性格に加えて、パソコン通信という手段に馴染みがなかったということが大きな要因として浮かび上がってくる。

5.3. 接触の状況

学生には手段に加えて、頻度や1回に費やす時間、話題など、日本人とやりとりを交わしている様子を具体的に語ってもらった。質問票で見られたとおり、チャットと電子メー

ルを使ったやりとりが最も多い。会う、電話するなどの手段でやりとりをしている学生もいるが、本稿ではパソコン通信に焦点を当て、それ以外の手段についての分析は機会を改めることにする。

タイの一般的なコンピューター環境は、日本語フォントを表示することができてもタイプができないという場合が多い。プログラムによっては日本語フォントが読めないものもある。学生は大学のコンピューターセンターや自宅、インターネットカフェなどでやりとりをしているようだ。日本語が使える環境かどうかで学生のやりとりの様子も変わってくる。日本語が使える自分のコンピューターを持っているモモ(旅有)やノグ(多有)は漢字交じりの日本語でやりとりをしている。ダーク(夏有)は自分のコンピューターがなく、大学のコンピューターは日本語がタイプできないので日本語が使えるインターネットカフェを利用して日本語でやりとりをしている。相手は日本語で送信してくるが自分が送るのはローマ字というソム(夏有)、相手の日本語は読めるがタイプができないので英語で送信しているベル(無有)など状況は様々である。チャットに費やす時間はそのときの状況によって異なるが短くて5分、長くて2時間、大体は30分から1時間程度のような。話題は「勉強した?」「ご飯を食べた?」といった生活に関する話題が多いが、進路、趣味、大学のこと、タイのことなど様々である。

チャットを好む学生は相手のメッセージにすぐ応答ができ、コンピューターの操作にも慣れているようだ。漢字変換も苦にならないというモモ(旅有)は相手からのメッセージで分からない言葉があるとウェブサイトの辞書を利用する。ノグ(多有)も画面の半分は辞書のサイトを開いたままチャットをしているが、辞書を参照することはとくにやりとりの妨げにはならないと述べている。また、日本人を辞書代わりにするという回答もよく見られた。

チャットのとき、二人以上の相手と別画面で同時に話すこともある。言い方が分からないときはもう一人の画面の人の答え方を真似たり、答えをそのままカット・アンド・ペーストしたりしている。(モモ・旅有)

「どういう意味?」と相手に聞く。(ソム・夏有、メイ・夏有、ポー・夏有、アグー・夏有、ダーク・夏有、ベル・無有)

写真を送り合い、すぐにそれを見ながら会話ができ(ナウ・夏有)、分からないときはすぐ英語で意味が聞ける(メイ・夏有)といった楽しさや手軽さが、チャットの魅力であるようだ。相手がチャットをしないため電子メールでやり取りをしたが、電子メールは返事が遅く、そのうち連絡が途絶えてしまった(ミング・少有)といった例もある。しかし、電子メールに利点を見出す学生もいる。

Eメールのほうがやりやすい。準備に時間がかけるから。だいたい30分ぐらい言葉を調べたりするのに時間がかかる。(アグー・夏有、ダーク・夏有)

相手の日本語のメッセージを短い時間で読み、応答しなければならないチャットとは違い、電子メールはじっくり時間をかけて準備することができる。手紙に似ているが手紙よりはずっと速く、また手紙ほど形式に頭を悩ますこともないというのが電子メールの特徴

といえそうだ。

このように、チャットや電子メールは単に物理的な距離感を埋められるだけではなく、辞書を使いながらもやりとりが進められたり、送信した画像が言葉で足りない情報を補ってくれたり、手助けが豊富で学生にとっては魅力的な手段であるようだ。

文通相手に交流会で出会う機会を得たネーンは現在相手との連絡は疎遠になってしまったが、その理由を彼女は次のように考察している。

文通相手とは最初は日本語で手紙を書いていたが、彼女が帰国した後は1ヶ月に1回ぐらい英語でEメールのやりとりをしていた。彼女からメールが来なくなって2、3ヶ月になる。多分、私が英語を使ったからだと思う。でも、私にとって日本語でチャットをしたりEメールを書いたりするのは大変。彼女とはチャットしたことはないが、もしチャットをしたとしても多分英語を使うと思う。もうすぐ卒業なので、時間がきたら彼女に日本語でEメールを送ってみたい。(ネーン・無無)

彼女の場合は相手が電子メールやチャットに馴染みがなかったという原因も考えられるが、ネーン自身は自分が日本語で電子メールを送っていたら状況は違っていたかもしれないと考えている。リン(夏無)と異なり、ネーンは普段、タイ人の友人とはチャットをしているし、日本語が使えるコンピューターもあるようだが、彼女の場合、壁になったのは日本語での入力であった。

リンやネーンのケースからも推測できるように、パソコン通信は単に日本語が使えるコンピューターがあるというだけでなく双方がパソコン通信に通じていなければうまく機能しない手段でもある。しかし、双方がパソコン通信に負担を感じない環境が整うなら、物理的距離を克服し、日本語のハンディを軽減してくれる便利な手段であるといえよう。

5.4. 接触が及ぼす影響

教室の外での日本人との接触が何にどのように影響を与えたかを聞き出すために、まず学生には外でやりとりをしてみてどうだったか、どんな違いを感じたかという点から話をスタートさせた。面接を重ねていくうちに、学生達が教室内の日本語使用と教室外の日本語使用に違いを見出していることに気が付いた。その違いが、日本語や学習意欲、自信等に関わっているように思われるので、まず学生達が述べた教室内外の日本語の違いについてまとめたいと思う。

5.4.1. 教室の中と外の違い

違いは大きく①言葉、文型、文体など言語そのものや、言語使用の4技能に関すること、②難しさ、分かりやすさ、面白さ、不安やストレスといった情意的要因に分けて分析した。言語の使用に関しては、

外は簡単な言葉で済むが中は丁寧な言葉や敬語がたくさんある。(ショー・多無)
中で話すのは先生で話題が限られている、外は何でも自由に話せる。(ナウ・夏有、
ボーイ・夏有、ベル・無有、ミング・少有)
外は練習、中は聞くだけ。(ノッグ・多有)

文法漢字を中心に勉強するが、外はモデル会話以上。(ネーン・無無)
中は書いたり写したりすることが多い。外は話すことが多い。(ポー・夏有)

全体的に、教室の中の学習はコントロールが強く、外は自由で主体的だと捉えるコメントが多かった。情意要因に関しては、難しさ、面白さや楽しさ、ストレスをあげた学生が多い。興味深いのは、一つの要因が別の要因の原因になっていて、さらに人によっては全く逆の捉え方をしているといった点である。

日本人は速く話す。私は考えるのがゆっくりだから付いていけない。クラスではゆっくり考えられるのでストレスがない。(アン・多有)
教室で先生と話すのは外で日本人と話すより簡単。分かりやすい人と話すほうがいいと思うが、外で話すほうがワクワクする。(ミング・少有)
教室の勉強は楽しいが、試験が嫌い。できるかどうか心配だから。(ジューン・夏有)
教室の中で聞いて分からないと不安になるが、外で分からなくても不安になったりがっかりしたりしない。先生には習ったことを全部知られているので、間違えるととても恥ずかしいが、外では私が何を習ったか相手は知らないので間違えても気にならない。(ブン・無有, ベル・無有)

教室の中では教師の話が分かりやすいのでストレスがない分、挑戦する楽しさがない。また、分かりやすいはずの教室の中で分からなかったり、試験で評価されたり、教師の前で間違えたりすることにストレスを感じるが、外ではそのような心配はないと捉えている学生が多いようである。これは教室や教師のあり方を考える上で非常に重要な点であるように思われる。

5.4.2. 日本語に関する影響

学生達は外での日本語使用と教室の中での学習をかなり明確に分けている。そこで、外での日本語使用が中の学習に及ぼす影響に留まらず、教室が外に及ぼす影響についても話を聞いた。

まず、外でのやりとりが教室の中に及ぼした影響としては、

知っている語彙や漢字が増えた。(ソム・夏有, バード・滞有, ポーイ・夏有, ラルフ・無無)
聞き取りがよくなった。(ベル・無有, ダーク・夏有)

といった肯定的な意見がある一方で、外で日本語を使っても、教室の勉強はあまり変わらないというコメントも見られた。

文法や漢字、言葉など少しは役に立っていると思うが、あまり変わらない。(アーク・夏有)
あまり日本語が上手になったとは思わない。まだ知り合って5ヶ月しか経っていないし、Eメールは月に1度ぐらいだから。(ミング・少有)

一方、学生のコメントには中から外への効果について触れたものが目立つ。

ホストファミリーと電話で話すとき、教室の勉強が役に立った(メイ・夏有)
お父さんのお客さんが来たとき、ビジネスコミュニケーションのクラスで習った電話の会話が役に立った。(ポー・夏有)
学校で漢字をたくさん勉強すれば、テレビ番組のサブタイトルが分かるようになる。(モモ・旅有)
文法や話し方を知らないと外で使えない。(ミング・少有)

教室の中で学んだ日本語が役に立つかどうかは、外の環境によると答えた学生や、教室の中の機能と外の機能をはっきり区別している学生もいる。

教室の中で勉強したことは友達と話すのにはあまり役に立たない。友達とは分かれば済むことだから。でも、アルバイト先の上司と話すときは分かるだけでは駄目。教室で勉強したことを使ってみるいいチャンス。(バード・滞有)
中はパターンや文法を勉強するのがいい。外は話すのがいい。(ポー・夏有)

このように学生達は外の日本語使用と中の学習は別のものだとの認識を持っているものの、そこには何かしらの繋がりを見出しているようだ。

5.4.3. 情意的要因その他に及ぼす影響

日本語学習に関しては教室の中から外への影響が目立ったが、意欲、興味、自信に関しては外から中への影響が強く見られた。難しさに関する学生の反応は興味深い。

外で日本語を話すのは難しいが、分からなかったらもっと勉強を頑張ろうという意欲が湧く。(アグー・夏有, メイ・夏有, ポー・夏有)
英語だとちゃんと話せるのに日本語だと文の半分も言えない。自分の日本語の力が足りないと分かった。でも、もっと勉強しようと思う。(ミング・少有)
会う前は聞き取りが苦手で、先生と話すのも苦痛だった。初めて日本人学生と日本語で話すときは緊張して唇が震えるほどだったが、今は何でも話せるようになった。(ベル・無有)

一般的に難しさは動機を低める結果に繋がりやすいと思われるが、外で経験する難しさは決してマイナス要因ではないようだ。むしろ意欲を増す要因となっている。中の難しさは、

勉強で嫌いなのは難しい科目。分からないときは好きじゃない(ジューン：夏有)

と動機が下がる。しかし、外に結びつく目的が得られると、学生の姿勢に変化が見られる。

文通相手と会ったことで少しやる気が出た。日本人と知り合う前は日本語の成績はいつも悪くて、勉強にやる気がなかったけど、彼女に会ってからは卒業後も続けたいと思うようになった。(ネーン・無無)
目的ができた。日本人の友達ができる以前は試験があるから義務的に勉強していたけれど、今は友達ともっと話せるようになることが目的。(ノグ・多有)

ノグは日本人と出会う以前の1年生のとき、日本語科目で落第を繰り返して卒業が遅れてしまった。落第すると卒業の遅れを心配して他の学科に移ってしまう学生が多い中で、彼は日本語の勉強を続け、現在4年生の科目にまでたどり着いた学生である。彼ほど顕著な変化は見られなくても、

難しくても日本語の勉強は続ける。もっと日本のことを知りたいから。(ジューン・夏有)

敬語やビジネス場面の日本語は難しい。でもそれが分かれば将来会社で役に立つ。(アーグー・夏有)

というコメントから、学生は外に結びつく何かをバネに、教室の中の難しさを乗り越えようとしていることがうかがえる。また、外の難しさは学生達を教室の勉強に向かわせる作用があるようだ。中から外へもっと直接的な影響をあげる学生もいた。

覚えた日本語を使ってみたい。(モモ・旅有)

中で勉強した文型を使って成功すると嬉しい。(ダーク・夏有)

これは、「中は聞く、外は話す」と教室と外の機能分けをしていたノグ(多有)やポー(夏有)のコメントとも関連するが、彼らの中で教室と外は決して別々に存在するものではなく相互に作用しあった関係にあると考えられる。

注目すべきことは、ほとんどの学生が外での日本人との接触は日本語の勉強に役に立つと評価しながらも、学業成績には結びついていないと考えていることである。

日本語はよくなったけれど、成績は変わっていない。(ポー・夏有, モモ・旅有)

いい成績のために勉強を頑張ろうとはあまり思わない。日本語をもっと知りたいから頑張ろうと思う。成績は合格できれば何でも嬉しい。(ノート・旅有)

これも学生が教室を外とは異なった機能を持った日本語環境の一つと捉えていることの表れではないだろうか。試験や成績は教室環境の一つである。学生が外の機能と中の機能を区別しているなら、外が中に反映されないからといって、外への意欲がそがれるわけではないと解釈できる。

学習の手段に関しての変化の自覚は少なく、辞書を頻繁に使うようになったという点だけであった。

分からない言葉をすぐ辞書で調べるようになったこと。(ボーイ・夏有, ミング・少有)

文化理解に関して影響に触れた学生は多くはなかったが、中と外の相互作用が見られた。

日本にいたとき七・五・三という数字を見て何だろうと思っていた。花火という言葉聞いて、花見と同じかと思っていたが、大学の日本事情のクラスで勉強して初めて分かった。(バード・旅有)

読解の授業を受けて、日本の文化や考え方はとてもややこしいと思っていた。でも、日本人と会ってみたらタイ人とあまり変わらないと思うようになった。(ミング・少有)

バードは外で見聞きして、不思議だったり、分からなかったりしたことを教室で知識として学び、整理した。訪日経験のないミングは教室から得たことから作り上げた価値観が、外で日本人と接触することで修正されたといえる。文化や価値観の理解という面でも学生達は外と中の相互作用で学習を進めているようだ。

質問票による分析では、学習行動や姿勢に関する影響と文化や価値観の理解に関する影響の割合が低かった。それに対応して、聞き取りでも辞書の使い方以外は学習行動に外の接触が影響したというコメントは見られなかったし、文化理解に関するコメントも数が少なかった。しかし、情意的要因に関しては、聞き取りで影響を示唆するコメントが多く見られた。この矛盾は質問票で行動と姿勢を同一項目にしてしまったことに原因があったように思われる。文化理解に関する影響が低く出ている点に関しては、今後の研究の課題としたい。

6. 分析のまとめ

以上、日本人を人的リソースと捉え教室外での接触の現状と接触が及ぼす日本語学習への影響について、筆者が現場で関わっている学習者を対象に行った調査で得られた回答に分析を加え考察してきた。その結果、多くの学習者が接触による影響を自覚していたことが分かった。影響が及んだのは学習者の日本語、学習意欲、文化や価値観の理解に関してであったが、日本人と接触した影響は、教室の中と外という二つの異なった環境で相互に学習に影響を及ぼしあうといった関係にあることが示唆された。

教室の中と外の違いに関する学生のコメントをまとめると、教室の中では話題や言葉が限られ、教師の話聞き、内容を理解し、漢字や文法や日本事情など日本語や日本に関する知識を得る場所であるとの認識が強いことがうかがえた。一方、外での日本語の使用は好きな言葉が使えて、好きな話題で、気が向いたときだけやりとりすればいいので自由であると考えた学生が多い。情意的側面から見ると、外は、「楽しい」、「面白い」、「ワクワクする」、「チャレンジ」といった場であり、中は「安心できる」「分かりやすい」場所であるようだ。「難しさ」にも違いがある。外での困難は日本人の話すスピードの速さ、馴染みのない言葉、表現、文体などに起因する難しさであり、中は試験、教師の評価、科目の内容による難しさである。

このように異質の環境であっても、教室の中と外は切り離された「点」として存在しているわけではなく、お互いに影響を及ぼしあう関係にあるようだ。学生の多くは、外での日本人との接触で自分の日本語力に限界を感じても、学習意欲が下がるどころかもっと上手になろうと、むしろ動機を強めて教室に戻ってくる。また、学習動機を低下させる原因となりやすい中の困難に関しては、学生は外に目的を持つことで克服し、難しくても続けていこうとする姿勢が見られた。外で難しさや失敗体験がマイナスに作用しにくい理由として考えられるのは、相手が自分の日本語を評価しない、好きな言葉が使え、好きな話

題で話せるといった外の気楽さが大きく関わると思われる。このような外と中の相互作用は、意欲だけでなく、日本語の知識や文化理解の面でもみられた。

さらに、日本人との接触の機会という学習環境が、学習者を取り巻く別の学習環境に大きく影響を受けることも分かった。特に次の二つの点で顕著であった。

第1点は、接触の機会を得る段階での環境の影響である。交流会という同じ機会を共有しても学生の行動は接触背景によって異なった。日頃から接触経験が多い学生は、初めての相手でも物怖じせず話すことができる。また、ほとんどの学生が見知らぬ日本人と初めて日本語で話すときには緊張感や不安といったストレスにさらされるのだが、慣れることでストレスを克服することができる。助け合える友人の存在もストレス軽減に役立つが、逆に日本語を話す必然性を失い、意欲を失う場合もある。このように一つの接触の機会に別の接触の機会や、友人のような人的リソースが影響を与えている。

第2点は接触を維持する上での環境の影響である。学生は数時間程度で初めて会った日本人とも打ち解けることはできるが、それだけでは継続してやりとりを行える相手にはなりにくい。知り合いから友人へと関係を発展させることが必要である。発展させるためにはある程度の期間が必要で、その間に連絡の手段がない場合は関係が消失してしまいやすい。ここでは物的リソースが大きく関わっていた。連絡に最も頻繁に使われているのはチャットと電子メールである。チャットや電子メールはタイと日本の物理的距離感をなくすだけでなく、日本語でのやりとりを支援してくれる手段でもある。特にチャットは辞書のサイトを活用したり、相手に聞いたり、英語を織り交ぜたりと手助けが得やすい。また、画像などのファイルを手軽にやりとりできる利点もある。

これらの結果から、日本人との接触が日本語学習に及ぼす影響は次のようにまとめられる。外での日本人との接触が学習にもたらす効果は大きい。接触環境を得るためには、まず、時間的に短くてもよいから多くの機会を得て、恥ずかしさや緊張といった最初の困難を克服して知り合うことが重要である。そして知り合った後、接触ができる環境を保持するために関係を発展させていくことが大切である。接触環境維持には日本語コンピューターといった物的リソースが活用できる環境にあることが必要である。このような点に着目すれば、日本人を人的リソースとした日本語学習への有効利用が期待できる。しかし、その一方で教師が関わる教室は、学習環境という大きな視点から学習を捉えなおすと学習に及ぼす影響や役割が限られていることも見えてきた。

7. 学習環境を教室に活かすために

調査を通して筆者が感じたことは、学習者と教師には「日本語学習における教師の役割」に対する認識のズレがあったということである。筆者は聞き取り調査で学生と話するとき、「日本語学習」という言葉は使わず「日本語の勉強」という言葉で代用した。「学習」より「勉強」のほうが学生には馴染みのある言葉であるからだ。だが筆者は、教師は教室の「勉強」以外にも学生達の日本語の学習に関わっているのだという認識を持ってきたし、学生からもそのように受け取られていると考えていた。筆者に限らず、多分教師は「学習」という言葉には教室に関連する学習に留まらず体験的な学習を含む広い意味を持たせるのが一般的だと思う。しかし実際は、学習者には教師が「勉強」以外の日本語学習に関わると

いう意識がほとんどないのではないかと思われた。

教師は「学習」全般に関わるという認識が間違っているとは思わない。しかし、教師が目にすることができる学生の姿は、実は日本語学習の一部でしかないことも事実である。筆者は、調査を行うまで自分の学生がタイの他の教育機関の学生に比べて訪日経験のある学生が多く、日頃日本人とやりとりを交わしている者が多いことを知らなかった。訪日経験がない学生も6割以上が教室外で日本人との接触の機会を持っていたのだが、教室の中の彼らを見ていてそのような環境にあったとは気付かなかった。教師である筆者の目の届く範囲は、まさに「勉強」に限られていた。

教室の中で、学生達は失敗には敏感な反応を示し、指示されたものを読み、決められた話題で、使うよう期待された文型を使いながら、話し、書く。教師の話すことを理解し、言われたとおりにできれば安心する。タイの学生達は主体性に欠ける、受身であるといった批判をよく耳にする。しかし、彼らの教室内での様子だけを見て、なるほどそうだと結論付けることはできないようだ。教室という環境が学生をそうさせているだけで、教室の外では彼らは主体的に、可能な手段を駆使して日本語を使っているのかもしれないからだ。失敗しても気落ちせず、むしろ「もっと上手になる」と意欲を高めて教室に帰ってきたのかもしれない彼らの本当の姿は、教室の中にいる教師には見えない。

学生の外でのやりとりに教師が参加しても、学生の本当の姿を見ることは難しいであろう。教師が存在するだけで、そこは教室環境の延長になってしまう。ブン(無有)が述べたように、学生にも面子がある。「先生は私が何を勉強したか全部知っている」ので教師の前で「好きな言葉(初歩的な語彙や文型ばかり)」で「自由(間違いだらけを気にせず)」に話すわけにはいかない。教師は「勉強」の相手役である。学生のこの意識を変えることは困難であろう。

このような状況の中で、教師は教室をどのように学習に活かしていけばよいのであろうか。学生は教室という学習環境を否定しているわけではない。外とは違う機能を与えているだけである。そうであるならば、教室環境の利点はそのままに、教師はもっと大きな観点から学習に関わる役割を見つければよいのではないだろうか。教室の環境は外の環境と結びつき影響しあっていた。そこにどんな作用があるのか、学生が語ってくれたことをさらに深く研究することで、教室と教師の役割が何であるのかが見えてくるのではないかと思う。

本稿ではやりとりの手段としてチャットと電子メールのみの分析となったが、そのほかのやりとりの手段を活用している学生も多い。また、やりとりの相手がいる学生に比べてやりとりの相手がいない学生のデータが不足していた。まだ処理の終わっていないデータの中にも興味深い回答がある。現時点で学習環境を教室活動に活かす具体的な道を示すことはできないが、この調査から、筆者は学習環境全体から見た教室と教師の役割を次のように捉えるようになった。

「学習」を芝居に例えるなら、「学習環境」が舞台で、主演は「学生」である。学生の間からは「教師」は「教室」という一幕の相手役である。しかし、「教師」がより広く「学習」という舞台に関わる必要があると思うなら、役者だけではなく、舞台セッティングをする大道具・小道具の役も兼ねる必要がある。どの幕にどんな道具が必要かも、どんなストーリー展開なのか知っておかなければならない。芝居の上演にはどちらもおろそかに

ティングをする大道具・小道具の役も兼ねる必要がある。どの幕にどんな道具が必要かも、どんなストーリー展開なのか知っておかなければならない。芝居の上演にはどちらもおろそかにはできない仕事である。演出のやり方によっては、一人二役を演じて、教室以外の幕で教師以外の役で、舞台に立つこともできるのかもしれない。単なる比喩でしかないが、このような教室・教師の捉え方から、筆者がこれまで教室に取り入れてきた、日本人訪問者のクラス受入れ、企業見学、文通交流、日本でのサマーコースなどを見直し、学習環境全体における教室・教師の役割と効果的な活用法を探っていきたいと思う。

謝辞

快く情報を提供いただいた龍谷大学の皆さんに、また、調査に協力してくれた学生と便宜を図ってくれた同僚に、そして助言をいただいた皆さんに感謝します。

注

- ¹ 「日本語学習のために現在使っているものについて」は最も多くあげられたのが「文法解説書」(71.9%)、2位が「日本語のテレビ番組、日本の映画」・「日本語の歌の入った音楽テープ、CD」(30.9%)であった。その他に辞書、漢字字典、音声テープなどもあげられた。「今後充実を希望するものについて」では同じく「文法解説書」(67.6%)が最も高く、次いで「日本のテレビ番組、日本の映画」(60.1%)、3位が「辞書」(60.1%)、4位が「日本人との交流会」(56.9%)、5位が「日本人家庭への訪問、ホームステイ」(56.3%)となっている。
- ² 龍谷大学では留学生を受け入れる制度の一つとして、日本人学生から希望者を募り留学生を支援するためのチューターと呼ばれる学生ボランティアを組織している。彼らは留学生が滞在する寮に住み込み共同生活を共にし、生活や学習の手助けを与えてくれる。サマーコースでは2004年、2005年で延べ20人ほどのチューターが協力してくれ学生達と親しくなった。
- ³ 「滞在」に含まれるのはサマーコース以外のプログラムでの短期留学や滞在プログラム、1ヶ月以上の親族訪問などの訪日形態である。
- ⁴ 「バンコックアンケート調査」では訪日経験は高等教育で10%に満たない。
- ⁵ 本稿に出てくる人物名は全て仮名である。
- ⁶ 本稿では詳細は省くが、「交流会がきっかけで現在やり取りしている相手がいる」と答えた学生は必ずしも「たくさん話す機会があった」と答えた学習者とは一致しない。
- ⁷ 「バンコックアンケート調査」では高等教育で、やり取りをするときの手段は「会って話す」が76.6%を占めている。しかしこのやりとりの相手には日本語教師や同国人も含まれていると思われるので、やりとりの相手を日本語教師以外の日本人に絞った本調査とは単純に比較はできない。
- ⁸ 「バンコックアンケート調査」ではやりとりの内容として最も多いのが「生活」、続いて「勉強」、「日本語」の順である。
- ⁹ 英語は学生の母語ではないが、筆者が勤務する大学では英語を媒介語としている。外国語科目など一部を除いては授業も試験も教師とのやり取りも通常は全て英語で行われるため、学生は英語でも言いたいことが伝えられると考え、本調査では英語を用いた。日本語への翻訳は筆者自身が行った。日本語を使いたいという学生には日本語で行った。
- ¹⁰ 聞き取りでの学生の話の引用は、録音したものを筆者が文字化し、再構成したものである。英語の場合は再構成の段階で日本語に翻訳した。

参考文献

- 太田亨・三浦香苗(2005)「テレビ会議で行う異文化ディスカッションの方法 Web 用試作版教材公開」2005 年度日本語教育学会秋季大会デモンストレーション『2005 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』p. 10
- 小西正恵(1994)「第二言語習得における学習者要因」SLA 研究会編『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』, 大修館書店, pp. 127-146
- 鈴木伸子(2004)「日本事情クラスにおける家庭訪問プログラムの試み」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第7号, pp. 209-225
- トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第7号, pp. 17-29
- 中田賀之(1999)『言語学習モチベーション』リーベル出版
- 深澤伸子(2005)「タイ国内日本人家庭ホームステイプログラムは関わった人たちにどんな意義があったか—学習者・教師・日本人協力者3者の調査報告—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号, pp. 201-206
- 森康眞(2005)「一般日本人・日本語アシスタントによる「日本語教育活動」の意義—異文化間コミュニケーションと日本語教育支援の立場から—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号, pp. 95-106
- Imura, Taeko(2004) 'Let Learners Talk with Native Speakers Outside the Classroom in Your Home Country: Community Involvement Project' 『世界の日本語教育』第14号, pp. 125-147
- Kano, Yoko(2004) 'Going Beyond the Classroom with Videoconferencing and Internet Discussion Forum: Effective Use of Peer Editing from Japanese College Students' 『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第7号, pp. 239-256
- Torii-Williams, Eiko(2004) 'Incorporating the Use of e-mail into a Japanese Language Program' 『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』第7号, pp. 227-237

マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境

阿久津 智(拓殖大学)

1. はじめに

このレポートでは、国立国語研究所(以下、「国語研」)が「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」の一貫としてマレーシアで行ったアンケート調査とインタビュー調査の資料を用いて、マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境の特徴について見ていきたいと思います。この調査研究については、国語研から『平成17年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 マレーシアアンケート調査集計結果報告書』(以下、『報告書』)が出ていますが、このレポートでは、対象を学習者にしぼり(国語研の調査は教師に対しても行われています)、インタビュー資料も使い、『報告書』とは違う枠組み(種別)によって、マレーシアにおける日本語学習について見ていきたいと思います。

はじめにお断りしておきますが、このレポートでは、調査資料(結果)を見て私が特徴的だと思ったことをあげるにとどめ、踏み込んだ分析や、それを踏まえた議論や提言は行いません。それは、私がすでにマレーシアの現場を離れて久しく、現地での調査にも直接かかわっておらず、ただ資料を利用して何か述べるしかない立場だからです。

さて、本論に入る前にマレーシアの日本語教育の特色について簡単にふれておきます。マレーシアの日本語教育は、主として政府主導で進められてきたという特色を持ちます。マレーシア政府は、長年にわたり、日本(および他の東アジアの国)に学び、主にマレー人の人材育成を行おうという「東方政策」を推し進めてきました。そして、この政策のもとに各種の日本語コースが開設されてきました。その中には、全寮制のエリート中等教育機関における第2外国語としての日本語クラス、日本の大学や高等専門学校への留学を目標とした複数の予備教育プログラム、日本への産業技術研修生派遣に向けた日本語教育プログラムなどがあります。これらのプログラムの多くに日本政府による経済的・人的支援が行われてきたこともマレーシアの日本語教育の特色といえると思います。

しかし、マレーシアにおける日本語教育はもちろんこれだけではありません。日本語はほかにもいろいろな形で学ばれています。私は、マレーシアにおける日本語学習の大きな特徴は、教育段階あるいは教育機関の種類によって、かなり異なる学習者像が見られることではないかと思っています。

そこで、このレポートでは、まず国語研のアンケート資料をもとに、日本語教育機関の種類ごとに学習者の特徴と日本語との接触のようすについて概観したいと思います。次に、インタビュー資料から、日本留学プログラムと非営利団体の日本語クラスという対照的な機関(各1機関)の学習者を例にとり、その学習動機と「日本語の見聞き」について詳しく見ていきたいと思っています。

2. アンケート調査に見る日本語学習者と日本語学習環境

2.1. 対象

ここでは、国語研が2004年6~7月に行った「マレーシアアンケート調査」のうち、「学

習者調査票」の回答について見ていきます。これは以下にあげる教育機関の種別ごとに行います。上で述べたように、種別によって学習者に違いが見られることが、マレーシアの日本語教育の特徴ではないかと思うからです。

その種別ですが、国語研の『報告書』では調査対象機関を「中等教育機関・高等教育機関・学校教育以外の機関」の3つに分けていますが、ここでは、次の5つに分類したいと思います。この分類のほうが、同種の機関がまとまり、それぞれの性格がはっきりと見られると思うからです。

- A 中等教育機関(略称「中等教育」)
- B 日本留学予備教育・高等教育機関(略称「留学前教育」)
- C 高等教育機関(略称「高等教育」)
- D 一般日本語教育機関(略称「一般」)
- E その他の特殊な日本語教育機関(略称「特殊」)

「A 中等教育機関」は、『報告書』の「中等教育機関」と同じです。日本の中学・高校に相当する機関です。

「B 日本留学予備教育・高等教育機関」は、『報告書』の「高等教育機関」のうち、日本留学プログラムにおける留学前教育を行っている(正規の)予備教育・高等教育機関です。

「予備教育」は、教育段階としては「中等教育後、非高等教育」段階(つまり、高校と大学の間)に当たります。

「C 高等教育機関」は、『報告書』の「高等教育機関」のうち、上のB以外の大学およびカレッジです。カレッジは、日本の短大や専門学校に相当します。

「D 一般日本語教育機関」は、『報告書』の「学校教育以外の機関」のうち、民間の日本語学校と非営利団体の日本語クラスです。

「E その他の特殊な日本語教育機関」は、『報告書』の「学校教育以外の機関」のうち、上のD以外のもの、すなわち、組織内教育、企業内研修、公務員等に対する教育、B以外の日本派遣プログラムなどを行っている機関です。ここには性格の異なるものが含まれています。

表1に種別ごとの対象学習者数をあげておきます。

表1 アンケート調査 対象学習者数

『報告書』での分類	中等教育		高等教育		学校教育以外		合計
	A 中等教育	B 留学前教育	C 高等教育	D 一般	E 特殊		
本稿での分類							
分析対象学習者数	2, 276 人 (42.5%)	562 人 (10.5%)	1, 683 人 (31.4%)	644 人 (12.0%)	195 人 (3.6%)	5, 360 人 (100%)	
上の所属機関数	40 機関 (44.4%)	4 機関 (4.4%)	19 機関 (21.1%)	15 機関 (16.7%)	12 機関 (13.3%)	90 機関 (100%)	

2.2. 結果

ここでは、「学習者調査票」にある以下の項目について見ていきます。なお、『報告書』に数値の載っている一部のものを除いて、集計はここで独自に行いました。(< >内は「学習者調査票」の項目番号です。詳しくは『報告書』をご覧ください)

・「学習者について」の項目

性別<F1>, 年齢<F3>, 母語<F4>, 訪日経験<F8>, 学習動機<F9>, 日本語能力<F10>

・その他の質問項目

日本語を使っのやりとりの有無<Q1>,

最もよくやりとりをする相手<Q1-2①>,

身の回りで日本語が使われているものの有無<Q2>,

最もよく見聞きするもの<Q2-3①>,

日本語に接する機会や場所の利用経験の有無<Q4>

集計結果は表2と表3にまとめて示します。ここでは、大まかな傾向を見るのが目的ですので、いちいち数値をあげることはしません。また、マレーシア全体の結果についてはここにはあげません。こちらについては『報告書』をご覧ください。

2.2.1. 「学習者について」の項目

まず「学習者について」の項目の集計結果を表2に示します。

表2 アンケート調査 「学習者について」の項目

	性別*	年齢*	母語*	訪日経験*	主な日本語学習動機**	日本語力***
中等教育					1. 日本語に興味がある 2. 日本に行きたい 3. 学校の授業にある	読む: 2.68 書く: 2.69 聞く: 2.36 話す: 3.08
留学前教育					1. 科学技術に興味がある 2. 日本に行きたい 3. 日本に興味がある 4. 日本語に興味がある 5. 日本のものが好きだ	読む: 3.76 書く: 3.91 聞く: 3.30 話す: 3.82
高等教育					1. 日本語に興味がある 2. 日本に行きたい	読む: 2.25 書く: 2.26 聞く: 2.05 話す: 2.76
一般					1. 日本語に興味がある 2. 日本に行きたい 3. 文化や社会の情報を得たい	読む: 2.91 書く: 2.72 聞く: 2.45 話す: 3.02
特殊					1. 現在の仕事に必要な 2. 日本語に興味がある 3. 科学技術に興味がある	読む: 2.24 書く: 2.26 聞く: 2.21 話す: 2.91

*無回答や不明を除いた割合となっている。

**18の選択肢から順位をつけて3つ選ばせ、1位3点、2位2点、3位1点として集計した。表には各種別で総得点に占める割合が10%以上のものをあげた(20%以上のものはゴシック太字にした)。

***6段階評価(「1. 全くできない」～「6. 母語と同じようにできる」)の平均値である。

表2を見て、私が種別による特徴だと思うことを順不同で以下にあげます。

・種別により学習者の年齢層に違いが見られる。

表2では上から下へ行くにしたがって学習者の年齢層が上がっています。これは、ここで設けた種別が主に教育段階に基づいているからで、当然のことかもしれません。

「一般」のところに13%ほど10代の学習者がいますが、これは資料にあたりますと、ほぼ学生(中学生から大学生まで)のようです。つまり、正規の学校とは別に(たぶん放課後や休日に)日本語を学んでいる学生もいるということのようです。

・種別により母語(すなわち、民族)の偏りが見られる。

「中等教育」と「留学前教育」では、マレー語を母語とする者(すなわち、マレー人)が大多数であるのに対し、「高等教育」と「一般」では、中国語を母語とする者(すなわち、華人)が多数派になっています(母語を「英語」とした「一般」の学習者にも華人が多いのではないかと思います)。これは、「中等教育」と「留学前教育」(および一部の「特殊」)の日本語教育が主に「東方政策」(これは主としてマレー人材の育成をめざす政策です)のもとに行われているのに対し、そこに入れられない多くの華人にとってはその他の機関が日本語を学ぶ場になっていることを示すものだと思います。

・「留学前教育」にほかに違った特徴が多く見られる。

「留学前教育」には、男性の比率が高い、主な学習動機が多岐にわたる、日本語力が比較的高い、などの特徴が見られます。男性の比率が高いのは、マレーシア政府の理工系人材育成政策により、日本留学の専攻が主に工学系となっていることと関係があると思います。学習動機については、表にあげたうちでも「日本の科学技術に興味がある」と「日本に行きたい」がとくに得点が高くなっていますが、このことは日本語力とあわせて、留学前教育の学習者が日本留学や日本語学習に対して高いモチベーションを持っていることを示していると思います。

・「特殊」では「現在の仕事に必要だ」を学習動機とする者が多い。

「現在の仕事に必要だ」は、ほかの「主な日本語学習動機」には現れていませんが、「特殊」ではとくに得点が高くなっています。これは、主として、「特殊」が企業(主に日系)の従業員に対する組織内教育としての日本語教育を多く含んでいることによるのではないかと思います。

2.2.2. その他の質問項目

つづいて表3に、その他の質問項目の集計結果を示します。質問はいずれも「日本語の授業(教材)以外」での日本語との接触について聞いています。

表3 アンケート調査 その他の質問項目

	日本語でのやりとりの有無*	最もよくやりとりする相手**	身の回りでの日本語の有無*	最もよく見聞きするもの**	日本語に接する機会の経験の有無*
中等教育		1. 学校の友人 2. 日本語教師		1. テレビ 2. ビデオ・VCD・DVD 3. ゲームソフト 4. 本	
留学前教育		1. 日本語教師 2. 学校の友人 3. クラスメート		1. ビデオ・VCD・DVD 2. 音声テープ 3. CD 4. 本	
高等教育		1. 日本語教師 2. 学校の友人 3. クラスメート		1. ビデオ・VCD・DVD 2. テレビ	
一般		1. 日本語教師 2. クラスメート 3. 知り合い		1. ビデオ・VCD・DVD 2. テレビ 3. 本	
特殊		1. 日本語教師 2. 職場の同僚 3. クラスメート		1. ビデオ・VCD・DVD 2. 本 3. テレビ	

*無回答や不明を除いた割合。

**11(「やりとり」)ないし14(「見聞き」)の選択肢から1つ選ばせた。表には各種別で回答者の10%以上が選んだものをあげた(ゴシック太字は20%以上のものである)。なお、「見聞き」にある「VCD」とは「ビデオCD」のことである。VCDは画質は悪いものの、ビデオカセットやDVDより安価なため、この調査の時点において、マレーシアで最も一般的に視聴されている映像記録媒体であった。

表3を見ると、全体として日本語を使う機会や日本語に接する機会がそれほど多くないことがうかがえます。種別で見ると、「留学前教育」と学校教育以外(「一般」と「特殊」)に比較的機会が多く、「中等教育」と「高等教育」には少ないということがいえるようです。細かい点について見ると、「特殊」で「最もよくやりとりをする相手」の第2位に「職場の同僚」があがっていますが、これは先に述べたように、「特殊」の回答者に企業(主として日系)の従業員が多いことによるのだと思います。

ほかに、「最もよく見聞きするもの」としては、「中等教育」の「ゲームソフト」、「留学前教育」の「音声テープ(カセットテープ)・CD」などが特徴的ですが、これはその年代の興味(中高生にとってのゲーム、18歳前後の若者にとっての音楽)を示すものではないかと思えます。

これまで見てきたように、アンケート調査結果からは、学習機関の種別による学習者の違いが見られ、そこにはマレーシア特有の事情もうかがえます。しかし、これが学習環境の大きな違いとなって現れているわけではなさそうです。大ざっぱにいつてマレーシアの学習者が日本語と接触する機会はそれほど多くないといえそうです。

3. インタビュー調査に見る日本語学習者と日本語学習環境

3.1. 対象

次に、国語研が2004～2005年に行ったインタビュー調査から、「留学前教育」と「一般」(各1機関)の学習者について見ていきます。

ここで見ていくのは、「留学前教育」では「日本マレーシア高等教育大学連合 Japanese Associate Degree プログラム」(セランゴール州バンギ, 以下「JAD」)の学習者, 「一般」では「ペラ馬日友好協会」(ペラ州イポー市, 以下「協会」)の学習者です。インタビュー調査の時期は、JADが2004年11～12月、協会が2005年10月でした。

この2つの機関を選んだのは、一方はマレーシア政府の東方政策に連動する日本留学プログラム(学生は政府系機関によって選抜され、配属されます)であり、他方は民間の非営利団体が行っている日本語クラス(希望者はだれでも参加できます)であるため、対照的な日本語学習者像(それぞれの種別における代表的な学習者像)が見られるのではないかと考えたからです(なお、JADは私が2000～2003年度に勤務していた機関です)。

両機関におけるアンケート調査とインタビュー調査の対象学習者数を表4にあげておきます。また、インタビュー調査に協力してくれた学習者に関する基本情報を表5にあげておきます(いずれも調査時点におけるものです)。

表4 アンケート調査・インタビュー調査 対象学習者数

	JAD プログラム	ペラ馬日友好協会*
学習者総数(協会は常時出席者数)	57人	100人以上
アンケート調査 分析対象数	57人	82人
インタビュー調査 協力者数	56人	41人
上のいずれでも対象となった者の数	56人	23人

*アンケート調査やインタビュー調査には14歳以下の子供も協力しているが、ここでは15歳以上の者のみを取り上げる。この表には15歳以上の者の数をあげた。

表5 インタビュー調査 調査協力学習者に関する基本情報(単位:人)

	性別	民族	年齢	身分	日本語学習歴	訪日経験	日本語レベル
JAD 56人	男性:43 女性:13	全員 マレー人	全員 18～20歳	全員 大学1年生	1～2年:52 5年以上:4	ある:3 ない:53	中級～上級:55 超級:1
協会 41人	男性:14 女性:27	華人:38 マレー人:2 インド人:1	10代:5 20代:13 30代:11 40代:8 50代:4	勤労者:34 学生:6 主婦:1	1～2年:11 3～4年:14 5～6年:5 9年以上:11	ある:5 ない:36	初級:22 中級:11 上級:8

3.2. 結果

インタビューは、両機関とも、調査者(主にその機関の教員)1名に対し数名の調査協力者(その機関の学習者)というグループ形式で行われました。使用言語は、JADは日本語のみ、協会は主として日本語で、適宜媒介語(英語・マレー語・広東語、通訳を使用)をまじえました。

インタビュー項目は多岐にわたりますが、ここでは、アンケート調査の項目にもある「日本語の学習を始めた理由や動機」と「日本語が使われているもので見聞きするもの」にし

ぼり、アンケート調査からはうかがえない部分まで見ていきたいと思います。

このうち、「日本語の学習を始めた理由や動機」については、実際のインタビューでは、両機関とも「どうして日本語を勉強しようと思いましたか」などと聞いています。また、「日本語が使われているもので見聞きするもの」については、JAD では「学校が終わってから、日本語を見たり聞いたり読んだりしますか」などと、協会では「日本のドラマやアニメ、映画を見ますか」「日本の歌を聞きますか」などと聞いています。

なお、以下の「学習動機」には答えた者の人数を書きましたが、これは概数と考えてください。不明な部分が多くあるからです。また、回答はすべて複数回答です(1つの質問に対していくつ答えを言ってもいいという形式です)。

3.2.1. 学習動機

まず、JADの学習者の「日本語の学習を始めた理由や動機」について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「留学前教育」全体と同様、「日本の科学技術に興味がある」と「日本に行きたい」がとくに得点が高く、総得点に占める割合は、それぞれ27%と21%でした。

インタビュー調査でも、「日本に留学したい」「日本の技術が勉強したい」というような答えがとくに多く見られました(20人以上)。しかし、これについて、調査者がさらに詳しく聞くと、「JADに入ってからそう思った」とか「日本のことは何も知らなかった」などと答える者が多く、日本語の学習を「始めた」理由としては、むしろ「日本留学プログラムに(たまたま)配属されたから」という者が少なくないようでした。

このほかに、「英語が苦手だから」「英語の試験の成績が悪かったから」などといった答えも多く見られました(8人)。これは英語圏への留学が難しいため、日本留学プログラムに来たというもので、これも積極的な学習動機とはいえないと思います。どちらかというところ、JADの学習者には、消極的な理由で日本語学習を始めた者が多いように思われました。

一方、もう少し積極的に日本語学習を始めたのではないかと思われる動機としては、「アニメを見て興味を持った」「漫画が大好き」「車が好き」など、日本のものに対する興味が多くあがりました(8人)。また、「中国語はうるさい感じがするが、日本語はうるさくなくて、いい感じだ」や「漢字の勉強は脳を使い、知識が身につく(イメージ)」などというように、日本語(主に話し方や文字など)に興味があったという者もいました(6人)。

つづいて、協会の学習者の学習動機について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「一般」全体と同様、「日本語に興味がある」がとくに得点が高く(総得点に占める割合は25%)、「日本の文化や社会の情報が得たい」と「日本に行きたい」がそれにつづいていました(総得点に占める割合は、それぞれ14%と12%)。

しかし、インタビュー調査で最も多かったのは、ただ「興味」「趣味」「おもしろい」と答えた者でした(16人)。

ほかに、「言語が好き」や「日本語に興味がある」など言葉への興味をあげた者、「友達に誘われて」や「姉につれられて」など人の影響で学習を始めたという者、「仕事で使う」「新しい仕事に就きたい」など仕事や就職を理由にあげた者が、それぞれ8人ずついました。

一方、「日本の文化が好き」や「日本の漫画が大好き」など日本の文化やもの(漫画やドラマ)への興味をあげた者や、「日本の大学に入りたい」など留学の希望をあげた者は少数でした(それぞれ4人と2人)。

全体として、協会にはとくに目的を持たずに日本語を学びはじめた者が多いように思われました。ですが、「日本語のクラスは楽しいか」という質問に対しては、ほぼ全員が「楽しい」と答えていました。

また、学習動機とは別に、「日本に行く予定があるか」という質問も行っていますが、これに対しても、ほぼ全員が「行きたい」と答えていました。その内容については、「旅行したい」(23人)と「勉強したい」(11人)がほとんどでした。ただし、これらはいずれも「希望」であって、「予定」ではないようでした。

3.2.2. 日本語の見聞き

まず、JADの学習者の「日本語が使われているもので見聞きするもの」について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「(学習教材以外で)最もよく見聞きするもの」(1つ選択)では、「留学前教育」全体と同様、「ビデオ・VCD・DVD」が最も多く選ばれました(回答者56人のうち54%が選択しています。なお、「最も」でなく、複数選択の「見聞きするもの」としては回答者56人のうち98%が選択しています)。

これについて、「コンピュータ(インターネット等)」が選ばれましたが(「最もよく見聞きするもの」として回答者の25%が選択しています。また、複数選択の「見聞きするもの」としては回答者の84%が選択しています)、これは「留学前教育」全体とは異なるもので、この機関の特徴といえるのではないかと思います(JADでは多くの者が個人でパソコンを所有していたようです)。

インタビュー調査でも、「VCD(ビデオCD)で日本のドラマやアニメを見る」という答えがとくに多く見られました。ただし、自分でVCDを買うという者は少数で、多くの者はVCDをたくさん持っている友達から借りて見ているようでした(JADは全寮制ですが、インタビューからは、寮の一室で数人の者が1台のパソコンのまわりに集まってドラマやアニメを見ているようすがうかがえました)。字幕(英語やマレー語)については、「(確認のために)ときどき見る」という者が多いようですが、「VCDを買うときに字幕はチェックしない」との発言もあり、あまり字幕にはこだわらないようすもうかがえました。

また、インターネットに関して、インタビュー調査では、「インターネットで日本の音楽をダウンロードする」「インターネットで日本の漫画を読む」「日本人の友達と電子メールでやりとりする」などという答えが多く見られました。しかし、「(授業とは関係なく)日本語のウェブサイトを見る」という答えはあまり多くありませんでした。JADでインターネットの利用が多いことには、情報工学(や日本語)の授業でインターネットを使っていることの影響があるのではないかと思います(ただし、寮にインターネット回線はないそうです)。

JADの学習者は「ドラマやアニメを見る」にしても、「音楽(歌)を聞く」にしても、パソコンを使うことが多いようです。とくに音楽については、CDやカセットテープというメディアがあるにもかかわらず(アンケート調査では、複数選択の「見聞きするもの」として、回答者の61%と34%が、それぞれCDとカセットテープを選択していました)、インタビュー

では、インターネットでダウンロードしたもの(主にポップス)をパソコンで聞くと答えた者のほうが多くいました。

そのほかには、漫画の本、テレビのドラマ、ゲーム、NHKの衛星放送(JADで受信可)、ラジオ番組、映画、雑誌、新聞、小説などがあがりました。

つづいて、協会の学習者の「日本語の見聞き」について見ていきます。

先にアンケート調査の結果をあげておきますと、「最もよく見聞きするもの」では、「一般」全体と同様、「テレビ(ニュース、ドラマなど)」と「ビデオ・VCD・DVD」がとくに多く選ばれました(回答者 55 人のうち、それぞれ 34%と 28%が選択しています。複数選択の「見聞きするもの」としては、回答者 60 人のうち、それぞれ 65%と 58%が選択しています)。

インタビュー調査でも、「日本語の見聞き」に関しては、日本のドラマやアニメを見ているという答えがとくに多く見られました。主に日本語音声に字幕(中国語や英語)付きで見ているようでした。

ちなみに、この調査時点(2005 年 10 月)で、協会のあるイポー地区では、テレビの地上波チャンネルで、「ドラえもん」「ポケモン」「名探偵コナン」など日本のアニメを 1 週間に 7 本放送していたそうです(ただし、すべてマレー語吹き替えだったようです)。一方、日本のドラマは、以前は週に何本か放送されていたようですが、韓国ドラマに押され、この時点では数か月おきに 1 本という状態だったようです。こうしたことから、協会の学習者は、この調査時点においては、日本のドラマやアニメを主に VCD で見ていたのではないと思われま

す。インタビューからは、ほかに、音楽(歌)、漫画の本、雑誌、映画、インターネット、ゲーム、NHKの衛星放送などに接しているようすがうかがえました(ただし、音楽以外はいずれも少数でした)。全体として、協会の学習者は JAD の学習者ほど日本語を見聞きしてはいないように思われました(アンケート調査でも、協会は JAD より日本語を見聞きしている者が少ないという結果が見られました)。

以上、インタビュー調査から、「留学前教育」と「一般」の学習者について、簡単に見てきました。

「留学前教育」の JAD には、プログラムの性格からだと思われま

すが、学習動機や学習目的のはっきりした学習者が多く見られました。しかし、多くの者にとってモチベーションが上がったのは、このプログラムに入ってからのものでした。日本のドラマや音楽に多くふれるようになったのも、JAD に入ってからのものでした。

一方、「一般」の協会の学習者には、とくに目的を持たず、趣味として日本語を学ぶ者が多いように思われました。インタビューをした協会の教師によると、協会には、「学習前には『ニーズ』や『目標』があったが、学習を始めたあとはただ日本語を勉強することが『目的=趣味』になった学習者」と「日本語や文化に興味があって始めたが、上達するにつれ何かに役に立てたいと思うようになった、しかし、就職や仕事などという積極的なものではない」という学習者がいるようだといいます(小林百恵氏からの私信)。いずれにしても、協会には「日本語学習を(趣味として)楽しんでいる」者が多いようです。個人的な感想を言えば、日本語に接したり日本語を役立てたりすることにそれほど積極的でなくても、日本語を学ぶことを純粋に楽しんでいる人たちがいるということは、たいへんうれしいこ

とだと思えます。

4. おわりに

以上、国語研のマレーシア調査から、マレーシアの日本語学習者と日本語学習環境についてごく大ざっぱに見てきました。

最後に1つ感想を言いますと、インタビューを書き起こした資料を読んでいて、私が興味を持ったのは、インタビューをしていた教員が学習者の話にしばしば驚いていた点です。たとえば、JADの調査では、「1週間に1回、夜中にラジオで、日本留学経験のあるマレー人が日本語でしゃべる番組をやっている」とか「日本の漫画の本をスキャンしたファイルをインターネットでダウンロードできる」などといった学生の発言に、教師が「それは初めて聞いた」「知らなかったね」などと反応していました(実は私もいっしょに驚いていたのですが)。当たり前のことでしょうか、このような調査は、何よりも現場の教師が学習者の学習環境や学習手段を理解するのに役に立つのだということを感じました。

さらに、もう1つ、この原稿を書き上げてから知ったことを付け加えますと、国語研の調査研究がきっかけとなり、ペラ馬日友好協会が日本語環境をよくするために勉強会やその他の活動を始めることになったといます。僭越なことを言うようですが、こういったことこそ、この調査研究の本当の成果だと思います。日本語をもっともっと楽しく学べる場がもっともっと増えることを期待したいと思います。

参考文献

阿久津智(2005a)「マレーシアにおける日本語学習者」『拓殖大学 語学研究』第108号, pp. 157-173, 拓殖大学言語文化研究所

阿久津智(2005b)「日本語の可能性 海外の日本語教育の現場から」『人文・自然・人間科学研究』第14号, pp. 59-72, 拓殖大学人文科学研究所

国際交流基金(2004)「『日本語教育国別情報』2004年度 国別一覧」

(http://www.jpff.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/index.html)

国立国語研究所(2005)『平成17年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 マレーシアアンケート調査集計結果報告書』

小林百恵・阿久津智(2006)「マレーシアの一般日本語教育機関における学習者の学習意識と学習環境 -ペラ馬日友好協会を一例として-」(平成17年度 国立国語研究所日本語教育シンポジウム「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 -海外調査の成果と展望-」ポスター発表)

日本語教育におけるリソースと環境： オーストラリアに関するデータの考察及び今後のリソース開発への示唆

ロビン・スペンス-ブラウン(モナシュ大学)

1. はじめに

第二言語習得、特に社会文化理論をもとにした近年の研究は、言語学習に対するリソース及び社会的コンテキストの重要性を強調してきた。言語習得を単なる個人の心理的活動として扱うのではなく、むしろ研究者らは学習者のコミュニティのダイナミクス、学習者の母語及び対象言語それぞれのコミュニティと学習者との関係の重要性を探求し、学習や他者とのやりとりから生じる社会的コンテキストによって個人の目標及び行動がどう形成されるかを示している。また、テクノロジーと言語学習に関する研究は、リソースの種類によって学習方式や学習内容が変わる可能性を示している。

5つの調査地域におけるリソース及び環境を調査した本調査研究は、学習のコンテキストに関する重要な情報を提示しており、国による学習者のニーズの類似・相違点の理解、また今後役立つリソースの開発の一助となると考えられる。本論文では、特にオーストラリアに関するデータに言及しながら、データから分かったいくつかの点、また、今後のリソース開発に関して得られた示唆について述べたい。

オーストラリアではアンケート回収率の低さが原因となり、他調査地域のように大規模な調査データを集めることはできなかった。しかし、中学校・高校の少数の生徒学習者に対するアンケート調査(回収数 309)、小学校の学習者へのインタビュー調査(14校で 383名)、小学校における学習者の保護者に対するアンケート調査(回収数 832)、大学生に対するアンケート調査(回収数 43)、大学生に対するインタビュー(6名)、教師に対するアンケート調査(回収数 104)、教師に対するインタビュー調査(42名)を実施した。補足的情報として小学生に対するインタビューのために訪問した学校の教師からの情報収集、記録・資料の収集、学校訪問による観察も行った。

本論文では、以上のデータの中から、小学校での学習者及び教師に対するインタビュー、大学生に対するアンケート調査及びインタビューを中心に分析する。

2. 社会的コンテキストにおける学習者及び教師の学習動機とニーズの理解

—日本語課程における教育目的の広範化及び学習者の学習動機とニーズ—

2.1. 教育機関における日本語学習の目的及び適切なリソースのニーズ

オーストラリア等の外国では、ほとんどの日本語学習者にとって、言語学習は正規教育の一部である。高校や大学の上級レベルは他の学習動機を有するが、それでも全ての学習者にとり、学校・大学教育の要件を満たすという目標は、日本語でコミュニケーションができるようになるという目的と同等もしくはそれ以上に重要である。全ての言語教育プログラムはコミュニケーション能力の向上を目的としているが、教育機関における言語教育プログラムは他の重要な教育目的の達成も目指しているのである。

近年オーストラリアでは、小学校及び中学・高校のカリキュラムに以下の目標が強調されている¹。

- ・異文化理解及び異文化対応能力の向上
- ・日本語学習と他の学習との融合一例：歴史、地理、情報技術等
- ・全般的な学力の向上
- ・言語・コミュニケーション全般についての理解、全般的なリテラシー及び言語学習能力の向上

大学レベルでも多くの機関において、言語教育課程の中で文化、文学、その他、さまざまな日本研究の側面を教えることに重きがおかれている。これは一つには、上記がコミュニケーションに重要であるからであり、また日本語課程の教育的価値を高めるということも要因である。大学課程は、語学力に加え全般的な知性、知的スキルの発達も目指しており、文化、社会、異文化コミュニケーションの教育が課程に大きな深みを与えている。現代の言語教育では、言語についての学習よりも、実際の言語使用による習得に重きを置いている。これは小学校におけるイマージョン教育、大学における内容重視の教育において明らかである。日本語を使用して日本について教えることは、内容重視の教育課程や従来のトピック中心の教育、またタスク中心教育のシラバスにおいて理想的な題材となるのである。

本調査研究による小学校の教師及び学習者へのインタビューでは、オーストラリアの小学校カリキュラムでは文法スキルに重点が置かれていないことが多いと分かった。カリキュラムの多くは全ての科目を網羅するトピック中心の「統合カリキュラム」であり、個々の学校により異なる。ここではゲームやパズルといった興味を引き、楽しめる活動、またさまざまな日本文化の紹介が中心となっている。中等教育の初期段階では、口頭によるコミュニケーションに焦点が当たっているが、教科書が体系だった言語中心シラバスの学習を支えている。トピック中心のシラバスの多くには、グループや個人の課題研究が組み込まれており、正規のカリキュラムではやはり異文化理解に重点が置かれている。ただしこれは全ての学校において十分に組み込まれているわけではない。高校最後の2年間は大学進学を左右する試験の準備のため、言語学的な正確さ及び適切さがより重んじられるようになる。

教師や学習者にとってリソースが役に立つものとなるには、言語習得という目的に加え、学校や大学におけるより広範な教育目的を考慮してリソースが作られることが重要である。研究・分析能力などの他の学問的スキル、さらに文化・社会に関する学習など他のカリキュラム分野を統合するような内容の濃い素材で、かつ多種多様なプログラムにおいて利用可能なものが最も有用なのである。

2.2. 大学における学習者の目標及び学習者が使用するリソース

本調査研究において、教室外での日本語学習に関連する活動の種類を大学生にインタビューしたところ、そのほとんどは言語課程での学習に必要な内容に関連していることが明らかになった。課題に関連して論文、ディベート、クラスへの訪問者に対するインタビュー等のトピックを探すのに加え、語彙・漢字を勉強し、授業のノートや教科書を復習して

いる。学習者は漢字や語彙の学習だけではなく宿題や課題にも役に立つリソースが欲しいと考えている。したがって辞書などの参考資料をよく利用する一方で、大学の課題研究のためのリソースも必要としている。参考資料については、様々な辞書や文法参考書が利用可能となっているが、意味や適切さの微妙な違いを説明する資料がもっとあると便利だと学習者は述べている。学習者が授業を受けているのとは異なるカリキュラムに関連する教材はあまり役に立っていない。

本研究でインタビューした大学生、またアンケートに回答した大学生は特に真剣に日本語を学んでいる者である。アンケートでは 93%の学習者が教室外でも日本語を見聞きすると回答し、62%はその頻度を週に 1 度以上としている。しかしながらインタビューの中では、日本語の本など多くのリソースを集めてはいるが活用する時間があまりないという学習者もいた。授業に関連する活動に時間がかかり、日本語を別の形で勉強する時間と気力があまり持てないともコメントしている。ある学習者は、多くのリソースが利用可能ではあるがその所在を突き止めるのが必ずしも容易ではなく、リソースを活用する時間とやる気が一番の問題だと述べている。

学習者が学問的な勉強とは直接関係しない活動で日本語を使用する場合、余暇的な活動となることが多い。日本の音楽を聴く、日本の映画を観る、インターネットのチャットサイトに参加するなどがその例である。インタビューでは、あまり興味を引かない、おもしろくない、もしくは難しすぎる場合はすぐにその活動をやめてしまうことが示されている。アンケートのデータでは、日本語を見たり聞いたりするのは日本語の能力を向上させるためというのが強い理由である一方、「楽しい」というのも同等に強い動機となっていることが明らかになった(この質問に回答した学習者の 78%が、日本語を見聞きする理由の 1 つは楽しいからという内容に同意、もしくは強く同意と答えている)。最もよく利用されているものは「コンピュータ(インターネットを含む)」であった(この質問に回答した学習者の 82%がコンピュータ上で日本語を見聞きしており、39%はコンピュータが最も頻繁に使用するリソースであると答えている)。これは、コンピュータによってウェブサイト、電子メール、新聞、音楽など多種多様なものへアクセスでき、オーストラリアにおいてコンピュータ上のリソースが最も安価で利用が容易だという事実を反映しているのであろう。コンピュータ以外で頻度が高かったのは漫画(68%)、ビデオ・DVD(68%)、雑誌(50%)、書籍(46%)、CD(43%)である。新しいリソースが役に立つためには、アクセスが容易でかつ楽しめる内容でなければならないことがうかがえる。学習者は様々なトピックに興味を持っているが、上述のリストからは、オーストラリアでは他のアジア諸国ほど頻繁に日本の大衆文化が主流メディアに登場することがないにもかかわらず大衆文化(映画、漫画、音楽)が多くの学習者を惹きつけていることが明らかである。学習者は映画や音楽などを面白いと感じる一方で、現代の日本社会や日本語コミュニケーションを知る手段としても認識している。

多くの学習者は教師や友人とのコミュニケーションのために教室外でも日本語を使用している。ただし 37%の学習者は日本語でのコミュニケーションの機会が全くなく、学習者の多くがそういった機会がもっと欲しいと述べている。しかしながら、本調査研究のアンケート及びインタビュー、またオーストラリアで実施された他の研究²では、日本語でのコミュニケーションが重要だと認識しながらも日本人の友人とのコミュニケーションに英

語を使用しがちであると多くの学習者が認めている。オーストラリアでは英語を使うのが当たり前であるととらえられており、時として日本語への切替えが難しいのである。さらに、技術的な問題、タイピング速度や読解力の不足が電子メールやチャットでの日本語の使用を遠ざけることも多い。学習者が教室外で日本語を使用する一番の理由は「日本語能力向上や維持のため」(5段階評価中4.9)であり、他には、「日本人とコミュニケーションしたい」(4.5)、「日本語を使用するのが好きである」(4.4)などの理由が挙げられた。「日本語がコミュニケーション手段として最適」(2.8)、「仕事のため」(2.7)といった実用的な理由は比較的评价が低い。上記の結果からは、日本語母語話者や他の話者と日本語でコミュニケーションする機会をもっと学習者に与えることが望まれるが、さらにそういった機会において日本語の使用をより強力に支援、奨励する環境を整えることも重要であると結論付けられる。

3. 技術革新が与える影響

本調査は興味深い時期に実施されたといえる。調査期間中においてさえ、研究者らは技術の進歩による急速な変化に気付かされることとなったのである。オーストラリアの大学に関するデータは2004年の終わりに収集されたが、コンピュータがもはや欠かせない手段となり、日本語を見聞きする機会、日本人と交流する機会を増やし、さらに学習者がリソースへアクセスする方法を変化させていることを示している。本調査の対象となった大学では課程のウェブサイトで教室外で利用するための情報やリソースを提供しているが、授業でコンピュータが頻繁に使用されることはない。しかしながら前に述べたように、教室外で最もよく見聞きするものを学習者に質問したところ、圧倒的に回答が多かったのは「コンピュータ(インターネットを含む)」(39%)であった。韓国も同様の結果である。ただし、他の調査国においては日本語を見たり聞いたりするためにコンピュータを利用するという回答は少なく、おそらく日本語のテレビなど他のメディアがより一般的であるのに加え、調査時にコンピュータやインターネット接続がさほど普及していなかったためと考えられる。しかしながら、今後全ての国においてコンピュータがますます重要になっていくことが予想できる。

学習者へのインタビューでは、電子メールやチャットの利用以外にも、新聞や興味のあるトピックのウェブサイトなどのリソースへアクセスするためにコンピュータを使用すると多くが回答している。こういったリソースは語学の授業で最初に紹介されることが多いが、その後学習者は授業とは関係なく利用するようになっていく。コンピュータの使用によって、日本以外では入手困難な新聞記事などのリソースへ非常に容易にアクセスできるようになっている。同様に重要な点として、学習者がリソースを容易に理解できるようにするための手段もコンピュータが提供している。従来の辞書の利用では難しすぎてなかなか読み進めない素材を楽しく読めるようにしてくれるウェブ辞書や翻訳ツールを多くの学習者が利用していると回答した。オンラインチャットへの参加時にはオンライン辞書も利用可能である。興味深いことに、全ての学習者がこれらのリソースを認識しているわけではなく、こういったリソースが大学の全ての授業に組み込まれるまでには至っていないことが分かる。

コンピュータがもたらしたこと、つまり、リソースへのアクセス方法が目覚しく容易になったことと、リソースを理解するためのツールの力や利用し易さの向上が、日本語学習に与える影響を軽視することはできない。しばらく前までオーストラリアの学習者は大学の最終学年になるまで日本人向けに書かれたものを読むことができず、利用可能なリソースもほとんどなかった。現在、学習者は自宅で容易にネットサーフィンし、興味のある資料やウェブサイトを数え切れないほど見つけることができる。翻訳ソフトウェアで用語集や全文翻訳でさえ容易に入手できる。

日本語でのやりとりという点でも同様にコンピュータがもたらした劇的な変化がある。アンケート結果では、学習者は教室外での教師とのやりとりに、直接会ってのコミュニケーションとほぼ同じ頻度で電子メールを使用していると分かった。大学や語学学校の友人とのやりとりも、電子メールやインターネットでのチャットを電話より頻繁に使用している。その他の友人とは他のどのコミュニケーション手段よりも頻繁に電子メールを使用しており、チャットを併用している学習者も多い。これは、やりとりする相手が日本にいる場合が多いという背景があるのかもしれない。近年まで日本にいる相手とのやりとりは手紙と時折の高額な電話に限られていたが、現在では日本(もしくは日本以外の海外)にいる相手との日本語でのコミュニケーションの方が、オーストラリアにいる人とのやりとりよりも頻繁だとインタビューで回答した学習者もいる。

直接会う場合と電子形態のコミュニケーションには違いがあり、電子コミュニケーションは非母語話者の参加を促進する場合があると研究では示されてきている³。コンピュータが日本語母語話者とのコミュニケーション手段を格段に容易にし、新しいコミュニケーション形態をもたらしたことにより、学習者の言語学習、言語学習のニーズに今後大きな影響があると予測できる。オンライン上の文章を電子辞書を利用して読む、インターネットのチャットに参加する、また電子メールを作成するといった作業に必要なスキルは、紙の辞書を使って書籍や新聞を読み、手紙を手書きするのに必要なスキルとは大きく異なる。現在の段階では、日本語課程や日本語教師の多くはこの事実を十分に認識できておらず、そのため授業の焦点を変更できていない。この問題が今後数年の大きな課題となるであろう。

4. 日本への留学と日本以外での勉強の関係

大学での調査に回答した学習者の74%は日本を訪れたことがあった。ただし、うち53.3%は1ヶ月未満の滞在であった。小学校においてさえ、学校の旅行や交換プログラムで日本を訪れることを既に楽しみにしていると多くの学習者が答えている。日本へ行ったことのある学習者は皆日本で友人を作り、オーストラリア帰国後も電子メールや他の媒体を通じて連絡を取り合っているとインタビューで回答している。学習者は日本での滞在で日本の様々な側面や文化に興味を持つようになり、それが学習者のその後の勉強に影響している。日本へ留学したオーストラリアの学習者の多くは(日本留学の前もしくは後に)自国で日本語を学んでいるし、またオーストラリアで日本語を学んでいる学習者の多くは、いずれ日本へ留学するか、少なくとも訪問するようになる。自国での学習が日本への留学前の準備としてどう役立っているのか、また帰国後留学経験を基に自国での学習がどう積

み重ねられていくのかについてはさらに研究が必要である。確実にいえることは、インターネットの開発によって学習者は日本にあるリソースを利用でき、日本にいる相手と非常に容易にコミュニケーションが取れ、日本からの帰国後も日本滞在時のような恩恵を引き続き受けることができるのである。電子コミュニケーションの容易さが自国での学習に置き換えられることはないが、互いの利点を高め合うよう、両者は相互に影響し合っていくと考えられる。

5. 文化と言語の学習

前述の通り、異文化対応能力は、小・中・高校の日本語カリキュラムにおいて中心となっており、大学レベルでも文化と社会はカリキュラムの一部として重要である。本調査でインタビューした小学校の学習者は日本の文化に興味を持っており、その学習を楽しんでいる。大学生も日本の文化・社会に興味を持っており、特定の状況下における表現の適切さなどの社会言語学的な点を取り上げたリソースがもっと欲しいと考えている。多くの学習者は日本語の勉強を始めた理由の中に日本の文化や社会への関心があったと述べている。学習者が正規の学習以外で日本語を見聞きする場合の素材もこういった関心を反映している。調査では、日本の生活と社会、文化・芸術、日本と日本人といったトピックへの関心が最も高かった。

しかしながら、異文化理解、異文化対応能力は日本に関する知識のみを必要とするわけではない。学習者は自らの文化を理解し、日本についてはステレオタイプにとらわれず多様な面や変化を含めて深く理解しなくてはならない。多くの著者が指摘しているように、日本語環境における自分自身のアイデンティティを表現・確立できなくてはならないのである⁴。今日では日本の文化・社会に関するテレビ番組や新聞・雑誌も日本語学習者向け教材も数多くあるが、異文化理解、異文化対応能力の向上に役立つリソースを見つけるのは非常に難しい。

6. 今後どのようなリソースが必要か

学習者及び教師が使用している、もしくは開発を望んでいるという回答が最も多かったリソース、または今日の環境に必要と考えられるリソースは以下の性質を有している。

a) 柔軟性があり、現地の授業で教材として利用できるリソース

前述のとおり、学習者は独立型のリソースではなく、授業に関連して役立つ教材を望んでいる。オンライン辞書などの参考資料や、課題やプロジェクトを仕上げるのに有用な教材などである。自主学習リソース(文法、漢字、語彙など)は、授業から外れた内容を勉強するのではなく、課程で習った項目を学習するために使用する際に最も役に立つ。

上記から一ついえることは、自主学習、授業の両方で最も役に立つリソースは、既存の課程用教材と併用できるものと推察される。個々の国の条件に合う新しい課程用教材もちろん大事である。しかし、柔軟性がなく、それぞれの国の状況や文化を考慮し

ていない独立型の教材はおそらくあまり有用ではない。

b) 楽しく有益であり、かつ学習者の関心に沿ったリソースと当該リソースを理解するためのツール

オーストラリアの学習者は興味を引くような魅力のあるリソースに慣れている。授業で学習する教材に対する学習者の最大の不満は「つまらない」である。課程とは関係しない自主学習向けのリソースは、授業で使用されるリソースよりもさらに魅力的で楽しめるものでなければならない。そうでなければ学習者は自主学習に時間を割かないであろう。学習者の関心は多岐にわたるため、それぞれの興味やニーズに基づき個別に容易にアクセスできるリソースが必要である。幸いなことに、大衆文化などの日本人向けの日本語素材がこういったニーズを既に満たしている。しかしながら学習者が理解するにはまだ難しすぎるものの中にはあり、学習者が日本人向けの素材を理解・鑑賞するためのツールがますます重要となる。

c) インターネット経由で速く安価にアクセスできるリソース、またはインターネット上の既存の日本語素材に学習者がより容易にアクセスできるリソース

前述のとおり、コンピュータ、特にインターネットは課程に関連する素材、また自主学習や娯楽のためのリソースを得る際の手段として急速に好まれるようになってきている。インターネット上の素材の多くは、柔軟性があり興味深く有益という前記 a) 及び b) の要件を満たす。しかしながらインターネット上には当惑するほど大量の選択対象があるため、学習者の欲しいものの探索、内容の理解が容易であるとは限らない。インターネットに関してはリソース自体のニーズはそれほどなく、むしろ学習者のアクセスや理解を容易にするためのツールが必要である。

d) 日本語母語話者やその他の話者と日本語でコミュニケーションする際の人的リソース及びツール

日本語の使用が強く支援される環境において日本語話者とコミュニケーションする機会は、(それが直接会ってでも電子的であっても)日本以外で日本語を学ぶ学習者にとって非常に重要である。英語が堪能で英語を使用したいと考える日本人の数は増えており、そのため学習者が日本語を使用する機会がますます減ってきている。したがって、言語選択に関して学習者には特別な援助が必要だと考えられる。新しいコミュニケーション形態(チャットサイトなど)や、電子コミュニケーションへの学習者の参加をより容易にするようなコンピュータ上のツールも必要である。

e) 文化理解及び異文化理解のためのリソース

社会文化能力を獲得する際の大きな問題は、ステレオタイプを作り出し、文化や社会の特定の一部を過度に重視しやすい点である。伝統的文化と新しい文化、主流文化と対抗文化など社会の多様性を示すリソースを学習者に紹介することが重要である。日本固有の事象を示すことも大事であるが、世界文化の一部としての日本文化を示すことも同じく重要である。国際文化フォーラムの写真素材など、人々の日々の生活を紹介する

リソースは非常に有用である。

アクセス可能で理解できる一次リソースに加え、文化的パターンや差異を規定することなしに理解させ、関心を呼び起こすような二次リソースも重要である。学習者が自らの文化と日本文化について考えるよう促し、学習者の文化リテラシー、異文化対応能力を発達させ、日本社会と交流する際の「第三の場所」⁵を創り出すのに役立つリソースがもっと必要なのである。

注

- ¹ ロビン・スペンス-ブラウン, 萩野祥子(2006)「オーストラリアの年少者日本語教育—初等・中等教育機関における日本語教育の理念と実践—」『日本語教育』128号, 日本語教育学会
- ² Kurata, Naomi(forthcoming) Language Choice and second language learning opportunities in learners' social networks, *Proceedings of the 30th Annual Congress of the Applied Linguistics Association of Australia*.
- ³ Spiliotopoulos, Valia(2005) Investigating the Role of Identity in Writing Using Electronic Bulletin Boards, *The Canadian Modern Language Review / La revue canadienne des langues vivantes*, Volume 62. Number 1, pp. 87-109
- ⁴ Morita, N. (2004) Negotiating participation and identity in second language academic communities. *TESOL Quarterly*, 38(4), 573-603.
Norton, B., & Toohey, K. (2002) Identity and language learning. In R. Kaplan (Ed.), *The Oxford University Handbook of Applied Linguistics*: Oxford University Press.
Peirce, B. N. (1995) Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.
- ⁵ Liddicoat, A., Lo Bianco, J. & Crozet, C. (1999) *Striving for the third place : intercultural competence through language education*. Melbourne: Language Australia.

台湾「日本語世代¹」の日本語環境と日本語意識

藤井 彰二(台湾大学)

1. はじめに

明治 28(1895)年から 51 年間、日本の植民地となった台湾では、この間、日本語は「国語」と呼ばれ、強制的にその普及が推進された。しかし、昭和 20(1945)年を境に、台湾には新たな「国語」がもたらされた。台湾が中華民国に祖国復帰²を果たすやいなや、台湾統治を始めた国民政府は、新たな「国語」を北京語に定め、日本化した台湾社会を中国化することに力を注ぎ、日本語の使用を禁止した。その結果、日本語が使用できなくなった台湾人は、一時的に文盲、失語状態に陥ってしまう。1980 年代以降、民主化、台湾化が進み、多言語が容認される社会となった台湾では、国語以外の方言、外国語も認められるようになり、日本語の位置づけにも変化が生じた。現在、台湾では日本植民地時代の教育を受けた「日本語世代」の年長者が、様々な場や機会、人、物といったリソースを用いて日本語と関わり、意欲的に学習している姿がよく見かけられる。日本植民地時代が終わって 60 年を経た今、彼らは何をどのように用いて、日本語と接しているのだろうか。またなぜ今なお日本語を使用し続けているのだろうか。日本語世代が高齢化し年々減少していく中、日本語教育史的な視点からもその世代の日本語学習体験や現在の日本語使用環境、日本や日本語に対する評価などについて、早急に調査を行う必要があるだろう。

独立行政法人国立国語研究所(以下、国立国語研究所)では、平成 13 年度より日本及び海外の地域(タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシア)を対象に各地域・機関と連携しながら、5 年計画の大規模な調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施した。本調査の主な目的は、学習者が日本語を学習する際、物、人、場や機会といった対象とどのように接触し、それを活用しているかを把握し、検討することである。台湾においての本調査は、日本語教育を実施している機関の学習者と教師を対象としたアンケート調査が、平成 15 年 12 月ー平成 16 年 2 月に実施され、すでにその報告書³が刊行されている。またアンケートに加え、インタビューも実施し、個々の日本語学習の状況について調査した。日本語学習者層の厚い台湾でのインタビューは他の国・地域とは異なり、学校教育機関においてだけでなく、それ以外の日本語学習者(社会人、年長者、年少者)に対しても行われた。筆者は、日本植民地時代に日本語教育を受けた日本語世代を東海大学工藤節子氏と共に担当し、25 人の方々にインタビューを実施した。

本稿では、台湾の日本語世代の方々が日本語学習、日本語能力の保持や強化に使用しているリソースの一端を明らかにするとともに、現在日本語を学んでいる若者世代、いわゆる「哈日族⁴」世代の日本語のリソースとの違いをも示した。さらに、日本植民地時代に受けた日本の教育に対する彼らの評価、また祖国復帰後、彼らを取り巻いてきた様々な言語政策下で、今あえて日本語を語りつづけることの意味についても考察した。

なお、台湾で日本語教育を受けた世代の人々を対象にした調査としては、甲斐ますみ(1997)がある。甲斐は 1994 年、日本語世代に対するアンケート調査及びインタビューを通して、彼らの言語能力の保持状況、使用言語の変化、日本語に対する評価について調査して

いる。しかし、この十年余の間に台湾の民主化、台湾化がさらに加速し、日本語の位置づけも、1994年当時とは多少異なってきた。それに伴い、かつての日本語教育を受けた日本語世代の言語生活も変化し、リソースの種類もさらに多様化してきたが、本稿ではその10年間の変化についても言及したい。

2. インタビューの方法と調査対象者

2.1. インタビューの方法

インタビューは、日本語世代の学習者が接触、活用しているリソースの調査を目的としているが、内容的にも形式的にも、比較的自由な形式で実施した。インタビューの内容としては、日本植民地時代の日本語学習の経歴、戦後から現在に至るまでの日本語使用環境の変化、日本語学習継続の動機、日本語学習の場や機会、日本人や日本語との接触状況、日本や日本語に対して考えていることなど、自由に語ってもらった。インタビューは1対1、もしくは1対2での対面形式、時間は一人あたり約40分から1時間程度、使用言語は日本語で行った。インタビューはカセットテープに録音し、それを文字化した資料をもとに分析を行った。

2.2. 調査対象者

表1は、調査対象者の年齢別内訳である。

表1 調査対象者年齢別内訳(人)

年齢層	60～69歳	70～79歳	80～89歳	90歳以上	合計
男性	0	10	4	1	15
女性	3	5	2	0	10
計	3	15	6	1	25

上記25名の調査対象者は、知人、知人からの紹介、さらには財団法人交流協会(以下、交流協会)の閲覧室、日本語勉強会「友愛会⁵⁾」で偶然会った方々である。なお、その母語の内訳は、閩南語17人、原住民言語3人(アミ語2人、タイヤル語1人)、日本語3人、客家語2人であった。なお、筆者は台湾北部の台北市・台北県の16人、台湾南部高雄市の4人に対し、工藤氏は高雄市在住の5人の年長者に対して、インタビュー調査を実施した。

表2は25人の調査対象者の簡単なプロフィールである。

表2 調査対象者のプロフィール

調査対象者	出身地・現住所 (母語)	出生年	職歴等	学歴 (終戦時・最終)
Aさん (男)	台南県・台北市 (閩南語)	1927年 (昭和2年)	医師	大学医学部
	現役の医師。妻との会話は日本語。週に3日程度、交流協会の閲覧室に通い、日本語の新聞、雑誌を読む。老人を対象とした医学・健康関係の講演をよく日本語で行う。趣味は日本への個人旅行。			

Bさん (女)	台北県・台北県 (閩南語)	1928年 (昭和3年)	台北州庁税務課、 (戦後)台北県 財政課	公学校、職業学校 (1年間)
	日本植民地時代には、日本人上司の下、台北州庁税務課で働いた。現在宗教団体慈済の活動に参加し、他の信者と日本語で会話したり、機関誌を日本語で読んだりする。趣味は、NHKのドラマと日本旅行。			
Cさん (男)	苗栗県・台北県 (客家語)	1924年 (大正13年)	不明	台北工業学校
	戦時中、福岡県久留米師団に入隊。趣味は日本語の辞書を読むこと、日本語で懐メロを歌うこと。約700曲を収めた歌詞集を手書きで作成、全曲歌えるそうである。			
Dさん (男)	台南・台北市 (閩南語)	1935年 (昭和10年)	機械、電子部品関 連の会社	国民学校、大学 電子学
	機械、電子部品会社で資材購入担当。日本へは150-200回程度出張。NHKや衛星放送のテレビ番組で絶えず新しい日本語の情報を取り入れている。英語も堪能。			
Eさん (男)	日本東京・台北市 (日本語)	1933年 (昭和8年)	電力研究所所長	小学校、アメリカ の大学院
	日本生まれ。中学生の時、台湾へ戻る。電力会社に勤務し、高電圧を専門とした。趣味は読書で、特に日本の推理小説が好き。妻との会話は8割が日本語。英語も堪能。			
Fさん (女)	台北市・台北市 (閩南語)	1939年 (昭和14年)	喫茶店経営	幼稚園、大学
	Eさんの妻。日本語は日本留学の父親から学ぶ。終戦時、幼稚園児。趣味はカラオケと日本のテレビドラマ。夫との会話は8割が日本語。日本語力は簡単な日常会話程度で、複雑な内容は、理解できない。			
Gさん (男)	花蓮・台北市 (原住民・アミ語)	1933年 (昭和8年)	電力会社勤務	公学校、高校
	終戦時12歳。世界文学全集を日本語で必死に読み、日本語を学び続けた。電力会社の送電線関係の技術者。日本の電力会社へ研修に行ったことが忘れられない思い出。			
Hさん (女)	花蓮・台北市 (原住民・アミ語)	1937年 (昭和12年)	主婦	公学校、中学校
	Gさんの妻。父親が戦前、鹿兒島で飛行機整備士をしていた関係で、家ではよく日本語を使用した。日本語は話すのは苦手だが、聞くのはほぼ理解できる。皇室の写真集を見るのが好き。			
Iさん (男)	台北県・台北県 (原住民・タイヤル語)	1934年 (昭和9年)	教会関係の病院で 歯科助手・コック	蕃童教育所 ⁶ 、 教会病院の歯 科助手訓練
	台北市郊外烏来地区のタイヤル族。同年齢以上の村民とは今でも日本語で会話する。日本人観光客と親しくなり、その日本人が経営する割烹料理屋に雇われて、日本で数年間コックとして働いたこともある。			
Jさん (男)	嘉義市・台北市 (閩南語)	1926年 (大正15年)	中国石油公司	開南商業学校
	神奈川県大和市高座で飛行機部品製造に従事、終戦までの約2年近くを日本で過ごす。戦後は短波放送で日本語を聞いていた。早起き会・温泉場では他の老人と日本語で話す。			
Kさん (男)	屏東・台北市 (閩南語)	1929年 (昭和4年)	編み物工場、通 訳・翻訳業	日本の中学校、 日本へ短期留学
	中学時代を日本で過ごす。昭和21年に帰国。日本の編み物機械の技術を学び、編み物工場を経営、主に日本へ輸出する。現在は日本語翻訳・通訳の仕事をしなが、日本語の勉強会「友愛会」の事務局長を務める。			

Lさん (女)	台南市・台北市 (閩南語)	1932年 (昭和7年)	日系企業台湾支社 責任者, 幼稚園教 諭, 西陣織師匠	長栄女学校(ミ ッション系)
	日本語勉強会「友愛会」会員。夫との会話は日本語。職業上, 毎日日本語を使用している。台湾の宗教団体に同行し, 福田元首相との会見で通訳を務めたこともある。英語も堪能。最近日本語で自伝を出版。			
Mさん (男)	嘉義・高雄市 (閩南語)	1927年 (昭和2年)	ちぎり絵講師, 日 蓮正宗信者, 日本 語講師	不明
	高雄市老人センターでボランティアの日本語講師を務める。日蓮正宗の信者として教義の翻訳や日本での集まりの際に日本語を使用する。ちぎり絵の講師も務める。教材はすべて日本語。日本の演歌が好き。			
Nさん (男)	嘉義・高雄市 (閩南語)	1923年 (大正12年)	嘉義高校教員, 日 本語講師, ゲート ボール審判	台北高専, 高雄 市空中大学
	高雄市老人センターでボランティア日本語講師を務める。ゲートボールを台湾に紹介した。世界大会優勝の経験もある。ルールブックを中国語に翻訳。民間大使の会に参加し, 世界中の人と交流している。立正佼成会信者。			
Oさん (男)	新竹・高雄市 (閩南語)	1933年 (昭和8年)	人形・おもちゃ関 係の会社	国民学校, 高雄 市空中大学
	ビジネスやロータリークラブの関係で, 日本人とつきあう機会が多い。趣味はカラオケで日本の演歌を歌うこと。交流協会のイベントにもよく参加する。現在高雄空中大学で日本語会話・翻訳を履修中。			
Pさん (男)	高雄・高雄市 (閩南語)	1931年 (昭和6年)	なめし革加工, 税 務署, 書道家, 日 本語ガイド, 日本 語教師	中学, 高雄市空 中大学, 現在高 雄第一科技大学 大学院在学中
	妻との会話は日本語。日本書道の師範。少年野球指導で日本人との交流も多い。現在老人センターで日本語講師を務めるかわら, 大学院で学ぶ。本人曰くボケ防止のためとか, 通訳ガイド試験(日本語)合格者でもある。			
Qさん (男)	新竹・台北市 (閩南語)	1914年 (大正3年)	台湾大学電気学科 名誉教授	東北帝国大学
	亡き妻は日本人。家庭での会話は日本語だった。現在一人暮らしだが, 近所に娘がおり, 互いの会話はすべて日本語。趣味は毎日NHKとCNNのニュースを見ること。時代劇も好き。日本時代に差別は感じなかったと言う。			
Rさん (女)	桃園・台北県 (原住民・日本語)	1940年 (昭和15年)	看護婦	看護学校
	原住民タイヤル族だが, 日本語で育つ。タイヤル語はあまりできない。夫の父親は原住民(タイヤル族と日本人の混血)で初めての医者。夫の仕事の関係で日本で10年間生活した経験がある。日本の知人と連絡を保つ。			
Sさん (女)	台北市・台北市 (客家語)	1935年 (昭和10年)	電気工事店経営	国民学校, 女子 高校
	日本植民地時代には国語常用家庭。改姓名し, 「富永君子」と名乗った。兄弟姉妹の多くが, 日本で生活している関係で, 年に何度も日本へ旅行する。趣味はテレビで旅行番組, 料理番組を見ること。			
Tさん (男)	台北県・台北県 (閩南語)	1916年 (大正5年)	林業関係, 雑貨屋	台北第二中学校
	現役時には日本のライオンズクラブとよく交流した。現在の趣味は旅行。年に2,3回, 日本へ出かける。NHKの歌番組が好き。長老教会の信者で, 他の信者とよく日本語で会話する。			

Uさん (女)	満州・高雄市 (日本語)	1928年 (昭和3年)	薬局	満州の女学校
	父の仕事(医者)の関係で、満州で生活。家庭では日本語を使用していた。現在でも満州時代の女学校の同窓会に参加する。夫、娘との会話では日本語を使用する。趣味は健康・料理関係の日本語の雑誌を読むこと。			
Vさん (女)	高雄・高雄市 (閩南語)	1928年 (昭和3年)	農協で会計	家政女学校
	夫、兄弟姉妹とは日本語で会話。同窓会で日本へも出かける。日本の同級生と手紙のやりとりもある。NHKのニュースを見ることが習慣になっている。すもうが好き。外来語が苦手。			
Wさん (男)	高雄・高雄市 (閩南語)	1924年 (大正13年)	不明	高雄中学、台湾大学
	妻との会話は日本語。同窓会で日本へ行くこともある。『文芸春秋』を定期購読している。NHKでニュース、のど自慢、すもうを見るのが好き。最近日本語には外来語が多すぎると感じている。			
Xさん (女)	高雄・高雄市 (閩南語)	1927年 (昭和2年)	銀行	高雄高等女学校
	女学校の同窓会に積極的に参加している。日本の婦人雑誌を参考にして、日本料理を作ってみたりする。小説も読む。外来語がよくわからないので、辞書を買った。日本旅行の際には温泉めぐりをする。			
Yさん (女)	高雄・高雄県 (閩南語)	1924年 (大正13年)	教員	師範学校
	高雄高等女学校の同窓会に毎回参加。日本の同窓生とも電話、手紙で連絡を取り合う。現在高雄県で退職した教員に雑誌や新聞を使って日本語を教えている。日本時代の厳しい教育を懐かしく思う。			

3. インタビュー結果と考察

3.1. 個人が持つ日本語リソース

インタビューの結果は、調査対象者ごとに、インタビューの文字化資料をもとにマッピングの手法で分析を行った。ここでは紙面の関係でAさんとIさん(以下、敬称省略)の日本語との接触状況について図と説明文で紹介する。説明文の(場)、(人)、(物)はそれぞれ、場のリソース、人のリソース、物のリソースを表す。図1は、Aの持つ日本語学習のリソースである。図1は、Aがどのような人、物、場や機会に接触しているかを表している。

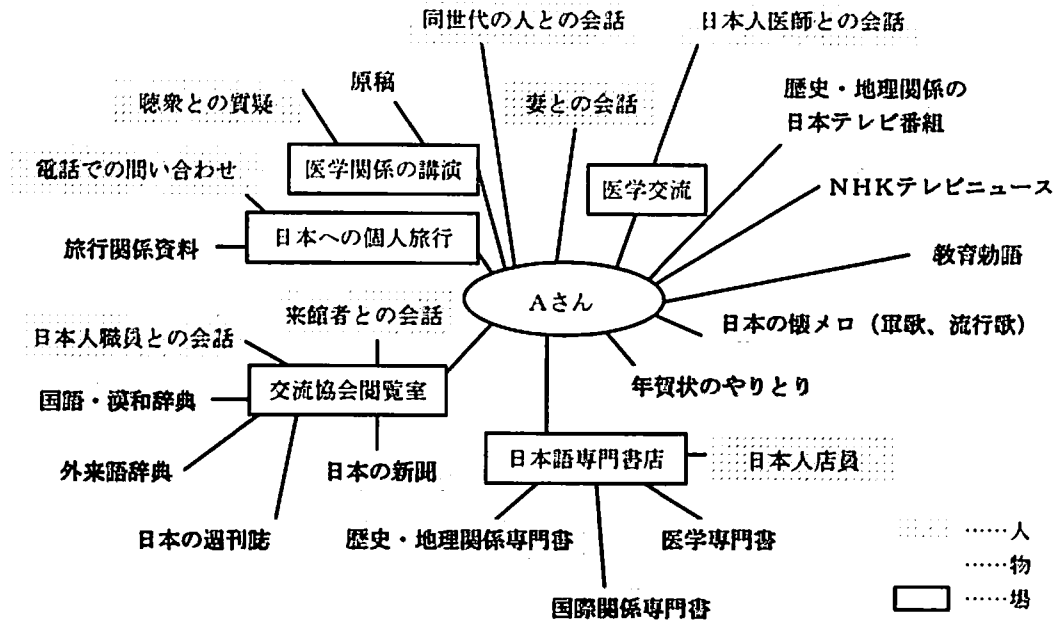


図1 Aさんの日本語リソース

Aは、78歳の現在も現役の開業医である。週に3日は、患者を若い医師に任せ、交流協会台北事務所の閲覧室(場)で、日本の新聞、週刊誌(物)を国語、漢和、外来語辞典(物)片手に閲覧している。分からない言葉は、メモ帳(物)に書き留めておき、知り合いの交流協会の日本人職員(人)にまとめて尋ねるほどの勉強家である。来館者には、Aのように、日本語の本を閲覧に来る日本語世代の老人(人)が多く、その方々とも日本語で会話を交わしている。交流協会に置いていない歴史、地理、国際関係、医学等の専門書(物)は、日本語専門書店(場)で買い求めている。そこでも日本人店員(人)に書名や新書の情報などについて尋ねるなどして積極的に日本語を使用している。

家庭(場)での妻(人)との会話は、日本語である。妻も日本語世代で、日本の大学を卒業した方である。二人とも日本に友人(人)が多く、年に一度は年賀状(物)で連絡を保っている。家ではテレビ(物)で日本語のニュースや歴史、地理関係の番組(物)をよく見ると言う。日本の懐メロ(物)もよく歌うそうである。趣味は日本への個人旅行(場)で、自分で旅行関係の資料(物)を取り寄せたり、旅行先の情報を電話(物)を使って、直接関係機関等の担当者(人)に問い合わせたりもしている。

専門の医学関係では、日台間の医学交流(場)の機会に、日本人医師(人)と語り合い、老人大学等での講演会(場)では、講演の原稿(物)は日本語で準備し、聴衆(人)との質疑応答等でも日本語を使用することが多いとのことである。

Aは、コンピューターやEメールは使用していない。自分で「書く」という作業が脳の刺激にとっても良いのだという信念を持っている。日本統治時代の教育については、「強制」でなく「奨励」、「差別」ではなく「区別」があった。たとえば、学校に入学するよう、先生が直接村に誘いに来た。入学時に日本語がほとんどできなかった台湾人児童と日本人児童が共に学ぶなら、学習効果が上がらないので、どうしても区別する必要があったのだと言う。また当時の教育現場で学識だけでなく、礼儀作法、衛生観念などしっかり教えられたことが自分の人生に大きなプラスとなった、今でも「教育勅語」(物)は心の中にしっか

り根を下ろしていると述べている。

図2はIの日本語リソースである。

Iは、台北市郊外の烏来に住むタイヤル族で、現在70歳、無職である。烏来の蕃童教育所で6年間日本教育を受けた。当時の日本名は、「高山 登」である。卒業後、駐屯していた日本軍の馬の世話をするなどの仕事をしていた。終戦後、教会病院(場)のドイツ人宣教師(人)から歯科助手の仕事日本語で教わり、東部の花蓮を中心に原住民(アミ族)を対象とした巡回歯科治療(抜歯等)を行っていた。そこでの患者(人)との会話はすべて日本語だったそうだ。12年間花蓮で働いた後、烏来に帰ったIは、キリスト教の教会(場)に通い続けた。教会で用いる聖書(物)は日本語であり、牧師(人)の説教(物)も他の信者(人)との会話も日本語(一部タイヤル語)であった。

一時日本語の使用が国民党政府により禁止された時期にも、日本の短波放送(物)を聞いたり、烏来へやって来る日本人観光客(人)と軍歌など(物)を歌ったり、観光客が残っていた日本語の雑誌や本(物)を読むなどしたりして、日本語との接触を保ってきた。また烏来の川魚料理を案内したことがきっかけとなり、割烹料理屋(場)を営む日本人(人)に誘われ、神奈川県逗子市で3年間コックをしたこともある。そこでは、日々他の日本人スタッフ(人)と日本語で話し、帰国した今でも手紙(物)や電話(物)で連絡を取り合っている。日本で生活した時の日本人との交流が今でも忘れられないと、懐かしそうに語っていた。

Iの趣味はカラオケ(場)で日本の懐メロや軍歌(物)を歌うことだそうだ。それ以外の日本語との接触はテレビを通してで、NHKの番組や日本のドラマ(物)を毎日見ているとのことである。しかし、テレビ番組で多く使用される外来語や時代劇で使用される日本語の古い言い回しは、よく分からないと言っていた。分からないことばはメモ(物)しておいて、部落内の先輩(人)に聞くのだそうだ。Iは、現在でも部落の老人や親戚(人)とはよく日本語で話している。日本時代の教育については、日本精神と礼儀が好きだと語った。

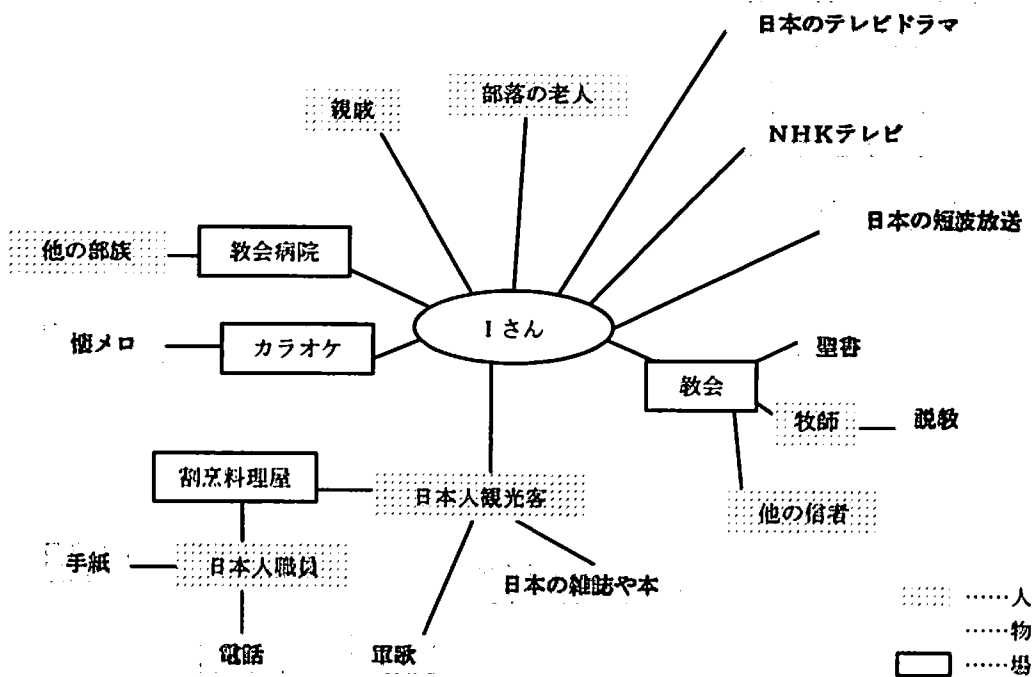


図2 Iさんの日本語リソース

図 1, 図 2 を見ると, A, I いずれも趣味(読書, 旅行, カラオケ)や職業(医師, 歯科助手, コック)と関連した場や機会の日本語リソースを持つことによって, そこから人, 物のリソースへと広がりを見せ, 豊富な日本語使用環境が生み出されている様子がわかる。また I のように日本人観光客という人のリソースと偶然知り合い, 会話したことがきっかけで, 日本の割烹料理屋という場のリソースが生み出され, そこからさらに人, 物のリソースへと広がっていく例も見られる。

インタビューから, A, I 以外の方々もほとんどが毎日の生活の中で, 家族や同世代の知人との会話で日本語を使用しており, テレビや雑誌, 書籍などで日本語に接していることがわかった。もちろん, 個々の持つリソースを分析すると, 職業, 日本語学習歴, 性別, 性格, 健康状態によってかなり個人差が見られる。傾向としては, 職業(特に A, D, E, K, L, M, O は現役), 旅行(C, Q 以外全員), 宗教(B, I, M, N, T), 趣味・娯楽(全員), 交流(C 以外全員)等で外に出かける機会が多くなると, それだけ場のリソースが増え, そこから広がる人, 物のリソースにより, 更に多くの日本語使用の機会が開かれるようである。それに反して, 専業主婦(H, R)や高齢(Q), 健康上の問題(C), あるいは内向的な性格等で, 外の社会との接触が限られる場合, 場のリソースをさほど利用できず, その結果, 限られた人, 物のリソースしか持たなくなってしまう。また日本植民地時代の日本語学習歴が短い人(F, H)の場合は, 戦後, 国語(北京語)で教育を受けた関係で, 日本語のリソースを積極的に求めることもない。

調査対象者のほとんどが, テレビや新聞・雑誌・書籍等読み物という物のリソースを活用しているが, 「この頃の日本語には外来語や略語が多くてわかりにくい」という意見が多かった。それに対してどのように解決しているかについては, 辞書・電子辞書(A, C, G, K, M, P, X), インターネット(D, G, K, P), 英語から推測(D, E, L, Q, U), 人に聞く(I, K)で意欲的に調べること等で, さらに, 物, 人のリソースを広げる方々もいた。

紙面の都合で 25 人個々の日本語リソースの紹介はできないが, 以下の表に, 調査対象者全体の場, 人, 物のリソースを分類し, まとめた。

3.2. 調査対象者全体の日本語使用状況

表 3 は, 25 人の調査対象者の持つ日本語リソースをまとめたものである。

表 3 調査対象者全体の日本語リソース

場	人	物
日本旅行(個人旅行, 団体旅行, 親族訪問, 同窓会)	日本人, 親族, 旅行仲間, 同窓生, 日本の旅行社スタッフ	旅行パンフレット, ガイドブック, 電話, ファクス
宗教(キリスト教長老教会, 慈濟, 日蓮正宗, 立正佼成会)	牧師, 僧侶, 他の信者	聖書, 賛美歌, 機関誌, 経典, 説教, テープ, ビデオ
職場(日系企業, 日本の取引先, 日本出張, 翻訳業)	現地日本人スタッフ, 取引先スタッフ	電話, ファクス, Eメール, 技術書, 翻訳資料, 辞書, インターネット, ワープロ
健康・運動(ゲートボール, 早起き会, ゴルフ, 少年野球, 温泉)	同世代の仲間, 日本のチームメンバー	日本語ルール集

趣味・娯楽(カラオケ, テレビ, 読書, 和紙ちぎり絵, 書道, インターネット)	日本人, 仲間, 生徒	日本の歌(特に演歌・軍歌), CD, テープ, NHK テレビ(ニュース, ドラマ, のど自慢, 歌謡ショー, 時代劇), 日本語の新聞, 雑誌, 小説, 文学全集, 皇室関係の本, 日本語教材, 手本, Eメール
教育・資格(大学, 大学院, 老人センター, 勉強会)	教師, 同級生, 生徒, 試験官	教科書, 日本語専門書, 日本語資料, 辞書, 講演, 試験(大学, 大学院, 漢字検定, 通訳ガイド試験)
家族	親, 配偶者, 子供, 親戚	電話, 手紙, ファクス, Eメール
交流(地域社会, ボランティア, ロータリークラブ, ラインオンズクラブ)	近所の同世代, ボランティアの仲間, 日本のクラブメンバー, 日本人観光客	電話, 手紙, 辞書

調査対象者全体の日本語リソースについて概観すると、日本語世代の日本語使用環境は、日本の年輩者のそれと大差ないことがわかる。いやむしろ日本の老人以上に積極的に自由に日本語に接することのできるようになったこの環境を活用しているようにも見える。日本語教育を受けたその世代にとっては、日本語はそれだけ生活に欠かせない言葉なのであろう。特にほぼ全員共通の日本語リソースとしてあがった日本旅行、テレビ(特にケーブルテレビを通し、リアルタイムで見られるNHKの番組)は、日本語世代と現在の日本をつなぐ大切な役割を果たしているようである。

3.3. 若者世代の日本語リソースとの比較

台湾では、1996年8月にケーブルテレビ局が正式に許可されたことを受けて、日本のテレビ番組が堂々と放送されるようになった。この頃を機に若者たちを中心に、テレビや雑誌、インターネットを通して入ってくる日本製の音楽・トレンドドラマ・アニメ・コミック・ファッション・ゲーム・グルメ等が大流行し始め、1999年頃には「哈日族」という社会現象が起こった。台湾の教育部(日本の文部科学省に相当)は、高校生の国際理解、異文化理解の一環として、1999年9月から普通高校での第二外国語教育推進五カ年計画(2005年より第二期五カ年計画がスタート)を実施した。これにより高校生は第二外国語(日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語)を自由選択科目として学ぶことができるようになったが、高校での日本語履修者は、他の外国語を後目に7割以上を占めている。高等教育機関の日本語関連の学科やコース設置校数も1970年代までの4校から、現在の43校にまで増加している。交流協会の『台湾における日本語教育事情調査報告書』平成15年度版によると、日本語教育を実施している機関における日本語学習者数は、128,641人⁷にのぼる。

上述の通り、国立国語研究所は、台湾で日本語教育を行っている機関の日本語学習者と日本語教師を対象としたアンケート調査を、平成15年12月ー平成16年2月に実施したが、すでにその報告書が刊行されている。報告書によれば、中等教育機関・高等教育機関・学校教育以外機関に属する若者世代の日本語学習者が、「学習者が日本語学習のために現在使っているもの」(物のリソース)に関しては、(1)学習参考書・問題集 (2)テレビ番組 (3)歌 (4)マンガ・アニメ (5)映画 が上位に挙がっている⁸。この順位から、若い世代に

とっては、日本語は学習対象言語であるとともに娯楽を楽しむための言語という特徴が見られる。一方、日本語世代にとっての日本語は、日々の生活を送るために不可欠な言語であり、使用する「物」も電話、ファクス、手紙、Eメール、辞書、旅行パンフレット、聖書、説教等、種類が多岐にわたっている。

また若者世代の人のリソースに関しては、「日本語を使つてのやりとりの有無」の質問に、「いいえ」が54.6%と半数以上を占め、「はい」の場合も、やりとりの相手は「学校の友人」、「日本語の教師」、「知り合い」といった順で、日本語学習の場に関係する人とのやりとりが主であることがうかがえる。やりとりをする頻度は、週に2,3回が多く、続いて週に1回、月に2,3回の順である。またやりとりをしていない学習者の理由としては、「日本語を使う相手がいない」、「自分の日本語力が充分でないから」の理由が大部分を占めており、人との接触には消極的な態度が見られる⁹。一方日本語世代は、日本語力に問題がないためか、積極的に日本語を話せる人との交流を求めている。家族の成員、宗教家、日本人医師、日本人スタッフ・技術者、日本人観光客、(閲覧室、日本語勉強会、早起き会、講演会、温泉で出会う)同世代の老人等、やりとりの相手は多様である。

「場」のリソースについては、「利用経験の有無」は、若者世代では、「無」が58.9%を占める。「有」の場合、(1)日本語カラオケ (2)日本・日本語に関するイベント の順¹⁰である。カラオケは、友人との娯楽の場であり、日本・日本語に関するイベントは学校の活動の一部としてであろう。一方日本語世代は、上述の通り、旅行、宗教活動、職業、健康・運動、趣味・娯楽、教育・資格、家族、交流と多様な「場」を有している。

3.4. 1994年調査結果との比較

甲斐(1997)の行った1994年当時の調査では、台湾老年層の日本語維持方法については、(1)歌を歌う (2)雑誌や本を読む (3)ビデオを見る (4)日本へ旅行する (5)日本人と会話する (6)新聞を読む (7)普段日本語で話をする の順番¹¹で挙げられている。

この10年余の間に台湾社会は大きく変化した。例えば政治的環境が変化し、メディアや交通手段も大きく発達した。例を挙げると、1996年3月の総統直接選挙で李登輝の民主化へ向けた政策が頂点を迎え、1997年には、51年間の日本植民地時代を客観的に評価し直した歴史教科書『国民中学 認識台湾(歴史篇)』(以下、『認識台湾』)が登場した。そこには「日本語は台湾人の生活言語にはならなかった」、「台湾人は終始日本語を外国語とみて、日本語を学んでも同化されることはなかった」としながらも、「日本語は台湾人にとって近代化された知識を吸収する主要な手段となり、台湾社会の近代化を促進した」¹²と説明している。今回インタビューの対象となった日本語世代にとっては、日本語はまさに知識を取り入れるための手段である。民主化、台湾化政策が推進されることにより、台湾で使用する各種言語や方言が見直され、日本語も台湾社会の中の一外国語として認められるようになり、今や正々堂々と使用できるようになった。また1996年8月に、ケーブルテレビが正式に許可されたことを受けて、日本のテレビ番組が放送されるようになったことも大きな変化である。さらにインターネットがこの10年余で急激に発達、普及した。

こうした変化の中、今回のインタビュー調査からは、日本語世代が普段から、家族、友人、日本人と直にまたは電話、ファクス、Eメールで日本語を使用する頻度が増加していることが明らかになった。10年前、普段の日本語の使用は、個人レベルでの狭い範囲であ

ったものが、現在では、公の場でも自由に使用できるようになり、日本語使用の場・機会が増えている。その結果、リソースの幅も人、物へと広がり、種類も増加している。また娯楽面ではビデオに替わり、テレビが日本語世代の「物」のリソースとして大きな位置を占めるようになった。特にリアルタイムで見られるNHKの番組はほぼ全員が利用しており、彼らが現在の日本と接触し、日本の今を知るための大きな役割を果たしている。またそれでは物足りず、衛星放送を利用して、さらに多くの情報を求めている方(D)もいた。さらに、25人中4人(D, G, K, P)はインターネットやEメールを日本語との接触の手段としており、これもテレビと共に挙げられるこの10年間の変化の大きな特徴と言える。

4. 日本語世代の日本語意識

今回のインタビュー調査の内容については、自由な形式で実施されたが、日本語世代が日本語を使用し続けている理由について、可能な限り尋ねた。以下、日本語を今でも日常的に使用する理由について調査対象者自身の言葉を引用する。

- A:「私の年輩の友達はみな日本語話せるから、私なるべく、でない日本語忘れて、日本語いわゆる進歩しなくなるといけないから。」「もうほんとに日本語だけはもう、今日本語で書く、日本語で話す、非常に便利です。思う存分に表せる。私今スピーチでもね、日本語で話す。」
- B:「やはり日本語の方が便利ですね。時々ね、新聞を見るときね、時々日本語で解釈するの私。」
- C:「僕はね、誰であろうが、日本語で使うときは、正確な日本語を使える自信があるんですよ。」
- D:「(情報を取り入れるのは)やっぱり日本語が速い。」
- E:「うちの娘と息子は日本語ができない。だから僕と家内が日本語でしゃべるっていう始まりは、彼らに知られたくないことを2人で話す。」
- G:「私としてはですね、もうすぐびんと来るのがね、日本語の方がね、中国文よりかね。」
- I:「昔の人は、あの時は日本の教育受けたからね、なかなか日本語言うんだ。中国語は、言ってもやっぱり日本語話すね。その精神があるで。」
- J:「李登輝さんが総統になって、それで初めてもう日本語…。自由に、自由よりもおおっぴら…。」「ほんとに今は自由に何でも、(日本の放送も聞けるし、日本語の番組もテレビで見ることまで)幸せですよ。もう。僕らの年配だったらとても幸せです。というのはね、国語はね、もちろん私できますよ。話せますよ。ところがね、話すにしてもね、僕の国語はね、…もう少し上手に表現しようということを話すとなるとね、ちょっとやっぱり無理ですね。」
- K:「我々は、日本語が、我々の今のこの、いわゆるものを書く、字を書くその基礎になってるわけですよ。それが、中国国民党の政権の時代に、完全ではないけど、ある面では、束縛、抑制を受けてた。まあおおっぴらに話す、日本語を話すことが、いわゆるまかりならんと。」「会に来ると、こういったお年より連中ばかりこう、こころおきなく日本語でみな会話できるということが楽しいんじゃないかと思うんです。」

- L:「いわゆる、私のマザータングっていうのは日本語でしょ。思想も考え方も、そういう風になってしまうんじゃないですか?」「主人と話す場合は、日本語でないとお互いに通じない。」
- O:「私はね、やっぱり日本人が大好きで、日本語をやっぱり、最初から習うという気持ちが強かったんです。やっぱり日本にね、それから先輩の人たちとよく、一緒になるんです。それでそのうちに習って。」
- P:「(家内が)嫁に来た時から、普通は日本語でやっています。今でも、夫婦喧嘩は日本語でやっています。…日本語が定着して。」
- Q:「おそらくね、私ほど日本を理解している人はいないと思う。小さい時から日本教育を受け、日本の子供たちと友達になってからね、遊んだりして、そしてずっと大学まで行って日本教育受けてる。」「今よく、日本時代にいい学校に入れなかったことをね、日本はなんか自分たちは入れてくれなかったとかね、差別したとか言うけど、あれはうそですよ。あれはうそだ。ほんとに教育家はね、日本の教育家は私は偉いと思う。非常に公平に扱ってくれた。」
- R:「(タイヤル語は)話せない。子供時代からもうずっと日本語ですよ。子供時代から日本語で、あと国民党入ってきたから、日本語しゃべっちゃいけないの。」
- S:「台湾で今こう(日本語を話すのが)自由になっているのはね、李登輝先生のために、李登輝総統のために、台湾人は今とっても自由でしょ。」
- T:「いやもう、昔の日本人なの。30歳までは純粋なる日本人なの。…私、台湾よりも、日本のほうが詳しいぐらい。」
- U:「やっぱり環境です、昔(日本語を使っていた)…。」
- V:「何て言うの、小学校から、公学校からずっとでしょ、小さい時から覚えるの。今の北京語だと忘れる。英語でもそうよ。」
- W:「いい言葉ですよ。本当にね。じつにきれいな言葉…。」「北京語なんか…ああいう…話さないです。ここではこの言葉使ってるから、もっとボロクソに言うよ。」
- Y:「やっぱり終戦後になるとみんながね、やっぱり日本の教育は成功してると。やっぱりこうして終戦後に大陸から来た人たちはやっぱり民主、民主と、口では民主、民主、自由、平等と叫んでいる。でもその人たちが自由って、何でもしてもいい、かまわないっていうような思想が違うのね。」

日本語を今なぜ使用するのか、その理由をインタビューすることにより、調査対象者個々の日本語に対する意識、日本植民地時代の教育への評価、彼らが経験した言語生活の変化などについての考えも聞くことができた。彼らの言葉から次のように日本語使用の理由を分類できるであろう。

- (1) 日本語が今でも知識や情報を取り入れる一番便利な言語である。
- (2) 日本語でしか十分に考えを言い表せない。「国語」(北京語)の能力に限界がある。
- (3) 自分は日本人だったのだから、思想・精神は今でも日本人である。
- (4) 日本語能力を保持し、さらに向上させたい。
- (5) 李登輝政権以来、公の場で自由に日本語が話せる時代になった。
- (6) 自分たちの受けた日本の教育は、中華民国のものより勝っている。

- (7) 日本語ができる者同士の仲間意識。
- (8) 「国語」(北京語)、中国人が好きではない。

上記の日本語使用の理由からわかるのは、日本語世代が基本的に「親日」的であるということだ。台湾で日本語世代に接するなら、誰もがそのことを実感するであろう。戦後の軍人戦後補償問題、従軍慰安婦問題、教科書問題、在日韓国・朝鮮人の指紋押捺拒否問題等で、筆者は、帝国主義、植民統治の「負」の側面を強く認識してきたが、台湾の日本語世代の「親日」的態度は意外であった。いったいなぜ日本語世代は親日的なのだろうか。津田勤子(2005)は、筆者同様、台湾在住の日本人として、「日治世代」と出会い、また台湾で小林よしのり「台湾論」論争を目の当たりにしたことをきっかけに、「親日」の意味と親日的日治世代の見方を再検討し、修士論文にまとめた。津田は、10人の「親日」家をインタビューし、日治世代の「個」としての自己概念と日本との関係を心理学理論の手法で分析している。津田によれば、親日的日治世代にとって、日本が表象するものは、(1)優れた道徳性 (2)進んだ近代性であり、日本語が表象するものは、(1)植民地統治されたという歴史的事実 (2)社会的地位の高さである。また「日本精神」については、その世代が植民地統治を受けた時代の戦前日本の精神であり、彼らにもその精神が植え付けられたことに誇りを感じるとともに、日本精神が衰えた戦後の日本にはいらだちを感じている。また「親日」であることの意味については、「日本」がまさに彼らの生きてきた半生であり、自己そのものだとは結論している¹³。

筆者ならびに津田のインタビューからは、調査対象者が、日本や日本語について語る時、それを中華民国、北京語という戦後の「国語」との比較で語っていることがわかる。藤井久美子(2005)は、台湾にもたらされた二つの「国語」を比較することにより、台湾社会における日本語の位置づけについて考察している。藤井によると、日本語と北京語という二つの「国語」の類似点は、「国語」が同化の手段であったことと「国語」への尊重により、台湾の言語を方言として差別したことである。また両者の違いは、日本語には、日本精神とともに近代文明志向が含まれていたのに対し、北京語は精神化のみが強調され、近代文明の概念が希薄であったことを挙げている。「日本が、二等臣民とはいえ台湾の人々を「一視同仁」して「皇民」化しようとしたのに対し、国民党政府は、台湾をあくまでも基地としか考えていなかったのである¹⁴。」「祖国」であったはずの中華民国が、台湾を再植民地化したことに対し、日本語世代は、かつての「国語」であった日本語を、その外来の少数派である国民党政権に対する抵抗の道具として、また台湾人アイデンティティの象徴として使用し続けたのである。そして、自らが日本語世代である李登輝が総統に就任し、民主化、台湾化政策が推進されることにより、日本語が台湾社会の中の一外国語として認められ、彼らが今や公にも正々堂々と日本語を使用できる時代が到来したのである。上記の日本語世代の発言からは、今日本語を自由に話せることの感慨を感じ取ることができるであろう。

5. おわりに

本稿では、国立国語研究所の調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」

の一環として実施した台湾の日本語世代へのインタビューを通して、その世代が接し、活用している日本語のリソースを明らかにするとともに、日本植民地時代に「差別教育」を受けたにもかかわらず、彼らが今なお日本語を使用している理由についても考察した。現在、日本語は台湾社会の中で一つの外国語として認められ、老若を問わず、多くの学習者に学ばれている。しかし、日本植民地時代に教育を受けた日本語世代にとって、日本語は単なる学習言語とは異なり、「日本精神」が注入された言語であり、今でも日々の生活のため、教養のため、また近代文明を享受するための欠かせない言語なのである。

現在、台湾では「台湾歌壇」、「台湾俳句会」、「台湾川柳会」といった日本語文芸活動や「友愛会」のような自発的な勉強会、さらには、日本語による自分史の出版など、日本語世代による日本語活動が盛んに行われている。しかし今後、日本語世代が減少していく中、また世界的な潮流として英語教育が以前にもまして重視される中、日本語は台湾でどのような役割を果たしていくのだろうか。さらに若者世代の日本語学習は、一時的なブームとして単にポップカルチャーを楽しむだけの手段に終わってしまうのだろうか。我々は日本語教育関係者として、今こそこれら台湾における日本語教育の将来についてもう一度真剣に考え直す必要があるであろう。筆者は自分自身の課題として、今後、日本語教育史の観点から、日本語世代の日本語意識が家族や次世代に及ぼしている影響について再考したいと考えている。

- ¹ 台湾では、日本植民地時代に日本教育を受けた世代を「台湾日本語族」、「日本系台湾人」、「皇民世代」、「日治世代」等と呼ぶことがあるが、本稿では、彼らの日本語学習の経歴やその環境に焦点を当て、一般的に広く用いられている「日本語世代」を使用する。
- ² 厳密に言えば、中華民国は台湾の祖国ではない。なぜなら台湾は、日清戦争後、清から日本に割譲されたのであり、中華民国は、日本の台湾植民地統治開始後、中国大陸で成立したからである。
- ³ 国立国語研究所(2005)『平成16年度日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 台湾アンケート調査集計結果報告書』(日本語版・中国語版)
- ⁴ 日本大好き族の意。1999年頃から起こった社会現象で、「哈日族」の「哈」は、「大好き」、「あこがれる」、「かぶれる」、「崇拜」する等の意味を持つ。
- ⁵ 「美しい日本語を残す」ことを主旨に結成され、毎月1回、台北市内で勉強会を開いている。会員約120名。平均年齢73歳。
- ⁶ 原住民の子供達が通った初等教育機関。警察官が教員を務め、礼儀、倫理、耕作種芸、手工、国語、計教法、習字、唱歌などを教えた。
- ⁷ 交流協会(2004)『台湾における日本語教育事情調査報告書』平成15年度版、p. 6
- ⁸ 前掲、国立国語研究所、p. 50
- ⁹ 前掲、国立国語研究所、p. 30-36
- ¹⁰ 前掲、国立国語研究所、p. 45, 46
- ¹¹ 前掲、甲斐、p. 6
- ¹² 国立編訳館主編、蔡易達・永山英樹訳(2000)『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』雄山閣出版、p. 89
- ¹³ 津田勤子(2005)「台湾日治世代の親日態度と自己概念」台湾教育史研究会第37例会報告
- ¹⁴ 藤井久美子(2005)「台湾社会における日本語の位置づけ—帝国日本と中華民国台湾の言語政策からの一考察—」p. 5、台湾日本語文学会第199例会

参考文献

- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学会第70回国際学術大会』 pp. 486-492
- 甲斐ますみ(1997)「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」『日本語教育』93号, pp. 3-25, 日本語教育学会
- 交流協会(2004)『台湾における日本語教育事情調査報告書』平成15年度版
- 国立国語研究所(2004)「これからの日本語学習支援を考える—学びを支えるモノ・ヒト・コト—」平成16年度国立国語研究所公開研究発表会予稿集
- 国立国語研究所(2005)『平成16年度日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—台湾アンケート調査集計結果報告書(日本語版・中国語版)』
- 国立編訳館主編, 蔡易達・永山英樹訳(2000)『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』雄山閣出版
- 蔡茂豊(2003)『台湾日本語教育の史的研究(上)・(下)』大新書局
- 津田勤子(2005)「台湾日治世代の親日態度と自己概念」淡江大学日本研究所修士論文
- 東海大学文学院日本語文学系(2005)『ばあちゃん, 聞かせて, じいちゃん, 教えて—祖母の歩み—』「社会方言分析」報告集
- 藤井久美子(2005)「台湾社会における日本語の位置づけ—帝国日本と中華民国台湾の言語政策からの一考察—」台湾日本語文学会第199例会
- 藤井彰二(2004)「台湾での伊澤修二評価についての考察」『「日語教育與日本文化研究」国際学術会議論文集』 pp. 347-369, 台湾日語教育学会
- 藤井彰二(2005a)「最終回『哈日族』現象と日本語ブーム」『いろは第18号』 pp. 4, 交流協会
- 藤井彰二(2005b)「日本語世代は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『「日語教育與日本文化研究」国際学術会議論文集』 pp. 177-191, 台湾日語教育学会

リスニングに関わるリソースの使用とリスニング能力との関係 —バンコクの日本語専攻の大学生の場合—

佐藤 純(タイ商工会議所大学)

1. はじめに

海外で日本語を教えていると、国内で教えている場合と違い学習者のリスニング能力がなかなか伸びないと感じることが多い。実際日本語能力試験の結果を見ると、1級から4級までの全ての級で聴解の点数の平均は、国内の学習者より低いものとなっている(表1)。特に1,2級においては、「文字・語彙」と「読解・文法」では、国内受験者より平均点が高いことがあるが、「聴解」の点数は全て国内受験者より低いものとなっている。ここから、海外においては「読み・書き」の能力より「聞く」能力の習得が難しいことがわかる。

このように、日本国内で学習する者に比べ海外で学習する者のリスニング能力が低い理由の一つとして、日本語の授業以外に日本語に触れる機会が少ないことがあげられるのではないかと。トムソン(1997)や山口(2001)も特にリスニングに関わるものと言及はしていないが、海外においては日本国内よりもリソースが不足していることを指摘している。このようなことから、学習者のリスニング能力を上げるための1つの方策として、授業外にリソースを使うことが有効なのではないかということが考えられる。

タイのバンコクにおけるリソースの状況については、2001年に国立国語研究所(2003)によって調査が行われ、概要が報告されている。この調査により全体的な傾向を把握することができるようになったが、個別的具体的な把握にまでは至っていないため、リソースの使用がリスニング能力の向上に役立っているのかまでは解明されていない。

そこで、今回、学習者のリスニングテストの点数とリスニングに関係のあるリソースの使用状況との関係を調べることにより、授業以外にリスニング能力を伸ばすためにリソースを使うことは効果があるのか、また効果が認められた場合はどのようなリソースが特に効果があるのかということをも明らかにしたいと思う。そして、調査の結果をもとに今後のリソース調査の方向性についても述べてみたいと思う。

表1 日本語能力試験：国外平均と国内平均の差¹

		1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
1級	文字・語彙	3.4	0.6	1.1	1.1	-0.1	1	0.7	1.7	1.5	1.9	0.4
	聴解	-8.4	-9.9	-12	-13	-9.2	-8.5	-9.6	-11	-11	-6.8	-14
	読解・文法	10.7	3.1	3.9	-2.7	-3.3	-2.3	-1.6	0.9	1.9	8.6	-0.3
2級	文字・語彙	1.9	0.9	2.6	2.4	4.5	3.1	2	3.8	-0.3	3.2	2.7
	聴解	-15	-19	-21	-18	-22	-18	-15	-16	-17	-16	-22
	読解・文法	9.1	1.6	4.7	6.4	2.3	0.8	0.4	1.3	0.6	3.9	-1.4
3級	文字・語彙	-5.5	-3.8	-3	-1.8	-2.5	-1.5	-3.9	-4.3	-2.3	-2.9	0.3
	聴解	-25	-24	-26	-22	-28	-24	-19	-27	-23	-23	-22
	読解・文法	-13	-14	-11	-17	-13	-11	-9.9	-8.3	-15	-11	-9.8
4級	文字・語彙	-8	-9	-7.8	-5.9	-8.1	-6	-6.3	-8.7	-8.1	-7.4	-6.1
	聴解	-22	-20	-23	-25	-23	-24	-22	-20	-23	-24	-19
	読解・文法	-23	-23	-21	-17	-15	-16	-13	-16	-17	-18	-17

※上記の点数は(国外平均点-国内平均点)によって求めたものである。

2. 調査の目的と方法

2.1. 調査の目的

リスニングに関わるリソースの使用と、リスニング能力の高低との間に関係があるかということ明らかにするため、以下の3点について調査を行う。

- 1) 様々な種類のリソースを使う者は、リスニング能力が高いのか。
- 2) リスニング能力を高めるのに特に関係のあるリソースはあるか。
- 3) 学習者はリソースを使用して、リスニング能力が向上したと感じているか。

2.2. 調査の方法

リスニング能力の高低を測る基準としては、1993年の日本語能力試験2級の試験を用いた²。

リソースの使用状況とリソースを使用しての自己評価については、質問紙で回答してもらった。リソースの使用状況に関しては、それぞれのリソース使用の有無を聞き、リソースを使用しての自己評価に関しては、それぞれのリソースを使うことがリスニング能力の向上に役立っているかどうかについて、「リスニング能力は全然変わらない」から「とてもリスニング能力が良くなった」の5段階尺度で答えてもらった。

質問紙は、リスニングテストとの相関をみるため、記名式で回答してもらった。被験者は全てタイ語を母国語とする者なので、日本語で作成した質問紙をタイ語に翻訳し、それを質問紙として配布した。

リスニングに関わるリソースとして設定した項目は、以下の通りである。

- (1) 直接会って日本語で会話をする
- (2) チャット
- (3) ニヶ国語放送を用いなくても日本語を聞くことができるテレビ番組
- (4) ニヶ国語放送を用いて日本語を聞くテレビ番組

- (5) ラジオ
- (6) ビデオ
- (7) VCD
- (8) DVD
- (9) テープ
- (10) CD
- (11) インターネット

(1)と(2)の項目に関しては、話す相手として日本人教師、タイ人教師、大学の友達など下位項目を設定したため、全部で23項目となった³。

2.3. 調査の概要

リスニングテストは2005年11月21日に行い、質問紙調査は2005年12月6日から9日の間に行った。被験者はタイのバンコクの大学で日本語を主専攻として勉強する4年生83名のうち、リスニングテストを受け質問紙調査で不備のなかった者58名(男性10名、女性48名)である⁴。

3. 分析と結果

3.1. リスニングテスト

リスニングテストの平均点は58.7点であった。1993年の2級の日本語能力試験の国外での平均点が58.8点(国内78.2点)であるため、ほぼ平均点は同じものとなった。

3.2. 使用するリソース数とリスニング能力との相関に関して

使用リソース数とリスニングテストの点数との相関を調べた。チャットに関しては、下位項目の回答者数が少なかったためチャットを使用している者として1つにまとめた。したがって、リソースの項目は16となり、これらの項目とリスニングテストの相関を求めたところ、やや相関($r=0.272$ 5%水準で有意)がみられた。このことから、様々な種類のリソースを使っている者の方が、リスニング能力が高い傾向があるということがわかった。

3.3. リスニング能力を高めるのに特に関係のあるリソースはあるか

リスニング能力の高低により使用するリソースに差が生じているのかを調べるため、リスニングテストの点数をもとに成績上位グループ、中位グループ、下位グループの3つに分け、リソースを使うことの有無との間で χ^2 乗検定を行った⁵。その結果、「直接会って日本人教師と話す」($p=0.032<0.05$)「直接会って日本人の友達と話す」($p=0.005<0.01$)「DVD」($p=0.03<0.05$)の3項目において統計的に有意な差がみられた。

差が生じたところを検討するため、調整済み残差を見てみると(表2)いずれの項目においても下位グループの「いいえ」の値が2.0以上であることがわかる⁶。このことより、リスニング能力が下位の者は、「日本人教師」「日本人の友達」「DVD」の3つのリソースをリスニング能力が上位・中位グループの者より使っていないということがわかる。

表2 調整済み残差の一覧表

	日本人教師		日本人の友達		DVD	
	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい
上位グループ	-0.7	0.7	-1.1	1.1	-0.6	0.6
中位グループ	-1.6	1.6	-1.8	1.8	-1.7	1.7
下位グループ	2.6	-2.6	3.2	-3.2	2.6	-2.6

上記3つ以外のリソースのうちラジオとビデオに関しては、 χ^2 検定を行ったところ期待度数が5未満であり統計的検定を行えなかったため、クロス表を作成し分布を調べた。その結果、ラジオ、ビデオとも使用者は3人であり、全ての者が成績上位者であることがわかった。したがって、人数が少ないため統計的な裏付けを持って言うことはできないが、ラジオとビデオを使っている者は、リスニング能力が高いということがわかった。

3.4. 学習者はリソースを使用して、リスニング能力が向上したと感じているか

まず、リソースごとにそのリソースを使ってみて自分のリスニング能力が伸びたかどうかを「全然変わらない」から「とても良くなった」までの5段階で評価してもらった。その結果をまとめたものが表3である。ただし、この質問項目においては、質問紙に回答してもらう際の複雑さを避けるため、「直接会話する」と「チャット」の項目では質問を行っておらず、また、「ビデオ・VCD・DVD」と「テープ・CD」をそれぞれ1つの項目にまとめて回答してもらった。

リソースを使ってみての自己評価の結果を見ると、まずリソースを使っていてもリスニング能力が全然変わらないと感じている者はおらず、全体的には良くなったと感じている者が多いということがわかる。「普通のテレビ番組」であまり変わらないと答えた者が多かったが(28.0%)、これは、日本語をわずかしか使っていないコマーシャルなども含まれており、日本語が話されている量が少ないということに関係しているためのものである。また、二ヶ国語放送の番組では回答が他のものに比べ分散しているが、これは番組を見ている際に音声をもどの程度日本語にかえるかが回答者によって様々であったためかもしれない。

表3 リソースを使ってみての自己評価(人数と割合)

	全然 変わらない	あまり 変わらない	少し良 くなった	良くな った	とても良 くなった	合計
普通のテレビ番組	0(0.0%)	7(28.0%)	12(48.0%)	6(24.0%)	0(0.0%)	25(100%)
二ヶ国語放送の番組	0(0.0%)	4(13.3%)	14(46.7%)	10(33.3%)	2(6.7%)	30(100%)
ラジオ	0(0.0%)	0(0.0%)	2(66.7%)	1(33.3%)	0(0.0%)	3(100%)
ビデオ・VCD・DVD	0(0.0%)	2(4.9%)	16(39.0%)	18(43.9%)	5(12.2%)	41(100%)
テープ・CD	0(0.0%)	2(4.3%)	24(51.1%)	18(38.3%)	3(6.4%)	47(100%)
インターネット	0(0.0%)	0(0.0%)	5(41.7%)	7(58.3%)	0(0.0%)	12(100%)

次に、リスニング能力によってリソースへの評価が変わるのかどうかを表したものが表4である。この表を見ると、「良くなった」と「とても良くなった」の割合は、成績上位者は49%、中位者は49.3%であり、どちらもほぼ半数の者がリスニング能力が良くなったと感じているのに対し、下位者は25%であり「とても良くなった」と感じている者は一人もい

ない。以上のことから、リスニング能力が低い者は、リソースを使ってはいるが、リソースを使うことによってリスニング能力が全然変わらないということはないが、それほど伸びたとは実感していないということがわかる。

表4 リスニングテストの成績とリソースへの自己評価⁸

			リソースへの自己評価					合計
			全然変わらない	あまり変わらない	少し良くなった	良くなった	とても良くなった	
リスニングテストの成績	上位	人数	0	2	26	19	8	55
		上位の中の%	0%	3.6%	47.3%	34.5%	14.5%	100%
		自己評価の%	0%	13.3%	35.6%	31.7%	80.0%	34.8%
	中位	人数	0	6	30	33	2	71
		中位の中の%	0%	8.5%	42.3%	46.5%	2.8%	100%
		自己評価の%	0%	40.0%	41.1%	55.0%	20.0%	44.9%
	下位	人数	0	7	17	8	0	32
		下位の中の%	0%	21.9%	53.1%	25.0%	0%	100%
		自己評価の%	0%	46.7%	23.3%	13.3%	0%	20.3%
合計	人数	0	15	73	60	10	158	
	成績別の%	0%	9.5%	46.2%	38.0%	6.3%	100%	
	自己評価の%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	

4. 考察

調査の結果、リスニング能力が高い者は、DVD、日本人教師、日本人の友達、ラジオ、ビデオを使っているということがわかった。以下では、それぞれのリソースについて、学習者に行ったインタビューの結果と合わせて考察を加える⁹。

4.1. DVD

DVD と似ている媒体としてVCDがあるが、VCDに関しては使用の有無とリスニングの成績との間に統計的な有意差は表れなかった。DVDでは有意差が表れたのに対しVCDにおいては有意差が表れなかった理由として、ソフトの違いと、使い方の違いが考えられる。

まず、ソフトに関してだが、DVDで手に入れられるものと同じものが、全てVCDで手に入れられるのではないのかもしれない。例えば日本で売っているソフトを手に入れようとした場合、日本ではDVDが主流でありVCDで手に入れられるソフトは限られてくる。この点は、どのようなソフトがリスニング能力を伸ばす上でより効果的であるかということを知るためにも、より詳細なリソースの調査を行っていく必要があるであろう。

使い方に関しては、DVDとVCDで一番大きく違う点は、字幕の表示を選択できるか否かという点である。今回の調査でもDVD使用者に、DVDを見るときに字幕を表示させるか否かを聞いたところ、77.4%の者が字幕を表示させると答えている。2002年にリソースに関して学習者にインタビューした際、ビデオやテレビを用いて日本語を学習している者から、ソフトに対して一番多かった要望は字幕の表示であった¹⁰。このようなことから、字幕の表示を選択できるDVDにおいてのみ有意差が生じた可能性がある。

4.2. 日本人教師、日本人の友達

日本人教師と日本人の友達はリソースの区分では、人的リソースに当たるものである。今回の調査では、この人的リソースと直接日本語で会話することの有無を聞き、日本人の教師または日本人の友達と日本語で話している者は、リスニング能力が高いということが明らかとなった。タイ人教師、タイ人の友達とのやりとりにおいては有意差が生じなかったが、これは基本的には相手がタイ人の場合は、日本語でのやりとりは挨拶などの簡単なものだけで、後はタイ語に移行してしまうためのようである¹¹。これに対して、リソースが日本人である場合は、やりとりの内容が様々であり、インプットの量がタイ人と日本語で話す場合よりも多いようである¹²。

日本人教師と日本人の友達を比べた場合は、特に日本人の友達が 1%水準で有意であり（日本人教師は 5%水準で有意）、よりリスニング能力の高さと結びついている。これは、教師の場合、学習者がわからない場合はことばの調整を行っていることが考えられるが、日本人の友達の場合はそのようなこともなく、学習者も内容を理解するためにより集中して聞いているためではないだろうか。

また、リスニング能力の高い者の方が日本人のリソースを使っていることは、学習動機との関係からもみることができる。成田(1998)はタイの大学生の学習動機と成績との関係を調べた結果、成績がいい学習者は「日本人と親しくなりたいから」とか「日本人とコミュニケーションしたいから」といった統合的志向が強いとしている。成田の調査では、筆記試験の成績との関係をみているため、リスニングの成績にそのままあてはめることはできないが、成績のいい学習者は「日本人と話したい」という動機が強いため、自ら日本人リソースを探し、会話をしていたのかもしれない。

4.3. ラジオ

ラジオを使っていた者は、リスニングの成績が上位グループの 3 名のみであった。ラジオで日本語を聞いていない者にその理由をたずねたところ、「番組の存在を知らない」が 76.4%で最も多かった¹³。タイではラジオの局数が多く、かつ日本語を使っている番組数自体が少ないことから、予め番組の情報を得ていないと、日本語の番組を聞くことができないためであろう。このような中、ラジオを聴いている 3 名とも成績上位グループであったことから、成績の高い者は日本語への動機が高く、様々なリソースを積極的に探して使っていることがうかがわれる。

4.4. ビデオ

ビデオを使っている者も、リスニングの成績が上位グループの 3 名のみであった。ビデオを使っている者が 3 名 (5.1%) というのは、VCD を使っている者 65.5%、DVD を使っている者 58.6% と比べると、極端に少ない数字である。この理由として、ここ数年タイにおいては VCD と DVD の再生機が廉価となり、それに伴い新しく発売されるソフトはほとんど VCD か DVD であり、ビデオのものはほとんどないということが考えられる。成績が上位の者だけが使っていた理由としては、2001 年にリソース調査で学習者にインタビューした際は、日本語の映像ソフトはビデオが主流であったことから、その当時買っておいたものを見たり、先輩などから借りるなど、以前から使っていたか積極的に先輩などに当たってビデオ

を探した結果だと考えられる。また、国際交流基金バンコク日本文化センターの図書館にある映像ソフトはほとんどがビデオであるため、センターを利用しているものは、ビデオを使ったのであろう¹⁴。このように、現在ではビデオのソフトは積極的に探さないと手に入れにくくなっているため、動機や学習意欲の高い成績上位の者がビデオを使っていたのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

5.1. 調査のまとめ

調査の結果、以下の点が明らかとなった。

- (1) 様々な種類のリソースを使っている者は、リスニング能力が高い。
- (2) リスニング能力が低い者の方が高い者より使っていなかったリソースは、DVD と日本人教師と日本人の友達であった。
- (3) ラジオとビデオを使用している者はごくわずかであった。
- (4) リソースの種類に関わらず、リソースを使うことにより、全ての者が程度の差はあれリスニング能力が伸びたと感じている。
- (5) リソースを使っただけの自己評価が「良くなった」と答えた者は、リスニングの成績が下位の者より中・上位の者の方が多い。

以上のことより、授業以外の時間に学習者がリソースを使うことはリスニング能力を伸ばす上で効果があるといえるのではないだろうか。リソースを使った者は、リスニング能力が伸びたと実感し、また、様々な種類のリソースを使っている者はリスニング能力が高いことから、リソースを学習者に提示することはかなり有効な手立てであるといえる。しかし、考察のところでみてきたように、その際、リソースごとに注意点があることがわかった。以下にその点をまとめ、今後の課題としたい。

5.2. 今後の課題

5.2.1. より詳細なリソース調査

今回の調査では、リスニング能力とそれぞれのソフトの内容との関係までは触れることができなかった。それぞれのソフトには様々な内容のものがああり、どのような物が特にリスニング能力の向上に役に立つのかということ調べておかないと、学習者に提示する際不完全な提示になってしまう。この点を深く調べていくことにより、VCD と DVD、テープと CD などのように似たソフトの違いなどを把握することができるようになるのではないだろうか。

5.2.2. リソースの使用方法についての調査

DVD の考察でも述べたように、DVD は VCD と違い字幕の表示を選択できる。このような使い方の違いがリスニング能力に影響を与えた可能性があるが、ではどの言語(日本語・タイ語・英語等)をどのくらい表示させるのが効果があるのかなど、どのように活用すればリスニング能力が伸びるのかなどは研究はまだなされていない。また、リソースを使っただけの自

己評価で、リスニングテストの成績の下位のグループの者の自己評価が低かったのは、適切なリソースの使い方をしていなかったためかもしれない。このようなことから、DVDに限らず、テレビの二ヶ国語放送の活用の仕方、CDやテープなどで歌を聞くときの歌詞の活用の仕方など、全てのリソースにおいて使用方法を調査して提示しておけるようにしておくことが必要ではないだろうか。そうすれば、学習者が教室外でリソースを使って自律学習をしようとする際に役立つであろう。

5.2.3. リソースを得る機会・場所・方法等の情報の提供

今回の調査で、日本人の人的リソースがリスニングリソースとしては効果的であるということがわかったが、海外においてはこの人的リソースというものは手に入れにくく限りのあるリソースである。実際、国立国語研究所(2003)の調査でも、日本語でやりとりしない理由を聞いたところ、一番多かった答えは「日本語を使う相手がいないから」であった¹⁵。このことから、人的リソースの場合は、学習者に効果的であると紹介するだけではなく、どのようにしてそのリソースを手に入れるのか、機会の作り方などについても提示していくことが不可欠であろう。

5.2.4. 学習動機とリソース使用との関係

人的リソース、ラジオ、ビデオの考察でもみてきたように、成績が高い者は動機が高く様々なリソースを積極的に使っているようである。逆にいうと、あまり動機が高くない者には、リソースの存在を提示しても使わない可能性がある。リソースを用いて学習者が自律的に学習していくためには、動機付けも大きな要素となる可能性がある。今後のリソース調査においては、動機付けとの関連にも関心を払っていくべきであろう。

5.2.5. ハードの変更に伴うソフトの変更

現在タイにおいては、ビデオの再生機はVCD、DVDの再生機にとってかわりつつある。このような状況においては、これから出てくる新しいソフトに関してはVCDやDVDで発売されるため問題がないが、以前作られたビデオソフトが再生できなくなってしまうという問題が出てくる。私の教える大学においても、2004年から教室でビデオを使うためには一回VCDに焼き直してVCDの再生機で再生させなければならなくなってしまう。このようにVCD化、DVD化が進んでいる状況では、ビデオのVCDやDVDへの焼き直しという作業が必要となってくるであろう。このことは、テープとCDとの関係にも言える。以前から日本語教育を行っている機関では、このようなソフトの移行を行わなければ、教室でも教室外の学習者の自律教材としても使えなくなってしまう。著作権法との兼ね合いもあり、難しいところではあるが、早急に取りかからなければならない問題であろう。

6. おわりに

今回の調査により、使えるリソースが日本国内と比べ少ない海外においても、教室外でリソースを使うことはリスニング能力を高めるのに役立つということがわかった。しかし同時に、取り組まなければならない課題も多くあるということが明らかとなった。これら

の課題を一つ一つ順番に明らかにしていくとかなりの時間がかかってしまうであろう。その間にも、学習者は変わり、リソースとなるハードやソフトなども変わっていつてしまう。このようなことから、それぞれの地域で教えている者が協力し合い、これらの課題を同時並行的に調査していくことが必要であろう。

注

- ¹ 『日本語能力試験の概要』(国際交流基金)1993年版から2003年版までをもとに作成した。
- ² 最近数年間の能力試験は過去の問題が入手しやすく、学習者が既に学習している可能性があったため用いず、1993年の試験を用いた。
- ³ 直接会って会話するの下位項目：日本人日本語教師，タイ人日本語教師，大学の友達，家族・親戚，大学以外の日本人の友達・知り合い，大学以外のタイ人の友達・知り合い
チャットの下位項目：日本人日本語教師，タイ人日本語教師，大学の友達，家族・親戚，大学以外の日本人の友達・知り合い，大学以外のタイ人の友達・知り合い，チャットで知り合った日本人，チャットで知り合ったタイ人
- ⁴ 調査はタイのバンコクにある私立タイ商工会議所大学で行った。
- ⁵ グループ分けはリスニングテストの素点をもとに，平均点（15.26点）が中位グループの真ん中に来るようにし，それぞれのグループの点数の幅が等しくなるように分けた。
- ⁶ 「分割表における残差とは，実測度数と期待度数の差のことである。残差の大きいところが特徴的なところである。実際には，残差そのものではなく，調整済み残差を計算し，その値を吟味することになる。～調整済み残差 d は，平均0，標準偏差1の正規分布に近似的にしたがう。この性質から $|d|$ が2以上のものは，特徴的な箇所であるとみなしてよい。」内田(1997)
- ⁷ この2項目に関しては，今後改めて調査を行う予定である。
- ⁸ 人数は該当項目を選択した延べ人数となっている。
- ⁹ インタビューは2002年2月に今回の調査と同じ大学の学生24人に対して，どのようなリソースを使っているのか，リソースの使用法，希望するリソースなどについて半構造化した形で行った。
- ¹⁰ 2002年当時はまだDVDの再生機・ソフトともそれほど普及しておらず，高価なものであった。
- ¹¹ 「タイ人の友達と話すときは，文法とか言葉とかで知っているのを話す。『今日は何を食べる』とか。難しい言葉があったらタイ語で話す。」(2002年のインタビューより)
- ¹² 日本人の知り合いとの会話の内容は，日本のこと（地理，マンガ，映画，歌など），タイのこと（文化，タイ料理，タイでの生活，観光地のこと），アルバイト先でのお客さんのやりとりなど様々であり，ほとんど日本語で話している。(2002年のインタビューより)
- ¹³ その他の答えは以下の通りである。「興味がないから」5.5%，「ラジオがないから」3.6%，「時間がないから」3.6%，「一緒に聞く人が日本語がわからないから」1.8%，「その他」7.3%，「無回答」1.8%
- ¹⁴ 日本語・日本関係の本・映像資料などが置いてあり，学習者は図書館でビデオなどの映像資料を見ることができる。
- ¹⁵ 今回の調査でも同じ質問をしたところ，やはり一番多かった答えは「日本語を使う相手がない」で59.3%であった。

参考文献

内田治(1997)『すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析』東京図書
国際交流基金(1994-2004)『日本語能力試験の概要』1993年版～2003年版

- 国立国語研究所(2003)『平成13年度日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書』
- トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第7号, pp. 17-29, 国際交流基金日本語国際センター
- 成田高宏(1998)「日本語学習動機と成績との関係—タイの大学生の場合—」『世界の日本語教育』第8号, pp. 1-11, 国際交流基金日本語国際センター
- 山口雅代(2001)「チェンマイ大学におけるリソースの活用」『バンコック日本語センター紀要』第4号, pp. 123-128, 国際交流基金バンコック日本語センター

日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー

李 徳奉(同徳女子大学)

1. はじめに

日本語教育関連リソースの評価は、リソースの量と質、それから活用度の三つの観点から下すことができる。このような三つの観点から韓国、台湾、マレーシア、タイ、オーストラリア等における日本語教育用リソース事情を見ると、量的には、決して少ないという共通点があった。90%の学習者が日本語の見聞きのできる環境にあり、70%が周りに日本語があるという。50%が日本語でのやりとりの経験があり、日本からの遠近に関わらず日本語は身の周りであったということである。質的には、教育用として作られた一部の教材や辞書等の質は別として、書籍・テープ・放送・インターネット資料・人的リソースなど、生のリソースはどれも質的に低くない。

問題は、活用の問題で、ほとんど日本語教育に用いられていないというところにある。リソースが山ほどあっても学習に取り入れ、活かされない限り真のリソースとはいえない。とりわけ人的リソースの場合、学習者の多くは、日本人との交流やホームステイ等の接触を望んでいるにもかかわらず、日本人との出会いの機会が足りなすぎる。そこで本稿では、日本語教育におけるリソースの役割について考えた上で、リソースを積極的に活用するために必要なリソースの活用能力、すなわち、「リソース・リテラシー」や活性化のための戦略について触れてみたい。

2. リソースに期待する役割

世界的に日本語学習者の多くは初級レベル止まりの傾向が目立つ。その原因の一つは、日本語教育のほとんどが時間の限られた学校教育に偏っているところにある。また、日本語能力判定の基準として広く用いられている日本語能力試験中心の日本語教育の影響も大きい。試験から比較的に自由な立場にいる一部地域の学習者を除いて、リソース排除の日本語教育は、学校中心の日本語教育と試験中心の日本語教育の合作と言えよう。この障害を乗り越えるためには、学校教育と日本語能力試験にリソース関連の内容を積極的に取り入れることであろう。試験中心の教材の中の日本語は計画的節約と制限が加えられたもののゆえ、その内容の深さや多様性に限りがある。しかし、多様なリソースを取り入れることにより、学習者は、生きた日本語、多様なジャンルの文章と内容、生きた情報、多様なレベルの文章に触れられ、初級止まりという限界を乗り越えられるような動機付けを与えることができる。すなわち、リソースは、限られた時間による学校教育の限界を乗り越え、自律学習への転移を促すことになるであろう。

もう一つ、アジアにおける日本語教育の目指すべき方向は、地域の協調体制づくりの国際的な動きに合わせて、今後のアジア太平洋地域という地域内交流の活性化に貢献するための日本語教育、すなわち、「交流型日本語教育」と言える。そのような時代的ニーズにあった日本語教育システムの構築が必要であり、「交流型日本語教育」

や「異文化理解の日本語教育」に活用できるようなリソースを学習活動に積極的に取り入れることであろう。中でも人的リソースの活用は、交流型日本語教育を成功させる近道であろう。このようにリソースは、教科書と試験の虜になっている日本語教育をより多様化させることのできる脱出口とも言えよう。

韓国の場合、このような事情を踏まえて2009年適用予定の新しい学習指導要領では、政策的に交流活動を進めていくためにリソースの積極的な活用を取り入れることを検討している。

3. リソース・リテラシーの必要性

「豊穡の中の貧困」の状態にあるリソース活用不振の原因が学校と試験中心の教育にあるということは、結果的に教育と学習の多くが教科書に閉じこめられていることになる。教科書の限界を乗り越えるためには、学習活動としてのリソースの活用方法を見つけることと、日本語教育を学外に拡大することの両方からアプローチすることが必要である。リソース活用の問題は、学習者の学習に対するビリーフの問題であり、地域や個人の学習スタイル、すなわち「学習文化」に繋がっている。地域や個人の学習文化への理解に基づいたリソース活用の方法を見つけ、教材の中に教育活動としてのリソース活用を取り入れるべきである。また、日本語を学外に拡大することは、自律学習活動の中にリソースを活用した課題活動を取り入れることや、学外での交流活動をより活発化するなど、日本語の学習スタイルを多様化することである。このように日本語リソースを日本語教育に積極的に取り入れていくためには、教師・学習者ともにリソースをリソースらしくさせる活用のすべ、すなわち、「リソース・リテラシー」を身に付けなければならない。

リソース・リテラシーを構成する能力としては次のような点が考えられる。

- ① 教授法としてのリソース活用の効果に対するビリーフ
- ② メディアへのアクセス能力
- ③ 資料の収集と分類能力
- ④ 資料の運用能力と交渉能力
- ⑤ リソース活用結果の評価能力
- ⑥ リソースを作り、交流する能力

3.1. リソース活用の効果に対するビリーフ

リソースの活用効果は、動機付けと自律学習に代表される。学習者の興味を引く内容は動機付けの効果があるとともに、自律学習の効果も期待できる。場や人的リソースを活用した「体験学習」は、レベル別学習もできれば、総合的学習効果も期待できる。リソースを取り入れたこのような学習効果に対するビリーフの生成こそリソースの活用を実現させることに繋がるであろう。とりわけ、実物資料や実際の体験による学習の認知的効果についての深い理解が求められる。

3.2. メディアへのアクセス能力

リソースの情報量と接近しやすさを考えると、新聞・雑誌、テレビ放送、インター

ネットなどが代表的メディアとして挙げられる。とりわけ、インターネットは、あらゆる種類のリソースに出会えるリソースの宝庫と言える。インターネットの情報量は、ますます増大していく。従って、今後は、インターネットを通じてのリソースの開発や活用の方法に努めていくべきであろう。韓国インターネット振興院(www.nida.or.kr)の『2005年上半期情報化実態調査』によると、韓国のインターネットの利用状況は次のとおりである。

表1 韓国におけるインターネットの利用状況

利用者数	3,257万人(71.9%)
性別利用率	男性77.4%(1753人), 女性66.3%(1504人)
年齢別利用率	10代以下(6-19): 97.3%, 20代: 97.2%, 30代: 89.8% 40代: 67.2%, 50代: 34.7%, 60代: 11%
職業別利用率	生産関連職: 45.8%, 主婦: 57.1%, サービス・販売職: 67.2%, 学生: 88.0%
世帯別保有率	78.5%
接続率	73.4%
利用形態	e-mailアドレス保有率: 88.9% インターネットショッピング経験: 48.2% 有料コンテンツ利用経験: 27.7% インターネット・バンキング経験: 34.2% インターネット株式取引経験: 7.0% ブログ利用経験: 41.3% メッセージ利用経験: 44.2%

韓国のみならず、インターネットの利用率は世界的に速いスピードで増加しつつあるので、インターネットを中心とした多様なリソースの発信と利用ができるメディア・リテラシーが求められる。中でも、情報検索能力が必要である。

3.3. 資料の収集と分類能力

身の周りにある日本語は、それをリソースとして認識しない限りリソースにはなれない。従って、リソースの中から日本語教育に活用できる可能性を見つけ出す能力が求められる。また、学習者の周りにはどのようなメディアによるリソースが多いかを知らなければならない。そのような情報に加えて、収集したリソースをジャンル別、内容別、レベル別に分類し使いやすく整理していくことも大事である。さらに、分類は、使いやすさに通じるもので、リソース・ネットワークづくりによる全体的把握が望まれる。

3.4. 資料の運用能力と交渉能力

周りの日本語リソースをどのような学習段階と活動に取り入れるかを判断できる能力と、人的リソースとの交渉能力などがないと、リソースの活用は期待できない。生

のリソースを教育に取り入れるためには、何よりもカリキュラムを組む能力が求められる。また、副教材を作る能力も必要である。

3.5. リソース活用結果の評価能力

教師は、宿題、自律学習、課題学習など、リソースを活用した学習に対する評価能力を養う必要がある。とりわけ遂行評価の基準などを設けておく必要がある。

3.6. リソースを作り、交流する能力

リソースには、学習目的に合わせて意図的に作られたものや改造されたものなどがある。日本語教師にはこのような手作りのリソース作りの能力が求められる。また、このようなリソースの共有のための管理能力やネットワークづくりの行動力も望ましい。

4. 人的リソースと交流の活性化

外国語学習の主な動機が個人の就職のためのような生きるための学習であった時代から、現代は、交流を通じて地域の共生、共栄を目指した平和のための日本語教育の時代へ傾斜しつつある。したがって、現代の日本語教育に交流という学習形態を取り入れるということは、学習理念にも合致する。ただし、自文化のイメージ向上のために行われているような交流は、望ましくない。何のための交流かをはっきりさせないと交流の意義は色あせてしまう。

4.1. 日・韓交流の実態

文部科学省(2004)の統計によると、日本の大学と韓国の大学との交流協定締結数は1,149校にのぼる。また、日本の高校の1,352校が海外の学校と交流をしていて、そのうち11.5%が韓国の高校と交流している。ソウル市内の小・中・高86校、プサン市内の小・中・高106校が日本の小・中・高と交流協定を結んでいて相互訪問などの交流を続けている。また、2005年は、日・韓友情年ということで600件あまりの文化交流が計画されていた。このような国際理解教育やグローバル教育の一環として行われる様々な交流の実績は、日・韓の間で長年にわたり実行されてきて、相当の量にのぼる。しかし、交流の量にふさわしいほどの異文化理解の効果が得られたかは疑問である。従来多くの交流は、行政中心、学校などの機関中心の交流が多く、何らかの類似点を接点に行われている傾向がある。

4.2. 交流の定義と類型

「交流」の辞書的意味は、「ちがった系統のものどうしが互いに入りまじること、また入りまじらせること(『広辞苑』)」とある。日本語教育的活動に合わせて言い換えると、「異文化間の学習者同士が互いに触れ合うこと」と言える。交流とは、人間や文化などの単なる混じりあいではなく、異文化理解のプロセスとして捉えなければならない。異文化体験のやり取りであり、異文化間の触れ合いであり、異文化間の付き合いである。即ち、異文化理解における交流とは、相互経験のやり取りであり経験

の共有と言える。異文化理解教育とは、異文化の中に新しい文化的自分を発見させるプロセスなのである。従って、異文化理解教育では、文化の交流に重点を置くより、人間の接触に重点をおくべきであろう。このような人間中心の交流を段階別にみると、「出会いの段階」、「ふれあいの段階」、「話し合いの段階」、「やり取りの段階」、「付き合いの段階」に分けることができる。

交流には、様々な類型が考えられる。体験の度合いによって、情報提供レベル、観察レベル、体験レベル、生活レベルに分けることができる。交流の担い手によっては、団体(行政、学校、民間団体、企業)主導型交流、個人主導型交流があり、属性別には、子供の交流、学生の交流、青年の交流、障害者の交流、同好人の交流などがある。また、一方的交流があれば、相互的交流もあり、一過性交流と連続性交流がある。期間別には、短期的交流と長期的交流があり、主題別には、留学、研修旅行、修学旅行などのような研修から、芸能交流などの文化交流、学術交流、学習交流、技術交流、スポーツ交流、業界交流、地域内交流などがある。交流の目的別には、援助、指導、紹介、取引、親善(和解)、協力、学習、興味(エンター)など、様々である。日本語教育において行われている交流の場合、ほとんどが学校どうしの交流に限られている。それも姉妹校中心の親善を目的とした一過性の短期的観察型の交流がほとんどである。

4.3. 交流の効果と限界

機関中心の交流は出会いや触れ合いのようなきっかけの場に過ぎなく、後続のやり取りや話し合いは続かない。そこには誠意を尽くしてのもてなしと観光地めぐり、食べ物など文化的体験が加わるのが普通である。このような交流によって、訪問者は温かい心遣いに感動し、相手に対するイメージがよくなるに違いない。多くの場合、出会いとしての効果と異文化に対する興味の発見が期待できる。ステレオタイプの調整と個の文化に芽生えるきっかけにもなりうる。この場合は、異文化理解に芽生え始めたということでも成功した体験とも言えるが、逆に嫌いになることさえもあり、失敗した体験のまま終わる場合もある。

人間は、だれもが成功した自分の体験を大事にしがちだが、逆に、失敗した体験に対しては相手または周りの環境に責任を転嫁する傾向がある。したがって、細かいところまで気を配られたもてなし風の交流の場合は、一応、成功した出会いになる可能性は高い。これだけで異文化理解につながるには限らないが、この類の交流も、異文化理解に導く近道であるには違いない。

機関主導による交流の問題点を並べてみると次の通りである。

- ① 一過性の交流がほとんどである。
- ② 文化の表層的体験にとどまる場合が多い。
- ③ 行政や学校などのような機関主導型の交流が多い。
- ④ 教師主導型の交流計画や進行が多い。
- ⑤ 観察中心の異文化体験が多い。
- ⑥ 団体単位の交流が多い。
- ⑦ 異文化適応教育は伴わない場合が多い。
- ⑧ 多文化的価値観教育のカリキュラムが見られない。
- ⑨ 誠意を尽くしたもてなしにより真の姿が見られないおそれがある。

- ⑩ 政治的目的による自文化の広報やイメージ改善のための交流の対象になるおそれがある。
- ⑪ 広報と商品販売の橋頭堡を築くための文化交流もある。
- ⑫ 多くの場合、相互の類似性に頼っての交流が多い。

4.4. 教授法としての交流

「交流」は、教育現場での実績が多く、体験学習であり、総合認知的学習形態ということで教授法としての可能性が高い。それに、カリキュラム化ができることと、定型化ができることなどから教授法としての活用可能性が高いと思われる。いわゆる「交流法」の特徴としては、相互理解学習であり、学習者中心の学習、打ち合わせによる学習であることなどが挙げられる。交流法のメリットとして挙げられるのは、何よりも、言語と異文化理解の習得が同時にできることである。

交流は、文化という先入観抜きに人間同士の接触により「個の文化」の理解に入る入り口に値する。しかし、その接触は異文化理解への入り口に過ぎない。商品の交流の時代(文明の交流)から人間の交流(文化の交流)の時代になってから異文化理解の必要性は高まっているが、その理解のすべはまだ初歩的レベルに止まっている。異文化理解のきっかけとしての「交流」をより効果的にするためには、「交流」の教授法としての位置づけが求められる。

交流が教授法としての機能を果たすためには、次のような点を補わなければならない。

- ① プログラムの充実により体験中心の交流にすること
- ② 交流の目的を相互理解に置き、互いに親しくなれるようにすること
- ③ せっかく芽生えた異文化への関心が続けられる後続のプログラムを設けること
- ④ 学習者の自律による学習者中心の交流にすること
- ⑤ 交流プログラムを段階化し、レベル別に進めること
- ⑥ 交流の担い手同士のネット化により交流の輪を広げていくこと
- ⑦ 交流の体験内容を多様化し、動機付けと理解の幅を広めること
- ⑧ 交流対象を多極化し多数の文化圏の体験を豊かにすること
- ⑨ 人間文化の属性を理解し異文化を見る目を育てること
- ⑩ 普段からグローバル教育、多文化主義的考え方を教えること
- ⑪ 異文化に対するステレオタイプの実態を確かめ、認識を正すこと
- ⑫ 自文化の広報やイメージ向上のための交流は避けること
- ⑬ 自文化を客体化する教育を並行させること

5. おわりに

リソースは、始めから身の周りにあったものもあれば、意図的に提供されたものもある。既にあったリソースの活用も大事であるが、いかにしてリソースを提供し続けるかも大事である。

今後、身の周りのリソースを日本語学習に積極的に取り入れていくためには、次のような改善と努力が求められる。

- ① リソース活用のシステム構築：
その一環として、カリキュラムや学習指導要領の授業内容のところにリソースの活用を取り入れるとともに、教授法や教材に取り入れる。
- ② リソースのDB構築：
より多くの学習者や教師が利用しやすくするために、リソースの体系化によるリソースDBの構築とその情報の国際的ネットワークによる共有が必要である。
- ③ 学習者のリソース活用の行動ネットワーク分析：
学習者のメディア使用状況の分析、IT活用度、IT教室環境の細かい分析、PC使用時間などの理解に基づいたリソース指導の方向や計画を立てる。
- ④ 教室環境としての授業設備の調査：
現在の日本語教室のマルチメディア設備など稼働可能な設備の状況に基づいたリソース指導の計画を立てる。
- ⑤ 日本語教育に対するリソースへのビリーフ：
学習文化の一つとして、学習におけるリソース観を捉えた上で、リソース利用指導に取り組む。
- ⑥ インターネットの使用状況：
若い学者ほど利用率の高いインターネット使用を重視し、そのためのコンテンツの開発に努めるべきである。
- ⑦ リソースの教材化：
漫画やゲームなど学習者に親しまれているリソースの教材性の分析によりリソースの教材化も望ましい。
- ⑧ 学習のために開発されている教材・教具の状況：
リソースとしての教材・教具をより具体的に調べ、その特徴を調べてみる必要性がある。
- ⑨ 「リソース・リテラシー」の教育：
日本語教育にリソースを積極的に活用させるためには教師養成教育や教師研修を行う必要がある。
- ⑩ 自動翻訳機の活用：
日本語力の低い学習者がインターネットによるリソースへアクセスできるように自動翻訳機やリーディング・ソフトの発達状況と使用実態を調べておく必要がある。
- ⑪ リソースの効果的な提示方法に関する理論化：
リソースの活用に関する研究実績を増やしていく。
- ⑫ 人的リソース活用の環境づくり：
海外における地域内日本人と学習者との姉妹関係締結等を通じた交流支援、インターネット画像会議の設備支援など人的交流の環境を整えることも大事である。
- ⑬ 交流の教授法化：
「交流」を教授法として取り入れ、人的交流の機会を増やす。
- ⑭ 学習者のメディア・リソースに対する理解：
学習者に親しまれているリソース伝達の手段としてのメディアに対するより詳しい理解が求められる。

⑮ リソース資料室の運営：

教材資料室としてのリソース・センターの運営によりリソースを実際に教材化する。

⑯ 著作権の問題：

学習者に人気のあるリソースほど著作権に触れる場合が多い。著作権フリーのリソースの拡大はリソースの活性化に繋がる。

⑰ リソースの収集や活用等の全ての過程は、できるだけ学習者中心に行う。

参考文献

魚住忠久(1995)『グローバル教育』黎明書房

金容雲編(2003)『韓日地方自治団体間交流実態調査書』韓日文化交流会議

国際研究集会実行委員会編(2005)『国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」
プロシーディング』国際研究集会実行委員会(代表：佐々木倫子)

国立国語研究所(2003)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究－タイ
(バンコック)アンケート調査集計結果報告書』国立国語研究所

国立国語研究所(2004)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究－台湾ア
ンケート調査集計結果報告書』国立国語研究所

国立国語研究所(2005)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究－韓国ア
ンケート調査集計結果報告書』国立国語研究所

佐藤群衛(1999)『国際化と教育』放送大学教育振興会

宮崎里司・マリオット，ヘレン編(2003)『接触場面と日本語教育』明治書院

文部科学省(2004)『大学等間交流協定締結状況等調査』

(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/teiketsu/main6_a9.htm)

李徳奉(2005)「日本語教授法としての<交流>の位置づけ」『第5回日本語教育国際
フォーラム要録』明海大学，pp. 30-32

学習者の学び方から学ぶ—台湾調査より—

金田 智子(国立国語研究所)

1. はじめに

日本語学習者及び日本語教育関係者に対して適切な支援を行うためには、日本語教育の現状を様々な観点から把握する必要がある。特に、近年の科学技術の進歩や国際交流活動の多様化は、日本語の学習環境や学習手段を変容させ、学習活動と教授活動の両面に影響を与えていることが予想される。

国立国語研究所では、これらの変化をとらえ、支援の方向性を探るための基礎資料を提供することを目的に、2001年から2005年にかけて、タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、マレーシア、日本で「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施した。その結果、日本語や日本文化に直接触れる環境にない国・地域においても、日常生活の中で、身の回りにある様々な人・物・場や機会といったリソース(学習資源)を通じて日本語や日本文化に接触している学習者がいること、その一方で、周辺に多くのリソースがあっても、それを意識的に利用するに至らない学習者も多く存在することなどが明らかになっている。

本研究の調査地の一つである台湾では、2003年から2005年にかけて調査を行った¹。本論では、2003年から2004年までに台湾で実施した学習者用アンケート調査の結果をもとに、台湾の日本語学習者のリソース利用の特徴を、台湾での地域別比較や他調査地との比較を交えながら紹介する。同時に、日本語能力別比較も行い、言語学習者というものの行動について考える一助としたい。

2. 調査概要

2.1. 調査対象・期間・方法

台湾で日本語教育を実施している機関(中等教育機関、高等教育機関、学校教育以外の機関)における日本語学習者と日本語教師を対象に、アンケート調査を2003年12月から2004年2月、インタビュー調査を2004年6月から2005年11月に実施した。インタビュー調査では、いわゆる教育機関には属さない日本語学習者等も対象としている。

2.2. 調査票(学習者用アンケート)の内容

学習者用アンケートでは、まず、属性として、性別、居住地域、年齢、母語、身分、日本語学習の開始学年、日本語学習の場所、訪日経験、日本語学習動機、4技能別日本語力自己評価等をたずねた。質問項目は、日本語使用状況(相手、頻度、手段、内容、理由等)、日本語接触状況(物、機会、頻度、内容、理由等)、授業で使用する日本語教材の授業外使用状況、日本語学習のための教材等の利用状況、日本語学習のために充実を希望するもの、等である。

2.3. 回答者数

学習者用アンケートの有効回答数は 3,447 である。学習者回答数の機関別内訳を表 1 に、地域別内訳を表 2 に示す。尚、台湾の教育制度については、本報告書の「3.1.5. 台湾の学習環境の概要」を参照されたい。

表 1 学習者回答数・内訳 ()内は%

	合計	中等教育	高等教育	学校教育以外
回答者数	3447 (100)	926 (100)	2075 (100)	446 (100)
(内訳)				
中学校	39 (1.1)	38 (4.1)	0 (0.0)	1 (0.2)
高校	757 (22.0)	720 (77.8)	0 (0.0)	37 (8.3)
専科学校	641 (18.6)	166 (17.9)	411 (19.8)	64 (14.3)
二年制技術学院	268 (7.8)	0 (0.0)	247 (11.9)	21 (4.7)
四年制技術学院	196 (5.7)	0 (0.0)	192 (9.3)	4 (0.9)
大学	1219 (35.4)	0 (0.0)	1120 (54.0)	99 (22.2)
大学院	103 (3.0)	0 (0.0)	70 (3.4)	33 (7.4)
その他	146 (4.2)	1 (0.1)	11 (0.5)	134 (30.0)
無回答	78 (2.3)	1 (0.1)	24 (1.2)	53 (11.9)

表 2 学習者回答数・地域別内訳 ()内は%

	中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
北部	340 (36.7)	686 (33.1)	237 (53.1)	1,263 (36.6)
中部	333 (36.0)	513 (24.7)	31 (7.0)	877 (25.4)
南部	129 (13.9)	661 (31.9)	36 (8.1)	826 (24.0)
東・島嶼部	66 (7.1)	63 (3.0)	0 (0.0)	129 (3.7)
不明	58 (6.3)	152 (7.3)	142 (31.8)	352 (10.2)
合計	926 (100.0)	2,075 (100.0)	446 (100.0)	3,447 (100.0)

回答者のうち、女性の占める割合は 75.4%、男性は 23.2%である。母語は中国語 91.9%、台湾語 5.9%である。年齢は、中等教育では 10 代が 89.7%、高等教育では 20 代が 74.6%と最も多い。学校教育以外では、20 代が 49.1%と最も多いが、30 代以上も半数近くを占めている。

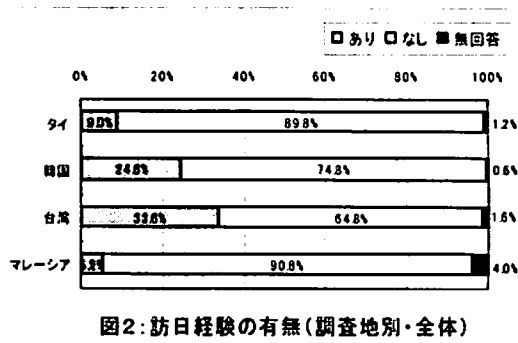
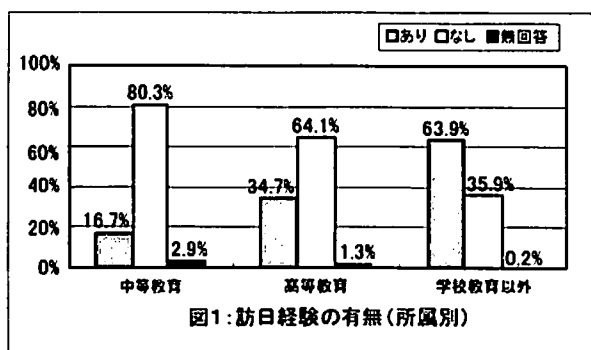
3. 調査結果

質問項目の中から、学習者がどのようにヒト(人)、モノ(物)、コト(場や機会)といったリソースに触れ、それらをどう利用しているのか、どういった方法で日本語を学んでいるのかがわかる項目を選び、その結果を分析する。必要に応じ、他調査地域(タイ<バンコク>、韓国、マレーシア)との比較を行う。また、台湾内での地域間比較及び日本語能力による比較を行った結果も示す。

3.1. 訪日経験

全体の 33.6%は訪日経験がある。中等教育では 16.7%、高等教育 34.7%、学校教育以外 63.9%の学習者に訪日経験があり、教育段階の上昇に従い、訪日経験のある人の割合が高

くなっている(図1)。また、タイやマレーシアに比べ、台湾は訪日経験のある学習者が多い(図2)。



3.2. ヒトとの接触

日本語の授業以外で学習者が実際に日本語を使ってどのようなやりとりをするのか、やりとりの有無、相手、手段、内容等について尋ねた。まず、やりとりをすることがあるかどうかについての結果は以下の通りである。

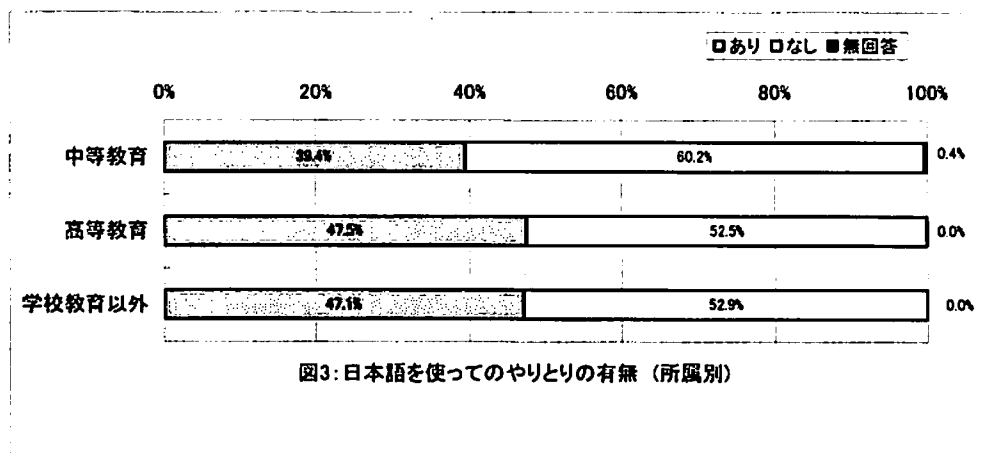


図3に見られるように、日本語の授業以外で日本語を使ってやりとりをする学習者は中等教育でも40%近くおり、高等教育や学校教育以外では半数近い。個人により、やりとりの頻度等に違いはあるが、多くの学習者が授業を離れても日本語を使って何らかのやりとりをしていることがわかる。

やりとりの相手は、中等・高等教育では「学校の友人」「日本語の教師」「知り合い」の順で多く、回答者全体においても同様の順となっている。学校教育以外では「日本語の教師」「塾や語学学校等のクラスメート」「知り合い」であり、日本語を学ぶ場で接する人とのやりとりが中心であり、それに次いで「知り合い」とのやりとりが多いことがわかる。

表3 やりとりの相手 ()内は回答数

順位	合計	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	学校の友人 (995)	学校の友人 (252)	学校の友人 (676)	日本語の教師(121)
2位	日本語の教師(970)	日本語の教師(227)	日本語の教師(622)	塾や語学学校等のクラスメート(91)
3位	知り合い (763)	知り合い (199)	知り合い (485)	知り合い (79)

(複数回答可)

やりとりの相手によって、その手段が異なるかどうかを比べてみると、「日本語の教師」では「直接会って話す(会話)」人が所属機関に関わらず多く、他の手段を用いている人は少ないが、相手が「学校の友人」や「知り合い」の場合は、チャットや電子メールなど、他の手段も多く用いられている(図4, 図5)。特に「知り合い」の場合、日常的に顔を合わせるような状況にあるとは限らず、こうした通信手段が多く用いられていると考えられる。逆に、こういった通信手段が開発されたことにより、海外の知り合いなど、容易に会うことのできない人との接触機会を保つことが可能となり、学習者にとって、日本語を用いたやりとりの幅が広がっているとも言える。

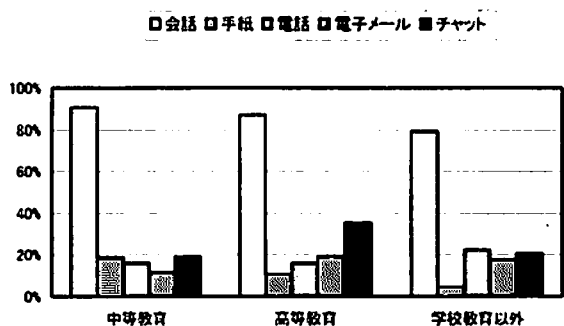


図4:やりとりの手段「学校の友人」の場合(所属別)(複数回答可)

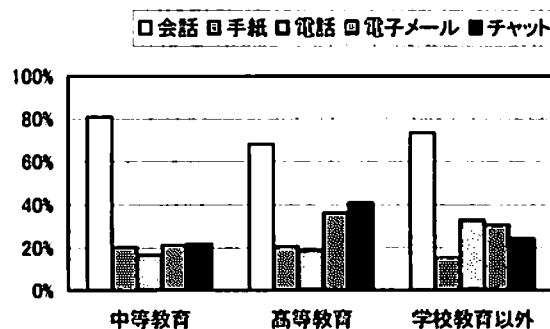


図5:やりとりの手段「知り合い」の場合(所属別)(複数回答可)

「知り合い」とのやりとりにチャットや電子メールを用いるという点については、他の調査地域においても似た傾向がある(表4)。

表4 やりとりの手段「知り合い」の場合-調査地別比較- (%)

手段	タイ	韓国	台湾	マレーシア
会話	71.7	52.9	72.1	60.2
手紙	25.5	29.5	19.8	20.7
電話	28.9	33.7	19.7	17.9
電子メール	35.8	49.9	31.7	37.2
チャット	-	19.4	34.1	30.3

(複数回答可)

本調査は地域によって調査時期が異なるため²、調査地域別の比較をする際には注意が必要であるが、4つの調査地域に共通して、電子メールが、台湾とマレーシアでは、それに加えてチャットがやりとりの手段として重要な位置づけとなっていると考えられる。尚、当初、やりとりの手段としてチャットは選択肢に含まれていなかった。しかし、タイ調査を実施した際、自由回答への記述や聞き取り調査などから、チャットの活用が広がっていることがわかり、翌年の韓国調査からは選択肢に含めた。残念ではあるが、チャットの利用率が台湾とマレーシアにおいて高い理由が、地域性によるものか、チャットの普及によるものかは本調査のデータから予測することはできない。

アンケート調査では、やりとりをする相手の中から「最もよくやりとりをする相手」に関し、やりとりの頻度、方法、内容などを、さらに詳しくたずねている(表5)。やりとりの内容については、台湾では所属に関わらず、「生活について」が最も多く、これは、他の調査地域と共通している。「趣味について」は、台湾の場合、中等教育で3位、高等教育で2位、全体でも3位に挙がるものであるが、他調査地域においてはいずれの教育段階でも3位以内には入らない。これは、後述するモノやコトの利用とも関連するが、台湾の学習者にとって、日本語が「学習」以外のものとも結び付いていることを表していると考えられる。

表5 やりとりの内容－最もよくやりとりする相手の場合－ (%)

順位	タイ		韓国		台湾		マレーシア	
1位	生活	52.8	生活	62.3	生活	64.0	生活	38.1
2位	勉強	44.2	勉強	20.8	日本語	38.7	勉強	36.9
3位	日本語	25.0	日本語	15.6	趣味	38.4	日本語	25.7

ここまで述べてきたように、台湾には日本語によるやりとりを、方法においても、内容においても豊かに行っている学習者が数多くいる。その一方で、授業以外で日本語を使わないという学習者も半数以上いる(図3)。その理由を所属別に見ると、中等教育では「自分の日本語力が充分ではないから」(42.9%)が、高等教育・学校教育以外では、「日本語を使う相手がいないから」(それぞれ、50.7%、71.2%)が最も多い。つまり、相手さえいればやりとりをするという学習者が台湾には多いのである。

「日本語力の不足」と「相手の不在」が理由の上位に挙がるのは、タイ、韓国にも見られる傾向である。しかし、コンピュータの導入状況など、日本語の学習環境が比較的似ていると考えてよい韓国と台湾を比べた場合、韓国では中等教育はもちろん、高等教育機関であっても日本語力の不足を第一の理由として挙げる学習者のほうが多い。これは、韓国と台湾の学習者の言語学習観やコミュニケーション観の違いの現れと捉えることもできるだろう。

表6 授業以外で日本語を使わない理由 (%)

日本語を使わない理由	タイ	韓国	台湾	マレーシア
日本語を使う相手がいないから	43.2	32.2	49.5	14.6
日本語を使いたいと思わないから	0.9	3.6	2.8	1.7
自分の日本語力が充分ではないから	43.2	43.0	33.2	63.0
恥ずかしいから	1.2	0.3	1.5	0.6
自信がないから	-	6.5	3.4	4.2
母語や英語などの方が便利だから	8.3	8.8	7.3	5.2
その他	1.4	3.0	0.6	0.1
無回答	1.5	2.6	1.8	10.7

3.3. モノとの接触

学習者の身の回りにある、日本語で書かれたものや日本語が使われているものに対する見聞きについて、見聞きの有無、対象、頻度等についてたずねた。

身の回りに日本語で書かれたものや日本語が使われているものがあると答えた 2,867 人の内、日本語の授業以外の時間に、それらを見たり聞いたりすることがあると答えたのは、2,683 人(93.6%)である。所属による違いはなく、他調査地域と比べても大きな差はない。

見聞きするもので最も多いのはテレビ番組であり、これは所属を問わず第1位となっている。他の調査地域と比べても、テレビ番組を見聞きする人の多さは目立つ(表7)。これは、台湾が日本からのテレビ番組輸出量が世界で最も多く、日本番組専門チャンネルなどが存在することと関係があると思われる。

表7 授業以外で見聞きするもの (%)

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1位	テレビ放送 56.2	マンガ 52.8	テレビ番組 86.3	ビデオ・VCD・DVD 63.8
2位	マンガ 53.8	テレビ番組 48.0	CD 61.6	テレビ 57.2
3位	雑誌 48.1	ビデオ・DVD 47.8	マンガ・アニメ 59.4	マンガ・アニメ 39.0

(複数回答可)

最もよく見聞きするものを1つ挙げた場合も、台湾では、テレビ番組(41.6%)、CD(16.0%)、マンガ・アニメ(12.0%)の順である。そして、見聞きする頻度を見ると、「毎日」と「週2,3回」が多く、両者をあわせると72.9%となり、日本語が使われているものを日常的に見たり聞いたりしている人が多いことがわかる。

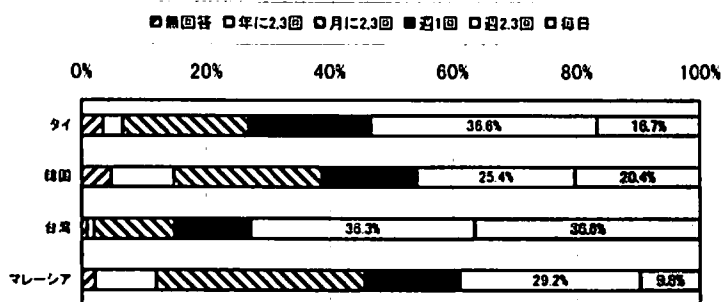


図6: 見聞きする頻度(性別・全体)

3.4. コトの利用

学習者が授業以外の様々な日本語学習の場や機会をどのように利用しているのかについてたずねた。

何らかの場や機会を利用したことがある学習者は 39.4%，ない学習者は 58.9%であった。利用経験のある学習者 1,357 人に、これまでに利用した経験のある場や機会をたずねたところ、台湾での利用経験があると答えたのは 1,155 人で、表 8 に示すように「日本語のカラオケ」が最も多かった。台湾は、カラオケのできる場所、カラオケ機材を持つ家庭が多い。

表 8 利用経験のある場や機会－台湾－ (%)

順位	全 体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本語のカラオケ (48.0)	日本語のカラオケ (47.1)	日本語のカラオケ (49.6)	日本語のカラオケ (42.8)
2位	日本・日本語に関するイベント (36.8)	日本・日本語に関するイベント (37.7)	日本・日本語に関するイベント (37.7)	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事 (29.9)
3位	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (22.2)	日本人との交流会 (33.2)	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (26.7)	日本・日本語に関するイベント (23.5)

(複数回答可)

また、後述する「日本語学習のために現在使っているもの」の第 3 位に「日本語の歌」が挙がっており、台湾の学習者はカラオケやテレビ番組などを通じて日本語の歌になじみがあるだけでなく、それを学習のために用いる人も多いようである。

日本での利用経験があると答えたのは 473 人で、その内容は表 9 に示した通りである。

表 9 利用経験のある場や機会－日本－ (%)

順位	全 体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (67.2)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (70.0)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (70.1)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (58.8)
2位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (44.2)	日本人との交流会 (30.0)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (50.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (40.3)
3位	日本人との交流会 (27.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (20.0)	日本人との交流会 (30.6)	日本人との交流会 (19.3)

(複数回答可)

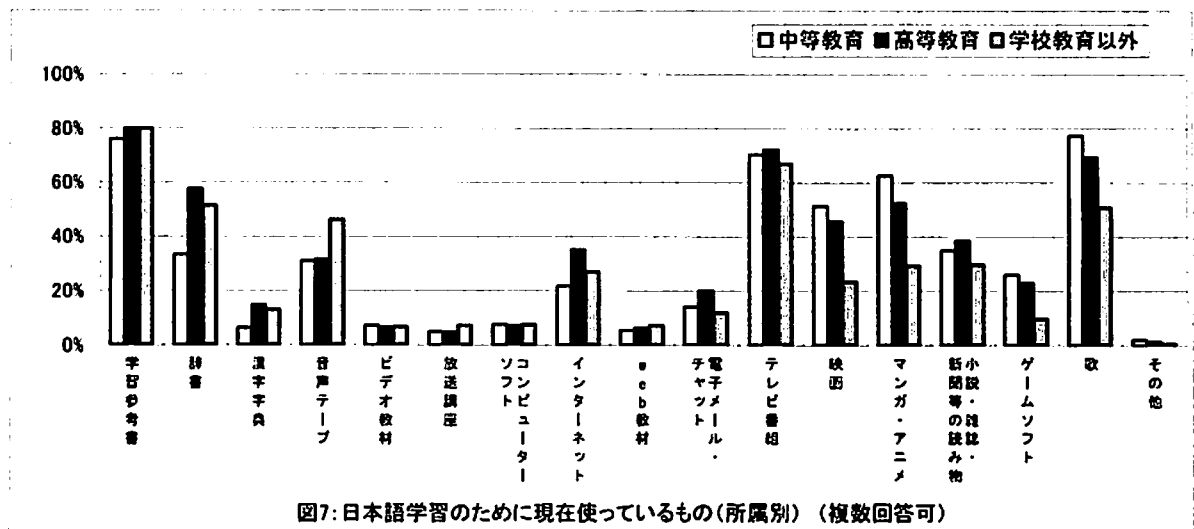
利用経験のある場や機会の中で、再度あるいは継続して経験したいものがあると答えた回答者1,164人に、最も経験したいものを1つ選んでもらった。全体では「日本人がいる場所、日本人が集まる場所」「日本人家庭への訪問・ホームステイ」「日本・日本語に関するイベント」の順で回答者が多かった(表10)。日本人との交流が期待できる活動に対する要望が高いことがわかる。

表10 再度あるいは継続して最も経験したい場や機会 (%)

順位	全体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本人がいる場所、日本人が集まる場所 (18.2)	日本人がいる場所、日本人が集まる場所 (18.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (18.8)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (19.4)
2位	日本人家庭への訪問・ホームステイ (17.6)	日本・日本語に関するイベント (14.2)	日本人がいる場所、日本人が集まる場所 (18.7)	日本人がいる場所、日本人が集まる場所 (15.6)
3位	日本・日本語に関するイベント (11.7)	日本人家庭への訪問・ホームステイ (13.1)	日本・日本語に関するイベント (11.3)	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事 (12.4)

3.5. 日本語学習のために使っているもの

日本語の学習のために、現在使用しているものについてたずねたところ、全体では、「学習参考書・問題集」(79.0%)が最も高く、「日本語のテレビ番組」(71.1%)、「日本語の歌」(69.1%)がそれに続いた。図7に見られるように、中等・高等教育では、テレビや歌のほかに、マンガ・アニメ、映画などを使う回答者も多く、自分自身の興味・関心に応じて、楽しみながら学習している様子が伺える(図7)。



3.6. 今後の充実を希望するもの

日本語学習や日本理解のために、今後さらに充実を希望するものは何かをたずねたところ、表11に示す結果となった。すでに述べたように、「日本のテレビ番組」は、連日、放送されており、それを日常的に見ている学習者、学習のために利用している人はかなり多

いのだが、より一層の充実を希望している。その一方で、日本人との交流や留学の経験者は現在、それほど多くはないが、そういった機会の充実を期待する声も高い。希望するものの中で「特に希望するもの」を1つ挙げてもらったところ、全体では「留学の機会」(27.8%)「日本人との交流」(24.0%)「日本語のテレビ番組」(19.6%)の順となったことから、現在はまだ充実しているとは言えない留学や交流の機会とともに、ある程度充実し、活用できていると言えるものについてもさらに期待をしていることがわかる。

表 11 今後の充実を希望するもの (%)

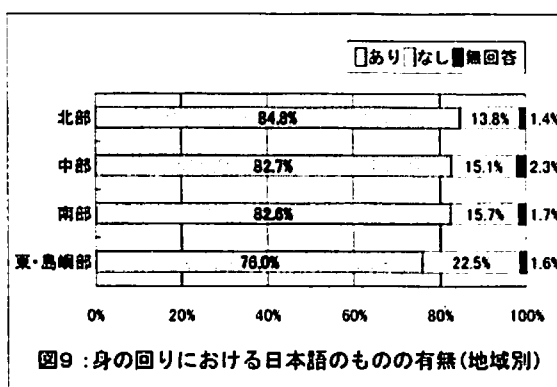
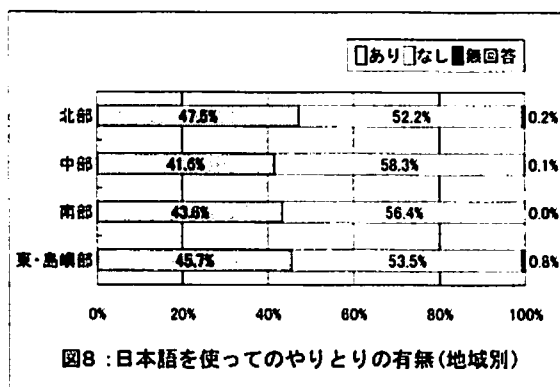
順位	全 体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	日本語のテレビ番組 (64.0)	日本語のテレビ番組 (67.8)	日本語のテレビ番組 (63.3)	日本語のテレビ番組 (59.2)
2位	日本人との交流 (58.5)	留学の機会 (58.6)	日本人との交流 (60.5)	学習参考書・問題集 (52.8)
3位	留学の機会 (54.9)	日本人との交流 (58.4)	留学の機会 (57.1)	日本人との交流 (49.5)
4位	学習参考書・問題集 (53.5)	日本語の映画 (56.1)	学習参考書・問題集 (53.4)	辞書 (45.6)
5位	日本語の映画 (49.3)	学習参考書・問題集 (54.2)	日本語の映画 (49.9)	日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物 (40.6)

(複数回答可)

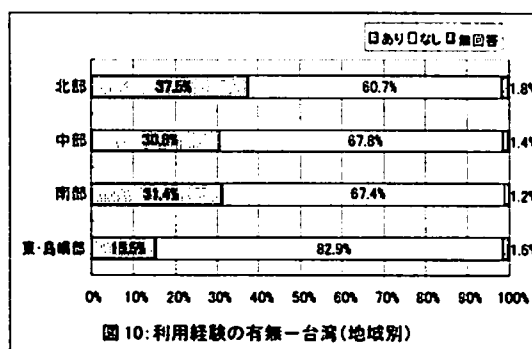
3.7. 台湾における地域差

台湾は、大きく北部、中部、南部、東・島嶼部という地域に分けられる。ここでは、地域によって日本語や日本人との接触の度合いが異なるのかどうかを比較する。

まず、3.2で取り上げた「授業以外で日本語を使ってやりとりをするかどうか」だが、地域間での大きな差は見られない(図8)。また、3.3で取り上げた「身の回りに日本語で書かれたものや日本語が使われているものがあるか」についても、大きな差はない(図9)。日本人が多く住み、日本に関する情報なども入手しやすい台北市を中心とした北部地域において、他地域よりも日本語に接する機会が多いことが予想されたが、実際は地域による差はさほど大きくなかった。また、台北市、台中市、高雄市といった都市部とそれ以外の地域についても比較を試みたが、ヒトとモノについては大きな差はなかった。



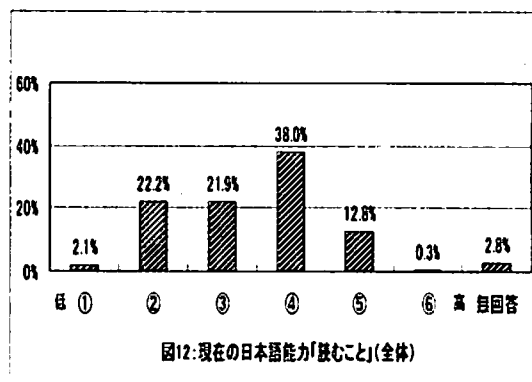
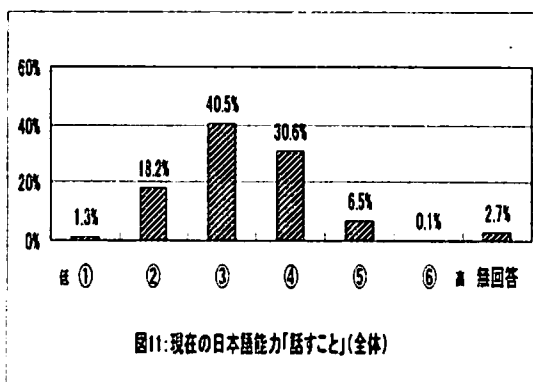
地域による差が見られたのは、コトについてである。3.4で取り上げた「授業以外の日本語学習の場や機会を利用したことがあるかどうか」に関し、台湾での経験については、図10に示す結果となった。東・島嶼部では、利用経験があると答えた割合が他の地域の約半分となったのである。これは、ヒトやモノについては、インターネットやテレビ放送の充実等により、地域差がなくなっているのに対し、東・島嶼部では、利用できる場や機会そのものが他地域よりも少ないということによると考えられる。



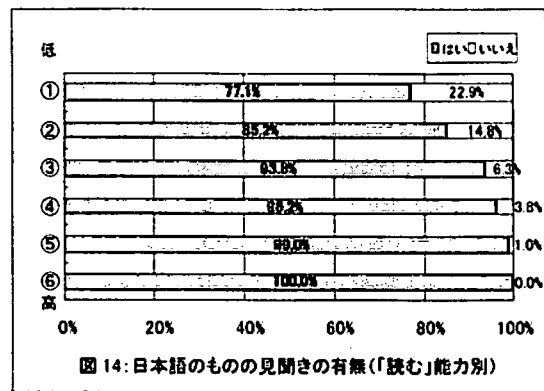
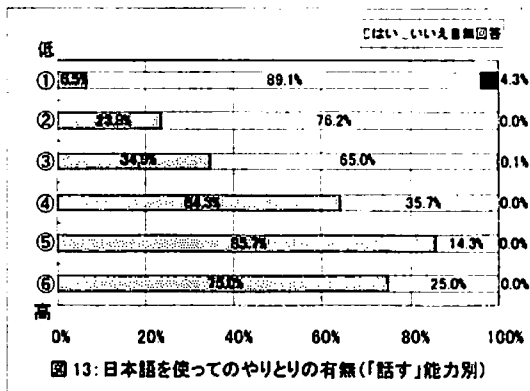
3.8. 日本語能力による比較

本アンケート調査では、日本語能力とリソース利用の関係について知るために、「読む・書く・聞く・話す」の4技能それぞれの能力について、6段階で自己評価してもらっている。6段階とは、「話す」能力については、①「全くできない」②「挨拶ができる」③「簡単な自己紹介ができる」④「日常生活に必要な表現を状況に応じて使える」⑤「自分の意見や考えを話すことができる」⑥「母語と同じように話せる」。「読む」能力については、①「全くできない」②「ひらがなとカタカナが読める」③「よく使われる漢字なら日本式に読める」④「簡単な文章ならだいたい理解できる」⑤「新聞や雑誌、興味のある分野の本などがだいたい理解できる」⑥「母語と同じように読める」、である。

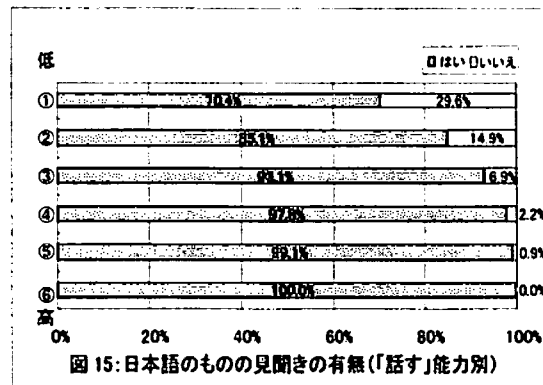
ここでは、「話す」「読む」の能力と、リソース利用との関係について分析する。尚、「話す」能力と「読む」能力について、回答者は図11、図12のように自己評価している。



まず、3.2で取り上げた「日本語を使つてのやりとりの有無」だが、図13に示すように、話す能力が低い場合は日本語を使つて人とやりとりをする人は少なく、話す能力が高いほうがやりとりをする人が多い³。しかし、「読む」能力に関しては、能力が低いからといって、日本語で書かれたものや日本語が使われているものを見聞きしないわけではなく、能力が低くてもかなり多くの学習者が日本語のものを見聞きしている(図14)。

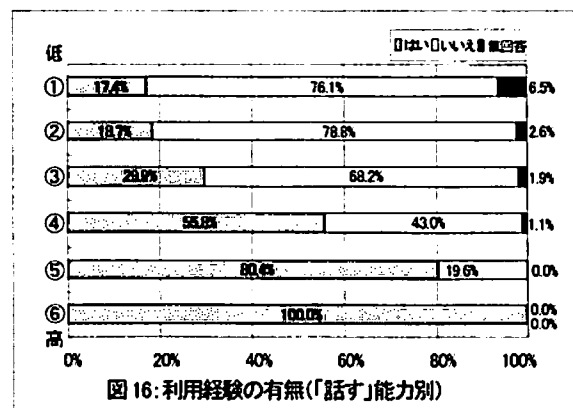


これは、「話す」能力との関係でも同様で、たとえ「話す」能力が低くても、日本語のものを見聞きしている人は多い(図 15)。仮に、挨拶程度の日本語しかできない学習者であっても、授業以外の時間に日本語のものを見たり読んだりしている可能性は非常に高いのである。



人とのやりとりにおいては、相手の日本語を理解し、自分も日本語を発するという

ことをしなくてはならず、ある程度の日本語能力が必要となるが、もの見聞きにおいては、わからなければわからないままにしておいたり、また、わかるところだけを見たり聞いたりするなど、自分のペースで自分の能力を発揮することが可能である。印刷物であれば、辞書を引きながら読むこともでき、また、ビデオであれば、巻き戻しも可能ということで、対象によっては何度も繰り返して読んだり聞いたりすることができるのである。そのために、能力に関わらず、多くの学習者がモノに接していると考えられる。また、漢字を共有する台湾の学習者にとっては、日本語で書かれたものはある程度、内容を類推することも可能であり、それによってモノへの接触に対する抵抗がないとも考えられる。



しかし、「話す」能力の高低とヒトとの接触度合いに関係があるように(図 13)、コトの利用、つまり日本語学習に関する場や機会の利用においても、能力の違いとの関係が見られる(図 16)。日本語を話す能力が低い場合には、コトを利用する人は少なく、能力が高ければ利用者も多いのである。これは、そういった場や機会においては、人とのやりとりが含まれる場合が多く、話す能力が低い学習者には利用が困難に感

じられたり、そういった場や機会が十分に活用できないと判断されたりすることによるかもしれない。また、日本語能力が低いために、日本語学習に関わる情報の入手が困

難であるということも考えられる。

4. 台湾調査からわかることと今後の課題

台湾で行われたアンケート調査結果を中心に分析し、台湾の日本語学習者がリソースをどう利用しながら日本語を学んでいるかを述べてきた。他調査地域との比較、台湾の中での地域間比較、日本語能力による比較などを通じて、以下のことが明らかになった。

- 1) 全般的に、台湾の学習者は他の調査地域に比べ、リソースに接する機会が多い。
- 2) 他の調査地域に比べ、日本語のテレビ番組や歌に触れる学習者が多く、それらを日本語の学習のために利用している者も多い。
- 3) 台湾においては、ヒトとの接触やモノの有無について、地域による差はほとんどない。
- 4) 台湾においては、日本語能力(話す)が高いほど、ヒト・コトの利用度が高いが、モノとの接触には日本語能力は関係がない。つまり、日本語能力が低くても、学習者はモノとの接触は行う。

本稿で取り上げたのは、台湾で行ったアンケート調査の一部である。台湾の中での地域間比較や、日本語能力による比較も部分的に行ったが、多くの項目について、同様の比較を行う必要がある。また、年齢や学習歴などを観点にして比較など、台湾の日本語学習者のリソース利用について、その特徴を明らかにするためにすべき分析はまだ数多く残されている。さらに、他の調査地域との比較を通じて、それぞれの地域の特徴と同時に海外の日本語学習者の共通点というものを明らかにしていく必要もある。

尚、本稿で試みた分析は、いくつかの問題点を含んだものとなっている。まず、調査時期の異なるものを比較していることである。実施体制の問題などから、全地域一斉にアンケート調査を行うことができず、かなり実施時期の隔たりのあるデータを比較することとなった。特に、技術の進歩が著しいリソースを選択肢に含んでいる質問については、その結果を解釈する上で、十分な注意が必要である。

技術の進歩とリソース利用の関係について考えた場合、技術革新が学習者のリソース利用に与える影響と同時に、影響を受けない側面もあると予想される。影響を受けない側面は何なのかを明らかにしていくことも、今後の課題の一つとして挙げられる。

以上の課題については、今後、分析を重ねることにより解明し、また、新たに類似の調査を定期的実施していくことにより解決できるのではないかと考えている。

注

- ¹ 台湾におけるアンケート調査に関する結果は、国立国語研究所(2005)を参照のこと。
- ² タイ(2001年12月)、韓国(2003年3~9月)、台湾(2003年12月~2004年2月)、マレーシア(2004年6~7月)の順に実施している。
- ³ 「話す」能力の⑥「母語と同じように話せる」と自己評価している回答者は、4名しかいないため、この後の分析には注意を要する。

参考文献

- 国立国語研究所(2002)『平成13年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2004)『平成15年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－韓国アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2005)『平成16年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－台湾アンケート調査集計結果報告書』
- 国立国語研究所(2005)『平成17年度 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
－マレーシアアンケート調査集計結果報告書』

韓国調査にみるインタビュー調査方法の検討 —インタビュー調査によって学習者から引き出されたもの—

小河原義朗・笠井淳子(国立国語研究所)
石井恵理子(東京女子大学)

1. はじめに

国立国語研究所では、2000年から国内外の地域(日本、タイ(バンコック)、韓国、オーストラリア(ビクトリア州)、台湾、マレーシア)を対象に、各地域・機関と連携しながら5年計画の大規模調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施してきた。

本調査研究の最も大きな目的は、国内外の日本語教育の学習環境と学習手段に関する実態について全体的な傾向を把握し、新たな観点から日本語教育の改善・支援・連携のための基礎資料を作成することにあった。この点については、国立国語研究所(2004)など、これまで様々な形で成果報告を行ってきたが、本調査研究をもとに、今後の学習環境と学習手段に関する調査研究における調査方法のあり方、調査の内容・技術に関する検討のための基礎資料を提供することも、その目的の一つであった。

そこで本稿では、本調査研究の方法の検討、特に韓国調査における学習者を対象としたインタビュー調査の方法について、インタビューによって学習者から何を引き出すことができたのか、あるいはできなかったのかという観点から検討し、今後のための基礎資料とする。

2. 韓国調査の概要

本調査は、微視的(個々の日本語学習や教育等)・巨視的(日本語教育が置かれている社会環境等)視点から、学習者・教師の双方を対象とし、主にアンケート及びインタビューの手法を用いて行った。その他に、教育制度や出版状況、インフラ状況等、韓国の日本語教育にかかわるマクロレベルの情報について、文献調査、現地聞き取り調査もあわせて実施した。

アンケート調査では、韓国全体を視野に入れ、ソウル、釜山、光州の3地域を核として2003年3～9月に実施した。高等教育機関(大学)については日本語・日本語教育関連学会を通じて、中等教育機関(中学校・高校)については各地域の教師会にあたる日本語教育研究会を通じて、調査協力校の選定、アンケートの配布及び回収を行った。学校教育以外の機関(民間)については調査協力機関を経て行った。学習者の有効回答数は6,739名(回答率91.9%)である(表1)。

表1 アンケート有効回答数(%)

	中等教育	高等教育	学校教育以外	計
機関数	45(47.9)	38(40.4)	11(11.7)	94(100)
学習者	3,177(47.1)	2,456(36.4)	1,106(16.4)	6,739(100)

特に学習者を対象としたアンケート調査では、学習者が日本語を学習する際には何らかの人・物・場や機会といった対象(以下、リソース)に接触すると考えられることから、学習者がどのようなリソースにどのように接触しているのかについて質問する項目が中心になっている。また、リソースの種類や接触の方法等に影響すると考えられる項目として、日本語学習歴、学習動機、訪日経験等についてもあわせて尋ねている。このアンケート調査結果の詳細については、国立国語研究所(2004)を参照されたい。

このアンケート調査結果を踏まえ、並行してインタビュー調査を実施した。アンケート調査では、韓国での日本語学習環境・手段を全体的に把握するために、大規模な量的調査を行った。しかし、全体像は把握できても、各学習者が具体的にどのようなリソースにどのように接触しているのかについて知るには限界がある。そこで、より具体的、個別的なリソースとの接触状況やそれに対する評価等について聞く、インタビュー調査を実施した。韓国調査では2回のインタビューを行っており、1回目は2003年9月、2回目は2005年2月に、本稿の筆者3名で実施した。インタビュー調査対象学習者の内訳を表2に示す。表2中、「その他」とは「大学生・大学院生以外(会社員等)」を示す。

表2 インタビュー調査対象者の内訳(人)

地域	1回目		2回目	
	大学	その他	大学	その他
ソウル	35	0	30	0
大邱	6	2	0	0
釜山	20	2	0	0
大田	25	0	0	0
天安	0	0	11	4
計	86	4	41	4

このインタビューは、量的に全体を把握しようとするアンケート調査を補完する質的調査として位置付けられる。筆者らが本調査のために現地を訪れた際に、限られた時間と場所の制約の中でインタビューへの協力が得られた学習者を対象に実施した。地域によってデータ数等にばらつきがあり、大学生が中心であるなど、データに偏りがあるのは、そのためである。インタビューは、以下に示したような調査項目をもとにした半構造化式インタビューとした。この調査項目は、事前に3名のインタビュアーに共通した項目として設定したものであるが、学習者やインタビューの展開によって、内容はインタビュアーの裁量に任された。

【インタビュー項目】

(0)身分、訪日経験、日本語学習動機

- (1) 現在、どこで日本語を学習しているか。勉強を始めて、何年くらいか。
 - ・日本、日本人、日本語とのつながりはどうか(周囲の日本語環境：日本人をよく見るか等)
- (2) 日本語の学習は楽しいか。その理由は何か(他の外国語学習との違い等)。
日本語のイメージはどうか。
 - ・現在受講中の日本語の授業についてどう思うか(内容、方法、教科書、頻度、時間、人数等)。
- (3) 授業の予習、復習、テスト勉強等、自分自身でどのように勉強しているか。
 - ・(勉強方法として挙がってこないものについて)それをしないのはなぜか。
 - ・授業で扱われること以外のことを勉強しているか。その方法は。
 - ・自分で勉強していて、何かわからないことがある時はどうしているか。
 - ・学習が大変な部分はどんなところか。
 - ・どんな助けがあれば、その学習が容易になると思うか。
- (4) 今後、日本語学習をどう予定、あるいは計画しているか。
 - ・日本語学習に対するやる気のもととなっているものは何か。
- (5) その他

インタビューは、3名がそれぞれ実施し、学習者と個別あるいはグループで行った。時間は学習者の都合に合わせて、一人30～60分の範囲で日本語で行った。そのため、今回対象となった学習者は日本語でインタビューを受ける程度の日本語力がある学習者である。インタビューはMDに録音・文字化して資料とし、分析を行った。

3. インタビュー調査方法の検討

3.1. インタビューの結果

インタビューの結果について、インタビューの文字化資料をもとに表2の135名を対象として学習者ごとにマッピング(Margulies, 2002)の手法を使って示すと、図1のようになる。図1はある日本語学習者Aの日本語との接触状況について示したものである。図1は、学習者Aがどのような人(斜線で示した□)・物(網掛けで示した□)・場や機会(白色で示した□)に接触しているのかについて、学習者Aを中心に示したものである(以下同様)。

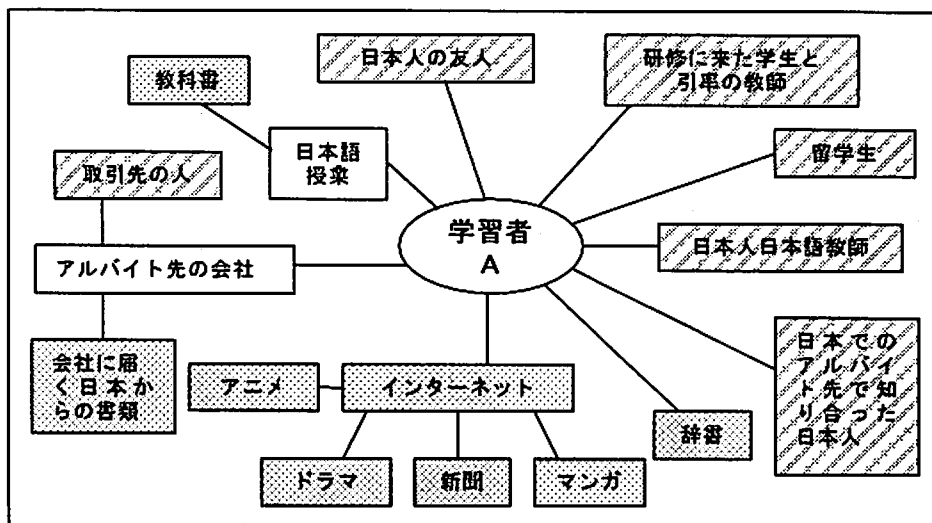


図1 学習者 A の日本語との接触状況

学習者 A は釜山の大学で日本語を専攻している大学院生である。人との接触としては、大学の「日本人日本語教師」「日本人留学生」「大学に研修に来た日本人学生と引率の日本人教師」と大学で直接日本語を使って接触している。さらに、日本への留学時に知り合った「日本人の友人」「日本でのアルバイト先で知り合った日本人」と e-mail を通じて日本語で接触している。物との接触としては、「辞書」の他に、インターネットを通じて日本語の「アニメ」「ドラマ」「新聞」「マンガ」を見たり読んだりしている。場や機会との接触としては、当然ながら「日本語の授業」があり、そこから授業で使う「教科書」に接触している。また、アルバイト先の日系企業で「取引先の日本人」と話したり、会社に届く「日本からの書類」を読んだりするなどして日本語と接触している。このように、約 30 分間という限られた時間でのインタビュー内容ではあるが、学習者 A が日本語の授業以外にも様々なリソースを通して日本語と様々な接触をしていることがわかる。

また、学習者の中には図 1 の学習者 A のように人・物・場や機会を様々に利用している学習者もいれば、図 2 の学習者 B のように物との接触が多い事例(網掛けで示した□が比較的多い)、図 3 の学習者 C のように場や機会との接触が多い事例(白色で示した□が比較的多い)が見られた。

具体的には、図 2 の学習者 B は釜山の学院で学ぶ高校生で、「音楽」を聞いたり、「テレビ」や「雑誌」「映画」を見たり、自分が書いた「作文」を何度も読んだり、直してみたりしている。また、「インターネット」を通じて好きな「アイドルの情報」を集めたり、「ドラマ」を見たりしている。

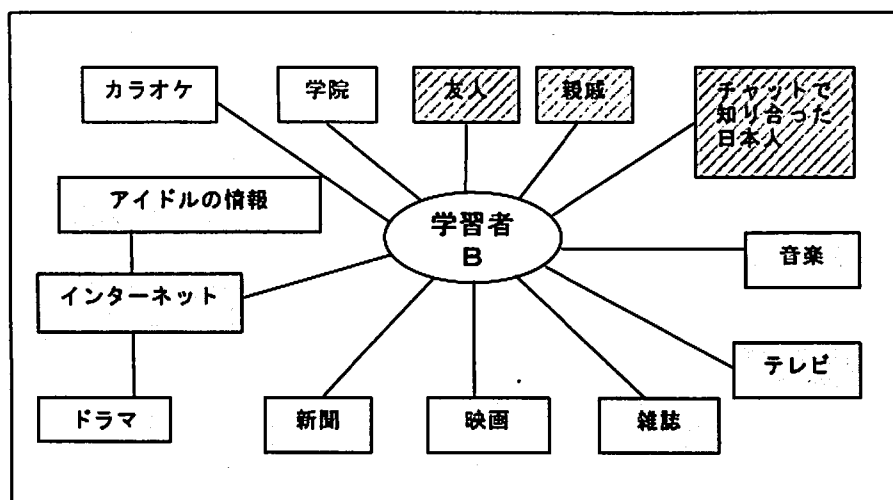


図2 学習者Bの日本語との接触状況

一方、図3の学習者Cは釜山の大学で日本語を専攻している大学生である。日本人家庭への「ホームステイ」に参加したり、2003年に韓国で行われた「ユニバーシアード」競技大会で審判や選手の通訳をしたり、「免税店」に行って日本人に話しかけてみたり、「ボランティア活動」に参加したり、「学院」でも日本語の勉強をしたりしている。

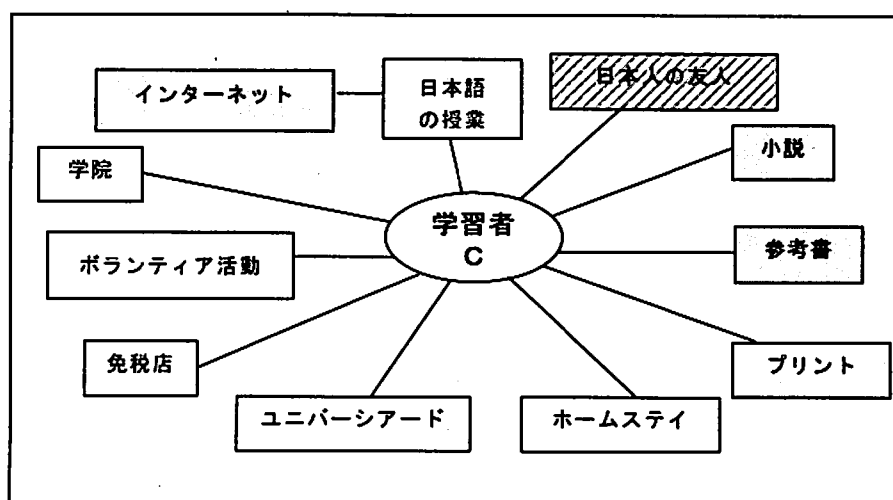


図3 学習者Cの日本語との接触状況

このようにインタビューによって、各学習者の置かれた学習環境や学習目的に応じた様々な日本語接触の様子が見られた。このことから、学習者は日本語の授業以外にも日常生活において身の回りにある様々な人・物・場や機会としてのリソースを通じて日本語と様々な接触をしているという、アンケート調査結果(国立国語研究所(2004)など)を学習者個別に具体的に示すものとなった。

しかし、日本語との様々な接触が起きている学習者とは対照的に、あまり接触に広

がりが見られない学習者もいた。図4は左側に図1の学習者A、右側に同じく釜山にある大学で日本語を専攻している学習者Dの日本語との接触状況を比較して示したものである。

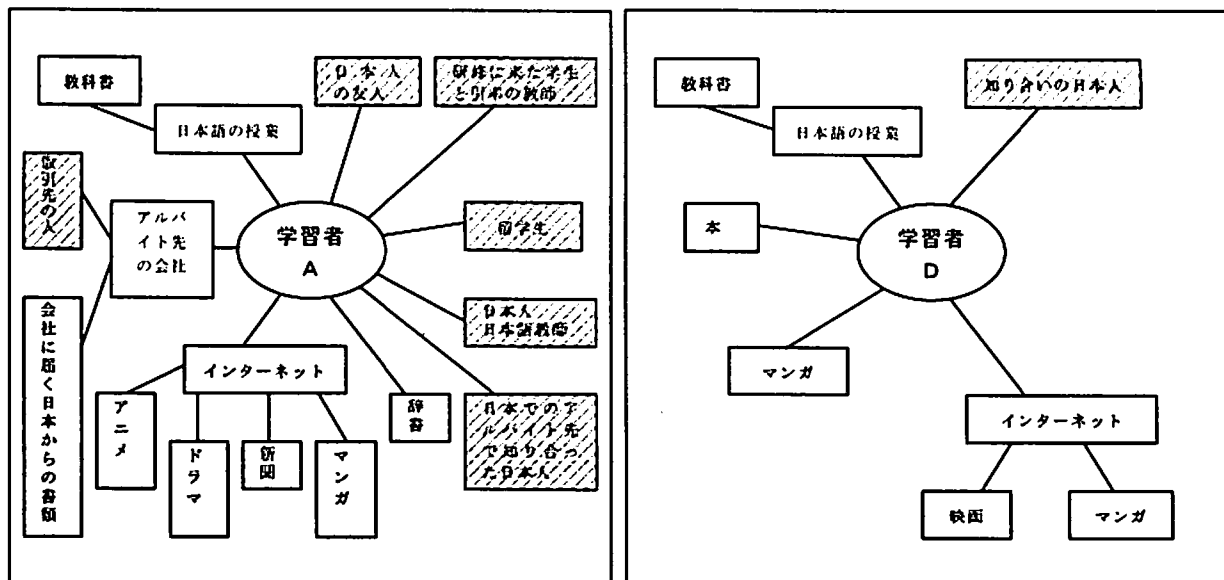


図4 学習者AとDの日本語との接触状況

図4に示したように、学習者Dは先の学習者Aと比べて、接触の範囲が狭いことがわかる。このように学習者間で接触の範囲に違いが見られる要因としては、まず地域によって日本語に関するリソースの絶対量に違いがあるという物理的環境の問題が考えられる。また、この学習者Aが大学院生、学習者Dが大学生というように、学習者の日本語レベルの違い、その他にも動機づけなど、様々な学習者要因が考えられる。

そのような様々な要因の中で、本稿では特にインタビューの方法自体による影響について、以下で検討する。

3.2. 第1回インタビュー

学習者の接触範囲の違いに影響を与えるインタビュー要因について、学習者の接触範囲が広い場合と狭い場合に分けて検討する。

まず、図4の学習者Aのように、接触範囲が広がったという結果自体は、学習者個別の接触対象や範囲について現状を把握するという意味では、限られたインタビュー時間ではあるものの、インタビューによって実現できていると考えられる。しかし、インタビュアーが学習者からなるべく多くの接触対象を引き出そうとすると、限られた時間の中ではそれらの対象に接触する理由、具体的な接触方法や接触に対する評価などについては十分なデータを得ることはできない。この点については、インタビュアーがその理由や具体的な接触方法などについて学習者からうまく引き出せなかった、あるいは、学習者の方でリソースに単純に接触しているだけで接触方法にあまり特徴的な工夫が見られない、接触に対する評価も意識的になされていないという場合には、

インタビュアーが意図的に他の接触対象に話題を切り替えるなどしたため、結果的に接触範囲を探るだけのインタビューになってしまったというケースも見られた。

一方、学習者 D のように、接触範囲が狭かったという結果については、接触範囲が広がったという結果同様、学習者の接触範囲が狭いという現状を把握できたという意味では有益な情報である。ただ、接触範囲が狭いという事実だけでなく、なぜ狭いのか、なぜ接触しようとししないのかなどについて聞くことは今後の具体的な支援や実践の改善に向けた示唆となる。

また、接触範囲が狭いのではなく、インタビュアーが学習者から接触対象をうまく引き出せなかったということも考えられる。例えば、以下は中国語専攻で日本語を選択している学習者に対するインタビューの一部である。I はインタビュアー、L は学習者を示す。

I: 今までの学生さんは日本語だったんですけど。

L: みんな、はい。

I: じゃ、中国語も勉強しながら日本語も勉強してるんですか？

L: ……勉強じゃなくて。

I: はい。

L: なんか興味があって。

I: はい。

L: 中学生からずっと日本語……勉強したん……です。

インタビュアーの「勉強」という言葉に学習者は「勉強じゃなくて」と答え、以後この学習者は全体的に言いよどんだ発話になっている。この学習者にとって日本語は興味の対象であり、それを日本語の勉強として聞かれたことに違和感を覚えていると考えられる。つまり、学習者は日本語の「学習」や「勉強」のためにリソースに接触しているわけではないにもかかわらず、インタビュアーが日本語の「学習」「勉強」といった語を用いて接触対象を尋ねてしまったために、リソースをうまく引き出せなかったということが考えられる。リソースについて尋ねてもほとんど反応がなく、インタビュー自体が停滞していたところに、話の流れから偶然日本語の「マンガ」の話になった途端、日常的にたくさんの「マンガ」に様々な方法で接触している実態が語られ始めたというような事例があった。学習者の日本語学習に対する捉え方を踏まえ、日本語との「接触」に重点を置いた聞き方や具体例を出すなど柔軟に対応する必要がある。

以上、接触範囲の広がりという観点からインタビュー結果について見てきたが、そのような学習者の多様な接触状況の中で、アンケートの質問項目の一つでもあった「日本語の授業でどのようなものを使っているか」について尋ねたところ、「教科書」「ビデオ」「プリント」といった回答が多く、あまり多様性がない傾向がみられた。そこで、インタビューの対象となった学習者に共通した日本語に接触する場である「日本語の授業」(以下、授業)を中心にマッピングデータを見てみる。

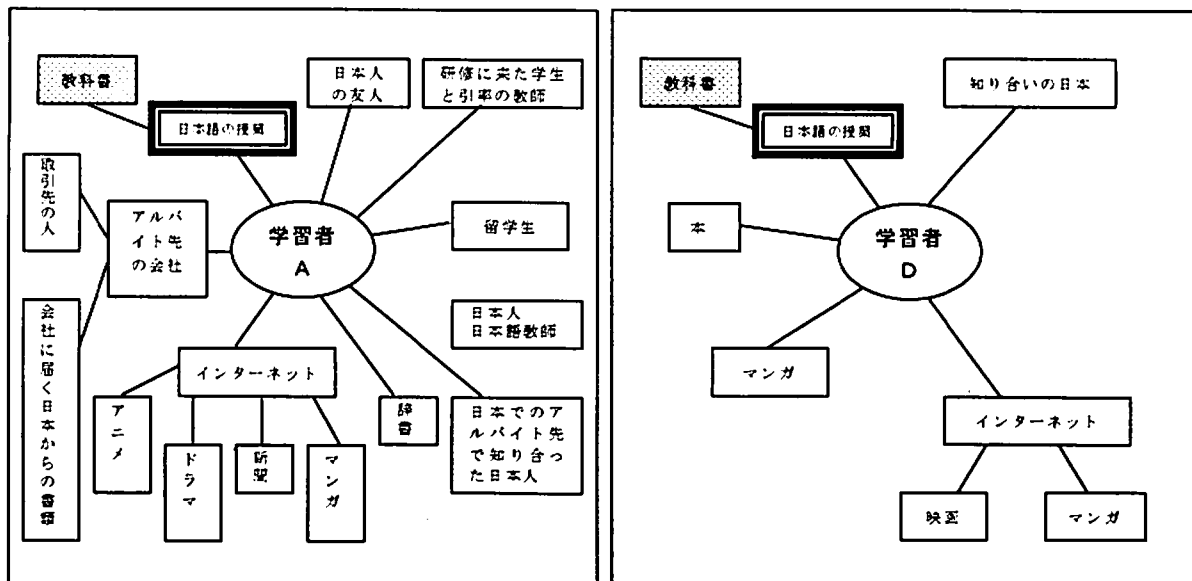


図5 学習者 A と D の授業を中心として見た日本語との接触状況

図5は図4と同じ学習者Aと学習者Dの接触状況を比較したものであるが、授業を中心に見てみると両者とも授業から他のリソースへの接触が広がっていないことがわかる。比較的接触範囲が広い学習者Aにしても、授業からは授業で使用している「教科書」のみで、他のインタビュー結果でも同様に授業から接触が広がっていない傾向が見られた。つまり、学習者は日本語の授業外で様々なリソースに接触している一方で、それらが授業における日本語の学習と有機的に結びついていないということが考えられる。もちろん、この点についてはインタビュアーが直接尋ねなかったためか、学習者が意識していないだけで、実際には授業での日本語学習が他のリソースへの接触につながっているということもある。しかし、授業を基にした接触の広がりについてこちらから直接質問した場合でも、そのような具体的な事例はあまり現れなかった。むしろ、「授業での学習と授業外での様々な接触は別である」「授業では成績のためにやっている」といった学習者の声が多く見られた。日本語の学習がコミュニケーションのための日本語習得を目的とした場合、その授業が基点となって、身の回りにある様々な日本語との接触の機会が広がっている、あるいは学習者自身からそのような機会を広げていけるような授業のあり方を検討することは、授業改善のための重要な契機となる。

この点に関して、インタビューの中から「インターネット日本語」「情報日本語」といった科目名の授業の中で日本語学習の手段や情報を提供するような授業展開によって、以下の表3のような授業外へと接触の広がりが起きている事例が見られた。

表3 授業から接触が広がっている学習者の事例(大学生3名)

地域	授業内	→	授業外
釜山	<ul style="list-style-type: none"> ・政治について日韓のホームページを見る ・グループで発表する ・おすすめのサイトなどを紹介しあう 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・家に帰っても一人でホームページを見る ・自分の考えなどをまとめてみる
釜山	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページに掲載されている新聞記事を読む ・それに関する討論を行う 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページで頻繁に新聞記事を読む ・チャットを使って意見交換を行う
大邱	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットの新聞記事や「キッズ goo」(漢字を振り仮名付きで表示するホームページ)を紹介される 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事を読む ・ひらがなルビ機能を使って他の物も読む

このようにして引き出されたものは、授業が授業の中だけで完結するのではなく、接触を広げる基点として授業を捉えなおすといった、授業の役割を改めて考える契機となり、授業改善のための示唆となる。しかし、このような観点からの質問は1回目のインタビューの際にはインタビュアー間で積極的に意識されていなかった。

3.3. 第2回インタビュー

第2回インタビューを実施するにあたり、基本的には第1回インタビューと同様の内容と方法を用いるが、前節で検討した内容を受けて、以下のことを踏まえた上で行った。

- ・日本語の接触対象や範囲だけでなく、接触の理由や具体的な方法、接触に対する評価に重点を置く
- ・接触対象や範囲が狭い場合にはなぜ狭いのかその理由を尋ねる
- ・学習者の日本語学習の捉え方に配慮する
- ・日本語の授業からの接触範囲の広がりについて尋ねる

以上の点を踏まえた上で実施した結果、もちろん学習者によるが、1回目のインタビューに比べて接触対象や範囲は狭いが、その対象に関する具体的な方法や接触理由など、上記の点に関わる詳細を引き出すことができた事例が見られた。

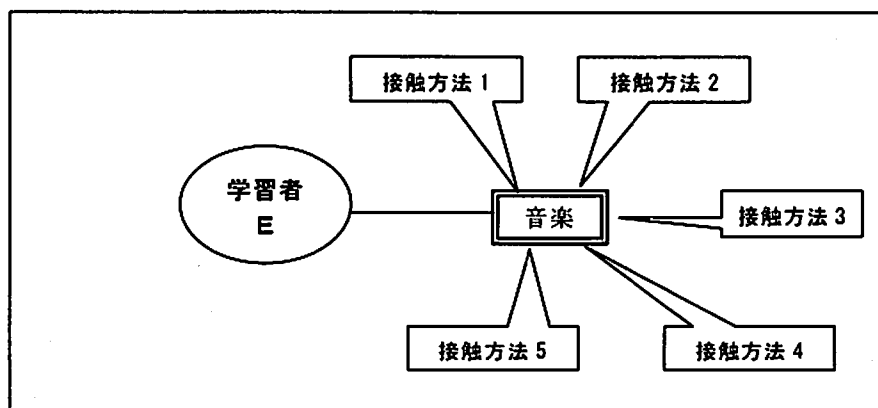


図6 学習者Eの日本語との接触状況

例えば、図6ではリソースは「音楽」だけであるが、他のリソースではなく、「音楽」

についてさらにインタビューを続けたところ、その接触について「勉強だと思って聞いていない。好きだから聞き、発音がわかるようになるし、その意味が知りたくなって、意味を調べる。それが自然と勉強になる。歌をひらがなで書き取り、元の歌詞と比べながら、発音と表記の違いを確認する。歌を聞いて発音を書くことで、話せるようになりたい。」と述べている。また、「音楽を聞くことは勉強ではない勉強だが、自分の日本語にはプラス」「自分は音楽が好きだから、自分には合っている方法」というように、学習者自身から自分の接触対象や方法についての考え方や学習観、評価について述べている。

さらに、日本語学習の開始時期、動機からインタビューを発展させることで、日本語のレベルや時間による接触対象、方法、評価の変化についての言及も見られた。例えば、学習者 E では「音楽」との出会いから接触の動機や方法に以下のような変化が見られた。

表 4 「音楽」への接触方法の変化

中学時代
<ul style="list-style-type: none"> ・偶然日本語の歌に接触し、歌詞の意味が知りたくなる ・兄の友人からひらがなとカタカナの表をもらい、韓国語と日本語の音の対照を知る ・歌の歌詞をハングルで書いて発音してみる
高校時代
<ul style="list-style-type: none"> ・学校の授業では教科書を一生懸命勉強すると同時に、授業外では音楽を繰り返し聞く
大学入学後
<ul style="list-style-type: none"> ・自分より日本語がうまく話せる人がいることにショックを受け、もっと勉強する ・音楽は勉強だとは思っておらず、音楽が好きだから、聞きながら発音が聞ける ・発音の意味が知りたくなり意味を調べ、自然に勉強になる
現在
<ul style="list-style-type: none"> ・いいと思った歌は歌いたいと思うが、歌うためには発音ができないと歌えない ・ひらがなで発音を書き、わからない単語は調べる ・元の歌詞と比べ、間違っただ所について検討する ・韓国人にどうしてもわからない発音があり、それがわかるようになりたい ・日本語が聞けることがうれしい

授業についても、学習者 E は「大学の先生が勧める NHK の番組より、普通の言葉が出るバラエティなどを見たい。本も読むようにいわれるが、それは日本語だけでなく、教養を深めるために必要」と述べている。その他、「自分の日本語の学習にプラスになっているか」「他の人に勧めるとしたらどんなことか」といった質問についても、学習者 E は「人には勧めたいが、合わないこともある」「何でもいいから興味を持って!」と述べ、別の学習者は「自分が求めるものに合う学院を探し、そこでの学習によって 3 ヶ月で日本語能力試験 1 級に合格できた。決められた期間での目標達成のために『なぜ自分に合わないのか』理由を考え、自分に足りないところを探し、見つける。『これ、おもしろくないから、これをやってみようか』とやってみて、『これもおもしろくないから、またやってみようか』とやってみる、そういう興味や軽い気持ちでやるだけでは何にもならない」という明確な考え方を持っていた。

このように、インタビュアーから促されることなく、学習者から積極的に発話する

事例が、特に様々な接触方法を試行錯誤したり工夫したりしている学習者やそのような過程を経ることでかなり明確な学習観を持っている学習者などに多く見られた。このようなデータは、単に接触対象や範囲を聞くものと違い、前節で述べた、日本語の授業外でのさまざまなリソースとの接触と授業における日本語の学習とを有機的に結びつける上で、重要な示唆となる。

4. まとめと課題

本稿では、本調査研究の方法の検討、特に韓国調査における学習者を対象としたインタビュー調査の方法について検討してきた。本調査研究におけるインタビュー調査はアンケート調査を補完するという位置付けではあった。しかし、それだけでなく、本稿で検討してきたように、現場教師が教室外で学習者がどのようにリソースを利用しているのかを知ることによって、学習者理解を進めることができ、さらにそれを通して授業での実践そのものを振り返ることにつながるという点で非常に有効であると言える。この点については、国立国語研究所(2006)などでも、多くの調査者から述べられている。

インタビュー項目や方法など、本稿で検討してきた点以外にも課題はある。まず、インタビュアーが学習者の母語でインタビューを行うに十分な語学力を持っていなかったため、ある程度の日本語力がある学習者を対象にせざるを得ないという問題があった。何を聞かれているか十分に把握できない、あるいは質問に対してある程度応答はできても、具体的な内容について日本語では表現できない、ということもあった。また、インタビュアーは学習者にとって初対面の外部者であったため、学習者との関係を作るための時間を必要とした。長時間のインタビューは難しいため、約30分という時間をどのように有効に使うかがポイントになる。そして、リソースとの接触には無意識に行っている場合もあり、それがその学習者にとって重要なリソースになっている可能性もある。しかし、それらを短いインタビューの中でどのように引き出すかは難しい課題である。

本稿では韓国調査を対象にした。しかし、リソースの利用に関わる物理的環境、「学習」の捉え方などには対象となる国や地域によって違いがあることから、インタビューの仕方も柔軟に変えていく必要がある。そのため、同じ方法で行った各インタビュー調査の結果について国別比較などの分析を行っていく必要がある。さらに、調査は一つの方法や視点からよりは複数の方法や視点から行うことが望ましい。アンケートで得られた結果とインタビュー結果をあわせて分析することで、相互で取り上げる項目を絞り込むことが可能になる。

最後に、本稿では取り上げなかったが、今回のインタビュー調査では韓国調査において第2回インタビューでインタビューした学習者が、その後日本に1年間留学したため、留学中にそのうちの4名について日本国内でインタビューすることができた。来日後、リソースの範囲やその利用方法が変化している事例が見られた。その学習者たちが韓国へ帰国した後、再度インタビューすることができれば、また興味深い結果が得られると思われる。今後の課題としたい。

参考文献

- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか？—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『日本学報』第65号1巻, 韓国日本学会, pp. 145-156.
- 国立国語研究所(2004)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—韓国アンケート調査集計結果報告書』(日本語版・韓国語版)
- 国立国語研究所(2006)『国立国語研究所日本語教育シンポジウム(平成17年度第2回日本語教育短期研修) 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—海外調査の成果と展望—』
- Margulies, Nancy 2002. *Mapping Inner Space: Learning and Teaching Visual Mapping*. Zephyr Press

参考文献¹

- 阿久津智(2005a)「[研究ノート]マレーシアにおける日本語学習者」『語学研究』108, pp. 157-173, 拓殖大学言語文化研究所
- 阿久津智(2005b)「日本語の可能性 海外の日本語教育の現場から」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』14, pp. 59-72, 拓殖大学人文科学研究所
- 阿久津智・小林孝郎・小林伊智郎・伊藤俊也・山下哲生(2005)「工学系ツイニング・プログラムの日本語教育—マレーシアにおける準備教育の試み—」『平成 17 年度工学・工業教育研究講演会講演論文集』pp. 650-651, 日本工学教育協会
- 阿曾村陽子・阪本史代・加藤好崇(2002)「[研究ノート] 東海大学学部留学生日本語使用実態調査プロジェクト—中間報告(第2部):東海大学留学生の持つネットワーク—」『東海大学紀要 留学生教育センター』22, pp.89-94, 東海大学留学生教育センター
- 石井恵理子・岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子(2003)「学習リソースの再検討—日本語学習者の多様性を読み解くためのフレームワーク作りに向けて—」第2回日本語政策学会研究発表会資料, pp. 22-23
- 石黒広昭(2003)「言葉の教授から言葉を創る実践へ—新しい言語学習環境のデザインに向けて—」『AJALT』26, pp. 16-20, 国際日本語普及協会
- 今井武(2003)「事例報告 リソースの観点から見た海外派遣日本人教師の役割」2003. 1. 26. 国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料
- 上野直樹(2004)「日本語学習環境のデザイン—状況論的アプローチ—」『AJALT』27, pp. 24-28, 国際日本語普及協会
- 上野直樹・柳町智治・ソーヤーリエコ・森下雅子(2005)「パネルセッション 第二言語学習への状況論的アプローチ—「教授法のデザイン」から「学習環境のデザイン」へ—」『2005年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 247-258, 日本語教育学会
- 内海由美子(2003)「多言語・多文化共生社会の実現に向けた日本語教師の役割」宮崎里司・マリオット, ヘレン 編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』pp. 397-410, 明治書院
- 欧州教材プロジェクト(2002)「科学研究費プロジェクト「多元性のある日本語教育教材研究及び作成—欧州広領域での使用を目指して—」平成 13 年度主要活動「ベルリン会議」報告」『無差』9, pp. 95-131, 京都外国語大学日本語学科研究会
- 欧州日本語教材プロジェクト(鎌田修 代表)(2002)「欧州の日本語教育に関するアンケート—欧州の日本語教員・日本語学習者の視点から見た日本語の接触場면을教材開発の原点として—」『無差』9, pp. 144-150, 京都外国語大学日本語学科研究会
- 岡田みさを(2002)「タスクに埋め込まれた言語使用—微視的談話分析とその意義—」北海道大学留学生センター日本語・日本語教育講演会資料, pp. 1-9
- 岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子(2002)「リソースからとらえた学習の多様性」2002. 6. 15. 国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料, pp. 1-5

¹ 本調査研究を進める際に全体を通して参考にした文献を掲げる。

- 岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子(2003)「リソースからとらえた学習の多様性」2003. 1. 25.
国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料,
pp. 1-6
- 小河原義朗・岡部真理子(2005)「地域における日本語学習リソースの活用について」文化
庁日本語教育大会資料, pp. 28-29
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005a)「学習者は何をどのように用いて学習している
のか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学会第
70 回学術大会予稿集』 pp. 486-492, 韓国日本学会
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005b)「学習者は何をどのように用いて学習している
のか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『日本学報』65-1,
pp. 145-156, 韓国日本学会
- 小河原義朗・笠井淳子・金田智子・石井恵理子(2004)「日本語教育の学習環境と学習手段
に関する調査研究—タイ調査報告—」『2004 年日本語教育国際研究大会 予稿集発
表 1』 pp. 131-136
- 小河原義朗・金田智子・笠井淳子(2005)「海外における日本語学習者の学習環境と学習手
段」『日本語科学』18, pp. 111-123, 国立国語研究所
- 落合由治(2005)「インターネットによる日本語会話能力向上への探究」『淡江姉妹校外国語
教育国際学術研究会 予稿集』淡江大学外国語文學院
- 柏崎秀子・小林由子・館岡洋子(2005)「日本語学習支援にメタ認知を活かす」『日本教育心
理学会第 47 回総会 発表論文集』 pp. 22-23, 日本教育心理学会
- 金田智子(2005a)「「ことばを学ぶ」方法について考える—こちら国語研究所—」『NIK アナ
ウンサーのはなす, きく, よむ』 pp. 168-175, 日本放送出版協会
- 金田智子(2005b)「学習者の学び方から学ぶ—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調
査研究をもとに—」『台湾日本語文学会 2005 年度日本語文学術研討会 会議手冊』
pp. 22-29, 台湾日本語文学会
- 鎌田修・佐治圭三・中川良雄・内田万里子・由井紀久子・川口義一(2001)「欧州日本語教
材プロジェクト調査報告—多元性のある日本語教材研究及び作成—」『無差』8,
pp. 25-62, 京都外国語大学日本語学科研究会
- 菊池富美子(2005)「学習リソースとは何か—日本語教育における学習リソース研究の概観
—」『第 30 回言語文化研究会予稿集』 pp. 21-24, お茶の水女子大学日本言語文化
研究会
- 斉藤祐美(2003)「事例報告 学習者のリソース利用—参与観察から見えること—」2003. 1. 26.
国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料
- 桜井恵子(2004)「韓国人短期留学生の日本社会文化接触に関する調査研究—日本語能力の
上達の観点から—」『日本学報』61-6, pp. 151-166, 韓国日本学会
- 塩谷奈緒子(2004)「「学習者の解放」の環境設定と活動支援—「学習者の教室からの解放」
と「学習者の教室内での解放」—」『21 世紀の「日本事情」』5, pp. 18-34, くら
しお出版
- 下平菜穂・岡部真理子・石井恵理子(2004)「学習者はどのようにリソースを活用するか—
日本語を母語としない中学生のケーススタディー—」『2004 年日本語教育国際研究
大会 予稿集発表 1』 pp. 137-142

- スペンス・ブラウン, ロビン・萩野祥子(2006)「オーストラリアの年少者日本語教育—初等・中等教育機関における日本語教育の理念と実践—」『日本語教育』128, pp. 46-58, 日本語教育学会
- 田中望(1993)「教師の役割の新たな広がり」『日本語学』12-3, pp. 7-12, 明治書院
- 寺村由佳・佐久間治夫(1995)「事例研究：人的リソースの利用状況—中国帰国生徒の場合—」『中国帰国者定着促進センター紀要』3, pp. 128-141, 中国帰国者定着促進センター
- 徳永あかね・山口明・池津丈司・大場しづ恵(2004)「「日本語教育環境マップ」作成の試み」『神田外語大学紀要』16, pp. 287-307, 神田外語大学
- トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第7号, pp. 17-29, 国際交流基金
- 長友隆男・福永迪雄・松田精久・橋雅彦・永富輝昭(2005)「マレーシアにおけるツイニングによる工学教育」『平成17年度工学・工業教育研究講演会講演論文集』, pp. 648-649, 日本工学教育協会
- ナカミズ, エレン(2002)「接触場面アンケート調査の報告」『無差』9, pp. 133-143, 京都外国語大学日本語学科研究会
- 西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100, pp. 7-18, 日本語教育学会
- 西坂仰(2002)「プラクティスとしての文法 I」北海道大学留学生センター日本語・日本語教育講演会 資料
- 浜田麻里(2003)「何が多様性を生み出すのか」2003. 1. 25. 国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料, pp. 1-5
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子(2003)「学習者と学習環境の相互作用をめぐって—学習者条件の記述—」国立国語研究所 編『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成』論文集 第4巻』 pp. 527-563
- 浜田麻里・林さと子・文野峯子・岡良和・福永由佳・宮崎妙子(2002)「日本語学習支援システムの構築と言語政策—日本語学習者と学習環境との相互作用調査から—」第1回日本言語政策学会研究発表会 資料, pp. 23-24
- 林さと子(2002)「何が多様性を生み出すのか—第二言語習得に関わる諸要因をめぐって—」2002. 6. 15. 国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料
- 林さと子(2005)「「学習環境」からみた日本語教育」『月刊言語』34-6, pp. 50-57, 大修館書店
- 春原憲一郎(1992)「ネットワーキング・ストラテジー—交流の戦略に関する基礎研究—」『日本語学』11-11, pp. 17-26, 明治書院
- 福永由佳・岡部真理子・下平菜穂・浜田麻里・林さと子(2004)「日本語学習者と学習環境との相互作用—二つの学習者調査から—」『2004年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 227-238, 日本語教育学会
- 藤井彰二(2005)「日本語世代は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『2005年「日語教育與日本文化研究」国際学術会議 論文集』 pp. 177-191, 台湾日語教育学会

- 米国学術研究推進会議 編著(森敏昭・秋田喜代美 監訳, 大河内祐子 訳)(2002a)「第6章 学習環境—学びの環境をデザインする—」『授業を変える—認知心理学のさらなる挑戦—』 pp. 131-157, 北大路書房
- 米国学術研究推進会議 編著(森敏昭・秋田喜代美 監訳, 村瀬公胤 訳)(2002b)「第7章 教授法—歴史, 数学, 理科をいかに教えるか—」『授業を変える—認知心理学のさらなる挑戦—』 pp. 159-195, 北大路書房
- 宮崎里司(2001)「外国人力士の日本語習得と学習ストラテジー—社会的ストラテジーを中心として—」『講座日本語教育』 37, pp. 1-13, 早稲田大学日本語研究教育センター
- 宮崎里司(2002)「外国人力士の日本語習得—言語管理と自然習得—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 15, pp. 119-131, 早稲田大学日本語研究教育センター
- 宮地裕・田中望(1993a)「1. 日本語教育の課題—学習者の多様性に応じて—」『日本語の教育とその理論』 pp. 17-25, 放送大学教育振興会
- 宮地裕・田中望(1993b)「4. 学習者による学習過程の意識化—学習環境と学習のストラテジー—」『日本語の教育とその理論』 pp. 48-62, 放送大学教育振興会
- 宮副ウォン裕子(1998)「自律的日本語学習支援のためのネットワークング・ストラテジー」『日本学刊』 2, pp. 45-59, 香港日本語教育研究会
- 村野良子(1996)「高校留学生の自律的学習と学習ストラテジー—日本語学習の支援のために—」『日本語教育』 91, pp. 120-131, 日本語教育学会
- 森敏昭・秋田喜代美(2005)「「学習環境」のデザイン: 学習科学からの示唆」『日本教育心理学会第47回総会 発表論文集』 pp. 36-37, 日本教育心理学会
- 森下雅子・菊岡由夏・ソーヤーリエコ・柳町智治・上野直樹(2003)「日本語学習環境のエスノグラフィ—状況論的アプローチ—」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 239-250, 日本語教育学会
- 森下雅子(2004)「日本語ボランティアグループにおける参加のデザイン」『21世紀の「日本事情」』 5, pp. 4-16, くろしお出版
- 安場淳(1992)「異文化間サポート・ネットワークの形成—中国帰国者の二世青年の場合—」『異文化間教育』 6, pp. 114-128, アカデミア出版会
- 柳町智治(2002)「相互行為としての日本語の学習と教授」北海道大学留学生センター日本語・日本語教育講演会 資料, pp. 1-4
- 冷麗敏(2004)「中国の高等教育における日本語教育の現状と課題」政策研究大学院大学日本語言語文化研究プログラム 発表資料, pp. 1-5
- 和田玉己(2003)「事例報告 学習者のリソース利用 —アンケート調査からみえること—」2003. 1. 26. 国立国語研究所短期研修「学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—」資料
- Sawyer, Rieko(2004)「Situating learning in scientific practice: an ethnographic study」『情報メディアセンタージャーナル』 5, pp. 29-34, 武蔵工業大学環境情報学部
- Ueno, Naoki(2004)「Social organization of access to knowledge and boundary objects: the case of repair technicians of copy machine」『情報メディアセンタージャーナル』 5, pp. 25-28, 武蔵工業大学環境情報学部

資 料

日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究

アンケート調査 学習者調査票

タイ(バンコック)調査 学習者調査票	1
韓国調査 学習者調査票	6
オーストラリア調査 学習者調査票	11
台湾調査 学習者調査票	16
マレーシア調査 学習者調査票	21

「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」への

御協力をお願い

国立国語研究所日本語教育部門では、「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を行っております。

インターネットを始めとする様々な情報流通のあり方の変化に伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化し、支援のあり方も柔軟に対応する必要があります。そのためには、まず国内外で日本語を学習、あるいは教えている方々がどのような環境で日本語を学習、あるいは教え、どのような手段で日本語を学習、あるいは教えているかについて広く情報収集し、「多様化」している現状を把握する必要があります。その一環として、本年度は国際交流基金バンコクセンターの御協力を得て、日本語教育支援のための基礎研究として、タイ（バンコク）での日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査を行っております。

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨を御理解くださり、別紙の「ご記入のお願い」をお読みの上、ご回答くださるようお願い致します。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
国立国語研究所日本語教育部門
TEL:03-5993-7660
FAX:03-3906-3530
<http://www.kokken.go.jp/jsl/>

The Japan Foundation Bangkok Language Center
Serm Mit Tower 10F
159 Sukhumvit Soi 21
Bangkok 10110

ご記入にあたってのお願い

- (1)ご回答は、研究目的のためにのみ使わせていただきます。また、回答は統計処理を施して総括的に公表しますので、個別の回答を公表することはありません。
- (2)ご回答の方法は、各質問項目について異なりますので、各質問項目の指示にご注意ください。
- (3)自由記述の項目及び「その他」を選択された場合は、その具体的な内容についてお書きください。

(4)2001年12月21日(金)までに担当の先生に御返却ください。

(5)もし何かご不明の点がございましたら、下記まで御連絡ください。

連絡先:

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14

国立国語研究所日本語教育部門

TEL:03-5993-7660

FAX:03-3906-3530

<http://www.kokken.go.jp/jsl/>

<学習者用アンケート>

* 選択肢のあるものは番号に○をしてください。

F1 性別 1. 男 2. 女

F2 国籍 _____

F3 年齢 1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60歳以上

F4 母語<最もよく話せることば> _____ 語

F5 身分 1. 高校生 _____年 2. 大学生 _____年 専攻 _____

3. 大学院生 _____年 専攻 _____

4. 勤労者

仕事で日本語を必要としますか。

1. いいえ
2. はい

「2.はい」と答えた方は次の4つのうち、最も必要とする技能は何ですか。

1. 読む 2. 聞く 3. 書く 4. 話す

5. 無職

6. その他 _____

F6 日本語の学習歴 約 _____年 _____か月

F7 あなたは今どこで日本語を勉強していますか。(複数回答可)

- | | |
|-----------|-----------------|
| 1. 高校 | 5. ソーソーヨー |
| 2. 大学 | 6. その他の日本語学校 |
| 3. 大学院 | 7. 基金 (中上級6クラス) |
| 4. ソーソーヨー | 8. その他 _____ |

F8 日本に行った経験がありますか。

1. ない
2. ある

「2. ある」と答えた方におたずねします。

日本に行った回数と期間をお書きください。

回数 _____回 期間(延べ) _____年 _____か月 _____日

日本に行った目的は何ですか。(複数回答可)

1. 観光 2. 留学 3. 仕事 4. 語学研修 5. 企業研修 6. 交流
7. その他 _____

F9 日本語の学習を始めた理由や動機は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを3つまで選び、最も近いものから順に表に記入してください。

1. 大学の入試科目にあるから/大学入学に有利だから
2. 学校の授業にあるから
3. 就職に有利だから
4. 現在の仕事に必要なから
5. 日本人の知り合いがいるから
6. 親や知人などに勧められたから
7. 日本語を学ぶのは知的なこととしてまわりから評価されるから
8. 日本語は難しそうで、やりがいがあるから
9. 学びやすそうだから
10. 日本語に興味があるから
11. 国際的に重要な言語だから
12. 日本の文化や社会についての情報を得たいから
13. 日本の文学や歴史に興味があるから
14. 日本に興味があるから
15. 日本に行きたいから
16. 日本のもの(テレビ、映画、ゲーム、歌など)が好きだから
17. その他 _____ ←17.を選んだ場合は記入してください。

1	2	3

F10 あなたは現在、日本語がどのぐらいできると考えていますか(①)。そして、将来どのぐらいできるようになりたいと思っていますか(②)。「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」それぞれについて、最も適当なものを選んで、表の中に記入してください。

F10-1 【読むこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとかたかなが読める。
3. 商品のラベル、雑誌の見出しなどがわかる。
4. 簡単な文章ならだいたい理解できる。
5. 新聞や雑誌、専門書などがほぼ問題なく理解できる。
6. 母語と同じように読める。

①	②

F10-2 【書くこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとかたかなが書ける。
3. 簡単なメモを書くことができる。
4. 一般的な手紙を書くことができる。
5. レポートや企画書などが書ける。
6. 母語と同じように書ける。

①	②

F10-3 【聞くこと】

1. 全くできない。
2. 日常生活で使う簡単な表現、挨拶などが聞いて理解できる。
3. 簡単な指示などを理解することができる。
4. 会話の中で、相手の考えや意見をだいたい理解することができる。
5. テレビニュース、学校の講義など一方的に話されるまとまった話がほぼ理解できる。
6. 母語と同じように聞いて理解できる。

①	②

F10-4 【話すこと】

1. 全くできない。
2. 挨拶ができる。簡単な自己紹介ができる。
3. 日常生活に必要な表現を状況に応じて使える。
4. 会話の中で、意見や考えを伝えることができる。
5. 人前で論理的にまとまった話を行うことができる。
6. 母語と同じように話せる。

①	②

Q1 日本語の授業以外で日本語を使ってやりとり（会話、電話、手紙、電子メールなど）をすることはありますか。

1. はい (→Q1-1へ) 2. いいえ (→Q1-3へ)

Q1-1 日本語の授業以外でどんな人と日本語でやりとりしますか。やりとりする人全員に○をし、その方法を選んで○をつけてください。(複数回答可)

○	相手	方法			
		会話	手紙	電話	電子メール
1	日本語の教師				
2	学校の友人				
3	語学学校のクラスメート				
4	会社の同僚				
5	会社の上司				
6	仕事上の取引相手				
7	勤務先（レストラン等）の客				
8	家族・配偶者等				
9	知り合い				
10	その他				

Q1-2 Q1-1 で○をした中で、もっともよく日本語でやりとりをする人あるいは人達について、答えてください。

その人は 1～10 のどれですか。	*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10.
何人ですか。	1. オーストラリア人 2. 日本人 3. その他 _____
性別	1. 男 2. 女
やりとりをするようになった頃、あなたの日本語はどうでしたか。○を付けてください。	1. ほとんどできなかった 2. 少しできた 3. 日常会話程度できた 4. かなりできた 5. 日本人と同程度できた
やりとりをする頻度はどのぐらいですか。1つ選んでください。	1. 年に2、3回 2. 月2、3回 3. 週1回 4. 週2、3回 5. 毎日
やりとりの主な手段は何ですか。(複数回答可)	1. 会って話す 2. 電話で話す 3. 手紙 4. 電子メール 5. その他 _____
その人とやりとりをする時、日本語をどのぐらい使いますか。	1. 全部日本語 2. 主に日本語 3. 日本語と他の言語が半々 4. 主に他の言語

主にどんなことについて話しますか。(複数回答可)	1. 日本語について					
	2. 勉強について					
やりとりをその人とするとき、なぜ日本語を使うのですか。右の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。	3. 仕事について					
	4. 生活について					
	5. 趣味について					
	6. 社会について					
	7. その他 _____					
	日本語を使うのは楽しいから	5	4	3	2	1
	日本語の母語話者と話したいから	5	4	3	2	1
日本語能力向上や維持のため	5	4	3	2	1	
仕事として義務づけられているから	5	4	3	2	1	
日本語が最もわかりあえる言葉だから	5	4	3	2	1	
相手が使うから	5	4	3	2	1	
習慣になっているから	5	4	3	2	1	
その他 _____	5	4	3	2	1	

Q1-3 (Q1で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外で日本語を使わない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

1. 日本語を使う相手がいないから
2. 日本語を使いたいと思わないから
3. 自分の日本語力が充分ではないから
4. 恥ずかしいから
5. 自信がないから
6. 英語など他の言語の方が便利だから
7. その他 _____

Q2 身の回りに、日本語で書かれたものや日本語が使われているものはありますか。(教科書は除きます。)

1. はい (→Q2-1へ)
2. いいえ (→Q3へ)

Q2-1 日本語の授業以外の時間に、日本語で書かれたものや日本語が使われているものを見たり聞いたりすることはありますか。

1. はい (→Q2-2へ)
2. いいえ (→Q2-4へ)

Q2-2 授業以外でどんなもの(日本語が使われているもの)を見たり聞いたりしますか。あてはまるもの全てに○をしてください。(複数回答可)

1. 新聞
2. 雑誌
3. 本
4. マンガ
5. 商品の解説書
6. テレビ放送
7. ラジオ
8. ビデオ(映画、テレビドラマ等)、DVD
9. CD
10. 音声テープ
11. コンピューター(インターネット等)
12. ゲームソフト
14. その他 _____

Q2-3 Q2-2で○をした中で、もっともよく見たり聞いたりするもの二つについて、答えてください。

それは1～13.のどれですか。	*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13.																																														
頻度はどのくらいですか。○を付けてください。	1. 年に2、3回 2. 月2、3回 3. 週1回 4. 週2、3回 5. 毎日																																														
それは誰のものですか。	1. 自分のもの 2. 家族のもの 3. 友人や知り合いのもの 4. 学校のもの 5. 会社のもの 6. その他 _____																																														
主にどんな内容ですか。(複数回答可)	1. 政治・経済 2. 社会・生活 3. 科学技術 4. 文化・芸術 5. スポーツ・趣味 6. 日本語 7. 日本語学習 8. 日本人 9. 日本 10. その他 _____																																														
見たり聞いたりする理由は何ですか。右の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。	<table border="0"> <tr> <td></td> <td>全くそう 思う</td> <td>どちらとも いえない</td> <td>全くそう 思わない</td> </tr> <tr> <td>楽しいから</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>日本語に触れたいから</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>日本語の力を試してみたいから</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>日本語能力の向上や維持のため</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>様々な情報が得られるから</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>日本や日本人について知ることができるから</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>その他 _____</td> <td>5</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> </table>		全くそう 思う	どちらとも いえない	全くそう 思わない	楽しいから	5	4	3	2	1	日本語に触れたいから	5	4	3	2	1	日本語の力を試してみたいから	5	4	3	2	1	日本語能力の向上や維持のため	5	4	3	2	1	様々な情報が得られるから	5	4	3	2	1	日本や日本人について知ることができるから	5	4	3	2	1	その他 _____	5	4	3	2	1
	全くそう 思う	どちらとも いえない	全くそう 思わない																																												
楽しいから	5	4	3	2	1																																										
日本語に触れたいから	5	4	3	2	1																																										
日本語の力を試してみたいから	5	4	3	2	1																																										
日本語能力の向上や維持のため	5	4	3	2	1																																										
様々な情報が得られるから	5	4	3	2	1																																										
日本や日本人について知ることができるから	5	4	3	2	1																																										
その他 _____	5	4	3	2	1																																										

Q2-4 (Q2-1で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外の時間に、日本語で書かれたものや日本語が使われているものを見たり聞いたりしない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

1. 見たり、聞いたりしたいと思わないから
2. 時間がないから
3. 自分の日本語力が充分でないから
4. 利用するのにお金がかかるから
5. 手に入りにくいから
6. その他 _____

Q3 現在使っている日本語の教科書や授業で先生から渡されるものを授業以外の時間にも使いますか。

1. はい (→Q3-1へ) 2. いいえ (→Q3-2へ)

Q3-1 授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡されるものを使って勉強するときに、どんなことをしていますか。次の中からあてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答可)

1. 語句の意味を調べる
2. 漢字にふりがなをふる
3. 英語に訳す
4. 日本語がわかる人に質問する
5. 練習問題を解く
6. 付属のカセットテープを聞く
7. 単語帳を作る
8. 自分で文を作る
9. 暗記、暗唱する
10. 練習相手を見つけて会話の練習をする
11. その他 _____

Q3-2 (Q3で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

日本語の教科書や授業で先生から渡されるものを授業以外の時間に使わない理由は何ですか。

1. 教科書を学校から持ち帰ることができないから
2. 授業以外の時間に勉強をしないから
3. どうやって使ったらいいかわからないから
4. 特に日本語に興味がないから
5. 教科書がわかりにくいから
6. その他 _____

Q4 次のような機会や場所を経験したことがありますか。あてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答可)

1. 日本人との交流会
 2. 日本人家庭への訪問
 3. 日本語のスピーチコンテスト
 4. 日本語が使われている職場でのアルバイト
 5. 日本・日本語に関するイベント
 6. 日本人のいる場所、日本人が集まる場所
 7. 日本・日本語に関する資料センター (例、シドニー日本語センター)
 8. その他 _____
 9. 経験したことがない (→Q5へ)
- } (→Q4-1へ)

Q4-1 経験したことがある場合、もう一度経験したい、あるいは継続して経験したいと思うものはありますか。最も経験したいと思うものを Q4 の選択肢の中から一つだけ選んで記入してください。

1. ある

--

 →Q4の選択肢の番号を一つ記入してください

2. 今後経験したいと思うものはない

Q5 次の中で、日本語学習のために、現在使っているものはどれですか。(複数回答可)

1. 文法解説書
2. 辞書 (書名: _____)
3. 漢字字典 (書名: _____)
4. 日本語学習のための音声テープ
5. 日本語学習のためのコンピューターソフト
6. インターネット
7. 日本語のテレビ番組、日本語の映画
8. 日本語を使ったゲームソフト
9. 日本語の歌の入った音楽テープ、CD
10. その他 _____

Q6 次の中で、日本語学習や日本理解のために、今後、もっと充実したらいいと思うものはどれですか。(複数回答可)

1. 文法解説書
2. 辞書
3. 漢字字典
4. 日本語学習のための音声テープ
5. 日本語学習のためのコンピューターソフト
6. インターネット
7. 日本語のテレビ番組、日本語の映画
8. 日本語を使ったゲームソフト
9. 日本人との交流会 (パーティー、ハイキング、料理教室など)
10. 日本人家庭への訪問、ホームステイ
11. 日本語のスピーチコンテスト
12. 日本や日本語に関するイベント
13. 日本語を使うアルバイト
14. その他 _____

ご協力ありがとうございました。

韓国学習者用

「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」への

御協力をお願い

国立国語研究所日本語教育部門では、「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を行っております。

インターネットを始めとする様々な情報流通のあり方の変化に伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化し、支援のあり方も柔軟に対応する必要があります。そのためには、まず国内外で日本語を学習、あるいは教えている方々がどのような環境で日本語を学習、あるいは教え、どのような手段で日本語を学習、あるいは教えているかについて広く情報収集し、「多様化」している現状を把握する必要があります。その一環として、本年度は、日本語教育支援のための基礎研究として、韓国での日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査を行っております。

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨を御理解くださり、ご回答くださるようお願い致します。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
国立国語研究所日本語教育部門
TEL:+81-3-5993-7660
FAX:+81-3-3906-3530
<http://www.kokken.go.jp/jsl/>

<学習者用アンケート>

*選択肢のあるものは番号に○をしてください。

F1 性別 1. 男 2. 女

F2 居住地域 _____ (特別市・広域市・道) _____ (市・郡)

F3 年齢 1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60歳以上

F4 母語<最もよく話せることば> _____ 語

F5 身分 1. 中学校 _____ 年生

2. 高校

1. 一般高校 _____ 年生

2. 実業高校 _____ 年生

3. 外国語高校 _____ 年生

4. その他(_____ 高校) _____ 年生

3. 専門大学 _____ 年生 専攻 _____

4. 大学 _____ 年生 学部 _____ 専攻 _____

5. 大学院

1. 修士 _____ 年 専攻 _____

2. 博士 _____ 年 専攻 _____

6. その他 _____

F6 日本語学習を開始した学年

1. 小学校 _____ 年生

2. 中学校 _____ 年生

3. 高校 _____ 年生

4. 専門大学 _____ 年生

5. 大学 _____ 年生

6. 大学院 _____ 年生

7. その他 _____

F7 あなたは今どこで日本語を勉強していますか。(複数回答可)

1. 高校

2. 大学

3. 専門大学

4. 大学院

5. その他の教育機関(学院など)

6. その他 _____

F8 日本に行った経験がありますか。

1. ない 2. ある

F8-1 「2. ある」と答えた方におたずねします。日本に行った回数と期間をお書きください。

回数 _____ 回 期間(延べ) _____ 年 _____ か月 _____ 日

F8-2 日本に行った目的は何ですか。(複数回答可)

1. 観光

2. 短期留学(6ヶ月未満)

3. 短期留学(6ヶ月以上～1年未満)

4. 長期留学(1年以上)

5. 仕事

6. 企業研修

7. 国際交流

8. ワーキングホリデー

9. 家族滞在

10. その他 _____

F9 日本語の学習を始めた理由や動機は何ですか。理由や動機として強い順に3つ選んで表に記入してください。

1. 大学の入試科目にあるから/大学入学に有利だから
2. 学校の授業にあるから
3. 就職に有利だから
4. 現在の仕事に必要なだから
5. 日本人の知り合いがいるから
6. 親や知人などに勧められたから
7. 日本語を学ぶのは知的なこととしてまわりから評価されるから
8. 日本語は難しそうで、やりがいがあるから
9. 学びやすそうだから
10. 日本語に興味があるから
11. 国際的に重要な言語だから
12. 日本の文化や社会についての情報を得たいから
13. 日本の文学や歴史に興味があるから
14. 日本に興味があるから
15. 日本に行きたいから
16. 日本のもの(テレビ、映画、ゲーム、歌など)が好きだから
17. その他 _____

17. を選んだ場合は記入してください。

1	2	3

F10 あなたは現在、日本語がどのぐらいできますか (①)。そして、将来どのぐらいできるようになりたいと思っていますか (②)。「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」それぞれについて、最も適当なものを選んで、表の中に記入してください。

F10-1 【読むこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなが読める。
3. やさしい漢字なら日本式に読める。
4. 簡単な文章ならだいたい理解できる。
5. 新聞や雑誌、興味のある分野の本などがだいたい理解できる。
6. 母語と同じように読める。

①現在	②将来

F10-2 【書くこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなで知っている言葉が書ける。
3. 簡単な短い文を書くことができる。
4. 親しい友人などへの簡単な手紙やメールを書くことができる。
5. まとまった文章が書ける。
6. 母語と同じように書ける。

①現在	②将来

F10-3 【聞くこと】

1. 全くできない。
2. 相手の名前や挨拶などを聞いて理解できる。
3. 日常生活で使う簡単な表現、指示などを理解することができる。
4. 会話の中で、相手の考えや意見をだいたい理解することができる。
5. テレビニュース、学校の講義などまとまった話がほぼ理解できる。
6. 母語と同じように聞いて理解できる。

①現在	②将来

F10-4 【話すこと】

1. 全くできない。
2. 挨拶ができる。
3. 簡単な自己紹介ができる。
4. 日常生活に必要な表現を状況に応じて使える。
5. 自分の意見や考えを話すことができる。
6. 母語と同じように話せる。

①現在	②将来

Q1 日本語の授業以外で日本語を使ってやりとり（会話、電話、手紙、電子メールなど）をすることはありますか。

1. はい（-01-1, 01-2へ） 2. いいえ（-01-3へ）

Q1-1 日本語の授業以外でどんな人と日本語でやりとりしますか。やりとりする人全員の番号に○をし、その方法を選んで○をつけてください。（複数回答可）

○	相手	方法					
		会話	手紙	電話	電子メール	チャット	
1	日本語の教師						
2	学校の友人						
3	学院・語学堂等のクラスメート						
4	職場の同僚						
5	職場の上司						
6	仕事上の取引相手						
7	勤務先（レストラン等）の客						
8	家族・親戚等						
9	知り合い						
10	その他						

⑤やりとりをその人とするとき、なぜ日本語を使うのですか。下の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。

	全く行わない	どちらともいえない	全く行いたい		
1. 日本語を使うのは楽しいから	5	4	3	2	1
2. 日本語の母語話者と話したいから	5	4	3	2	1
3. 日本語能力向上や維持のため	5	4	3	2	1
4. 仕事として義務づけられているから	5	4	3	2	1
5. 日本語が最もわかりやすい言葉だから	5	4	3	2	1
6. 相手が使うから	5	4	3	2	1
7. 習慣になっているから	5	4	3	2	1
8. その他	5	4	3	2	1

Q1-3 (01で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外で日本語を使わない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

- 日本語を使う相手がいないから
- 日本語を使いたいと思わないから
- 自分の日本語力が充分ではないから
- 恥ずかしいから
- 自信がないから
- 英語や韓国語など他の言語の方が便利だから
- その他

Q2 身の回りに、日本語が使われているものはありますか。（日本語学習教材は除きます。）

1. はい（-02-1へ） 2. いいえ（-02へ）

Q2-1 日本語の授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりすることはありますか。

1. はい（-02-2, 02-3へ） 2. いいえ（-02-4へ）

Q2-2 授業以外でどんなもの（日本語が使われているもの）を見たり聞いたりしますか。あてはまるもの全てに○をしてください。（複数回答可）

- 新聞
- 雑誌
- 本
- マンガ
- 商品のパッケージ・解説書
- テレビ番組
- ラジオ番組
- ビデオ・DVD
- CD
- 音声テープ
- コンピューター（インターネット等）
- ゲームソフト
- その他

Q2-3 Q2-2で○をした中で、もっともよく見たり聞いたりするもの一つについて、答えてください。

①それはQ2-2の1～13のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。																	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13					
②頻度はどのぐらいですか。○を付けてください。																	
1. 年に2,3回			2. 月2,3回			3. 週1回			4. 週2,3回			5. 毎日					
③それは誰のものですか。																	
1. 自分のもの			2. 家族のもの			3. 友人や知り合いのもの			4. 学校のもの			5. 会社のもの					
④主にどんな内容ですか。（複数回答可）																	
1. 政治・経済		2. 社会・生活		3. 科学技術		4. 文化・芸術		5. スポーツ・趣味		6. 日本語・日本語学習		7. 日本人		8. 日本		9. その他	

Q1-2 Q1-1で○をした中で、もっともよく日本語でやりとりをする人あるいは人達について、答えてください。

①その人はQ1-1の1～10のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
②どの国の人ですか。									
1. 韓国人 2. 日本人 3. その他									
③性別									
1. 男 2. 女									
④やりとりをするようになった頃、あなたの日本語はどうでしたか。○を付けてください。									
1. ほとんどできなかった			2. 少しできた			3. 日常会話程度できた			
4. かなりできた			5. 日本人と同程度できた						
⑤やりとりをする頻度はどのぐらいですか。1つ選んでください。									
1. 年に2,3回		2. 月2,3回		3. 週1回		4. 週2,3回		5. 毎日	
⑥やりとりの主な手段は何ですか。（複数回答可）									
1. 会って話す		2. 電話で話す		3. 手紙		4. 電子メール			
5. その他									
⑦その人とやりとりをする時、日本語をどのぐらい使いますか。									
1. 全部日本語		2. 主に日本語		3. 日本語と他の言語が半々		4. 主に他の言語			
⑧主にどんなことについて話しますか。（複数回答可）									
1. 日本語について		2. 勉強について		3. 仕事について		4. 生活について			
5. 趣味について		6. 社会について		7. その他					

⑤見たり聞いたりする理由は何ですか。下の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。

	全く知らない	どちらともいえない	全く知っている
1. 楽しいから	5	4	3 2 1
2. 日本語に触れたいから	5	4	3 2 1
3. 日本語の力を試してみたいから	5	4	3 2 1
4. 日本語能力の向上や維持のため	5	4	3 2 1
5. 様々な情報が得られるから	5	4	3 2 1
6. 日本や日本人について知ることができるから	5	4	3 2 1
7. 仕事のため	5	4	3 2 1
8. 研究のため	5	4	3 2 1
9. その他 _____	5	4	3 2 1

Q2-4 (Q2-1で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりしない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いもの一つを選んでください。

- 見たり、聞いたりしたいと思わないから
- 時間がないから
- 自分の日本語力が充分でないから
- 利用するのにお金がかかるから
- 手に入りにくいから
- その他 _____

Q3 現在使っている日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間にも使いますか。

- はい (→03-1へ)
- いいえ (→03-2へ)

Q3-1 授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡される学習資料を使って勉強するときに行っていることは、次のうちどれですか。()に○をつけてください。またその中でよくするものには◎をつけてください。(複数回答可)

- () 1. 語句の意味を調べる
- () 2. 漢字にふりがなをふる
- () 3. 韓国語に訳す
- () 4. 日本語がわかる人に質問する
- () 5. 練習問題を解く
- () 6. 付属のカセットテープを聞く
- () 7. 単語帳を作る
- () 8. 自分で文を作る
- () 9. 暗記、暗唱する
- () 10. 練習相手を見つけて会話の練習をする
- () 11. その他 _____

Q3-2 (Q3で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間に使わない理由は何ですか。

- 学校から持ち帰ることができないから
- 授業以外の時間に日本語の勉強をしないから
- どうやって使ったらいいかわからないから
- 特に日本語に興味がないから
- わかりにくいから
- その他 _____

Q4 過去3年の間に、韓国、あるいは日本で次の表(Q4-1)のような日本人や日本語に接する機会や場所を経験したことがありますか。

- はい (→04-1, 04-2へ)
- いいえ (→05へ)

Q4-1 経験したことがあるものの番号に○をし、韓国、日本のどちらで経験したか○をつけてください。

	機会・場所	韓国	日本
1	日本人との交流会		
2	日本人家庭への訪問・ホームステイ		
3	自宅への日本人の訪問・ホームステイ		
4	日本語のスピーチコンテスト		
5	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事		
6	日本・日本語に関するイベント		
7	日本人のいる場所、日本人が集まる場所		
8	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (例：ソウル日本文化センター、在釜山日本国総領事館)		
9	その他 _____		

Q4-2 経験したことがある場合、もう一度経験したい、あるいは継続して経験したいと思うものはありますか。最も経験したいと思うものを Q4-1 の選択肢の中から一つだけ選んで記入してください。

- ある →04-1の選択肢の番号を一つ記入してください
- ない

Q5 次の中で、日本語学習のために、現在使っているものはどれですか。()に○をつけてください。またその中でよく使うものには◎をつけてください。(複数回答可)

- () 1. 学習参考書・問題集 一次のどれですか
(1. 文法 2. 作文 3. 語彙 4. 漢字 5. 会話 6. 試験対策 7. 読解 8. その他 _____)
- () 2. 辞書 (書名: _____)
- () 3. 漢字字典 (書名: _____)
- () 4. 日本語学習のための音声テープ
- () 5. ビデオ教材
- () 6. 日本語の放送講座
- () 7. 日本語学習のためのコンピューターソフト
- () 8. インターネットによる資料収集
- () 9. web 教材による日本語学習

- () 10. e-mail・チャット
- () 11. 日本語のテレビ番組
- () 12. 日本語の映画
- () 13. 日本語のマンガ
- () 14. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
- () 15. 日本語を使ったゲームソフト
- () 16. 日本語の歌
- () 17. その他 _____

Q6 次の中で、日本語学習や日本理解のために、今後、もっと充実したらいいと思うものはどれですか。()に○をつけてください。またその中で特に充実したらいいと思うものには◎をつけてください。(複数回答可)

- () 1. 教科書—どんなものですか。 _____
- () 2. 学習参考書・問題集—次のどれですか。

1. 文法	2. 作文	3. 語彙	4. 漢字
5. 会話	6. 試験対策	7. 読解	8. その他 _____
- () 3. 辞書—次のどれですか。

1. 韓-日	2. 日-韓	3. その他 _____
--------	--------	--------------
- () 4. 漢字字典
- () 5. 日本語学習のための音声テープ
- () 6. ビデオ教材
- () 7. 日本語の放送講座
- () 8. 日本語学習のためのコンピューターソフト
- () 9. web 学習プログラム
- () 10. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
- () 11. 日本語のテレビ番組
- () 12. 日本語の映画
- () 13. 日本語を使ったゲームソフト
- () 14. 日本人との交流会 (パーティー、ハイキング、料理教室など)
- () 15. 日本人家庭への訪問、ホームステイ
- () 16. 日本語のスピーチコンテスト
- () 17. 日本や日本語に関するイベント
- () 18. 日本語を使うアルバイト
- () 19. 留学の機会
- () 20. その他 _____

ご協力ありがとうございました。

「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」への

御協力をお願い

国立国語研究所日本語教育部門では、「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を行っております。

インターネットを始めとする様々な情報流通のあり方の変化に伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化し、支援のあり方も柔軟に対応する必要があります。そのためには、まず国内外で日本語を学習、あるいは教えている方々がどのような環境で日本語を学習、あるいは教え、どのような手段で日本語を学習、あるいは教えているかについて広く情報収集し、「多様化」している現状を把握する必要があります。その一環として、本年度は、日本語教育支援のための基礎研究として、オーストラリアでの日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査を行っております。

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨を御理解くださり、下記の「御記入のお願い」をお読みの上、御回答くださるようお願い致します。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
国立国語研究所日本語教育部門

部門長 杉戸清樹

石井恵理子

金田智子

小河原義朗

ロビン・スペンスブラウン(モナシュ大学)

TEL:+81-3-5993-7660(金田・小河原)

FAX:+81-3-3906-3530

http://www.kokken.go.jp/js/

御記入にあたってのお願い

- (1)御回答は、研究目的のためにのみ使わせていただきます。また、回答は統計処理を施して総括的に公表しますので、個別の回答を公表することはありません。
- (2)御回答の方法は、各質問項目について異なりますので、各質問項目の指示にご注意ください。
- (3)自由記述の項目及び「その他」を選択された場合は、その具体的な内容についてお書きください。
- (4)2003年 月 日()までに担当の先生に御返却ください。
- (5)もし何か御不明の点がございましたら、下記まで御連絡ください。

連絡先:

金田智子 kaneda@kokken.go.jp

ロビン・スペンスブラウン Robyn.Spence-Brown@arts.monash.edu.au

<学習者用アンケート>

*選択肢のあるものは番号に○をしてください。

F1 性別 1. 男 2. 女

F2 国籍 _____

F3 年齢 1. 10-19歳 2. 20-29歳 3. 30-39歳 4. 40-49歳 5. 50-59歳 6. 60歳以上

F4 母語<最もよく話せることば> 1. 英語 2. その他 _____語

F5 身分 1. 中学校・高校 _____年生
2. 大学 _____年生 学部 _____ 専攻 _____
3. 大学院 _____年生 専攻 _____
4. 勤労者 _____
5. その他 _____

F6 日本語学習を開始した学年

1. 小学校 _____年生

2. 中学校 _____年生

3. 高校 _____年生

4. 大学 _____年生

5. その他 _____

F7 あなたは今どこで日本語を勉強していますか。(複数回答可)

1. 高校 2. 大学 3. 大学院 4. その他の日本語教育機関

5. その他 _____

F8 日本に行った経験がありますか。

1. ある (-F8-1へ) 2. ない (-F9へ)

F8-1 「1. ある」と答えた方におたずねします。日本に行った回数と期間をお書きください。

回数 _____回

期間(返べ) _____年 _____か月 _____日

F8-2 日本に行った目的は何ですか。(複数回答可)

1. 観光
2. 短期留学(6ヶ月未満)
3. 短期留学(6ヶ月以上~1年未満)
4. 長期留学(1年以上)
5. 仕事
6. 企業研修
7. 国際交流
8. ワーキングホリデー
9. 家族滞在
10. その他 _____

F9 日本語の学習を始めた理由や動機は何ですか。理由や動機として強い順に3つ選んで表に記入してください。

1. 大学の入試科目にあるから/大学入学に有利だから
2. 学校の授業にあるから
3. 就職に有利だから
4. 現在の仕事に必要なから
5. 日本人の知り合いがいるから

6. 親や知人などに勧められたから
7. 日本語を学ぶのは知的なこととしてまわりから評価されるから
8. 日本語は難しそうで、やりがいがあるから
9. 学びやすそうだから
10. 日本語に興味があるから
11. 国際的に重要な言語だから
12. 日本の文化や社会についての情報を得たいから
13. 日本の文学や歴史に興味があるから
14. 日本に興味があるから
15. 日本に行きたいから
16. 日本のもの(テレビ、映画、ゲーム、歌など)が好きだから
17. その他 _____

↑ 17. を選んだ場合は記入してください。

1	2	3

F10 あなたは現在、日本語がどのぐらいできますか (①)。そして、将来どのぐらいできるようになりたいと思っていますか (②)。「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」それぞれについて、最も適当なものを選んで、表の中に記入してください。

F10-1 【読むこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとかたかなが読める。
3. やさしい漢字がわかる。
4. 簡単な文章ならだいたい理解できる。
5. 新聞や雑誌、興味のある分野の本などがだいたい理解できる。
6. 母語と同じように読める。

①現在	②将来

F10-2 【書くこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとかたかなが書ける。
3. 簡単な漢字を書くことができる。
4. 短い文を書くことができる。
5. まとまった文章が書ける。
6. 母語と同じように書ける。

①現在	②将来

F10-3 【聞くこと】

1. 全くできない。
2. 日常生活で使う簡単な表現、挨拶などが聞いて理解できる。
3. 簡単な指示などを理解することができる。
4. 会話の中で、相手の考えや意見をだいたい理解することができる。
5. テレビニュース、学校の講義などまとまった話がほぼ理解できる。
6. 母語と同じように聞いて理解できる。

①現在	②将来

F10-4 【話すこと】

1. 全くできない。
2. 挨拶ができる。
3. 簡単な自己紹介ができる。
4. 日常生活に必要な表現を状況に応じて使える。
5. 自分の意見や考えを話すことができる。
6. 母語と同じように話せる。

①現在	②将来

Q1 日本語の授業以外で日本語を使ってやりとり（会話、電話、手紙、電子メールなど）をすることはありますか。

1. はい (→01-1へ) 2. いいえ (→01-3へ)

Q1-1 日本語の授業以外でどんな人とどのような方法でやりとりをしますか。あてはまるものすべてに✓をして下さい。(複数回答可)

相手	方法					
	会話	電話	手紙	電子メール	チャット	
1 日本語の教師						
2 学校の友人						
3 学院・語学堂等のクラスメート						
4 職場の同僚						
5 職場の上司						
6 仕事上の取引相手						
7 勤務先（レストラン等）の客						
8 家族・親戚等						
9 知り合い						
10 その他						

Q1-2 Q1-1 で○をした中で、もっともよく日本語でやりとりをする人あるいは人達について、答えてください。

①その人はQ1-1の1~10のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

②どこの国の人ですか。

1. オーストラリア人 2. 日本人 3. その他

③性別

1. 男 2. 女

④やりとりをするようになった頃、あなたの日本語はどうでしたか。○を付けてください。

1. ほとんどできなかった 2. 少しできた 3. 日常会話程度できた
4. かなりできた 5. 日本人と同程度できた

⑤やりとりをする頻度はどのぐらいですか。1つ選んでください。

1. 年に2,3回 2. 月2,3回 3. 週1回 4. 週2,3回 5. 毎日

⑥やりとりの主な手段は何ですか。(複数回答可)

1. 会って話す 2. 電話で話す 3. 手紙 4. 電子メール
5. その他

⑦その人とやりとりをする時、日本語をどのぐらい使いますか。

1. 全部日本語 2. 主に日本語 3. 日本語と他の言語が半々 4. 主に他の言語

⑧下にどんなことについて話しますか。(複数回答可)

1. 日本語について 2. 勉強について 3. 仕事について 4. 生活について
5. 趣味について 6. 社会について 7. その他

⑨やりとりをその人とするとき、なぜ日本語を使うのですか。下の項目それぞれについて、1~5の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。

	全くそう思	どちらともい	全くそう思わ		
1. 日本語を使うのは楽しいから	5	4	3	2	1
2. 日本語の母語話者と話したいから	5	4	3	2	1
3. 日本語能力向上や維持のため	5	4	3	2	1
4. 仕事として義務づけられているから	5	4	3	2	1

5. 日本語が最もわかりやすい言葉だから	5	4	3	2	1
6. 相手が使うから	5	4	3	2	1
7. 習慣になっているから	5	4	3	2	1
8. その他	5	4	3	2	1

Q1-3 (01で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外で日本語を使わない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

- 日本語を使う相手がいないから
- 日本語を使いたいと思わないから
- 自分の日本語力が充分ではないから
- 恥ずかしいから
- 自信がないから
- 英語など他の言語の方が便利だから
- その他

Q2 身の回りに、日本語が使われているものがありますか。(日本語学習教材は除きます。)

1. はい (→02-1へ) 2. いいえ (→02-3へ)

Q2-1 日本語の授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりすることはありますか。

1. はい (→02-2へ) 2. いいえ (→02-4へ)

Q2-2 授業以外でどんなもの(日本語が使われているもの)を見たり聞いたりしますか。あてはまるもの全てに○をしてください。(複数回答可)

- 新聞
- 雑誌
- 本
- マンガ
- 商品のパッケージ・解説書
- テレビ番組
- ラジオ番組
- ビデオ・DVD
- CD
- 音声テープ
- コンピューター(インターネット等)
- ゲームソフト
- その他

Q2-3 Q2-2で○をした中で、もっともよく見たり聞いたりするもの一つについて、答えてください。

①それはQ2-2の1~13のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----

②頻度はどのぐらいですか。○を付けてください。

1. 年に2,3回 2. 月2,3回 3. 週1回 4. 週2,3回 5. 毎日

③それは誰のものですか。

1. 自分のもの 2. 家族のもの 3. 友人や知り合いのもの 4. 学校のもの
5. 会社のもの 6. その他

④主にどんな内容ですか。(複数回答可)

1. 政治・経済 2. 社会・生活 3. 科学技術 4. 文化・芸術 5. スポーツ・趣味
6. 日本語・日本語学習 7. 日本人 8. 日本 9. その他

⑤見たり聞いたりする理由は何ですか。下の項目それぞれについて、1~5の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。

	全く(そう)思	どちらともい	全く(そう)思わ		
1. 楽しいから	5	4	3	2	1
2. 日本語に触れたいから	5	4	3	2	1
3. 日本語の力を試してみたいから	5	4	3	2	1
4. 日本語能力の向上や維持のため	5	4	3	2	1

5. 様々な情報が得られるから	5	4	3	2	1
6. 日本や日本人について知ることができるから	5	4	3	2	1
7. 仕事のため	5	4	3	2	1
8. 研究のため	5	4	3	2	1
9. その他 _____	5	4	3	2	1

Q2-4 (Q2-1で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりしない理由は何ですか。

次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

1. 見たり、聞いたりしたいと思わないから
2. 時間がないから
3. 自分の日本語力が充分でないから
4. 利用するのにお金がかかるから
5. 手に入りにくいから
6. その他 _____

Q3 現在使っている日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間にも使いますか。

1. はい (-Q3-1へ)
2. いいえ (-Q3-2へ)

Q3-1 授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡されるものを使って勉強するときに、どんなことをしていますか。次の中からあてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答可)

1. 語句の意味を調べる
2. 漢字にふりがなをふる
3. 英語に訳す
4. 日本語がわかる人に質問する
5. 練習問題を解く
6. 付属のカセットテープを聞く
7. 単語帳を作る
8. 自分で文を作る
9. 暗記、暗唱する
10. 練習相手を見つけて会話の練習をする
11. その他 _____

Q3-2 (Q3で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間に使わない理由は何ですか。

1. 学校から持ち帰ることができないから
2. 授業以外の時間に日本語の勉強をしないから
3. どうやって使ったらいいかわからないから
4. 特に日本語に興味がないから
5. わかりにくいから
6. その他 _____

Q4 過去3年の間に、オーストラリア、あるいは日本で次の表(Q4-1)のような日本人や日本語に接する機会や場所を経験したことがありますか。

1. はい (-Q4-1へ)
2. いいえ (-Q5へ)

Q4-1 経験したことがあるものすべてに✓をしてください。

	機会・場所	オーストラリア	日本
1	日本人との交流会		
2	日本人家庭への訪問・ホームステイ		
3	自宅への日本人の訪問・ホームステイ		
4	日本語のスピーチコンテスト		
5	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事		
6	日本・日本語に関するイベント		
7	日本人のいる場所、日本人が集まる場所		
8	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (例：シドニー日本語センター)		
9	その他 _____		

Q4-2 経験したことがある場合、もう一度経験したい、あるいは継続して経験したいと思うものはありますか。最も経験したいと思うものを Q4-1 の選択肢の中から一つだけ選んで記入してください。

1. ある - Q4-1 の選択肢の番号を一つ記入してください

2. 今後経験したいと思うものはない

Q5 次の中で、日本語学習のために、現在使っているものはどれですか。(複数回答可)

1. 文法解説書
2. 辞書(書名: _____)
3. 漢字字典(書名: _____)
4. 日本語学習のための音声テープ
5. 日本語学習のためのコンピューターソフト
6. インターネットによる資料収集
7. Web教材による日本語学習
8. e-mailチャット
9. 日本語のテレビ番組、日本語の映画
10. 日本語のマンガ
11. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
12. 日本語を使ったゲームソフト
13. 日本語の歌の入った音楽テープ、CD
14. その他 _____

Q6 次の中で、日本語学習や日本理解のために、今後、さらに充実したらいいと思うものはどれですか。(複数回答可)

1. 教科書—どんなものですか。 _____
2. 文法解説書
3. 辞書—1. 次のどれですか。(1. 英日 2. 日英)
—2. どんなものですか。(1. 漢字に振り仮名が振られたもの 2. 例文が多いもの
3. その他 _____)
4. 漢字字典—次のどれですか。(1. 英語で説明 2. 日本語で説明)

5. 日本語学習のための音声テープ
6. 日本語学習のためのコンピューターソフト
7. Web 学習プログラム
8. 日本語の章悦や雑誌、新聞などの読み物
9. 日本語のテレビ番組、日本語の映画
10. 日本語を使ったゲームソフト
11. 日本人との交流会（パーティー、ハイキング、料理教室など）
12. 日本人家庭への訪問、ホームステイ
13. 日本語のスピーチコンテスト
14. 日本や日本語に関するイベント
15. 日本語を使うアルバイト
16. 留学の機会
17. その他 _____

ご協力ありがとうございました。

台湾学習者用

「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」への

御協力をお願い

国立国語研究所日本語教育部門では、「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を行っております。

インターネットを始めとする様々な情報流通のあり方の変化に伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化し、支援のあり方も柔軟に対応する必要があります。そのためには、まず国内外で日本語を学習、あるいは教えている方々がどのような環境で日本語を学習、あるいは教え、どのような手段で日本語を学習、あるいは教えているかについて広く情報収集し、「多様化」している現状を把握する必要があります。その一環として、本年度は、日本語教育支援のための基礎研究として、台湾での日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査を行っております。

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨を御理解くださり、ご回答くださるようお願い致します。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
独立行政法人 国立国語研究所日本語教育部門
部門長 杉戸清樹
石井恵理子
金田習子
小河原義朗

TEL:+81-3-5993-7660 (金田)
FAX:+81-3-3906-3530
http://www.kokken.go.jp/jsl/

<学習者用アンケート>

•選択肢のあるものは番号に○をしてください。

F1 性別 1 男 2 女

F2 国籍 _____

F3 年齢 1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60代 7. 70歳以上

F4 母語 (最もよく話せる言葉) _____ 語

F5 身分 1 中学校 _____ 年生

2 高校

1. 一般高校 _____ 年生

2. 実業高校 _____ 年生 専攻 _____

3 専科学校

1. 5年制 _____ 年生 専攻 _____

2. 2年制 _____ 年生 専攻 _____

4. 2年制技術学院 _____ 年生 専攻 _____

5. 4年制技術学院 _____ 年生 専攻 _____

6. 大学 _____ 年生 学部 _____ 専攻 _____

7. 大学院

1. 修士 _____ 年 専攻 _____

2. 博士 _____ 年 専攻 _____

8. その他 _____

F6 日本語学習を開始した学年

1. 小学校 _____ 年生

2. 中学校 _____ 年生

3. 高校 _____ 年生

4. 専科学校

1. 5年制 _____ 年生 2. 2年制 _____ 年生

5. 2年制技術学院 _____ 年生

6. 4年制技術学院 _____ 年生

7. 大学 _____ 年生

8. 大学院

1. 修士 _____ 年生 2. 博士 _____ 年生

9. その他 _____

F7 あなたは今どこで日本語を勉強していますか。(複数回答可)

1. 高校 2. 専科学校(5年制 2年生制) 3. 2年制技術学院 4. 4年制技術学院

5. 大学 6. 大学院(修士 博士) 7. その他の教育機関

8. その他 _____

F8 日本に行った経験がありますか。

1. ある (-F8-1へ) 2. ない (-F9へ)

F8-1 「1. ある」と答えた方におたずねします。日本に行った回数と期間をお書きください。

回数 _____ 回 期間(延べ) _____ 年 _____ 月 _____ 日

F8-2 日本に行った目的は何ですか。(複数回答可)

1. 観光 2. 短期留学(6ヶ月未満) 3. 短期留学(6ヶ月以上～1年未満)
 4. 長期留学(1年以上) 5. 仕事 6. 企業研修 7. 国際交流
 8. 親族訪問 9. 家族滞在 10. その他 _____

F9 日本語の学習を始めた理由や動機は何ですか。理由や動機として強い順に3つ選んで表に記入してください。

1. 日本語を学ぶのが流行しているから
2. 学校の授業にあるから
3. 就職に有利だから
4. 現在の仕事に必要だから
5. 日本人の知り合いがいるから
6. 親や知人などに勧められたから
7. 日本語を学ぶのは知的なこととしてまわりから評価されるから
8. 日本語は難しそうで、やりがいがあるから
9. 学びやすそうだから
10. 日本語に興味があるから
11. 国際的に重要な言語だから
12. 日本の文化や社会についての情報を得たいから
13. 日本の文学や歴史に興味があるから
14. 日本に興味があるから
15. 日本に行きたいから
16. 日本のもの(テレビ番組、ゲーム、歌、漫画など)が好きだから
17. その他 _____

↑ 17. を選んだ場合は記入してください。

1	2	3

F10 あなたは現在、日本語がどのぐらいできますか(①)。そして、将来どのぐらいできるようになりたいと思っていますか(②)。「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」それぞれについて、最も適当なものを選んで、表の中に記入してください。

F10-1 【読むこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとカタカナが読める。
3. よく使われる漢字なら日本式に読める。
4. 簡単な文章ならだいたい理解できる。
5. 新聞や雑誌、興味のある分野の本などがだいたい理解できる。
6. 母語と同じように読める。

①現在	②将来

F10-2 【書くこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなで知っている言葉が書ける。

3. 簡単な短い文を書くことができる。
4. 親しい友人などへの簡単な手紙やメールを書くことができる。
5. まとまった文章が書ける。
6. 母語と同じように書ける。

①現在	②将来

F10-3 【聞くこと】

1. 全くできない。
2. 相手の名前や挨拶などを聞いて理解できる。
3. 日常生活で使う簡単な表現、指示などを理解することができる。
4. 会話の中で、相手の考えや意見をだいたい理解することができる。
5. テレビニュース、学校の講義などまとまった話がほぼ理解できる。
6. 母語と同じように聞いて理解できる。

①現在	②将来

F10-4 【話すこと】

1. 全くできない。
2. 挨拶ができる。
3. 簡単な自己紹介ができる。
4. 日常生活に必要な表現を状況に応じて使える。
5. 自分の意見や考えを話すことができる。
6. 母語と同じように話せる。

①現在	②将来

Q1 日本語の授業以外で日本語を使ってやりとり（会話、電話、手紙、電子メールなど）をすることはありますか。

1. はい（→01-1,01-2へ） 2. いいえ（→01-3へ）

Q1-1 日本語の授業以外でどんな人と日本語でやりとりしますか。やりとりする人全員の番号に○をし、その方法を選んで○をつけてください。（複数回答可）

○	相手	方法				
		会話	手紙	電話	電子メール	チャット (men など)
1	日本語の教師					
2	学校の友人					
3	塾や語学学校等のクラスメート					
4	職場の同僚					
5	職場の上司					
6	仕事上の取引相手					
7	勤務先（レストラン等）の客					
8	家族・親戚等					
9	知り合い					
10	その他					
	その他					
	その他					

Q1-2 Q1-1で○をした中で、もっともよく日本語でやりとりをする人あるいは人達について、教えてください。

①その人はQ1-1の1～10のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

②どこの国の人ですか。

1. 台湾人 2. 日本人 3. その他

③性別

1. 男 2. 女

④やりとりをするようになった頃、あなたの日本語はどうでしたか。○を付けてください。

1. ほとんどできなかった 2. 少しできた 3. 日常会話程度できた
4. かなりできた 5. 日本人と同程度できた

⑤やりとりをする頻度はどのくらいですか。1つ選んでください。

1. 年に2,3回 2. 月2,3回 3. 週1回 4. 週2,3回 5. 毎日

⑥やりとりの主な手段は何ですか。（複数回答可）

1. 会って話す 2. 電話で話す 3. 手紙 4. 電子メール
5. チャット (men など) 6. その他

⑦その人とやりとりをする時、日本語をどのくらい使いますか。

1. 全部日本語 2. 主に日本語 3. 日本語と他の言語が半々 4. 主に他の言語

⑧主にどんなことについて話しますか。（複数回答可）

1. 日本語について 2. 勉強について 3. 仕事について 4. 生活について
5. 趣味について 6. 社会について 7. その他

⑨やりとりをその人とするとき、なぜ日本語を使うのですか。下の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。

	全くそう思う	どちらともいえない	全くそう思わない		
1. 日本語を使うのは楽しいから	5	4	3	2	1
2. 日本語の母語話者と話したいから	5	4	3	2	1
3. 日本語能力向上や維持のため	5	4	3	2	1
4. 仕事として職務づけられているから	5	4	3	2	1
5. 日本語が最もわかりあえる言葉だから	5	4	3	2	1

6. 相手が使うから	5	4	3	2	1
7. 習慣になっているから	5	4	3	2	1
8. その他	5	4	3	2	1
	5	4	3	2	1

Q1-3 (01で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外で日本語を使わない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

- 日本語を使う相手がいないから
- 日本語を使いたいと思わないから
- 自分の日本語力が充分ではないから
- 恥ずかしいから
- 自信がないから
- 中国語など他の言語の方が便利だから
- その他

Q2 身の回りに、日本語が使われているものはありますか。（日本語学習教材は除きます。）

1. はい（→02-1へ） 2. いいえ（→03へ）

Q2-1 日本語の授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりすることはありますか。

1. はい（→02-2,02-3へ） 2. いいえ（→02-4へ）

Q2-2 授業以外でどんなもの（日本語が使われているもの）を見たり聞いたりしますか。あてはまるもの全てに○をしてください。（複数回答可）

- 新聞
- 雑誌
- 本
- マンガ・アニメ
- 商品のパッケージ・解説書
- テレビ（ニュース、ドラマなど）
- ラジオ
- ビデオ・DVD
- CD
- 音テープ
- コンピュータ（インターネット等）
- ゲームソフト
- 看板や店内の表示
- その他

Q2-3 Q2-2で○をした中で、もっともよく見たり聞いたりするもの一つについて、教えてください。

①それはQ2-2の1～14のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----

②頻度はどのくらいですか。○を付けてください。

1. 年に2,3回 2. 月2,3回 3. 週1回 4. 週2,3回 5. 毎日

③それは誰のものですか。

1. 自分のもの 2. 家族のもの 3. 友人や知り合いのもの 4. 学校のもの
5. 会社のもの 6. その他

④主にどんな内容ですか。（複数回答可）

1. 政治・経済 2. 社会・生活 3. 科学技術 4. 文化・芸術 5. スポーツ・趣味
6. 日本語・日本語学習 7. 日本人 8. 日本 9. その他

⑤見たり聞いたりする理由は何ですか。下の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。

	全くそう思う	どちらともいえない	全くそう思わない		
1. 楽しいから	5	4	3	2	1
2. 日本語に触れたいから	5	4	3	2	1
3. 日本語の力を試してみたいから	5	4	3	2	1
4. 日本語能力の向上や維持のため	5	4	3	2	1
5. 様々な情報が得られるから	5	4	3	2	1
6. 日本や日本人について知ることができるから	5	4	3	2	1

7. 仕事のため	5	4	3	2	1
8. 研究のため	5	4	3	2	1
9. その他 _____	5	4	3	2	1

Q2-4 (02-1で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりしない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

1. 見たり、聞いたりしたいと思わないから
2. 時間がないから
3. 自分の日本語力が充分でないから
4. 利用するのにお金がかかるから
5. 手に入りにくいから
6. その他 _____

Q3 現在使っている日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間にも使いますか。

1. はい (→03-1へ)
2. いいえ (→03-2へ)

Q3-1 授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡される学習資料を使って勉強するときに行っていることは、次のうちどれですか。()に○をつけてください。またその中でよくするものには◎をつけてください。(複数回答可)

- () 1. 語句の意味を調べる
- () 2. 漢字にふりがなをふる
- () 3. 母語に訳す
- () 4. 日本語がわかる人に質問する
- () 5. 練習問題を解く
- () 6. 付属のカセットテープを聞く
- () 7. 単語帳を作る
- () 8. 自分で文を作る
- () 9. 暗記、暗唱する
- () 10. 練習相手を見つけて会話の練習をする
- () 11. その他 _____

Q3-2 (03で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間に使わない理由は何ですか。

1. 授業以外の時間に日本語の勉強をしないから
2. どうやって使ったらいいかわからないから
3. 特に日本語に興味がないから
4. わかりにくいから
5. その他 _____

Q4 過去3年の間に、次の表(Q4-1)のような日本人や日本語に接する機会や場所を経験したことがありますか。

1. はい (→04-1, 04-2へ)
2. いいえ (→05へ)

Q4-1 経験したことがあるものの番号に○をし、台湾、日本のどちらで経験したか○をつけてください。台湾・日本のいずれでもない場合は、「その他」の欄に記入してください。

	機会・場所	台湾	日本	その他
1	日本人との交流会			
2	日本人家庭への訪問・ホームステイ			
3	自宅への日本人の訪問・ホームステイ			
4	日本語のスピーチコンテスト			
5	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事			
6	日本・日本語に関するイベント			
7	日本人のいる場所、日本人が集まる場所			
8	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (例：交流協会の日本語センター、国家図書館の日韓文閲覧室)			
9	日本語のカラオケ			
10	その他 _____			

Q4-2 経験したことがある場合、もう一度経験したい、あるいは継続して経験したいと思うものはありますか。最も経験したいと思うものをQ4-1の選択肢の中から一つだけ選んで記入してください。

1. ある →04-1の選択肢の番号を一つ記入してください
2. ない

Q5 次の中で、日本語学習のために、現在使っているものはどれですか。()に○をつけてください。またその中でよく使うものには◎をつけてください。(複数回答可)

- () 1. 学習参考書・問題集 一次のどれですか
 [() 1. 文法 () 2. 作文 () 3. 語彙 () 4. 漢字 () 5. 会話 () 6. 試験対策 () 7. 読解 () 8. その他 _____]
- () 2. 辞書(書名: _____)
- () 3. 漢字辞典(書名: _____)
- () 4. 日本語学習のための音声テープ
- () 5. ビデオ教材
- () 6. 日本語の放送講座
- () 7. 日本語学習のためのコンピューターソフト
- () 8. インターネットによる資料収集
- () 9. web 教材による日本語学習
- () 10. e-mail・チャット(manなど)
- () 11. 日本語のテレビ番組
- () 12. 日本語の映画
- () 13. 日本語のマンガ・アニメ
- () 14. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
- () 15. 日本語を使ったゲームソフト
- () 16. 日本語の歌
- () 17. その他 _____

Q6 次の中で、日本語学習や日本理解のために、今後、もっと充実したらいいと思うものはどれですか。()に○をつけてください。またその中で特に充実したらいいと思うものには◎をつけてください。(複数回答可)

- () 1. 教科書—どんなものですか。 _____

- () 2. 学習参考書・問題集一次のどれですか。
[() 1. 文法 () 2. 作文 () 3. 語彙 () 4. 漢字 () 5. 会話 () 6. 試験対策
() 7. 読解 () 8. その他 _____]
- () 3. 辞書一次のどれですか。
[() 1. 中-日 () 2. 日-中 () 3. その他 _____]
- () 4. 漢字辞典
- () 5. 日本語学習のための音声テープ
- () 6. ビデオ教材
- () 7. 日本語の放送講座
- () 8. 日本語学習のためのコンピューターソフト
- () 9. web 学習プログラム
- () 10. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
- () 11. 日本語のテレビ番組
- () 12. 日本語の映画
- () 13. 日本語を使ったゲームソフト
- () 14. 日本人との交流 (パーティ、ハイキング、料理教室など)
- () 15. 日本人家庭への訪問、ホームステイ
- () 16. 日本語のスピーチコンテスト
- () 17. 日本や日本語に関するイベント
- () 18. 日本語を使うアルバイト
- () 19. 留学の機会
- () 20. 言語交換学習・メールによる意見交換
- () 21. その他 _____

ご協力ありがとうございました。

「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」への

御協力をお願い

私共の国立国語研究所は、日本語教育に関する科学的な調査・研究により、日本語教育の振興を図ることを目的の一つとした日本の公的な機関です。その中の日本語教育部門では、日本語教育関係情報や教材用素材の提供など、日本語教育支援のための総合的ネットワークの構築・運営を実施し、その充実を目指しております。

近年、インターネットを始めとする様々な情報流通のあり方の変化に伴い、日本語を学習する環境や手段も多様化し、支援のあり方も柔軟に対応する必要があります。そのためには、まず国内外で日本語を学習している方々がどのような環境で、どのような手段で日本語を学習しているのかについて広く情報収集し、現状を把握する必要があります。

その一環として、本年度はマレーシアの日本語学習者が日本語学習に何を利用しそれらをどう評価しているのか等を把握する実態調査を行っております。

本調査研究により、次のような支援が可能になります。

①人、物、情報等のより効果的な日本語教育・学習支援が可能になる

②日本へ留学するマレーシア人学習者の日本語学習を効果的に支援できる

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨を御理解くださり、御回答くださるようお願い致します。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-1-4

独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門

部門長 杉戸清樹

金田智子

小河原親朗

TEL:+81-3-5993-7660 (小河原)

FAX:+81-3-3906-3530

http://www.kokken.go.jp/jsl/

御記入にあたってのお願い

(1)御回答は、研究目的のためにもみ使わせていただきます。また、回答は統計処理を施して総括的に公表しますので、個別の回答を公表することはありません。

(2)御回答の方法は、各質問項目について異なりますので、各質問項目の指示にご注意ください。

(3)自由記述の項目及び「その他」を選択された場合は、その具体的な内容についてお書きください。

(4)2004年 月 日(木)までに担当の先生に御返却ください。

(5)もし何か御不明の点がありましたら、下記まで御連絡ください。

小河原 親朗 ogawara@kokken.go.jp

Edward Lee(マレーシア日本語協会) edward@jkl.org.my

<学習者用アンケート>

*選択肢のあるものは番号に○をしてください。

F1 性別 1 男 2 女

F2 国籍 _____

F3 年齢 1. 10代 2 20代 3 30代 4 40代 5 50代 6 60代 7. 70歳以上

F4 母語(最もよく話せる言葉) _____ 語

F5 身分

1. 全寮制中学校(Residential School) Form _____

2. 普通中高等学校(Day School) Form _____

3. 1.2以外の中高等学校 Form _____

4. 大学予備教育課程 _____年

5. 大学 _____年

6. 短期大学 _____年

7. 勤労者

8. その他 _____

F6 日本語学習を開始した時期

1. 全寮制中学校(Residential School) Form _____

2. 普通中高等学校(Day School) Form _____

3. 1.2以外の中高等学校 Form _____

4. 大学予備教育課程 _____年

5. 大学 _____年

6. 短期大学 _____年

7. 就職後

8. その他 _____

F7 あなたは今どこで日本語を勉強していますか。(複数回答可)

1. 全寮制中学校(Residential School) 2. 普通中高等学校(Day School)

3. 1.2以外の中高等学校 4. 大学予備教育課程 5. 大学 6. 短期大学

7. 総合技術専門学校・ポリテクニク 8. 民間学校 9. 会社

10. その他 _____

F8 日本に行った経験がありますか。

1. ある(→F8-1へ) 2. ない(→F9へ)

F8-1 「1. ある」と答えた方におたずねします。日本に行った回数と期間をお書きください。

回数 _____ 回 期間(延べ) _____ 年 _____ 月 _____ 日

F8-2 日本に行った目的は何ですか。(複数回答可)

1. 観光 2. 短期留学(6ヶ月未満) 3. 短期留学(6ヶ月以上～1年未満)

4. 長期留学(1年以上) 5. 仕事 6. 企業研修 7. 国際交流

8. 親族訪問 9. 家族滞在 10. その他 _____

F9 日本語の学習を始めた理由や動機は何ですか。理由や動機として強い順に3つ選んで表に記入してください。

1. 日本語を学ぶのが流行しているから
2. 学校の授業にあるから
3. 就職に有利だから
4. 現在の仕事に必要なから
5. 日本人の知り合いがいるから
6. 親や知人などに勧められたから
7. 日本語を学ぶのは知的なこととしてまわりから評価されるから
8. 日本語は難しそうで、やりがいがあるから
9. 学びやすそうだから
10. 日本語に興味があるから
11. 国際的に重要な言語だから
12. 日本の文化や社会についての情報を得たいから
13. 日本の文字や歴史に興味があるから
14. 日本に興味があるから
15. 日本に行きたいから
16. 日本のもの（テレビ番組、ゲーム、歌、漫画など）が好きだから
17. 日本の科学技術に興味があるから
18. その他

18. を選んだ場合は記入してください。

1	2	3

F10 あなたは現在、日本語がどのぐらいできますか (①)、そして、将来どのぐらいできるようになりたいと思っていますか (②)。「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」それぞれについて、最も適当なものを選んで、表の中に記入してください。

F10-1 【読むこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとカタカナが読める。
3. やさしい漢字がわかる。
4. 簡単な文章ならだいたい理解できる。
5. 新聞や雑誌、興味のある分野の本などがだいたい理解できる。
6. 母語と同じように読める。

①現在	②将来

F10-2 【書くこと】

1. 全くできない。
2. ひらがなとカタカナが書ける。
3. 簡単な漢字を書くことができる。
4. 短い文を書くことができる。
5. まとまった文章が書ける。
6. 母語と同じように書ける。

①現在	②将来

F10-3 【聞くこと】

1. 全くできない。
2. 日常生活で使う簡単な表現、挨拶などが聞いて理解できる。
3. 簡単な指示などを理解することができる。
4. 会話の中で、相手の考えや意見をだいたい理解することができる。
5. テレビニュース、学校の講義などまとまった話がほぼ理解できる。
6. 母語と同じように聞いて理解できる。

①現在	②将来

F10-4 【話すこと】

1. 全くできない。
2. 挨拶ができる。
3. 簡単な自己紹介ができる。
4. 日常生活に必要な表現を状況に応じて使える。
5. 自分の意見や考えを話すことができる。
6. 母語と同じように話せる。

①現在	②将来

Q1 日本語の授業以外で日本語を使ってやりとり（会話、電話、手紙、電子メールなど）をすることはありますか。

1. はい（-01-1, 01-2へ） 2. いいえ（-01-3へ）

Q1-1 日本語の授業以外でどんな人と日本語でやりとりしますか。やりとりする人全員の番号に○をし、その方法を選んで○をつけてください。（複数回答可）

○	方法	会話	手紙	電話	電子メール	チャット
1	相手					
1	日本語の教師					
2	学校の友人					
3	塾や語学学校等のクラスメート					
4	職場の同僚					
5	職場の上司					
6	仕事上の取引相手					
7	勤務先（レストラン等）の客					
8	家族・親戚等					
9	知り合い					
10	日本人留学生、研修生、アシスタント					
11	その他					

Q1-2 Q1-1で○をした中で、もっともよく日本語でやりとりをする人あるいは人達について、答えてください。

①その人はQ1-1の1~10のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。										
1	2	3	4	5	6	7	8	10	11	
②どの国の人ですか。										
1 マレーシア人 2 日本人 3 その他										
③性別										
1. 男 2. 女										
④やりとりをするようになった頃、あなたの日本語はどうでしたか。○をつけてください。										
1. ほとんどできなかった 2. 少しできた 3. 日常会話程度できた										
4. かなりできた 5. 日本人と同程度でした										

⑤やりとりをする頻度はどのくらいですか。1つ選んでください。				
1 年に2,3回	2 月2,3回	3 週1回	4 週2,3回	5 毎日
⑥やりとりの主な手段は何ですか。(複数回答可)				
1 会って話す	2 電話で話す	3 手紙	4 電子メール	
5 チャット	6 その他			
(7)その人とやりとりをする時、日本語をどのくらい使いますか。				
1 全部日本語	2 主に日本語	3 日本語と他の言語が半々	4 主に他の言語	
⑧主にどんなことについて話しますか。(複数回答可)				
1 日本語について	2 勉強について	3 仕事について	4 生活について	
5 趣味について	6 社会について	7 その他		
⑨やりとりをその人とするとき、なぜ日本語を使うのですか。下の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。				
	全く使わない	どちらともいえない	全く使わない	
1. 日本語を使うのは楽しいから	5	4	3	2 1
2. 日本語の母語話者と話したいから	5	4	3	2 1
3. 日本語能力向上や維持のため	5	4	3	2 1
4. 仕事として義務づけられているから	5	4	3	2 1
5. 日本語が最もわかりやすい言葉だから	5	4	3	2 1
6. 相手が使うから	5	4	3	2 1
7. 習慣になっているから	5	4	3	2 1
8. その他	5	4	3	2 1

Q1-3 (01で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外で日本語を使わない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

1. 日本語を使う相手がいないから
2. 日本語を使いたいと思わないから
3. 自分の日本語力が充分ではないから
4. 恥ずかしいから
5. 自信がないから
6. マレー語や英語、中国語などの言語の方が便利だから
7. その他 _____

Q2 身の回りに、日本語が使われているものはありますか。(日本語学習教材は除きます。)

1. はい(→Q2-1へ)
2. いいえ(→Q3へ)

Q2-1 日本語の授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりすることはありますか。

1. はい(→Q2-2, Q2-3へ)
2. いいえ(→Q2-4へ)

Q2-2 授業以外でどんなもの(日本語が使われているもの)を見たり聞いたりしますか。あてはまるもの全てに○をしてください。(複数回答可)

1. 新聞
2. 雑誌
3. 本
4. マンガ・アニメ
5. 商品のパッケージ・解説書
6. テレビ(ニュース、ドラマなど)
7. ラジオ
8. ビデオ・VCD・DVD
9. CD
10. 音戸テープ
11. コンピュータ(インターネット等)
12. ゲームソフト
13. 看板や店内の表示
14. その他 _____

Q2-3 Q2-2で○をした中で、もっともよく見たり聞いたりするもの二つについて、答えてください。

①それはQ2-2の1～14のどれですか。*1つだけ選んで下の番号に○をしてください。													
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
②頻度はどのくらいですか。○を付けてください。													
1 年に2,3回	2 月2,3回	3 週1回	4 週2,3回	5 毎日									
③それは誰のものですか。													
1 自分のもの	2 家族のもの	3 友人や知り合いのもの	4 学校のもの										
5 会社のもの	6 その他												
④主にどんな内容ですか。(複数回答可)													
1 政治・経済	2 社会・生活	3 科学技術	4 文化・芸術	5 スポーツ・趣味	6 日本語・日本語学習	7 日本人	8 日本	9 その他					
⑤見たり聞いたりする理由は何ですか。下の項目それぞれについて、5～1の尺度で答えてください。また、それ以外に理由がある場合は、「その他」に記入の上、同様に答えてください。													
	全く使わない	どちらともいえない	全く使わない										
1. 楽しいから	5	4	3	2	1								
2. 日本語に触れたいから	5	4	3	2	1								
3. 日本語の力を試してみたいから	5	4	3	2	1								
4. 日本語能力の向上や維持のため	5	4	3	2	1								
5. 様々な情報が得られるから	5	4	3	2	1								
6. 日本や日本人について知ることができるから	5	4	3	2	1								
7. 仕事のため	5	4	3	2	1								
8. 研究のため	5	4	3	2	1								
9. その他	5	4	3	2	1								

Q2-4 (Q2-1で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

授業以外の時間に、日本語が使われているものを見たり聞いたりしない理由は何ですか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ選んでください。

1. 見たり、聞いたりしたいと思わないから
2. 時間がないから
3. 自分の日本語力が充分でないから
4. 利用するのにお金がかかるから
5. 手に入りにくいから
6. その他 _____

Q3 現在使っている日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間にも使いますか。 1. はい(→Q3-1へ) 2. いいえ(→Q3-2へ)

Q3-1 授業以外の時間に教科書や授業で先生から渡される学習資料を使って勉強するときに、どんなことをしていますか。次の中からあてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答可)

1. 語句の意味を調べる
2. 漢字にふりがなをふる
3. マレー語や英語、中国語などの言語に訳す
4. 日本語がわかる人に質問する
5. 練習問題を解く
6. 付属のカセットテープを聞く
7. 単語帳を作る
8. 自分で文を作る
9. 暗記、暗唱する
10. 練習相手を見つけて会話の練習をする

11. 参考書等参照する

12. その他 _____

Q3-2 (Q3で「1」と答えた人は回答する必要はありません。)

日本語の教科書や授業で先生から渡される学習資料を授業以外の時間に使わない理由は何ですか。

1. 授業以外の時間に日本語の勉強をしないから
2. どうやって使ったらいいかわからないから
3. 特に日本語に興味がないから
4. わかりにくいから
5. その他 _____

Q4 過去3年の間に、次の表(Q4-1)のような日本人や日本語に接する機会や場所を経験したことがありますか。

1. はい (→04-1, 04-2へ)
2. いいえ (→05へ)

Q4-1 経験したことがあるものの番号に○をし、マレーシア、日本のどちらで経験したか○をつけてください。マレーシア・日本のいずれでもない場合は、「その他」の欄に記入してください。

	機会・場所	マレーシア	日本	その他
1	日本人との交流会			
2	日本人家庭への訪問・ホームステイ			
3	自宅への日本人の訪問・ホームステイ			
4	日本語のスピーチコンテスト			
5	日本語が使われている職場でのアルバイト・仕事			
6	日本・日本語に関するイベント			
7	日本人のいる場所、日本人が集まる場所			
8	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (例：国際交流基金クアラルンプール日本語センター)			
9	日本語のカラオケ			
10	その他			

Q4-2 経験したことがある場合、もう一度経験したい、あるいは継続して経験したいと思うものはありますか。最も経験したいと思うものをQ4-1の選択肢の中から一つだけ選んで記入してください。

1. ある →04-1の選択肢の番号を一つ記入してください
2. ない

Q5 次の中で、日本語学習や日本理解のために、現在使っているものはどれですか。(複数回答可)

1. 学習参考書・問題集 一次のどれですか
(1. 文法 2. 作文 3. 語彙 4. 漢字 5. 会話 6. 試験対策 7. 読解 8. その他 _____)
2. 辞書 (書名: _____)
3. 電子辞書
4. 漢字字典 (書名: _____)
5. 日本語学習のための音声テープ
6. ビデオ教材
7. 日本語の放送講座
8. 日本語学習のためのコンピューターソフト
9. インターネットによる資料収集
10. web教材による日本語学習
11. e-mail・チャット
12. 日本語のテレビ番組
13. 日本語の映画
14. 日本語のマンガ・アニメ
15. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
16. 日本語を使ったゲームソフト
17. 日本語の歌(CD・テープ)
18. その他 _____

Q6 次の中で、日本語学習や日本理解のために、今後、もっと充実したらいいと思うものはどれですか。(複数回答可)

1. 教科書一冊なものでか。 _____
2. 学習参考書・問題集一次のどれですか。
(1. 文法 2. 作文 3. 語彙 4. 漢字 5. 会話 6. 試験対策 7. 読解 8. その他 _____)
3. 辞書一次のどれですか。
(1. 日本語-マレー語 2. マレー語-日本語 3. 和英 4. 英和
5. 日中 6. 中日 7. その他 _____)
4. 漢字字典
5. 日本語学習のための音声テープ
6. ビデオ教材
7. 日本語の放送講座
8. 日本語学習のためのコンピューターソフト
9. web学習プログラム
10. 日本語の小説や雑誌、新聞などの読み物
11. 日本語のテレビ番組
12. 日本語の映画
13. 日本語を使ったゲームソフト
14. 日本人との交流 (パーティー、ハイキング、料理教室など)
15. 日本人家庭への訪問、ホームステイ
16. 日本語のスピーチコンテスト
17. 日本や日本語に関するイベント
18. 日本語を使うアルバイト
19. 留学の機会
20. 言語交換学習・メールによる意見交換
21. その他 _____

御協力ありがとうございました。

■担当者

柳澤好昭（国立国語研究所日本語教育部門長）
金田智子（国立国語研究所日本語教育部門第一領域）
小河原義朗（国立国語研究所日本語教育部門第一領域）
笠井淳子（国立国語研究所日本語教育部門第一領域）

■刊行物検討委員会

柳澤好昭（委員長：国立国語研究所日本語教育部門長）
山口昌也（国立国語研究所研究開発部門第一領域）
森本祥子（国立国語研究所情報資料部門第二領域）
井上優（国立国語研究所日本語教育部門第一領域長）
小河原義朗（国立国語研究所日本語教育部門第一領域）

■「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」海外調査委員会

阿久津智（拓殖大学／元日本マレーシア高等教育大学連合）
李徳奉（韓国・同徳女子大学校）
石井恵理子（東京女子大学）
工藤節子（台湾・東海大学）
佐藤純（タイ・タイ商工会議所大学）
タナサーンセーニー美香（タイ・アサンプション大学）
藤井彰二（台湾・台湾大学）
ロビン・スペンス-ブラウン（オーストラリア・モナシュ大学）

■協力

中山健一 大石有香 伊藤啓子

日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究
海外調査報告書

平成 18 年 3 月 31 日

独立行政法人 国立国語研究所 日本語教育部門
〒190-8561 東京都立川市緑町 3591-2

TEL : 042-540-4300 (代表)

FAX : 042-540-4333

URL : <http://www.kokken.go.jp>

(平 17-25)